

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第110集

東松山市

だい しょう じ おお にし  
代 正 寺・大 西

一般国道407号線東松山市地内埋蔵文化財発掘調査報告

大 西 遺 跡

(第2分冊)

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



SJ-62



SJ-1

# 代正寺・大西遺跡 (第2分冊 大西遺跡)

V 大西遺跡の概要	425
VI 大西遺跡の遺構と遺物	429
1. 縄文時代の遺物	429
2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物	432
(1) 住居跡	432
(2) 壱棺墓	525
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	528
(1) 住居跡	528
4. 中近世の遺構と遺物	549
(1) 井戸跡	549
(2) 地下式坑	550
5. その他の遺構と遺物	552
(1) 包含層	553
(2) 土壇	553
(3) 溝跡	570
(4) 性格不明遺構	576
(5) 鉄製品	594
(6) 瓦	595
6. 大西遺跡についての小結	596
7. 新旧対照表	597
VII 付編 胎土分析	598
VIII 結語	608
1. 代正寺遺跡出土の円筒埴輪の編年的位置づけ	608
2. 代正寺遺跡出土の形象埴輪について	611
3. 代正寺・大西遺跡の中期後半～後期半の弥生土器について	623
おわりに	638

## V大西遺跡の概要

大西遺跡は、高坂台地のほぼ中央からやや南寄りに位置する。東側と西側をそれぞれ南東・南西に開く開析谷によって区切られており、遺跡はこの南に向かって舌状に延びる小支台上に展開しているといえる。そしてこの開析谷を挟んで、東西それぞれ代正寺遺跡・下寺前遺跡と対峙するかたちとなる。但し台地南部分は、台地下を巡る道路に切り通しされており、端部を失っている。そして、北側に関しては台地中央部の平坦面に当たり、現在宅地化が進んでいるため現状における遺跡範囲としては飽くまでも推定線である。

本遺跡は代正寺遺跡と同様に、今後の調査によって遺跡範囲がさらに拡大する可能性は充分に想定できる。現状における推定範囲は、570×300m程である。今回の調査範囲は幅20～30m・全長260m、遺跡の東南端～南端を調査したことになり、東松山市教育委員会の調査による大西遺跡A区については、遺跡推定範囲のほぼ北西端に相当する。

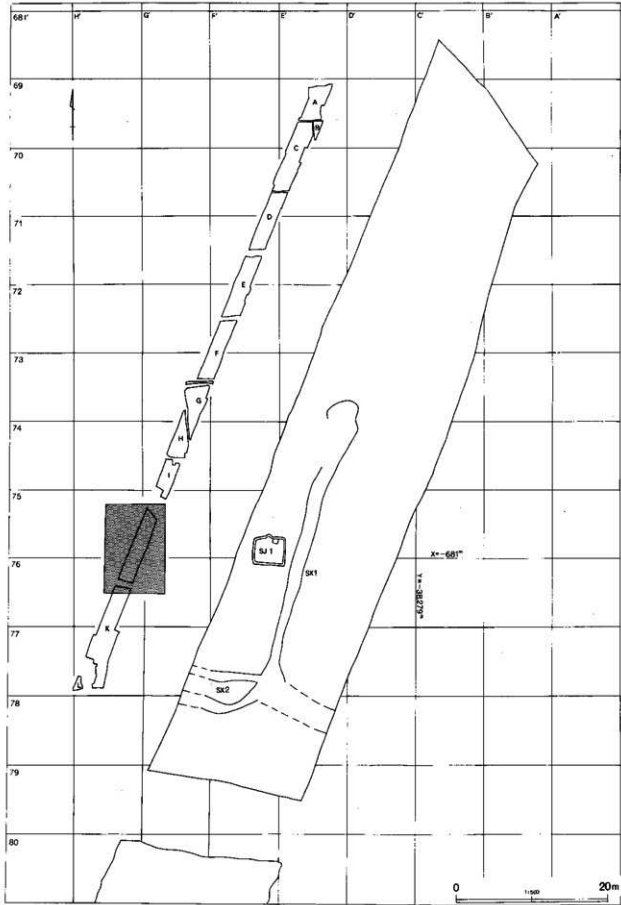
調査の便宜上、代正寺遺跡（A～I区）から引き続き調査区名を振り、J～K区と銘々した。J区～K区北半部は谷地形に面した斜面部であり、K区南半部～L区は平坦面となっている。代正寺遺跡と同じく遺構の遺存度は悪く、とくにK区・L区の平坦部において顕著である。また、L区南端部は道路による切り通しの他、遺存している平坦面南部も一部分現代の攪乱を受けている状況であった。第1分冊で既に述べたように、本遺跡の南東端に近在する大黒部遺跡は、大西遺跡の一部を形成するものであると看做すべきであろう。

大西遺跡において検出された遺構は、以下のとおりである。

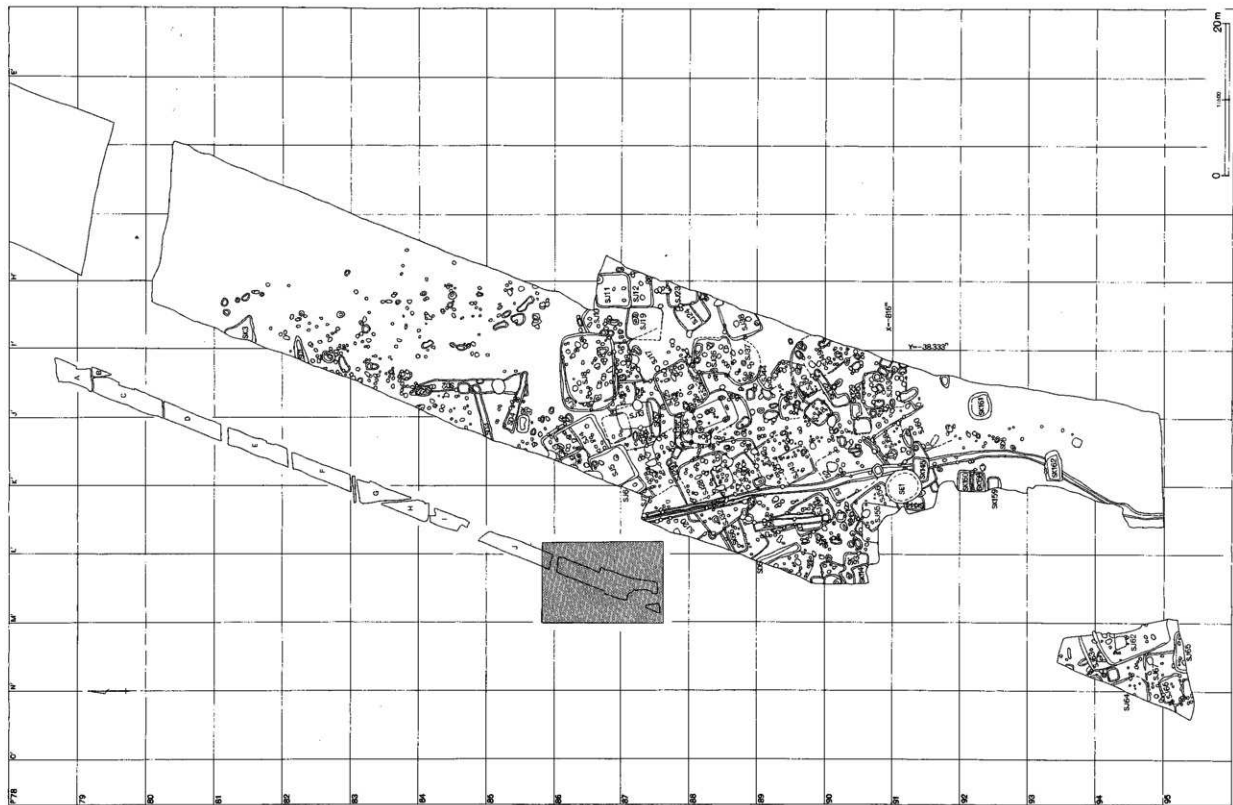
弥生時代後期後半～古墳時代後期の住居跡59軒、奈良・平安時代の住居跡8軒、この他に、土壇16基・溝跡6条・井戸跡1基・地下式坑1基等々である。今回の調査結果では、平坦面では弥生時代中期後半以降、古墳時代から奈良・平安時代を経て、中近世に及ぶまでの遺構が存在していた。舌状を呈するこの小支台上においては、過去の調査で先土器時代や縄文時代の遺構・遺物は検出されておらず、古墳時代初頭から平安時代を中心とするものであった。今回においても、先土器時代や縄文時代の遺構は検出されておらず、確かな痕跡としては弥生時代後半以降のものであった。そして、これらの立地は主に平坦部においてであり、谷地形に面した斜面部においては中世以降の痕跡が大多数であると考えられる。

以上の点から、弥生時代における集落は主に台地の南側に展開され、下寺前遺跡・代正寺遺跡とは別個の集落であったとも推定される。そして、古墳時代に降るとさらに北側にまで拡がり、奈良・平安時代にはいると、谷を越えて下寺前遺跡や代正寺遺跡に含まれる範囲にまで拡大したと想定することができないであろうか。さらに降って、中世に至ると谷地形に面した斜面部にまで人工の痕跡が観られるが、遺物的にも中世と看做される瓦が採取されており、谷を挟んで位置する香林寺との関連を窺わせる。そして、J区に検出された道条遺構（SX1・SX2）も、この香林寺との関係において理解されるのではなかろうか。

近世に伴う遺構はさらに数を増すと観られ、既期の大西遺跡は、下寺前遺跡・代正寺遺跡とさらに緊密に結びついた集落であったと推論されるのである。



第337圖 全測図



第338圖 全測圖

# VI 大西遺跡の遺構と遺物

## 1 縄文時代の遺物

大西遺跡と代正寺遺跡の間には小支谷が切り込んでおり、大西遺跡側には調査区外の西側台地上からの遺物の流出によって、包含層が形成されている。本遺跡の縄文時代の土器のほとんどはここから検出されたもので、縄文時代の遺構は検出されなかった。その他、流れ込みによる他の時代の遺構から出土したものが若干見られた。遺物の時期は、縄文時代前期から後期まで認められるが、出土量はいずれもごく僅かであり、各時期にわたって量的なまとまりはみられなかった。また、他の時代の遺構から出土しているものに関しても同様である。分類は以下の通りである。

第I群土器 前期の土器群

第II群土器 中期の土器群

第III群土器 後期の土器群

第I群土器 (第339図1~4)

縄文前期の土器を一括した。関山式、黒浜式、及び諸磯式が認められた。

第1類 (第339図1)

関山式土器に比定される。深鉢の口縁部破片である。口唇部に角状の突起を有し、2本の刻みが施されている。口縁部文様は竹管によって引かれ、上下交互に三角形区画を描出している。地文は、摩耗が著しいため不明確であるが、沈線文下にループ文の一部が見られる。

第2類 (2・3)

黒浜式土器と考えられる深鉢の胴部破片である。2は無節LRを、3は無節Rを、それぞれ横位に施文している。両者ともに繊維を含む。

第3類 (4)

諸磯b式に比定される。平縁の口縁部下に3条の沈線文を施している。地文はLR単節縄文である。

第II群土器 (5~13)

中期の土器を一括した。

第1類 (5・6)

中期初頭に位置づけられよう。5は浅鉢の口縁部附近の破片である。口縁内面に深い結節沈線文が施されている。

6は深鉢の胴部破片で、細かい結節沈線によって多段の鋸歯状文を描出している。

第2類 (7~9)

7~9は阿玉台式に比定される。

7は口縁部に楕円形区画を配する深鉢の口縁部破片である。区画内には、隆帯に沿って2条の結節沈線を巡らしている。

8は深鉢の胴部破片で、断面三角形の隆帯が垂下している。

9は深鉢の頸部と考えられる。横走る隆帯は波状を呈する。これら3点はいずれも多量の雲母末を胎土に含有し、特に7には金雲母の混入が顕著である。

#### 第3類 (10)

勝坂式の浅鉢の口縁部破片で、「く」字状に屈曲している。鮮やかな赤褐色を呈し、焼成は非常に堅緻である。口縁の一部は波状に隆起するものと考えられる。口縁部文様は、竹管状の施文具で上端をおさえ、頸部との空間に渦巻や弓状の有節沈線を引く。

#### 第4類 (11~13)

11は深鉢口縁部の小破片である。口縁直下に深い沈線を巡らせ、垂下する沈線の一部が観察される。単節RL縄文が施文される。

12は加曾利EⅢ式の深鉢の頸部付近と考えられる。口縁部文様と胴部文様の境目が不明瞭になっている。胴部には、浅い懸垂文が2条垂下しているのが認められる。地文は単節LRの縦位施文である。

13は、同じく加曾利EⅢ式に比定される浅鉢の頸部破片である。口縁部文様の下端の幅広の隆帯が見られる。胴部には縦位の粗い条線が施されている。

#### 第Ⅲ群土器 (14~22)

後期の土器群を一括した。堀之内式を主とする。

#### 第1類 (14~16)

堀之内Ⅰ式終末からⅡ式初頭に位置づけられる沈線文系の土器群である。いずれも胴部破片で、14・15には楕円形の文様が施されている。16・17では、平行する2条の沈線間にRL単節縄文がごく浅く充填されている。

#### 第2類 (17~22)

18は深鉢の胴部破片で、おそらく「X」状の区画文の一部と考えられる。区画内には単節LRが充填されている。

19は深鉢の口縁部破片である。口唇部内側には沈線が1条巡っている。口縁や下に3条の隆帯を巡らし、刻目を施している。また、1本の鎖状隆帯を垂下させ、3本の横走隆帯を連結している。残存部分には、地文は認められない。

20は、同じく深鉢の口縁部破片である。口唇部には三角形の突起を有している。内面には1条の沈線を引き、突起直下に円文を置く。外面の文様は13と同様に鎖状の隆帯を垂下させている。地文は認められず、色調は異なるが、19と同一個体の可能性もある。

21は注口土器の把手と思われる。下端は明瞭な剝離痕を残している。上部の菱形の突起部分は集合沈線で充填されている。

22は緩やかな波状を呈する口縁部破片である。波頂下に径1cmほどのやや横に広がる円孔が穿たれている。口唇上には波頂部を中心に同心の楕円形文などが施される。

23は深鉢の胴部破片で、単節RL縄文が横位に施されている。





第338圖 縄文時代遺物

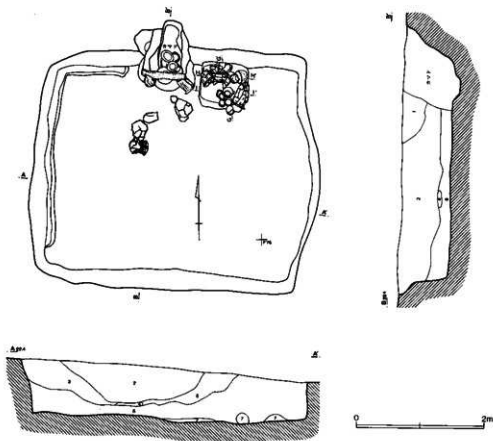
## 2 弥生～古墳時代の遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### 第1号住居跡 (第340～343図)

第1号住居跡は、G' 75 i グリッドに位置する。北西から南東に開いた谷に臨む、台地の肩部分に立地している。J区において検出された唯一の住居跡であり、他遺構との重複はない。遺構自体の遺存状況は、代正寺遺跡・大西遺跡を通じて最良といえるものである。平面規模・形態は、南北388cm・東西452cmの長方形を呈し、確認面からの深さは80cmを測る。主軸方向は、N-5°-Eを指す。貼床面は、硬度的にも色彩的にも明瞭なものではない。北壁面の西側から、西壁面にかけて壁溝が巡る。壁面の立ち上がりは急で、ほぼ直立する。

カマドは、北壁面の中央からやや西寄りに位置する。全長110cm・焚口幅30cmを測り、第3層はカマド天井部、10層～12層は袖部、8層は焚口部、6・7層は煙道部に相当すると推定される。カマ



#### 第1号住居跡土層記

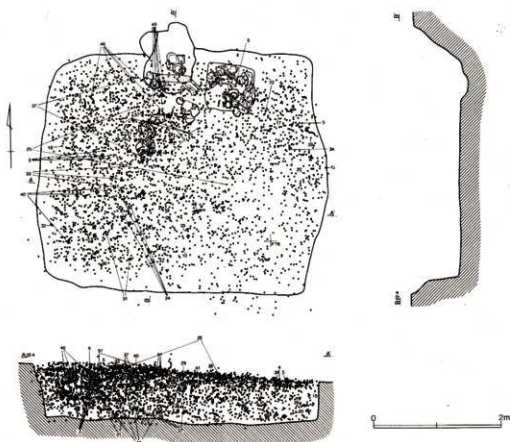
- |         |                                |         |                     |
|---------|--------------------------------|---------|---------------------|
| 1 黒褐色土  | 少量のローム粒・小礫・焼土粒・炭化物含有。粘質・しまり中。  | 3 暗茶褐色土 | 第2層より焼土粒多。粘性强。      |
| 2 暗茶褐色土 | 茶が濃い。少量のローム粒・小礫・焼土粒・炭化物含有。粘性强。 | 4 暗茶褐色土 | 第3層より焼土粒多。粘性强。      |
|         |                                | 5 暗茶褐色土 | 第4層より焼土粒少。粒子粗く、粘性强。 |
|         |                                | 6 黒褐色土  | 含有物が少ない。粘性强。        |
|         |                                | 7 黒褐色土  | 壁等の断面と考えられる。粒子粗い。   |

第340図 第1号住居跡(1)

ドは、粒子が粗く砂粒を混入した黄色の粘土を構築材としたものであり、遺存度も比較的良好である。カマド両袖内には、それぞれ土師器壺（第346図50・51）が1点づつ構築材として、口縁部を下に向けた状態にして、使用されていた。またこの2つの壺の底部に、長さ70cm・幅18cm・厚さ13cm程の凝灰岩を渡しかけ、器設部を設けている。カマド器設部からは、土師器の壺が2点（第347図52・53）が出土をしている。

カマドの東隣、北壁際において貯蔵穴が検出された。規模は72cm×74cmの略方形、床面からの深さは20cmを測り、底面は比較的平坦なものである。貯蔵穴底面から若干浮いた状態で、須恵器の壺（第348図57）や土師器の壺（第345図）等々が出土をしている。これらの遺物は、遺存度も高く土圧に押し潰された様相を呈していた。そして、この貯蔵穴周辺には、土師器の壺などが、比較的まとまった状態で分布していた。この他に、覆土内からも土師器片や須恵器片が出土しており、その点数は膨大な数に上った。

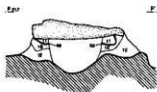
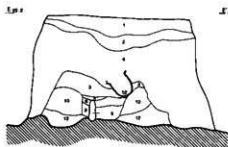
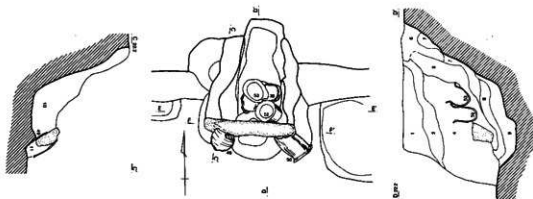
床面はほぼ平坦であるが、硬度は低いものである。ロームを少量含んだ、山砂混じりの黄褐色土による貼床であった。柱穴は検出されていない。



第341図 第1号住居跡2

第1号住居跡出土遺物 (第344・345・346・347・348図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 10.8 器高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削り、内面ナデ。赤褐色。	A+B+J 口75 体100 焼成：良
2	杯	口径 10.8 器高 4.1	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+J ほぼ完形 焼成：やや良
3	杯	口径 10.9 器高 3.4	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+E+J 口80 体100 焼成：良
4	杯	口径 10.2 器高 3.3	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+H+J 口70 体85 焼成：やや良
5	杯	口径 (10.5) 現存高 3.0	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面ヘラ削り、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+J 口20 体80 焼成：良

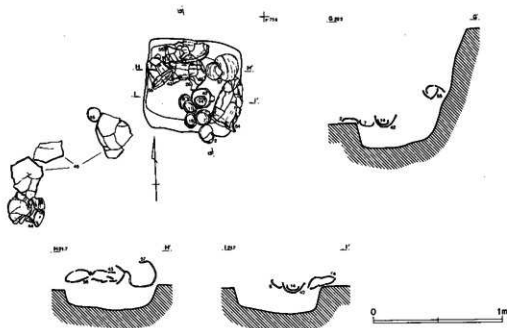


第1号住居跡のマド土層図記

- 1 暗褐色土 ローム粒・粘土粒・粘土粒含有。粘性有。
- 2 暗褐色土 粘土多。
- 3 明黄褐色土 粘土主体、粘土粒子粗く黒色土混入。
- 4 黒褐色土 ローム粒・粘土粒・粘土粒少。粘性有。
- 5 黒褐色土 第2層に類似。黒色が強い。粘性有。
- 6 明黄褐色土 第3層より粘土多、小礫混入。
- 7 黒褐色土 粘土粒・粘土粒を多。粘性有。
- 8 黒褐色土 第7層より粘土を多く含有。
- 9 黒褐色土 灰が多量に混入。しまり・粘性弱。
- 10 黄色粘土 粘土粗く、砂粒を含む、灰色粘土混入。  
カマド構築粘土。
- 11 明黄褐色土 粘土と黒色土の割合多。
- 12 黒色土 灰色粘土・粘土が混入。粘性弱。

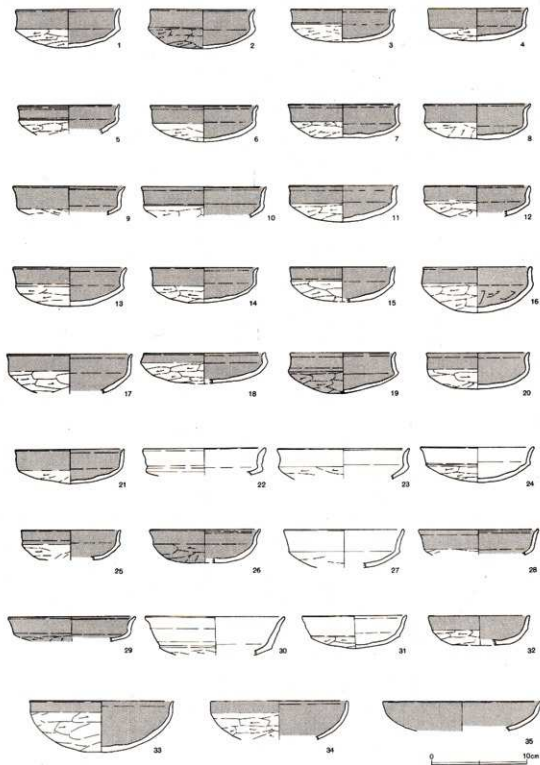


第342図 第1号住居跡③

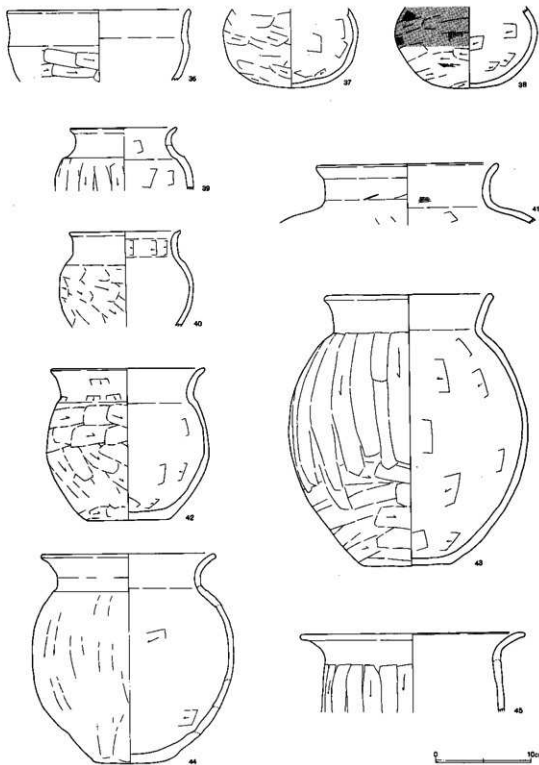


第343図 第1号住居跡(4)

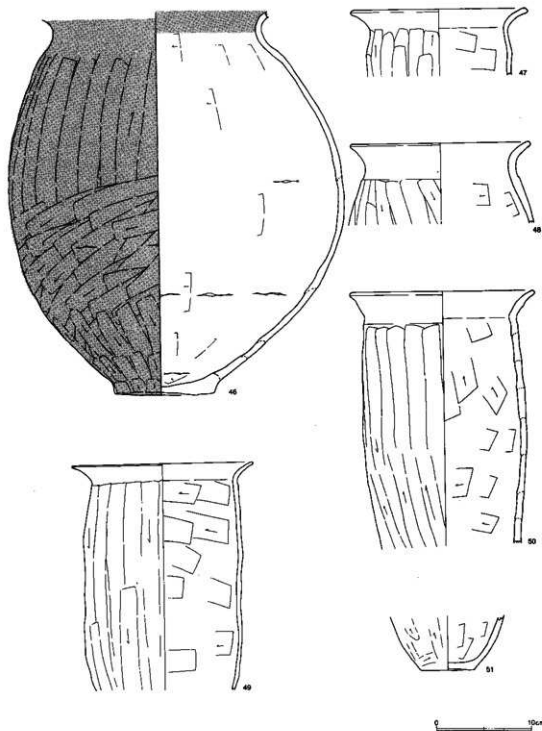
6	坏	口径 (11.2) 器高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削りの後ナデ、内面ナデ。灰赤色。口唇内側に沈線。	A+B+I+J □30 体40焼成：やや良
7	坏	口径 (11.7) 器高 3.4	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+I+J 完形 焼成：良
8	坏	口径 11.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削りの後ナデ、内面ナデ。底部は平底に近い。赤褐色。	A+B+I+J □65 体85 焼成：良
9	坏	口径 (11.8) 現存高 3.0	口縁部：内外面とも粗い横ナデ。体部：外面へら削り、内面ナデ。黄褐色。	A+B+I+J □20 体10焼成：やや良
10	坏	口径 (13.0) 現存高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削り、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+J(細密) □15 焼成：良
11	坏	口径 (11.3) 器高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。	A+B+I+J ほぼ完形 焼成：良
12	坏	口径 (11.0) 現存高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削り、内面ナデ。	A+B+I+J □・体 30 焼成：普
13	坏	口径 11.8 器高 4.1	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+J □55 体65 焼成：良
14	坏	口径 11.3 器高 3.7	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+I+J 完形 焼成：良



第344回 第1号住居跡出土遺物(1)

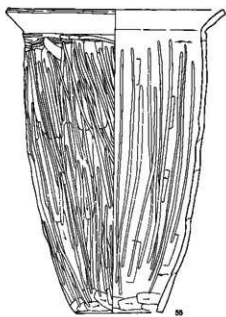
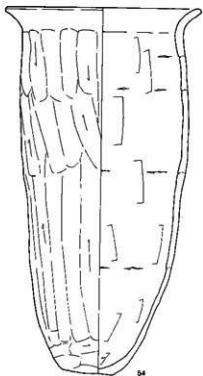
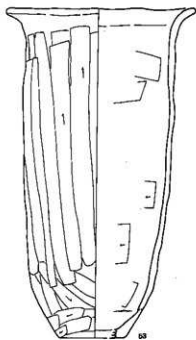
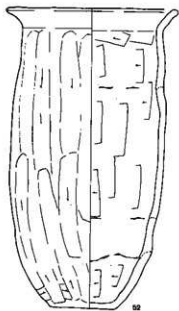


第345图 第1号住居跡出土遺物②



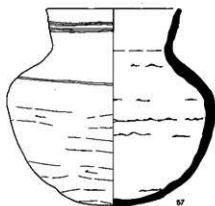
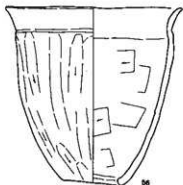
第346图 第1号住居跡出土遺物③





第347圖 第1号住居跡出土遺物(4)

15	杯	口径 10.9 器高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。褐色。	A+B+J □・体15
16	杯	口径 11.3 器高 4.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後粗いナデ、内面へラナデの後ナデ。赤褐色。	A+B+D+E+I+J 完形 焼成：良
17	杯	口径 (13.0) 現存高 4.1	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。褐色。口唇内側に沈線。	A+B+J □・体25 焼成：良
18	杯	口径 (13.0) 現存高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。赤褐色。	A+B+E+J □20 体25焼成：やや良
19	杯	口径 11.0 器高 4.3	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ。	A+B+E+I+J 完形 焼成：良
20	杯	口径 (10.8) 器高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。明褐色。	A+B+I+J □・体45 焼成：普
21	杯	口径 11.6 器高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後ナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+I+J ほぼ 完形 焼成：良
22	杯	口径 (12.8) 現存高 2.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後ナデか、内面ナデか。赤褐色。口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ。	A+B □20 焼成：普
23	杯	口径 (13.8) 現存高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。赤褐色。	A+B+D+E+J □15 焼成：やや良
24	杯	口径 11.9 器高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。褐色。	B+E(細密) □・体95 焼成：普
25	杯	口径 (10.4) 現存高 3.1	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。赤褐色。口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ。	A+J(細密) □・体20 焼成：良



0 10cm

第348図 第1号住居跡出土遺物⑤

26	坏	口径 (11.8) 現存高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後粗いナデ、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+I+J □35 体30 焼成：良
27	坏	口径 (12.4) 現存高 4.0	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後粗いナデか、内面ナデか。橙色。	B+E(細密) □20 体15 焼成：普
28	坏	口径 (12.5) 現存高 2.7	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。赤褐色。口唇内側に沈線。	A+B+H+J(細密) □10 焼成：良
29	坏	口径 (12.2) 現存高 2.7	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。赤褐色。	B+E+J □・体15 焼成：やや良
30	坏	口径 (14.6) 現存高 4.2	口縁外面に稜をもつ。口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。橙色。	A+B+D+E+J □25 焼成：普
31	坏	口径 (11.0) 現存高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。明褐色。	A+B+I+J □40 体60 焼成：普
32	坏	口径 (10.4) 現存高 3.1	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。赤褐色。	A+B+J(細密) □ 体30 焼成：やや良
33	坏	口径 (15.0) 器高 5.3	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削りの後ナデ、内面ナデ。暗赤褐色。口縁は短く外反して開く。	A+B+H+J □・体 20 焼成：やや良
34	坏	口径 (14.3) 現存高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。	A+B+I+J □・体 20 焼成：やや良
35	坏	口径 (16.5) 現存高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面ともナデか。赤褐色。	A+B+J □10 焼成：普
36	鉢	口径 (19.0) 現存高 7.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へラ削り、内面ナデ。茶褐色。口縁と体部の境に弱い稜をもつ。	A+B+E+J □30 体10 焼成：普
37	小型壺	胴径 (15.7) 現存高 8.2	胴～底部外面：へラ削りの後粗いナデ、内面へラナデの後ナデ。赤褐色。丸底を呈す。	A+B+E+I+J 体30 焼成：普
38	小型壺	胴径 (14.9) 現存高 8.5	胴～底部外面：ハケ目の後へラ削り、のち粗いナデ、内面へラナデとナデ。橙色。カマド内。	A+B+E+J 体100 焼成：普
39	壺	口径 (11.0) 現存高 6.6	口縁部：外面横ナデ、内面へラナデの後横ナデ。胴部：外面へラ削りの後粗いナデ、内面へラナデ。橙色。	B+F+I+J □25 焼成：普
40	壺	口径 (11.6) 胴径 (14.6) 現存高 10.0	外面は熱のため剥落著しい。口縁部：外面横ナデ、内面へラナデの後横ナデ。胴部：外面へラ削りの後ナデか、内面ナデ。黒褐色。	B+J □40 焼成：普
41	壺	口径 18.9 現存高 6.4	口縁部：外面横ナデ、内面ハケ目の後横ナデ。橙色。	B+H+J □25 焼成：普

42	壺	口 径 (15.8) 胴 径 (17.0) 底 径 8.5 器 高 16.0	口縁部：外面ヘラナダの後横ナダ、内面横ナダ。胴部：外面ヘラ削りの後粗いナダ、内面ヘラナダ。底部：ヘラ削りの後粗いナダ、内面ヘラナダ。褐色。	A+B+H+J □15 胴50 底100 焼成：良
43	壺	口 径 (17.0) 胴 径 25.0 底 径 9.2 器 高 28.5	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。底部：外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。口縁は直線的に緩やかに開く。褐色（一部黒色）。	A+B+I(多)+J □75 胴90 底100 焼成：良
44	壺	口 径 18.0 胴 径 21.2 底 径 8.0 器 高 22.0	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削りの後粗いナダ、内面ヘラナダの後ナダ。底部：内外面ともナダ。褐色（一部黒斑）。口縁は緩く外反して開き、胴部中に最大径をもつ。	A+B+J □85 胴90 底95 焼成：やや良
45	壺	口 径 (18.0) 現存高 8.3	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削り、内面ナダ。黄褐色。	B+E+H+J □20 焼成：普
46	壺	胴 径 35.0 底 径 10.3 現存高 39.6	器面は摩滅している。底部は上げ底を呈し赤彩を残す。胴部：内外面とも横ナダか。胴部～底部：外面ヘラ削りの後粗いナダか、内面ヘラナダの後ナダか。赤褐色。	A+B+C+J 胴70 底100 焼成：普
47	壺	口 径 (18.0) 胴 径 (15.2) 現存高 7.0	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削り、内面ナダ。褐色。	A+B+E+J □25 焼成：やや良
48	壺	口 径 19.0 現存高 8.5	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。褐色。口縁は緩やかに外反する。	A+B+E+J □30 焼成：普
49	壺	口 径 (19.0) 胴 径 16.7 現存高 23.8	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。口縁は短く外反し、器面は薄く仕上げる。褐色（一部黒色）。カマド袖。	A+B+E+I+J □50 焼成：やや良
50	壺	口 径 18.6 胴 径 17.4 現存高 26.5	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削りの後、粗いナダ、内面ヘラナダ。口縁は短く外反する。茶褐色。	A+B+D+E+J □・胴80 焼成：良
51	壺	底 径 5.5 現存高 5.7	底部は若干上げ底状を呈す。胴部：ヘラ削りの後ナダか、内面ヘラナダ。底部：外面木葉痕を残す、内面ナダ。黄褐色。	A+B+J 底100 焼成：普
52	壺	口 径 17.3 胴 径 16.2 底 径 6.7 器 高 31.5	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削りの後粗いナダ、内面ヘラナダ。底部：外面ヘラ削り、内面ナダ。口縁は短く外反する。暗褐色。カマド内。	A+B+E+I+J 完形 焼成：良
53	壺	口 径 19.1 胴 径 15.7 底 径 (6.7) 現存高 34.4	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。底部：外面ヘラ削りか、内面ナダか。口縁は短く外反し、胴部に張りをもたない。褐色（一部黒色）。カマド内。	A+B+D+E+F+I+J □・胴95 底10 焼成：良

54	壺	口径 20.0 胴径 17.7 底径 5.3 器高 37.9	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面へら削り、内面へらナデ。底部：外面ナデ、内面へらナデ。口縁は短く外反する。外面赤褐色、内面赤褐色。	A+B+E+I+J □・胴95 焼成：やや良
55	甌	口径 (22.6) 胴径 19.0 孔径 8.0 器高 31.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部外面：へら削りの後へら磨き。内面：下端部のへら削りとその他部分のへらナデの後へら磨き。口縁は短く屈曲して開く。橙色（一部黒色）。	A+B+E+I+J □40・体80 焼成：やや良
56	甌	口径 15.2 胴径 16.4 孔径 5.2 器高 18.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：へら削り、内面へらナデ。口縁は短く外反して開く。橙色（一部黒色）。	A+B+J □・体95 焼成：やや良
57	須恵器 壺	口径 13.6 胴径 21.9 器高 20.6	口縁は短く直線的に開き、丸底を呈す。へら描き沈線を口縁に2条、肩部に1条施す。口縁部：内外面とも横ナデ。体部外面：上位ナデ、中位～下位へら削りの後ナデ、内面：ナデ。	B+J □80 体100 焼成：普

### 第2号住居跡 (第349・350図)

第2号住居跡は、K' 86bグリッドに位置する。南東コーナー周辺部分のみの検出である。第4号住居跡を切っており、第3号住居跡との新旧関係は確定できなかったが本住居跡が新しいと推定された。P1を支柱穴と推定したが、第4号住居跡に伴うものとも考えられ、確定はできなかった。床面からの深さは54cmを測る。壁溝が巡り、平面形態は方形もしくは長方形が推定できる。カマドや貯蔵穴は検出されていない。ロームを混入する貼床面は、硬度も高く明瞭なものであった。

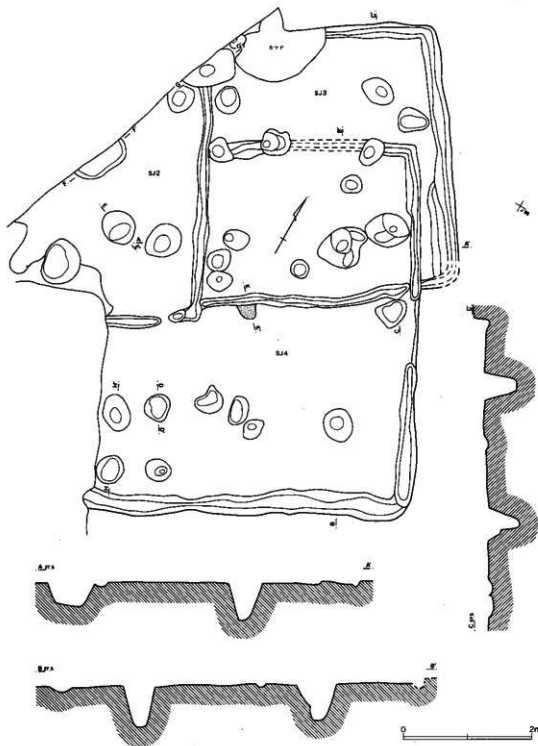
土師器片がごく小数量出土したのみであり、図化し得た遺物は1点のみである。

### 第2号住居跡出土遺物 (第350図)

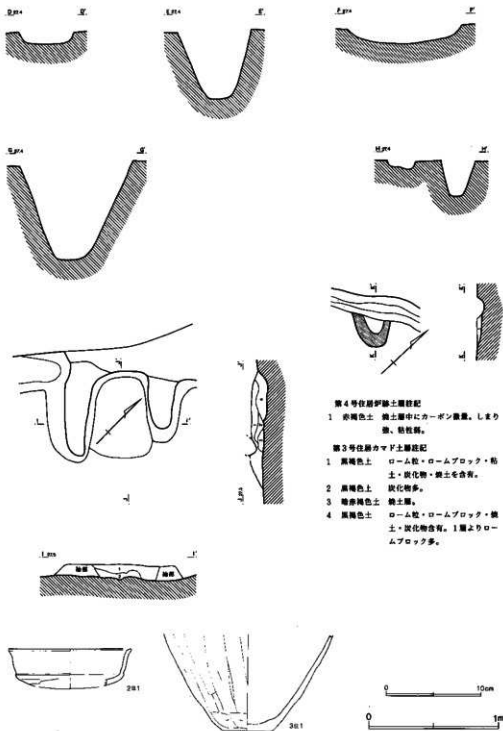
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (12.8) 現存高 3.9	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面へら削り、内面ナデ。口縁部と体部の境に明瞭な段を持つ。黒褐色。	A+B+J □10 焼成：良

### 第3号住居跡 (第349・350図)

第3号住居跡は、K' 85hグリッドに位置する。第4号住居跡を切り、第2号住居跡との重複については、本住居跡が切られていると推定される。南北430cmを測り、長方形を呈すると想定される。主軸方向はN-30° -Wを指す。北壁面にカマドが検出された。焚口幅は51cmを測り、第1層は天井部崩落層で、一部窪んだ箇所が器設部と推定される。第2・3層は焚口・燃焼部に、第4層は煙道部に相当しよう。P2～P5を支柱穴と推定した。その場合、各支柱穴間の距離は、P2-P3間で215cm・P3-P4間で362cm・P4-P5間で225cm・P5-P2間で320cmとなり、床面からの深さはP2が48cm・P3が50cm・P4が35cmを測る。ロームを混入する貼床面は、硬度も比較的高く、明瞭なものであった。貯蔵穴と思われる遺構は検出されていない。ごく小量の土師器片が出土したのみであり、図化し得た遺物は1点であった。



第349图 第2号住居跡(1)



第4号住居跡土層経記

- 1 赤褐色土 粘土層中にカーボン豊富。しまり強、粘性弱。

第3号住居カマド土層経記

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・粘土・炭化物・炭土を含有。
- 2 黒褐色土 炭化物多。
- 3 暗赤褐色土 粘土層。
- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・粘土・炭化物含有。1層よりロームブロック多。

第350図 第2~4号住居跡2、第3・4号住居跡出土遺物

### 第3号住居跡出土遺物 (第350図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	底径(5.0) 現存高 10.2	胴部～底部：外面ヘラ削り、内面ナデ。褐色。	胴下半25 底30 焼成：普

### 第4号住居跡 (第349・350図)

第4号住居跡は、K' 86fグリッドに位置する。第2号・3号住居跡に切られ、西側は調査範囲外に続く。南北583cmを測り、長方形を呈すると想定される。主軸方向はN-28' -Wを指す。P6～P8の3箇所を主柱穴と推定した。その場合、P1が4本目の主柱穴の可能性が高くなる。あるいは、西側の2本は、P9とP4のとも想定できる。各主柱穴間の距離は、P6-P7間で275cm・P7-P8間では343cm・P8-P1間で285cm・P1-P6間で350cmとなり、P9・P4を仮定するとP7-P9間で280cm・P9-P4間で255cmとなる。床面からの深さはP6が58cm・P7が63cm・P8が56cm・P1が51cm、P9では8cm・P4では35cmを測る。ロームを混入する貼床面は、硬度も比較的高く、明瞭なものであった。貯蔵穴と思われる遺構は検出されていない。主柱穴を結んだ線の内側中央よりやや北に、炉跡が第3号住居跡に切られた状態で検出された。ごく浅いもので、床面からの深さは5cmを測るのみであった。遺物の出土はみられなかった。

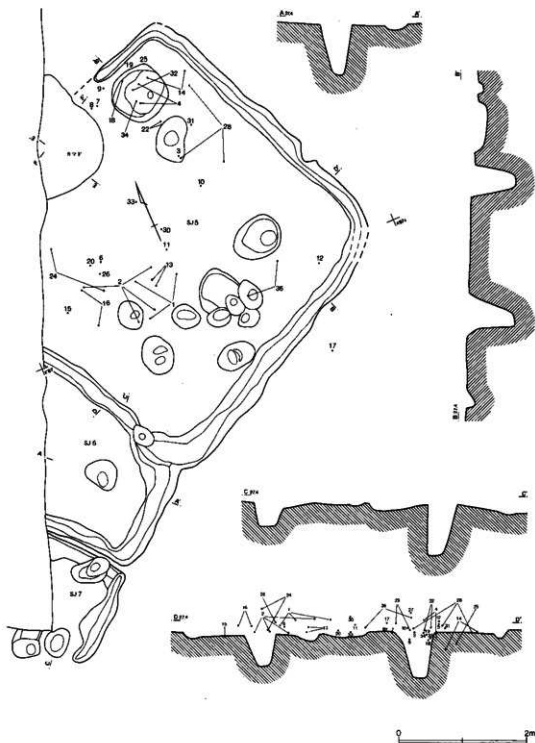
### 第5号住居跡 (第351・352図)

第5号住居跡は、K' 86gグリッドに位置する。西側で第6号住居跡を切るが、西壁から北壁及びカマドの西半分は、調査範囲外に存在する。南北520cm・東西540cmを測り、略長方形を呈する。主軸方向はN-27' -Wを指す。北壁面の、中央よりやや東寄りにカマドが検出された。部分的検出のため、全長・焚口幅等は不明。第1層は天井部の崩落土層と推定され、第2・3層は焚口・燃焼部に相当しよう。P1～P3を主柱穴と推定した。4本目については、調査範囲外に位置すると考えられる。各主柱穴間の距離は、P1-P2間で220cm・P2-P3間で255cm、床面からの深さはP1が68cm・P2が73cm・P3が52cmを測る。遺物の出土は比較的多く、32点を図化し得た。

### 第5号住居跡出土遺物 (第353・354図)

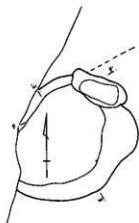
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 11.3 器高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+G+J □55 杯50 焼成：良
2	杯	口径 (11.9) 器高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後上位部分、指頭による押さえ、内面はナデ。	B+G(細密) □50 杯55 焼成：良
3	土師器 杯	口径 (11.3) 器高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+H+J □10 杯25 焼成：良





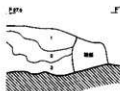
第351图 第5·6·7号住居跡

4	环	口径 (11.0) 現存高 2.5	口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	B+J(細密) □30 环20 焼成：普
5	环	口径 (11.6) 現存高 2.3	口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。橙色。	B+J(細密) □20 环10 焼成：普
6	环	口径 (11.8) 現存高 2.5	口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+J □20 环5 焼成：普
7	环	口径 (13.6) 現存高 2.5	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデか。环部：内外面ともナデか。赤褐色。	A+B+J □10 焼成：普
8	环	口径 (12.7) 現存高 3.0	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削りの後ナデか、内面はナデ。橙色。	B+E+J(細密) □10 环15 焼成：普
9	环	口径 (12.9) 現存高 2.8	口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+H+J(細密) □20 焼成：普
10	环	口径 (12.2) 現存高 3.0	口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。暗褐色。	A+B(細密) □20 焼成：普
11	环	口径 (14.0) 現存高 3.0	口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+G+J(細密) □30 焼成：普

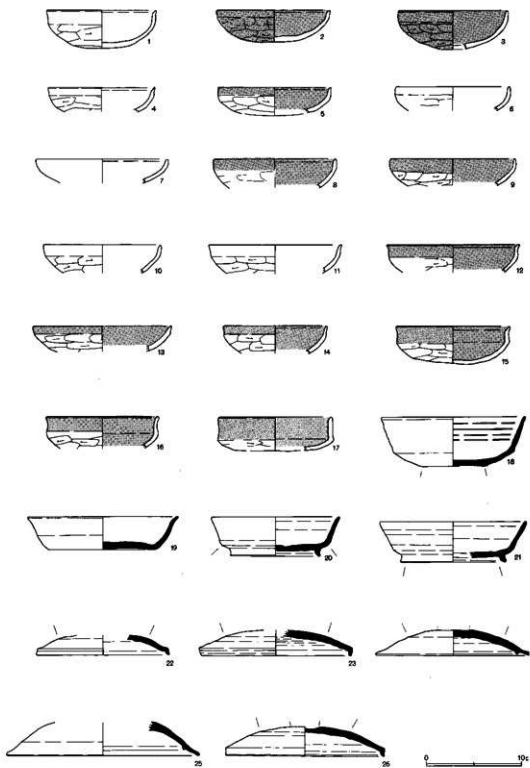


第5号住居カマド土層註記

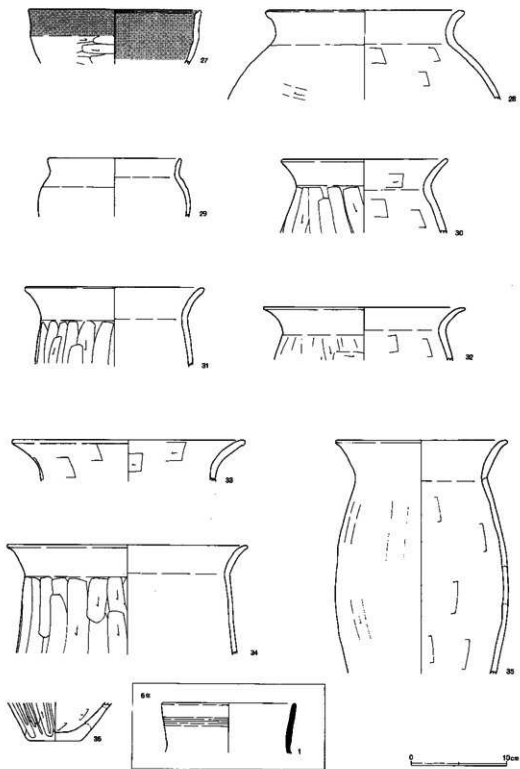
- 1 暗灰褐色土 黒色土と粘土の混合層。  
ローム粒・焼土を含有。
- 2 暗灰褐色土 1層に多量の粘土が混入する。
- 3 黒褐色土 2層より粘土少。  
ロームブロック多含有。



第352図 第5号住居層カマド



第353圖 第5号住居跡出土遺物(7)



第354图 第5号住居跡②、第6号住居跡出土遺物

12	杯	□ 径 (13.9) 現存高 2.9	□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+H+J □20 焼成：やや不良
13	杯	□ 径 (14.4) 現存高 2.7	□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+G+J(細密) □20 焼成：普
14	杯	□ 径 (10.7) 現存高 2.9	□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。橙色。	A+B+H+J(細密) □25 杯10 焼成：普
15	土師器 杯	□ 径 (11.9) 器 高 4.0	□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤橙色。	A+B+H+J □20 杯35 焼成：良
16	杯	□ 径 (11.8) 現存高 3.4	□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+H+J □20 焼成：やや良
17	杯	□ 径 (11.8) 現存高 3.5	器面は摩滅している。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+H+J □15 底20 焼成：不良
18	須恵器 杯	□ 径 (15.0) 底 径 (6.5) 器 高 5.2	全面：ロクロナデ。底部：ヘラ削り。 外部は明灰色、内部は灰黄色。	B+I+J □45 底70 焼成：やや不良
19	須恵器 杯	□ 径 (15.6) 底 径 (11.0) 器 高 3.5	全面：ロクロナデ。底部：糸切り難し後全面を右回転ヘラ削り灰色。	B+I(多)+J □20 底50 焼成：普
20	須恵器 杯	□ 径 (13.4) 高台径 (9.3) 高台高 0.6 器 高 4.1	全面：ロクロナデ。底部：回転ヘラ削り(右回転)の後、粗いナデ後、付高台又は削り出し。灰色。	B+H+J □35 杯45 高台45 焼成：普
21	須恵器 杯	□ 径 (15.3) 底 径 (10.8) 器 高 4.2	全面：ロクロナデ。底部：回転ヘラ削りの後ナデ、その後付高台又は削り出し。明灰色。	B+G 焼成：不良
22	須恵器 蓋	□ 径 (13.7) 現存高 2.1	全面：ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り(左回転)。灰褐色。	B+I+J □20 焼成：普
23	須恵器 蓋	□ 径 (15.5) 現存高 2.7	全面：ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り(右回転)。灰色。	B+D+H+J 焼成：やや不良
24	須恵器 蓋	□ 径 (16.0) 現存高 2.6	全面：ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り(右回転)の後ナデつまみ欠損。外面に一部自然釉付着。灰色。	B+I+J 焼成：普
25	須恵器 蓋	□ 径 (20.0) 現存高 3.7	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。灰色。	B+I+J □15 焼成：普
26	須恵器 蓋	□ 径 16.5 現存高 3.0	全面：ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り(左回転)。灰褐色。	B+H+J □55 天75 焼成：不良

27	坏	□ 径 (18.0) 現存高 5.7	□縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色。	A+B □15 焼成：普
28	壘	□ 径 10.2 現存高 9.2	□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。褐色。	B+E+J □25 胴上半15 焼成：やや良
29	壘	□ 径 (12.8) 現存高 6.1	器面は摩滅している。□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデか、内面はナデ。外部は橙色、内部黒褐色。	A+E+J □20 焼成：やや不良
30	壘	□ 径 (17.4) 現存高 7.8	□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。灰黄褐色。	B+E+J □15 焼成：普
31	壘	□ 径 (18.2) 現存高 8.3	□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+E+J □25 焼成：普
32	壘	□ 径 (21.2) 現存高 5.5	□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。明褐色。	A+B+F+J □25 焼成：普
33	壘	□ 径 (23.9) 現存高 4.5	□縁部：内外面ともヘラナデの後横ナデ。褐色。	A+B+F+H □25 焼成：普
34	壘	□ 径 (25.0) 現存高 11.4	□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+D+E+J □20 焼成：普
35	壘	□ 径 (17.8) 胴 径 (18.2) 現存高 24.4	□縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。赤褐色。	A+B+E+J □25 胴25 焼成：普
36	壘	底 径 5.2 現存高 4.1	胴部：外面はヘラ削りの後粗いヘラ磨き、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。赤褐色。	A+B+F+J 底75 焼成：普

#### 第6号住居跡 (第351図)

第6号住居跡は、L' 87c グリッドに位置する。北東側で第5号住居跡に切られ、南西側の第7号住居跡との新旧関係については不明である。遺構内のピットは、主柱穴とも推定されるが、対応するピットは確定できなかった。貼床面と壁溝、ピット1基のみの検出であり、数少ない出土遺物の中から、図化したのは1点のみであった。

#### 第6号住居跡出土遺物 (第354図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法的特徴	胎土・残存率等
1	壘	□ 径 (13.8) 現存高 5.2	ロクロナデ。茶褐色。	B+F+J(細密) □30 焼成：やや不良

### 第7号住居跡 (第351図)

第7号住居跡は、L' 87fグリッドに位置する。コーナー部分が、1箇所検出されたのみである。第6号住居跡と壁を接するようにして位置しているが、両者の新旧関係は不明である。貼床面と壁溝、ビット5基の検出にとどまる。

遺物の出土はみられなかった。

### 第8・9号住居跡 (第355・356図)

第8・9号住居跡は、J' 86hグリッド・J' 86bグリッドに位置する。

両者は重複しているが、切り合っていると表現するよりは、第8号住居跡を拡張して第9号住居跡になったと推定される。

その意味では、第8号住居跡A・Bと表現すべきであるかも知れないが、2軒として扱った。

第8号住居跡(内側)の支柱穴を、P1～P4に想定した。各支柱穴間の距離は、P1～P2間で376cm・P2～P3間で320cm・P3～P4間で376cm・P4～P1間で320cmを測り、貼床面からの深さはP1が50cm・P2が65cm・P3が65cm・P4が65cmとなる。

主軸方向はN-81°-Eを指す。P8ないしはP9が、第5ビットであろうか。東側は、第9号住居跡に拡張する際にやや変形しているが、小判形に近い隅丸の長方形を呈する。

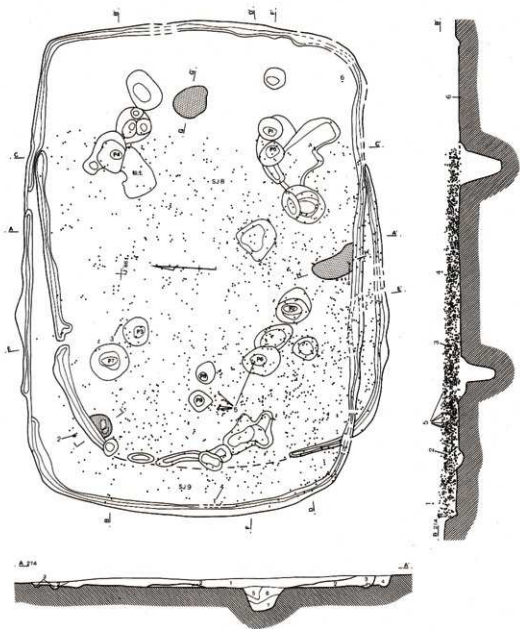
第9号住居跡(外側)の支柱穴を、P5～P7、P4に想定した。各支柱穴間の距離は、P5～P6間で440cm・P6～P7間で312cm・P7～P4間で440cm・P4～P5間で328cmを測り、貼床面からの深さはP5が50cm・P6が60cm・P7が55cm・P4が65cmとなる。

主軸方向はN-88°-Eを指す。P8ないしはP9が、第5ビットであろうか。東側は、第8号住居跡を拡張する際にやや変形しているが、概ね共有しており、小判形に近い隅丸の長方形を呈する。

各支柱穴を結んだ線の外側に、48cm×60cm、深さ10cmの炉跡が検出された。出土した土器片は数多あるが、図化し得た遺物は6点であった。

### 第8・9号住居跡出土遺物 (第357図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法的特徴	胎土・残存率%等
1	高杯	現存高	8.6	柱状部：外面は粗いヘラ磨き、内面はヘラナデ。突帯部：ナデ。赤褐色。	B+J 焼成：良



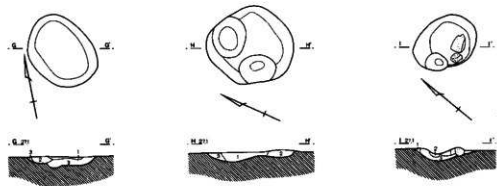
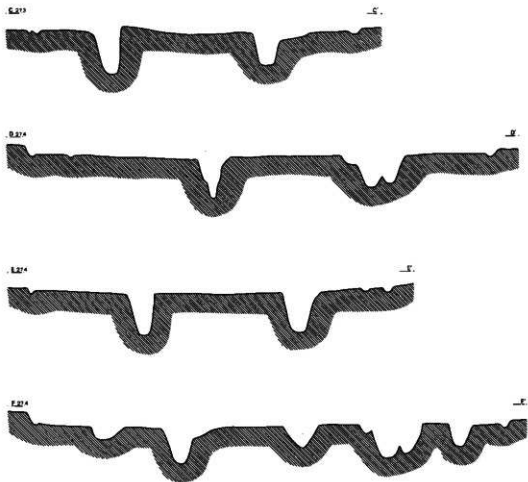
第8・9号住居跡土層註記

- |        |                                   |        |                          |
|--------|-----------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物含有。しまりやや弱。    | 6 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒含有。しまり強。 |
| 2 黒褐色土 | 1層より、ロームブロック・焼土粒多。南壁際にS J 18の跡有り。 | 7 黒褐色土 | 多量のロームブロック含有。しまり弱。       |
| 3 黒褐色土 | ローム含有多。しまり強。(1~3層=S J 9)          |        |                          |
| 4 黒褐色土 | S J 9第2層に比してローム含有少ない。             |        |                          |
| 5 黒褐色土 | ローム粒・焼土・粘土含有。粘土に砂質。しまり強。          |        |                          |

第355図 第8・9号住居跡(1)

0 2m





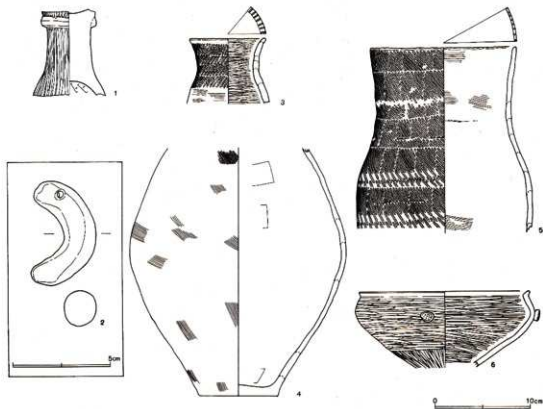
第9号住居伊藤土層経記 1~3共通

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・黄土・炭化物含有。しまり弱。
- 2 明赤褐色土 黄土層。しまり強。
- 3 明黄褐色土 掘けたローム層。

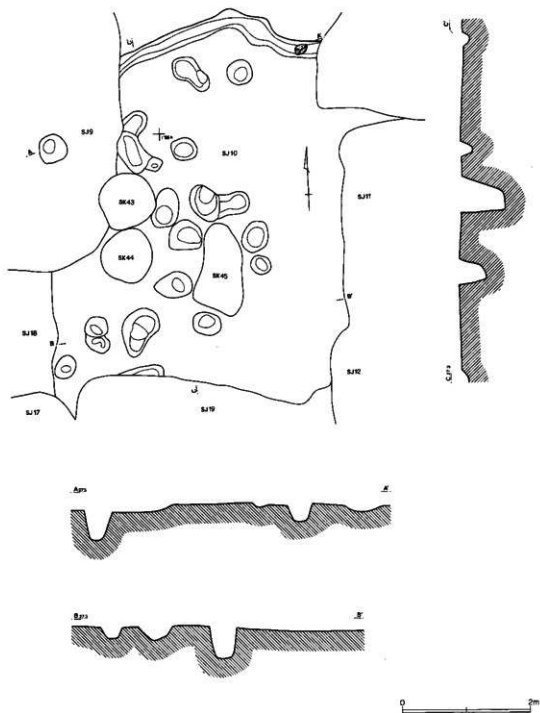


第356図 第8・8号住居跡②

2	土製 勾玉	長さ 5.5 幅 1.6 重さ 26.9	器面は荒れているが、赤彩と思われる。形状は「く」字状、断面は円形に近い。全面ナデ、比較的丁寧な作りである。両側からの穿孔と思われる。孔径0.2cm。褐色。	A+B+J 完形 焼成：やや良
3	甕	口径(7.8) 現存高 6.7	口唇部に木口状工具による刻み目。口縁～頸部：外面はLR織文 胴部：外面は粗いハケ目か、内面はへら磨き。黒褐色。	A+B+P+H+J 口径25 胴上半25 焼成：普
4	壺	胴径(22.7) 底径 8.3 現存高 26.0	器面は摩滅している。胴部：外面はハケ目の後ナデか、内面はへらナデとナデ。底部：内外面ともナデ。 外部は橙色、内部は黒色。	A+B+B+H 底100 胴30 焼成：普
5	甕	口径(15.2) 現存高 19.5	口唇部に木口状工具による刻み目か。頸部～口縁部：直線的にわずかに開く。口縁部～胴上半の輪襷痕は不連続、外面はLR織文を施す、内面はハケ目の後ナデか。暗茶色。	B+H+J 口径20 焼成：普
6	高杯	口径 17.8 現存高 8.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：内外面ともへら磨き。 飾り4箇所。褐色。	A+B+P+I+J 口径90 杯95 焼成：良



第357図 第8・9号住居跡出土遺物



第368圖 第10号住居跡

### 第10号住居跡 (第358図)

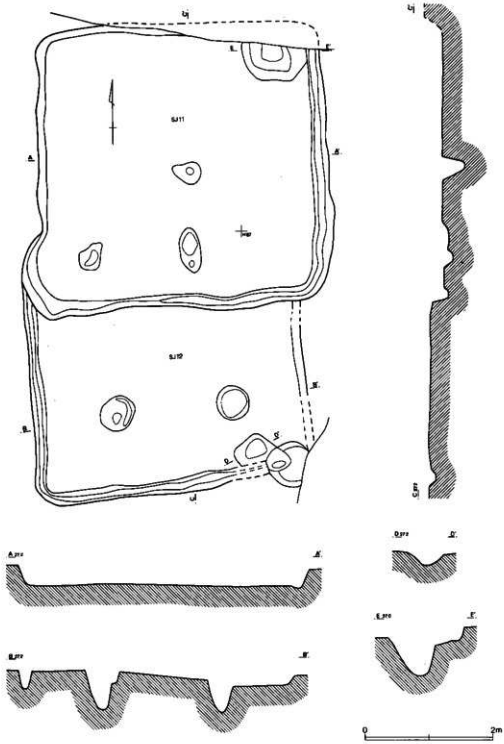
第10号住居跡は、I' 86 i グリッドに位置する。周囲を第9・11・12・17・18・19号住居跡との重複によって失われ、僅かに北側の壁溝を残すのみである。主柱穴を確定することはできず、貼床面についても非常に遺存度が悪く、不明瞭なものであった。炉跡や貯蔵穴についても確認されていない。小破片がごく小量出土したのみであり、図化し得た遺物はない。

### 第11号住居跡 (第359図)

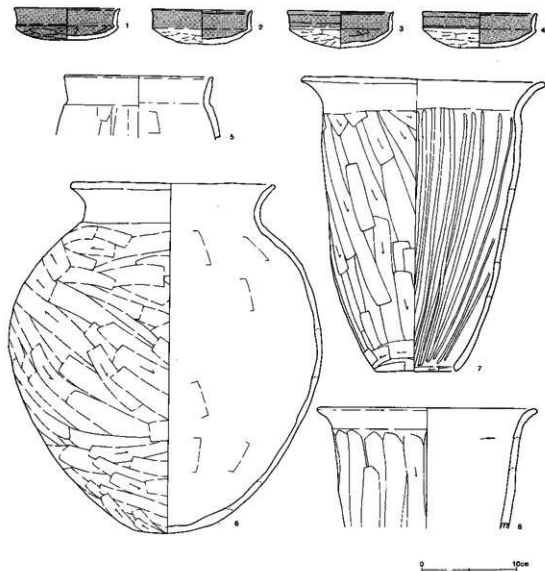
第11号住居跡は、I' 86 i グリッドに位置する。北側は調査範囲外に続き、南側と西側では第12号・第10号住居跡を切る。東側から南側にかけては、幅20～30cm・深さ10cm程の壁溝が巡るが、西側から北側においては検出されなかった。主軸方向はN-2°-Eを指す。平面規模は東西455cm・南北445cmの略方形、確認面からの深さは僅かに5cmを測るのみであった。遺構内においてピットが3基確認されているが、南側の2基については、第12号住居跡に伴うものとも推定される。床面からの深さは、北東のピットが60cm、南東のピットが40cmを測る。カマドは検出されていないが、北カマドであり、中央よりやや東寄りに位置すると推定され、調査範囲外に存在しよう。北東コーナー部分において貯蔵穴が検出された。75×100cm程の楕円形と推定されるもので、床面からの深さは、最も深い箇所75cmを測る。貯蔵穴内遺物を合わせ、図化し得た土器は8点である。

### 第11号住居跡出土遺物 (第360図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (11.0) 器高 3.3	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデとナデ。黄褐色。	A+B+F+H+J □10 杯25 焼成：普
2	杯	口径 10.4 器高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。明赤褐色。	A+B+I(多)+J 完形 焼成：良
3	杯	口径 11.1 器高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデとナデ。赤褐色。	A+B+I+J □75 杯95 焼成：良
4	杯	口径 12.0 器高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。明褐色。	A+B+E+I(多)+J 口杯70 焼成：良
5	甕	口径 (15.3) 現存高 6.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+H+J □25 焼成：普
6	甕	口径 21.6 胴径 32.8 器高 36.6	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部～底部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデの後粗いナデ。丸底を呈す。茶褐色。貯蔵穴内。	A+B+C+J □80 胴60 底70 焼成：やや良
7	甕	口径 25.0 底径 8.3 器高 30.6	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデの後粗いヘラ磨き。赤褐色（一部黒色）。貯蔵穴内。	A+B+I □40 胴50 底95 焼成：やや良
8	甕	口径 (22.2) 現存高 22.6	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+D+I+J □25 胴上20 焼成：普



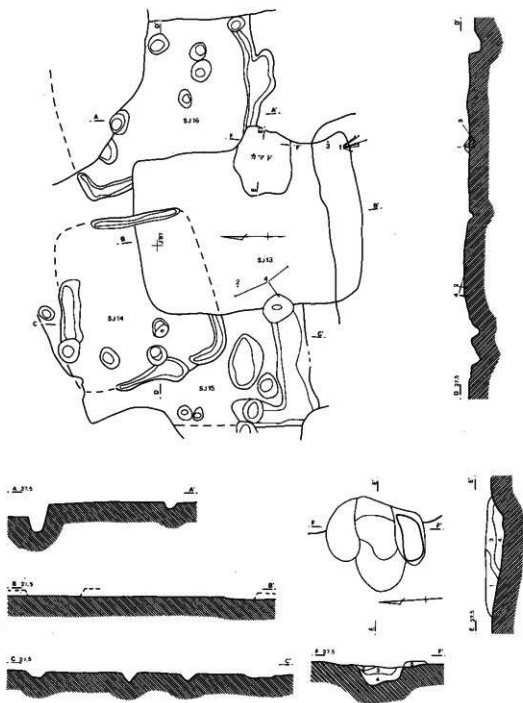
第358图 第11-12号住居跡



第360図 第11号住居跡出土遺物

第12号住居跡 (第359図)

第12号住居跡は、I' 87c グリッドに位置する。北側で第11号住居跡に切られ、西側で第19号住居跡と重複するが、新旧関係については不明である。南側と西側に、幅20~25cm・深さ25cm程の壁溝が巡る。主柱穴として、本住居跡内の2基と、第11号住居跡内の2基のピットが該当すると推定した。主柱穴間の距離は、南北方向に260cmと255cm、東西方向に155cmと185cmを測り、床面からの深さは40cm・60cm・45cmとなる。遺物の出土はなかった。



第361圖 第13~16号住居跡

### 第13号居跡 (第361図)

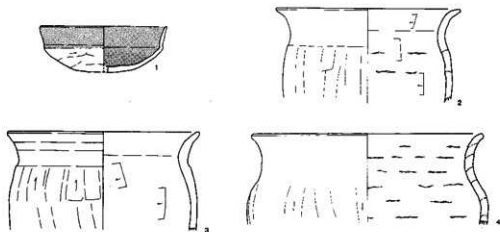
第13号住居跡は、J' 87a グリッドに位置する。第14～16号住居跡・第57号土壌と重複しているが、いずれの場合も、本住居跡の貼床が上についた状態で検出されており、後出と判断された。

カマド部分が若干島状に残されていた他は、遺構確認の段階で砂混じりで黄褐色の貼床が検出された程に、遺存状況は悪いものであった。平面規模は東西336cm・南北472cmの長方形、壁面の立ち上がりは残されていなかった。主軸方向は、N-86° -Eを指す。

東側壁面中央からやや南寄りに、カマドが検出された。検出し得た範囲内で、全長100cm・焚口幅40cmを測る。袖部分(第5層)は、砂礫混じりの黄褐色粘土であり、一部が崩落して燃焼部に流れ込んでいるのが観察された(第2層)。第1層は天井部の崩落土層、第2・3層は焚口部・燃焼部に相当しよう。貼床面直上から検出された内、4点を図化できた。

### 第13号住居跡出土遺物 (第362図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径(13.1) 現存高 4.8	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色(一部黒色)。	A+I+J □50 杯60 焼成：やや良
2	甕	口径(19.2) 現存高 9.7	口縁部：内面ヘラナデの後、内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。黄褐色。	B+D+P+J □25 胴上25 焼成：普
3	甕	口径(20.0) 胴径 19.8 現存高 10.3	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデ。褐色(一部黒色)。	B+P+H+J □15 焼成：普
4	甕	口径(23.8) 現存高 9.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。暗褐色。	A+B+D+H+J □30 胴上30 焼成：良



第362図 第13号住居跡出土遺物

0 10cm



### 第14号住居跡 (第361図)

第14号住居跡は、K' 87c グリッドに位置する。南部分を、第13号住居跡に切られる。第15号住居跡と重複するが、新旧関係については不明である。壁溝が、北側で部分的に、東側では第13号住居跡の貼床面の下まで続いていくのが観察された。南側から西側については、コーナー部分が検出され、以上から遺構の規模を得ることができた。東西360cm・南北340cmの略長方形を呈し、主軸方向は、N-78° -Eが推定される。柱穴・貯蔵穴・炉跡もしくはカマド等については検出されていない。



0 10m

第363図 第16号住居跡出土遺物

遺物の出土はみられなかった。

### 第15号住居跡 (第361図)

第15号住居跡は、K' 87c グリッドに位置する。北側で第14号住居跡と重複するが、新旧関係は不明であり、東側では第13号住居跡に切られている。また、南西側においては、第21号・22号住居跡との重複が推定されるが、新旧関係は不明である。

遺存度は非常に悪く、南西部分の掘り方が検出されたことによって、住居跡の存在を確認できたのみである。その掘り方についても、東側では第13号住居跡・北側では第14号住居跡のために失われており、規模や主軸方向は不明である。形態については、唯一検出し得たコーナー部分から、方形または長方形が想定される。ピットが数基確認されたが、本住居跡との関連については不明といわざるを得ない。遺物の出土はなかった。

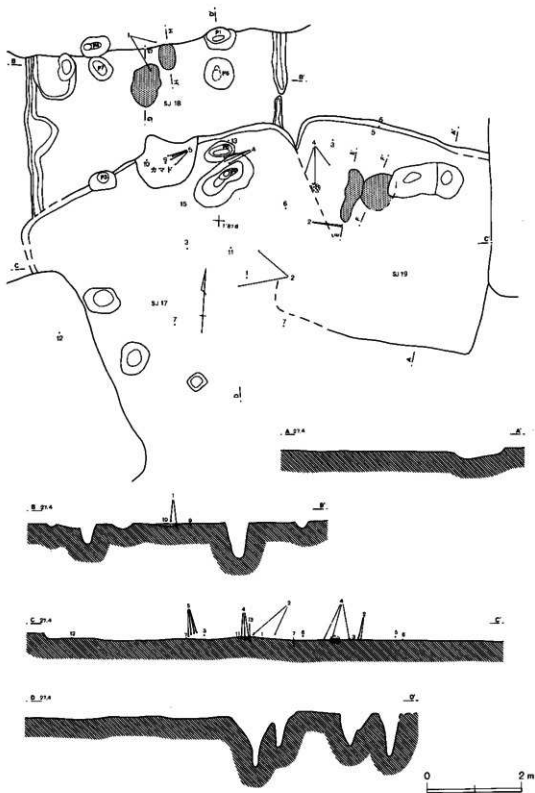
### 第16号住居跡 (第361図)

第16号住居跡は、K' 87a グリッドに位置する。北側を第8号・9号住居跡、東側を第18号住居跡、西側を第13号住居跡によって切られている。遺存状況は非常に悪く、南側壁溝の一部と北西コーナー付近が検出できたのみである。壁溝は幅25cm・深さ10cmを測る。東西規模は推定400cmであり、主軸方向については、N-82° -Eが推定される。

遺構内においてピットが7基検出されたが、本住居跡との関連については不明である。炉跡・貯蔵穴等は検出されていない。遺物はごく小数量出土したのみであり、図化し得た土器は1点である。

### 第16号住居跡出土遺物 (第363図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 杯	現存高	5.7	器面は荒れている。外面は不明瞭ではあるが横位の沈線を施す、内面上位は紋り、下位はナデか。穿孔3。黄褐色。	A+P+H 焼成：普



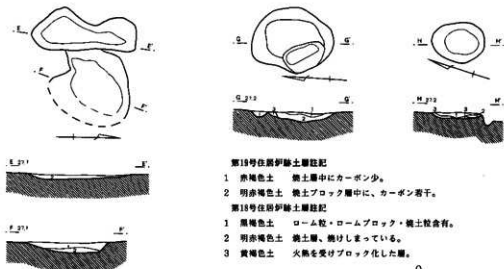
第364圖 第17~19号住層跡(1)

第17号住居跡 (第364・365図)

第17号住居跡は、J' 87fグリッドに位置する。遺構の遺存度は非常に悪く、規模については、東西を608cmと推定できるのみであり、確認面からの深さは最大で8cmであった。主軸方向はN-27°-Wを指す。14点を図化することができた。5・6に関しては時期的に異なる可能性もあり、別の遺構の存在を想定すべきであるかも知れない。しかし、調査時においては遺構として確認することはできず、参考として本住居跡の遺物と共に掲載をした。

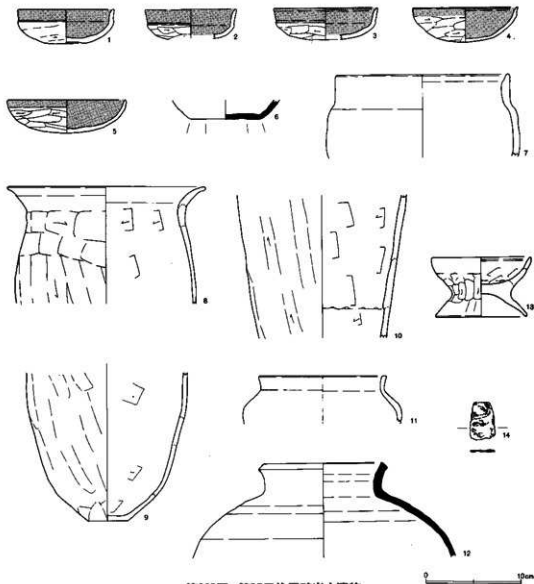
第17号住居跡出土遺物 (第366図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (9.9) 現存高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+H+J (細密) 口杯50 焼成：普
2	杯	口径 (9.5) 現存高 3.1	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+J (細密) 口25 杯30 焼成：普
3	杯	口径 (10.7) 現存高 3.3	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+P+J (細密) 口杯25 焼成：良
4	杯	口径 (10.9) 現存高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。橙色。	A+B+J (細密) 口杯45 焼成：良
5	杯	口径 (12.2) 器高 3.4	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+J (細密) □20 杯25 焼成：普
6	須恵器 杯	底径 7.4 現存高 2.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。 口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+H+J 底80 焼成：やや不良
7	甕	口径 (18.0) 現存高 8.7	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りか、内面はナデか。褐色。	A+B+G+I+J □25 焼成：やや不良
8	甕	口径 (20.5) 現存高 12.7	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。内面はヘラナデにより器面を薄く仕上げる。褐色。	B+D+E+I+J □50 焼成：普
9	甕	底径 15.6 現存高 4.0	胴部～底部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。灰褐色。	A+B+D+J 底45 焼成：普



第365図 第17～18号住居跡②

10	甕	現存高 15.0	胴部：外面はヘラ削りの後ナダ、内面はヘラナダ。褐色。	B+D+I+J 焼成：普
11	甕	口 径 (13.4)	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：内外面ともナダ。	A+B+F+J
		現存高 5.1	褐色（一部黒色）。	焼成：やや良
12	須恵器	口 径 (12.3)	口縁部：内外面ともナダ。黄灰色。	B+J(細密) 口35
	甕	現存高 10.0		焼成：普
13	高 杯	口 径 10.4	杯部・口縁部：内外面とも横ナダ。底部：ヘラナダ。	A+B+F+J(細密)
		底 径 9.4	接合部：ヘラ削り。脚台部：外面をヘラ削りの後内外面とも横	上部80 下部75
		器 高 6.2	ナダ。褐色。	焼成：普
14	不 明	現存長 4.0	錆化著しく形状不明、板状もしくは、刃部をもつ製品の一部分。	
	鉄製品	幅 3.6	厚さ0.2cm。	



第368図 第17号住居跡出土遺物

### 第18号住居跡 (第364・364図)

第18号住居跡は、J' 87c グリッドに位置する。プランとしては、東西の壁溝が部分的に遺存していたのみであった。東西552cm・主軸方向は、N-4°-Wを指す。P1~P4を主柱穴として想定した。各主柱穴間の距離は、P1-P2間が88cm・P2-P3間が256cm・P3-P4間が288cm・P4-P1間が264cm、確認面からの深さはP1が88cm・P2が104cmを測る。なお、P1-P4ではなくP5-P7の可能性も否定できず、その場合距離は240cm、深さは64cmと36cmとなる。P2ではなくP6であるとすれば、P1との距離は240cm、深さは80cmを測ることになる。84cm×60cm・深さ8cmと56cm×40cm・深さ84cmの2基の炉跡が検出されている。僅かに出土した土器の中から、図化し得た遺物は1点であった。

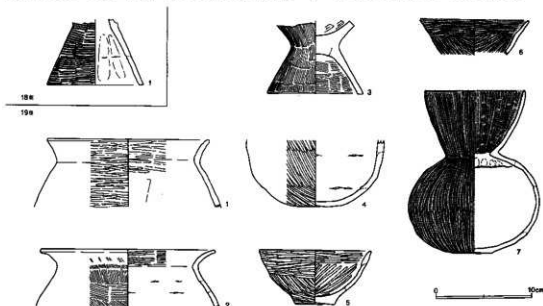
### 第18号住居跡出土遺物 (第367図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	台付壺	脚台径 10.2 現存高 6.8	脚台部：外面はハケ目、内面は指頭による押捺。 橙色。	A+B+E+I+J 脚40 焼成：やや不良

### 第19号住居跡 (第364・365図)

第19号住居跡は、I' 87a グリッドに位置する。東側は調査範囲外に続き、西側は第17号住居跡に切られている。遺存度は非常に悪く、僅かに残る立ち上がりや掘り方、覆土の広がりからプランを検出し得たのみである。平面規模は、東西が推定で440cm・南北は458cmを測り、略方形を呈する。主軸方向はN-8°-Eを指す。

壁溝や主柱穴・貯蔵穴などは検出されておらず、貼床面についてもきわめて不明瞭のものであった。住居跡中央よりやや北西寄りの位置から、炉跡が2基検出された。西側(第364図E-E')の炉跡は112cm×44cmの不整形・深さ5cm、東側(同図F-F')の炉跡は推定86cm×80cmの楕円形・



第367図 第18・19号住居跡出土遺物

深さ11cmを測る。形態や検出状況から、1基の炉跡であったとも考えられる。住居跡内で検出された2基のピットについては、本遺構との関連は不明であるが、あるいは浅いピット状に残った掘り方であるとも推定された。出土した土器の点数はそれ程多くはないが、合わせて7点を図化することができた。

#### 第19号住居跡出土遺物 (第367図)

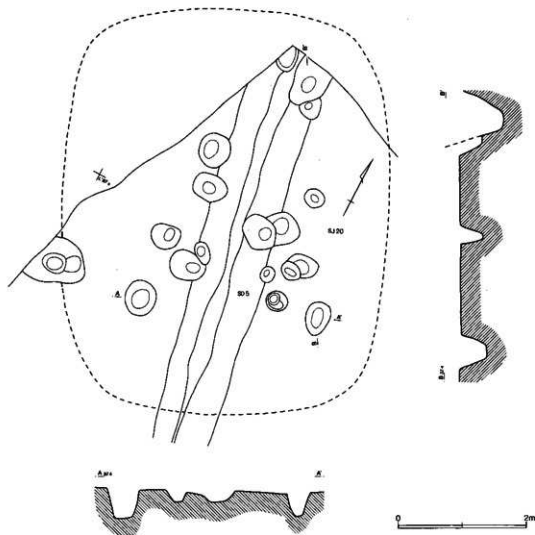
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 (17.0) 現存高 7.1	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも、ヘラナダの後粗いナダ。胴部：外面は粗いヘラナダの後ナダか、内面はヘラナダか、褐色。	B+C+E+J □20 焼成：やや不良
2	壺	口径 (18.0) 現存高 6.4	口縁部：内外面とも、ハケ目の後粗い横ナダ。胴部：外面はハケ目、内面はナダ。赤色。	A+B+I □20 胴上30 焼成：普
3	壺	脚台径 (10.0) 現存高 7.6	底部：内面はヘラナダ。脚台部：内外面ともハケ目。赤色。	A+B+F+J 胴20 焼成：良
4	壺	現存高 7.0	底部：内外面とも粗いナダ。胴部：外面は粗いヘラ磨き、内面はナダ。茶褐色。	A+B+I 底85 焼成：普
5	碗	口径 (11.6) 底径 4.0 器高 4.6	口縁～体部：外面はヘラ磨き、内面は粗いヘラ磨き。 底部：外面はナダ、内面はヘラナダ。橙色（一部黒色）。	B+D+F+J □30 体35 焼成：やや良
6	小型壺	口径 (11.2) 現存高 3.6	内外面ともヘラ磨き。褐色。	B+D+J(磨部) □20 焼成：良
7	小型壺	口径 (10.4) 胴径 13.6 底径 3.8 器高 17.0	口縁部：内外面とも丁寧なヘラ磨き。胴部：外面は丁寧なヘラ磨き、内面上位は指頭による押捺、中～下位はナダ。 底部：内外面ともナダ。外部は赤橙色（一部黒色）、内部は黄灰色。	B+D+E+J(磨部) □25 胴55 底100 焼成：やや良

#### 第20号住居跡 (第368図)

第20号住居跡は、I' 87 i グリッドに位置する。遺構中央部を第5号溝跡に切られるほか、第7号・第28号・第29号・第32号住居跡等々にも切られ、遺構としてのプランは失われている。調査時において、ロームブロックを主体とした非常に堅固な貼床が検出されたことにより、住居跡の存在が確認された。しかし、周囲を再精査したが、プランを得ることはできなかった。

P1～P3を支柱穴と推定した場合、支柱穴間の距離はP1-P2間が335cm・P2-P3間が280cmを測り、貼床面からの深さはP1で35cm・P2で40cm・P3で45cmとなる。主軸方向はN-27°-Wが推定される。炉跡・貯蔵穴・壁溝等は検出されていない。

遺物の出土はみられなかった。

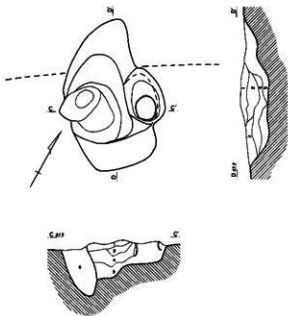
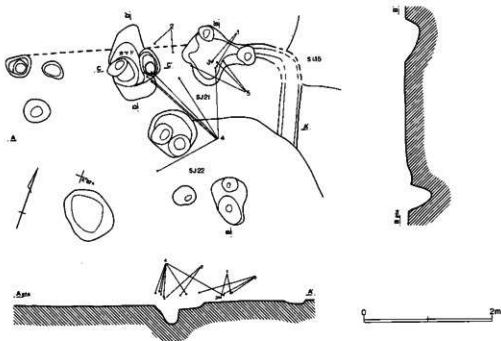


第368図 第20号住居跡

#### 第21号住居跡 (第369図)

第21号住居跡は、M' 87e グリッドに位置する。西側で第20号住居跡を切り、東側では第15号住居跡を切っている。これらの他にも、南側において第28号・第29号・第34号・第35号住居跡と重複するとも考えられるが、各遺構とも遺存度がきわめて悪く、遺構の範囲も確定しないため詳細については不明である。第22号住居跡についても、僅かに遺存していた貼床と掘り方から住居跡の存在を判断したのみであり、第21号住居跡との新旧関係については判定できなかった。

本住居跡においては、カマドと壁溝の一部が検出されたのみである。確認された範囲において、カマドの全長は119cm、焚口幅は46cm程と推定される。第1層は、暗黄褐色を呈するロームと粘土の混合層であり天井部の崩落土層に、第2～第4層は焚口部・燃焼部に相当しよう。カマドの右側(東側)では袖部分が基部付近のみではあるが遺存しており、構築材の一部として土師器の壁(第

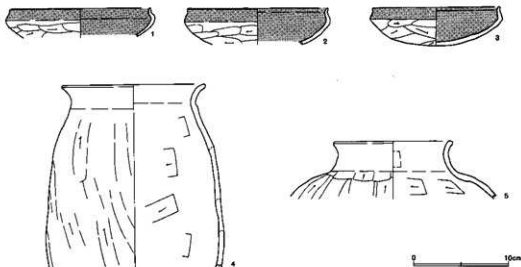


第21号住居のマド土層記載

- 1 暗黄褐色土 ロームと粘土の混合層。粘  
性あり。
- 2 暗赤褐色土 黄土を主体とする層。
- 3 黒褐色土 ローム腔・ロームブロック  
黄土・炭化物多含有。粘性有。
- 4 黒褐色土 黄土多含有。
- 5 黒褐色土 4層に比して黄土が少ない。
- 6 黒褐色土 中近位ビット。

第368図 第21・22号住居跡



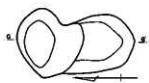
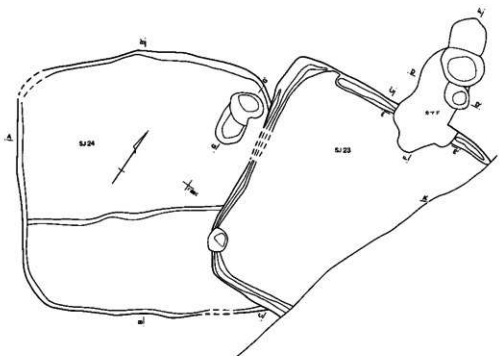


第370図 第21号住居跡出土遺物

370図4)が、倒立の状態にして用いられていた。なお、カマドの西側は中近世ピットに切られており、その周辺の壁面については、ほぼ完全に失われていた。カマド東側のエレベーションB-B'で示される窪みは、貯蔵穴の痕跡であろうか。貼床の痕跡や、柱穴と覚しき遺構は検出されていない。壁溝は幅約20cm・確認面からの深さは5cm程である。主軸方向はN-21° -Wが推定される。出土した遺物の中から、図化し得た土器は5点であった。

第21号住居跡出土遺物 (第370図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (14.8) 現存高 3.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+I+J □50 焼成：普
2	杯	口径 (14.5) 現存高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+I □30 杯 20 焼成：やや良
3	杯	口径 13.2 器高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+H+J □100 杯80 焼成：良
4	壺	口径 (14.9) 胴径 (18.6) 現存高 19.2	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+E+J □170 焼成：普
5	壺	口径 (12.1) 現存高 6.0	口縁部：内面をヘラナデの後、内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。外部は褐色、内部は灰色。	A+I+(多) □30 焼成：普



第371圖 第24号住居跡

### 第22号住居跡 (第369図)

第22号住居跡は、M' 87eグリッドに位置する。住居跡を始めとして、遺構の集中度が最も高い区域であるだけに遺存度はきわめて悪く、本住居跡においては掘り方から推定されたコーナー部分が1箇所と、支柱穴と覚しきピットが1基確認されたのみであった。プランの確定はできなかったが、隅丸の方形もしくは長方形を呈すると推定された。重複が想定される、第21号・第28号・第29号・第33号～第35号住居跡のすべてに切られていると考えられる。第369図のエレベーションB-B'で示されるピットを支柱穴と想定した。確認面からの深さは、34cmである。これに対応するピットに関しては、残念ながら確認することはできなかった。

遺物はごく少数出土をしているが、図化し得るものはない。

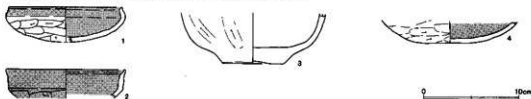
### 第24号住居跡 (第371図)

第24号住居跡は、I' 87hグリッドに位置する。東側で第23号住居跡に切られている他は、残されている壁面の立ち上がりは小さいものの、ほぼその全形を知ることができる。

平面規模は、東西が推定405cm・南北が415cmを測り、確認面からの深さは最大20cm程である。平面形態は、四隅がやや丸味をもつ略方形と推定される。東カマドが想定され、第23号住居跡によって切られていると考えられる。壁溝・柱穴等については、検出されていない。第371図のエレベーションG-G'で示される2基の土壌の内の1つに、貯蔵穴の可能性を考えたい。

2基の規模については、南側の土壌では51cm×50cmの不整形円形・深さ29cm、北側の土壌では短軸85cm・深さ24cmの楕円形を呈する。住居跡内には、10cm程の段が検出された。

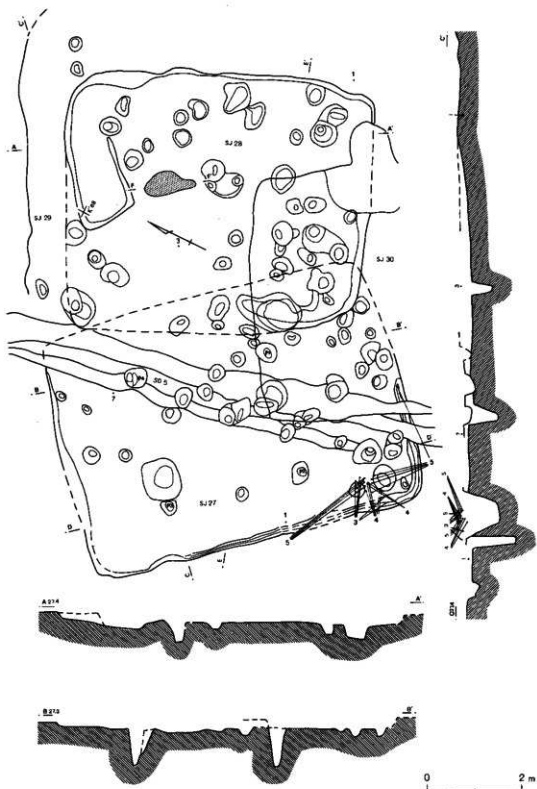
少数出土をした土器の内、図化し得たのは4点である。



第372図 第24号住居跡出土遺物

### 第24号住居跡出土遺物 (第372図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (11.8) 現存高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+I+J □20 杯25 焼成：普
2	杯	口径 (12.5) 現存高 2.9	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+J □20 底5 焼成：普
3	甕	底径 6.4 現存高 5.3	胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。底部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。外面は黒色、内面黄褐色。	A+B+E+F+I+J 底100 胴30 焼成：普
4	杯	底径 9.2 現存高 2.3	底部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。褐色。	A+B+D+I+J 底35 焼成：普



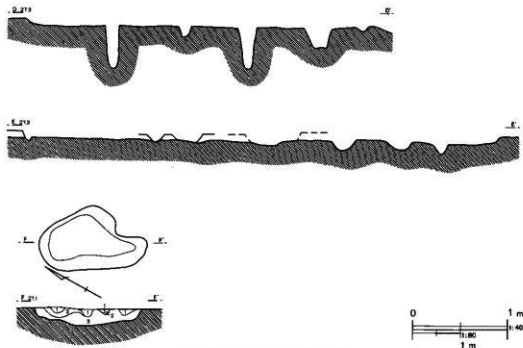
第373図 第27～28号住居跡(1)

### 第27号住居跡 (第373・374図)

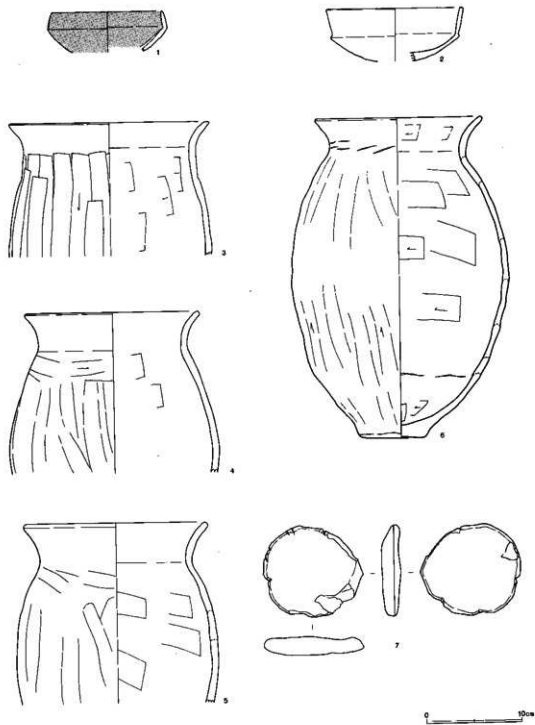
第27号住居跡は、L' 88 b グリッドに位置する。第28号住居跡を切る。多くの遺構との重複により、プランが大きく失われている。特に、第30号住居跡と第5号溝跡に切られることによって、遺構の北側と西側部分を除いて大部分を欠いた状態で検出された。P1~P4を主柱穴と推定した。各主柱穴間の距離は、P1-P2間で264cm・P2-P3間で288cm・P3-P4間で280cm・P4-P1間で288cmを測り、確認面からの深さはP1が80cm・P2が88cm・P3が96cm・P4が80cmである。東カマドが推定されるが、検出することはできなかった。南壁と西壁に部分的ではあるが壁溝が検出され、貯蔵穴に関しては確認されていない。規模は南北が736cm・東西は540cm程が推定される。推定の主軸方向はN-50°-Eである。3の遺物については、混入とも考えられるが、図化し得た遺物は合わせて8点である。

### 第27号住居跡出土遺物 (第375図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (11.5) 現存高 4.1	器面は剝離著しい。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデか、内面はナデか。橙色 (赤彩)。	A+B+J □・杯20 焼成：やや良
2	杯	口径 (14.4) 現存高 5.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤橙色。	A+B+H+J □5 杯25 焼成：良
3	壺	口径 (11.0) 現存高 14.1	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。褐色 (黒色)。	A+B+E+I+J □25 焼成：普



第374図 第27~28号住居跡②



第375图 第27号住居跡出土遺物

4	壺	口径 (17.9) 胴径 (22.0) 現存高 17.0	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。灰黄褐色（一部黒色）。	B+D+E+J □20 焼成：やや良
5	壺	口径 (18.5) 胴径 (21.2) 現存高 19.0	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。灰黄褐色（胴部黒色）。	B+E+I+J □30 胴35 焼成：普
6	壺	口径 17.1 底径 6.5 胴径 22.7 器高 33.5	口縁部：外面は横ナデ、内面はヘラナダの後横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナダ。底部：外面はナデ、内面はヘラナダ。褐色。	B+C+H+J □70 胴80 底100 焼成：普
7	不明土製品	縦 9.3 横 10.5 厚さ 2.0	全面ナデによる大雑把な仕上げである。褐色。	B+E+H+J 焼成：やや良

#### 第28号住居跡 (第373・374図)

第28号住居跡は、K' 88a グリッドに位置する。他遺構との重複によって、プランの大部分を失っている。炉跡と掘り方、それと僅かに残された壁面の立ち上がりから、遺構の平面形態と推定規模を得た。東西は560cm・南北は640cm、四隅に若干丸味をもつ長方形と推定される。遺構内において、数多くのピットが検出されているが、支柱穴を判別することはできなかった。主軸方向はN-27°-Wを指す。中央よりやや北寄りに炉跡が検出された。図化した土器は、3点である。

#### 第28号住居跡出土遺物 (第376図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	小型壺	口径 (14.7) 現存高 8.6	口縁部：内外面ともヘラ磨き。胴部：外面はヘラ磨き、内面は指頭による押捺。赤褐色。	B+E+H+J □60 焼成：やや良
2	高杯	脚台径 (11.7) 現存高 3.8	器面は摩滅している。脚台部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はハケ目。橙色。穿孔3。	A+B+J 胴50 焼成：普
3	手捏ね	口径 4.0 底径 3.0 器高 3.0	全面ナデ。褐色。	A+B+F □25 底100 焼成：普

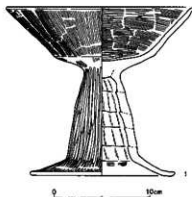


第376図 第28号住居跡出土遺物

### 第29号住居跡 (第373図)

第29号住居跡は、L' 87 g グリッドに位置する。周辺の遺構との重複が著しく、ほとんど原形をとどめておらず、規模についても不明である。わずかに残されたプランから住居跡と推定した。

住居跡であるとするれば、平面形態は方形もしくは長方形が考えられよう。



第377図 第29号住居跡出土遺物

### 第29号住居跡出土遺物 (第377図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高杯	口径 19.4 脚台径 15.1 器高 17.6	口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。杯部：内外面ともハケ目。底部：ヘラ磨き。脚台部：外面はヘラ磨き、内面は絞り。裾部：外面はヘラ磨きの後粗い横ナデ、内面は粗いハケ目の後粗い横ナデ。赤褐色。	A・B・E・I・J □65 脚95 焼成：やや良

### 第31号住居跡 (第378図)

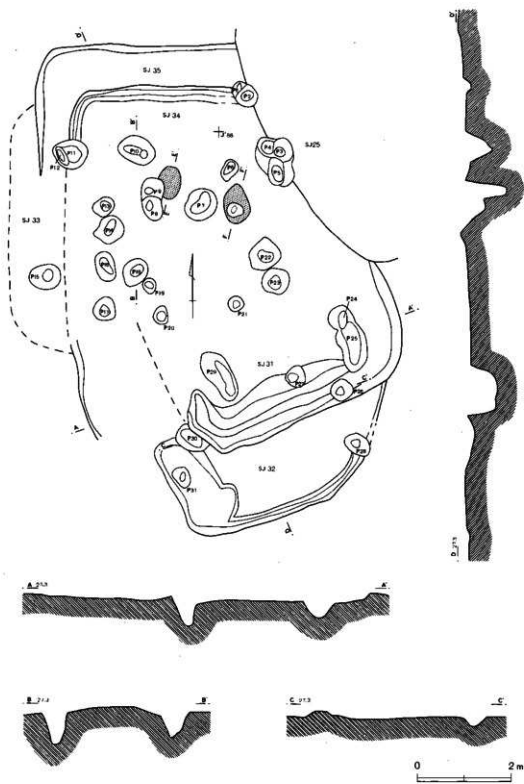
第31号住居跡は、J' 88 g グリッドに位置する。住居跡の密集している箇所であり、この範囲内に5軒が検出された。本住居跡は、第33号住居跡との新旧関係は不明であるが、第32号・第34号・第35号住居跡のいずれにも切られていると推定される。掘り方と壁溝の一部が確認されたことにより、本住居跡の存在が判明したものである。近辺には多数のビットが検出されており、これらの内の幾つかは、第31号～第35号住居跡の柱穴に相当すると考えられるが、特定できるビットは僅かであった。

P22・P26・P31・P17を、主柱穴と推定してみた。この場合各ビット間の距離は、P22-P26間で340cm・P26-P31間で388cm・P31-P17間で398cm・P17-P22間で350cmを測り、P26の確認面からの深さは25cmであった。主軸方向はN-30°-Wを指し、平面形態は隅丸の方形、あるいは長方形が考えられる。確認された壁溝は、幅約20cm・深さ22cmである。炉跡・貯蔵穴・貼床面等々は検出されていない。本住居跡と判断できる遺物は得られなかった。

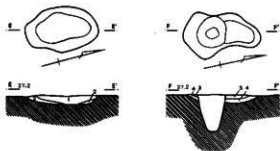
### 第33号住居跡 (第378図)

第33号住居跡は、K' 88 c グリッドに位置する。第32号住居跡との新旧関係は不明であるが、第31号・第34号・第35号住居跡等には切られていると推定される。プランは検出されず、主柱穴4基の存在から、住居跡と判断した。想定した主柱穴はP10・P18・P15・P11であり、各ビット間の距離はP10-P18間が260cm・P18-P15間が182cm・P15-P11間が260cm・P11-P10間が152cm、確認面からの深さはP10で56cm・P18で72cmを測る。主軸方向はN-3°-Wを指す。炉跡・貯蔵穴・壁溝等は検出されず、遺物の出土もなかった。





第378图 第31、33~35号住居跡(1)



第379図 第31、33 35号住居跡②

第32号住居跡土層註記

- 1 赤褐色土 黄土ブロック層。しまり強、粘性弱。
- 2 赤褐色土 黄土ブロック層にカーボン少。しまり強、粘性弱。
- 3 赤褐色土 黄土層中にカーボン多含有。しまり強、粘性弱。
- 4 明赤褐色土 黄土ブロック層。



第34号住居跡 (第378・379図)

第34号住居跡は、K' 87 i グリッドに位置する。第31号住居跡に切れ、第32号・第33号住居跡を切っていると推定される。第35号住居跡との新旧関係については、調査時においても判定することはできなかった。遺構の遺存度は非常に悪く、壁溝の存在からコーナー部分を1箇所と、第35号住居跡に伴う可能性もある炉跡が2基検出されたのみであった。

あくまでも可能性の1つとして、P5・P23・P20・P9を主柱穴と想定すると、各ビット間の距離はP5-P23間が240cm・P23-P20間が250cm・P20-P9間が266cm・P9-P5間が264cmを測る。この場合、平面形態は方形もしくは略方形が考えられ、主軸方向はN-10°-Wが想定される。遺構内で検出された炉跡は2基であり、それぞれ80cm×48cm・深さ8cm、80cm×48cm・深さ10cmを測る。少数の出土遺物の中から、図化し得た土器は2点である。第35号住居跡が本住居跡を切っているとすれば、炉跡も遺物も第35号住居跡に伴うものといえよう。

第34号住居跡出土遺物 (第380図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (17.8) 現存高 8.0	口縁部：内外面とも、ハケ目の後へラ磨き。 黄褐色。	A+B+H+J □40 焼成：やや良
2	高坏	脚台径 (10.2) 現存高 6.8	器面は摩滅している。脚台部：外面はハケ目の後ナブか、内面は紋り。茶褐色。	A+B+P+I 脚55 焼成：普



第380図 第34号住居跡出土遺物



第381図 第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡 (第378図)

第35号住居跡は、K' 87 i グリッドに位置する。第32号・第33号住居跡を切り、第31号住居跡には切られている。第34号住居跡との新旧関係については、判別できなかった。可能性の1つとして、両者の位置関係から見て、第34号住居跡を拡張して第35号住居跡となったとも推定され得る。その場合、第34号住居跡内に位置する炉跡は、本住居跡に帰属すると解釈すべきであるかも知れない。出土した遺物はごく少数であり、図化し得た土器は2点である。

第35号住居跡出土遺物 (第381図)

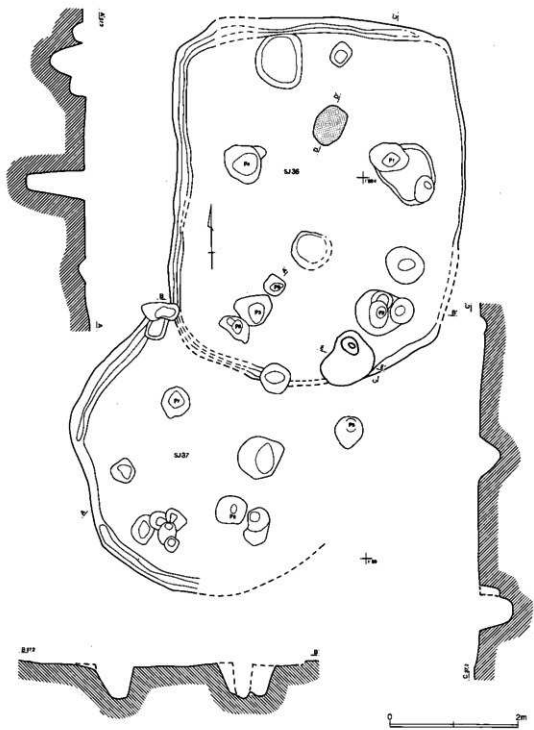
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	甕	口径 (14.2) 現存高 8.5	口縁部：内外面とも、ハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目の後粗いヘラ磨き、内面はヘラナデ。暗褐色。	A+B+F+J □35 胴上15 焼成：良
2	甕	口径 (19.4) 現存高 4.0	器面は摩滅している。口縁部：内外面ともヘラ磨き。褐色。	A+B+F+I □30 焼成：普

第36号住居跡 (第382・383図)

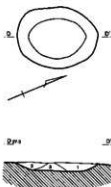
第36号住居跡は、J' 88 c グリッドに位置する。北側で第25号・第26号住居跡に、南側で第37号住居跡に切られる。東側と南側の一部で、壁溝が途切れる。P1～P4を支柱穴と推定した場合、各ビット間の距離はP1-P2間が240cm・P2-P3間が200cm・P3-P4間が240cm・P4-P1間が220cm、確認面からの深さは8cm程である。各ビットの確認面からの深さは、P1で35cm・P2で50cm・P3で55cmを測る。四隅の張った小判形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指す。支柱穴を結んだ線からやや北寄りに、炉跡が検出された。62cm×48cmの平面楕円形・深さ6cmを測る。北西の土壌は、貯蔵穴であろうか。土器1点・石器1点、合わせて2点を図化し得たのみである。

第36号住居跡出土遺物 (第384図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	高杯	脚台径 (11.0) 現存高 4.8	脚台部：外面はハケ目の後粗いナデ、内面はハケ目。孔4か。茶褐色。	B+J 脚25 焼成：やや良
2	砥石	現存長 5.7 幅 4.7 厚さ 1.7	上端・下端および左側面を欠く。残る3面はよく使用されており平滑。褐色。重量60.0g。	緑泥片岩製

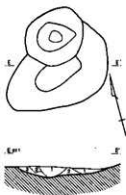


第382图 第36·37号住居跡(1)



第36号住居跡土層柱記

- 1 黒褐色土 ローム粒若干、しまり・粘性强。
- 2 黒褐色土 焼土粒・カーボン少。しまり強、粘性强。
- 3 黒褐色土 カーボン豊富、しまり強粘性强。



第37号住居跡土層柱記

- 1 黒色土 炭化物・ローム粒・焼土粒含有、しまり弱。
- 2 暗赤褐色土 焼土層。
- 3 黄褐色土 焼けたローム層、ボロボロになっている。



第383図 第36・37号住居跡②

### 第37号住居跡 (第382・383図)

第37号住居跡は、J' 88h グリッドに位置する。東側で第38号住居跡に切られ、南側では第44号住居跡と重複しているが、恐らくは切られていると考えられる。北側では、本住居跡の炉跡が第36号住居跡にのった状態で検出され、切っていることが確認できた。一部途切れるが、南側から西側にかけて幅25cm・深さ8cm程度の壁溝がみられる。遺構の遺存状況は悪いが、隅丸の長方形が想定される。

P5～P8を主柱穴と推定した場合、各ピット間の距離はP5-P6間が222cm・P6-P7間が190cm・P7-P8間が152cm・P8-P5間が235cmのやや不整形、ピットの確認面からの深さは、P7で95cm・P8で20cm、主軸方向はN-57°-Eを指す。P8ではなくP9を仮定した場合、P7-P9間の距離は238cm・深さ20cmを測り、主軸方向はN-52°-Eを指す。どちらのピットであっても、不整形な並びである点に変わりがないといえよう。主柱穴を結んだ線からやや北東寄りに、炉跡が検出された。89cm×54cmの槽円形・確認面からの深さ9cmを測る。出土した遺物は少数であり、その中から土器1点・石製品1点、合わせて2点を図化し得たのみである。



第384図 第36号住居跡出土遺物



第385図 第37号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物 (第385図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	現存高	11.1	8本単位の襷指波状文5段。下位～上位に施文。外面はナデの施文。内面上半はナデ、下半はハケ目。黒褐色。	A+B+P+I 焼成：良
2	磨製石斧	長さ 幅 厚さ	5.1 2.7 0.5	表裏面と側面の一部に自然面を残す。裏面は平坦、表面下端を研ぎ出し片刃としている。表裏面に糸線を残す。暗緑色。	緑泥片岩製

第39号住居跡 (第386図)

第39号住居跡は、M' 89 f グリッドに位置する。北側から東側にかけてを第6号溝跡に切られ、西側については調査範囲外に続く。住居跡の掘り方と、カマドの痕跡が検出されたのみであり、規模や形態は不明である。遺構内に炉跡が検出されているが、これは第39号住居跡によって失われた住居跡の炉跡のみが、掘り方の下位に残存した結果と推定される。推定プランを破線で示したが、掘り方の規模やカマドの位置から、本来はもっと大きな遺構と想定できる。

カマドは北カマドであり、中央からやや東に偏すると思われる。カマドは存在を知れるのみであり、土層断面を観察するまでに至らなかった。貼床・貯蔵穴は検出されず、柱穴と特定できるものは得られなかった。遺物は、1点を図化し得たのみである。

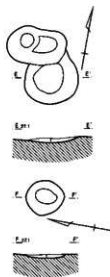
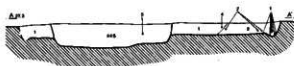
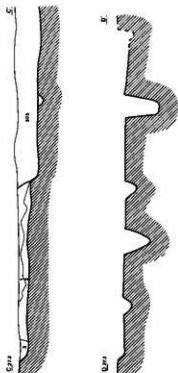
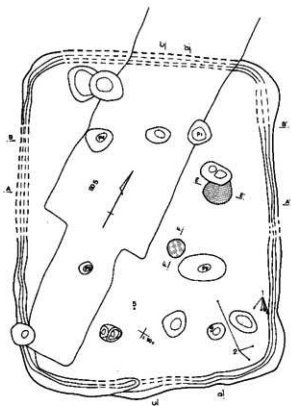
第39号住居跡出土遺物 (第386図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	坏	口径 (15.0) 現存高	5.5	□縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面へら削り、内面ナデ。暗褐色。	A+B+H+J □15 焼成：やや良

第41号住居跡 (第387図)

第41号住居跡は、L' 89 h グリッドに位置する。第5号溝跡が南北に切っているが、確認面からの深さも16cm程が残されているなど、大西遺跡では遺存状況の良好な部類に含まれる住居跡である。平面規模は南北が推定540cm・東西が412cmを測り、四隅に若干丸味をもつ長方形を呈する。

P1～P4を主柱穴と判断した。各主柱穴間の距離は、P1-P2間が210cm・P2-P3間が185cm・P3-P4間が205cm、各主柱穴の確認面からの深さはP1で50cm・P2で40cm・P4で70cmを測り、しっかりと



第41号住居跡土層柱記

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭土・皮化物を含有。
- 2 黒褐色土 1層より多くロームブロック含有。
- 3 黒褐色土 2層より多くロームブロック含有。

伊藤土層柱記

- 1 黄土層中にカーボン少。



第387図 第41号住居跡



第388図 第41号住居跡出土遺物

した明瞭なものである。主軸方向はN-29° -Wを指す。幅16cm・床面からの深さ12cmの壁溝は、全周すると推定される。

ロームブロックを主体とした貼床面は、平坦であり、堅固なものであった。貯蔵穴と覚しき遺構は検出されなかった。主柱穴を結んだ線の内側と線上から、炉跡が2基確認された。それぞれ40cm(推定)×40cmの略円形・深さ4cm、30cm×28cmの略円形・深さ4cmを測る。

図化し得た土器は、5点であった。

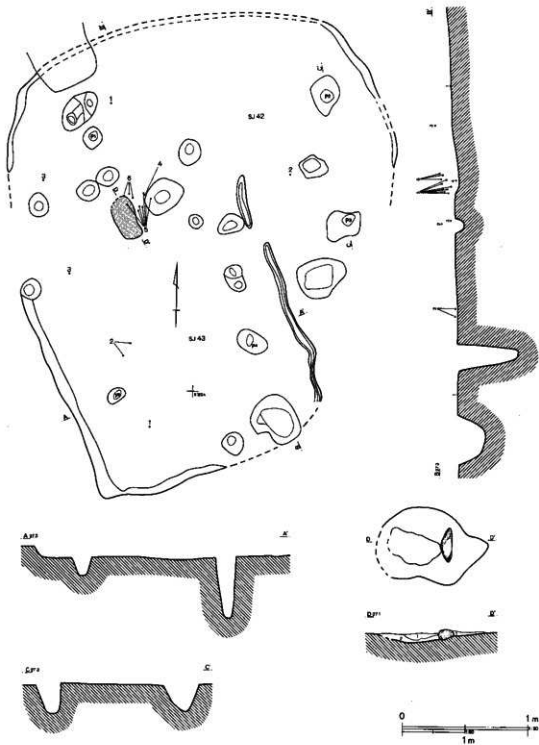
第41号住居跡出土遺物 (第388図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径 (11.6) 底径 6.4 現存高 12.1	器面はやや摩滅している。口縁部：内外面ともに、粗い横ナデか。胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面、上、下位はナデ、中位はハケ目。底部：内外面ともナデ。褐色（一部黒色）。	A+B+D+[(多)+J] 口10 胴50 底100 焼成：普
2	壺	口径 (11.4) 現存高 9.2	口縁部：内外面とも、ハケ目の後粗い横ナデ。胴部：内外面ともハケ目。赤褐色。	B+E+J 口50 焼成：普
3	手裡ね	底径 5.1 現存高 3.4	一部分LR織文あり。褐色。	A+B+E+F+J 底100 焼成：普
4	台付壺	口径 ( 6.8) 胴径 6.8 現存高 ( 9.7)	口縁部：外面はハケ目の後、内外面とも横ナデ。胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデ。黄褐色。	B+J(細密) 口20 胴15 焼成：普
5	壺	現存高 7.9	4本単位の櫛描文は雑で不鮮明。外面はハケ目の後施文。内面はヘラナデ。外部は褐色、内部は黄褐色。	A+B+I+J 焼成：普

第42号住居跡 (第389図)

第42号住居跡は、K' 89a グリッドに位置する。北側で第30号住居跡に、南側で第43号住居跡に切られる。僅かに検出された壁面の立ち上がりと、炉跡から住居跡の存在を判断した。貼床部分は既になく、壁溝・貯蔵穴等も検出されていない。実測図 (第389図) に表現されている炉跡は、第43号住居跡によって上部が削られ底面のみが残存ではあるが、第42号住居跡に伴うものである。第43号住居跡の出土遺物 (第391図) 4~6は、位置的に跡からは浮いており、第43号住居跡の床面直上と





第388圖 第42・43号住居跡



第390図 第42号住居跡出土遺物

もいえるレベルで出土をしている。残存していた炉跡は、86cm×60cmの楕円形・深さ8cmを測る。P1～P3を支柱穴と推定すると、各ピット間の距離はP1-P2間が370cm・P2-P3間が201cm、確認面からの深さは、P2・P3共に45cmを測る。主軸方向はN-104°-Wと想定される。

少数の遺物の中から、図化し得たのは3点である。

第42号住居跡出土遺物 (第390図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 杯	脚台径 (14.0) 現存高 12.0	脚台部：外面はハケ目の後端部横ナデ後へラ磨き、内面はナデとヘラナデの後端部を横ナデ。赤褐色。	B+J(細密) 脚15 焼成：普
2	高 杯	口 径 (18.0) 現存高 3.4	複合部：L&L編文。内外面ともへラ磨き。赤褐色。	A+B+I+J □25 焼成：普
3	高 杯	口 径 (13.8) 現存高 3.9	口縁部：外面は横ナデ、内面は横ナデの後へラ磨き。杯部：内外面ともへラ磨き。褐色。	B+J(細密) □10 焼成：普

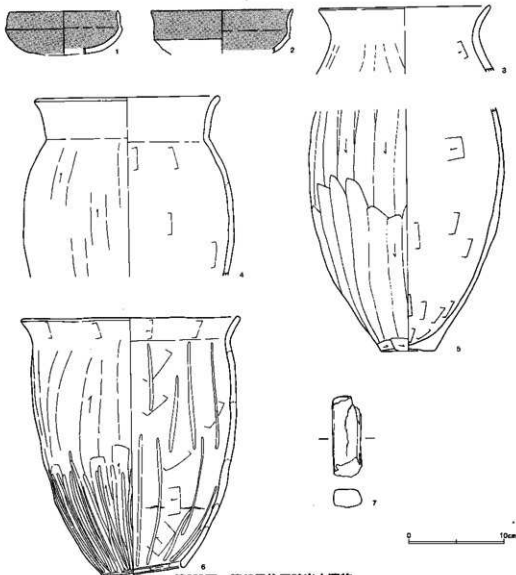
第43号住居跡 (第389図)

第43号住居跡は、K' 89 a グリッドに位置する。住居跡の床面付近が僅かに遺存しているといった状況で、本住居跡も東側で壁溝の一部が、西側で壁面の立ち上がりが20cm程検出できたのみである。P4・P5を支柱穴と推定すると、距離は220cm・確認面からの深さは100cmと30cmを測ることになる。P6も支柱穴の可能性が考えられる。図化し得た遺物は7点である。

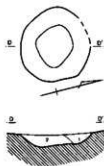
第43号住居跡出土遺物 (第391図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口 径 (14.1) 現存高 4.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はへラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+J □15 杯15 焼成：良
2	杯	口 径 (15.5) 現存高 4.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はへラ削りの後ナデか、内面はナデ。赤褐色。	B+J(細密) □20 杯20 焼成：普
3	甕	口 径 (17.8) 現存高 6.9	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はへラ削り、内面はへラナデ。黄褐色。	A+B+H+J □45 焼成：普
4	甕	口 径 (18.9) 胴 径 (22.1) 現存高 18.8	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はへラ削りの後ナデ、内面はへラナデ。黄褐色。	A+B+D+S+J □30 焼成：普

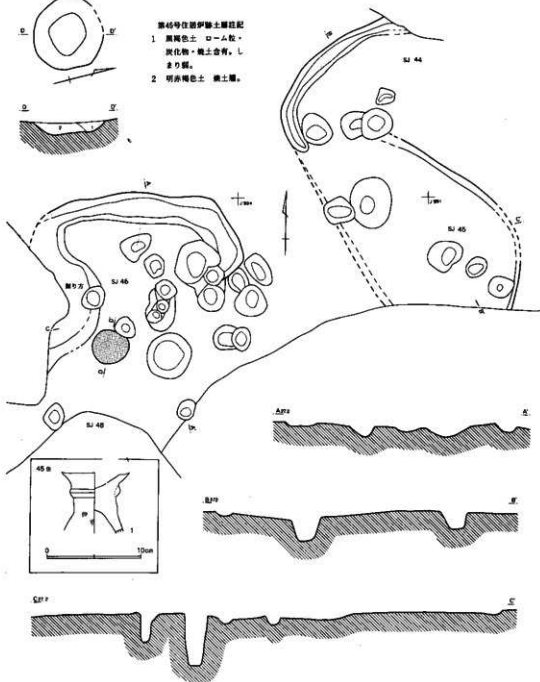
5	甕	胴径(20.5) 底径 5.8 現存高 25.4	胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。底部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。底部ドーナツ状。淡褐色。	A+B+I+J 底100 胴60 焼成：普
6	甕	口径 22.4 胴径 21.4 器高 27.0	口縁部：内外面ともヘラナデの後横ナデ。胴部：外面は全面ヘラ削りの後下半を粗いヘラ磨き、上半を粗いナデ、内面はヘラナデの後粗いヘラ磨き。赤褐色。	A+B+H+J 口70 胴70 焼成：普
7	砥石	現存長 8.5 幅 3.0 厚さ 1.9	上端と下端を欠損する。表裏面と両側面と条線を残す、あるいは磨製石片か。重量79.8g。青灰色。	粘板岩製



第391図 第43号住居跡出土遺物



- 第44号住居伊藤土層柱記
- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物・焼土含有、しまり質。
  - 2 明赤褐色土 焼土層。



第392圖 第44～46号住居跡

#### 第44号住居跡 (第392図)

第44号住居跡は、J' 89 b グリッドに位置する。北側で第37号住居跡、南側で第45号住居跡と重複しているが、新旧関係については不明である。幅25cm・深さ7cmの壁溝によりコーナー部分が、そしてごく部分的にはあるが堅固な貼床が検出されたことによって、住居跡の存在が確認された。第392図のエレベーションB-B' で示されるピットを支柱穴と想定すると、距離は245cm・確認面からの深さは30cmと35cmとなる。この並びを長軸と仮定すると、主軸方向はN-32° -Wを指すこととなる。貯蔵穴・炉跡等は検出されず、遺物の出土もなかった。

#### 第45号住居跡 (第392図)

第45号住居跡は、J' 89 b グリッドに位置する。第44号・第46号・第50号住居跡等と重複関係にあるが、新旧関係については判定することはできなかった。遺存度は非常に悪く、僅かに残された立ち上がりから、コーナー部分を1箇所確認できたのみにとどまる。貼床面・支柱穴・壁溝・炉跡・貯蔵穴等々は検出されていない。遺物の出土は少なく、図化し得た遺物は1点である。

#### 第46号住居跡 (第392図)

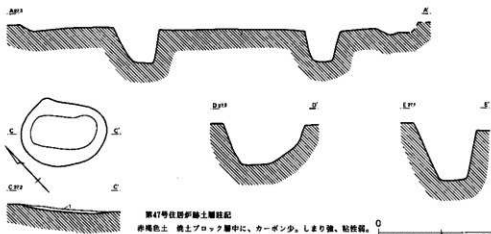
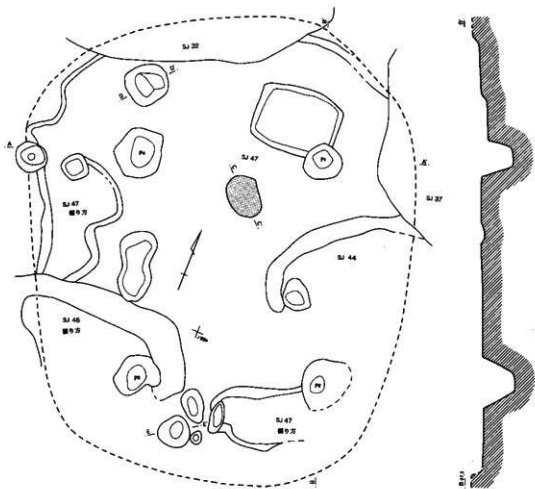
第46号住居跡は、J' 89 d グリッドに位置する。第45号・第48号・第50号・第51号住居跡等と重複しているが、新旧関係については判別できなかった。遺構の遺存度は非常に悪く、掘り方の一部と炉跡の存在から、住居跡が確認されたのみにとどまる。そのため、遺構の規模・形態は不明である。

遺構内から、多くのピットが確認されているが、支柱穴として特定できるピットは見当たらなかった。貯蔵穴については、北東コーナー付近の土壌にその可能性が考えられるが、確定することはできなかった。残存していた炉跡は、57cm×55cmの略円形・確認面からの深さは7cmを測るものである。遺物は出土していない。

#### 第47号住居跡 (第393図)

第47号住居跡は、J' 89 a グリッドに位置する。第32号・第37号・第44号・第46号住居跡等と重複するが、新旧関係については判別できなかった。部分的に遺存していた掘り方と炉跡から、住居跡として確認することができた。掘り方の形態から、隅丸の長方形を想定して図化した。確認はない。

P1~P4を支柱穴と判断した。各支柱穴間の距離は、P1-P2間が355cm・P2-P3間が286cm・P3-P4間が348cm・P4-P1間が290cm、各支柱穴の確認面からの深さはP1で50cm・P2で50cm・P4で55cmを測り、主軸方向はN-22° -Wを指す。支柱穴を結んだ線の内側、北寄りには炉跡が検出された。規模は66cm×50cmの楕円形・確認面からの深さは2cmを測るものである。エレベーションD-D' で示される土壌は貯蔵穴であろうか。遺物は出土していない。



第47号住居跡土層経記  
赤褐色土 焼土ブロック層中に、カーボン少。しまり強、粘性强。

第393図 第47号住居跡

### 第48号住居跡 (第394図)

第48号住居跡は、J' 89 g グリッドに位置する。北側の第46号住居跡との新旧関係については不明であるが、東側に位置する第50号住居跡は切っていると推定される。その他については重複はなく、本遺跡では遺存状況の良い部類に含まれる。

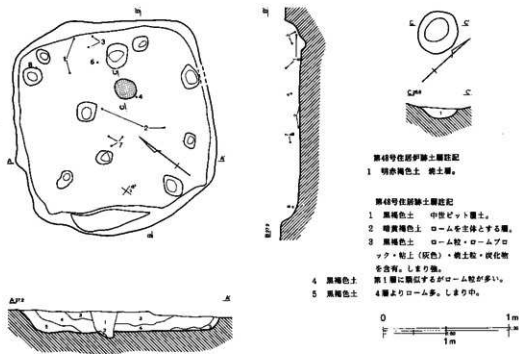
比較的小型の住居跡である。平面規模は北東-南西間で330cm・南東-北西間で310cm、四隅に若干丸味をもつ方形を呈する。確認面からの深さは35cmを測り、主軸方向はN-41° - Eを指す。遺構内から10基のピットが検出されているが、支柱穴を思わせるものは見当たらなかった。南西壁面に、テラス状部分をもつ。

住居跡中央からやや北東寄りに、炉跡が検出されている。規模は45cm×40cmの略円形・床面からの深さは8cmを測る。ロームブロックを主体とする貼床面は、堅固で平坦であり、比較的しっかりしたものであった。壁面の立ち上がりは、崩れた分を考慮するとかなり急であり、ほぼ直立すると推定される。壁溝・貯蔵穴等は検出されていない。

出土した遺物の中から図化し得たのは、土器7点・石製品1点の計8点である。

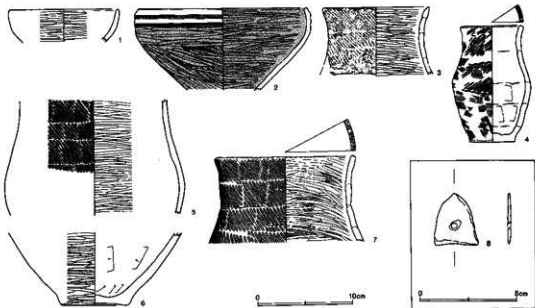
### 第48号住居跡出土遺物 (第395図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	高杯	□ 径 (11.4) 現存高 3.4	□縁部：内外面ともへら磨き。明褐色。	A+B+D+E+J □30 焼成：替



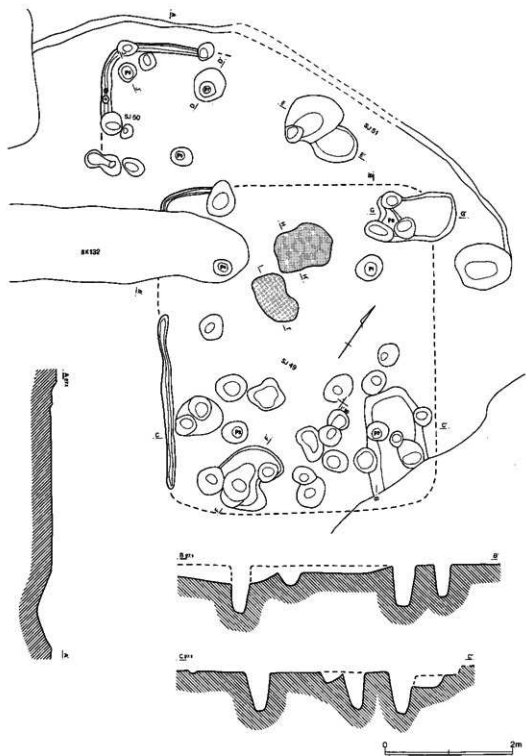
第394図 第48号住居跡

2	高 杯	口 径 (17.6) 現存高 8.5	口縁部：外面は横ナデ、内面は横ナデの後ヘラ磨き。杯部：内外面ともヘラ磨き。赤褐色。	A+B+G+J □25 焼成：良
3	壺	口 径 (11.0) 現存高 7.1	RL縄文。内面はヘラ磨き。褐色（一部黒色）。	A+B+J □25 焼成：普
4	壺	口 径 (5.9) 胴 径 8.2 底 径 4.6 器 高 12.1	頸部はほぼ直立し、口縁部でわずかに外反して開く。 口縁部：無節r縄文を施す。外面全体にハケ目の後ナデを行う。 口縁～胴部中位：外面は末端の原体1本をからげて結んだもの、原体ro段（無節）の結節縄文。施文は非常に雑である。 体部：内面はヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデ。灰褐色。	B+P+J □25 底100 胴80 焼成：良
5	壺	現存高 11.8	外面はハケ目の後施文（RLを3段）、内面はヘラ磨き。暗褐色。	A+B+P+J 焼成：普
6	壺	底 径 6.8 現存高 7.5	胴部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。橙色。	B+D+I+J 底100 胴下35 焼成：普
7	壺	口 径 (14.3) 現存高 9.0	口縁～頸部：輪襷痕は不明瞭、外面及び口唇部にRL斜縄文を施す。内面はハケ目の後ヘラ磨き。縄文は比較的鮮明である。 口縁は緩く外反して開く。黄褐色。	A+B+I □25 焼成：普
8	石 鏃	長 さ 2.6 幅 2.2 厚 さ 0.2	概略5角形を呈すが、抉りは浅い。長巾比率は0.89、先端角90度。側面に両側から面取りを行い、刃部を研ぎ出す。中央部に両側からの穿孔を施す。孔径0.3cm、重さ1.34g。浅緑色。	緑泥片岩製



第395図 第48号住居跡出土遺物

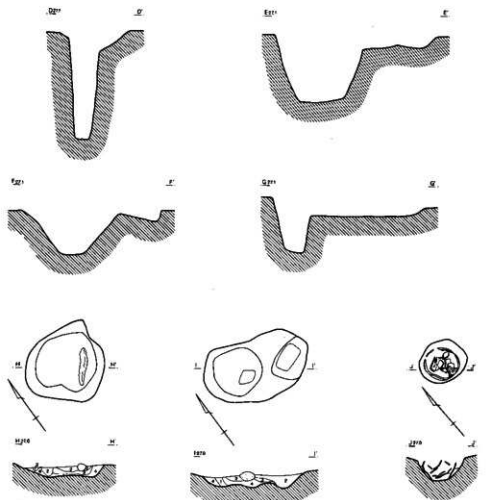




第398图 第48~51号住居跡(1)

第49号住居跡 (第396・397図)

第49号住居跡は、J' 89 i グリッドに位置する。第50号・第51号住居跡と北側で重複をしているが、これらを切っていると推定される。貼床部分はずでに失われており、西側で検出された幅15cm・深さ3cm程の壁溝から、規模や形態を推定してみた(第396図破線部分)。推定規模は510cm×425cmの略長方形、主軸方向はN-35° - Wを指す。P1~P4を支柱穴と想定した。その場合の各ビット間の距離は、P1-P2間が258cm・P2-P3間が220cm・P3-P4間が256cm・P4-P1間が230cmを測る。ちなみに、確認面からの深さはP2で65cm・P3で60cmである。北側コーナーのエレベーションG-G'で示した窪み、または南側のエレベーションF-F'で示した窪みが、貯蔵穴の痕跡であろうか。前者は推定100cm×68cmの楕円形・確認面からの深さ16cm、後者は推定100cm×70cmの不整形楕円形・確認面からの深さ20cmを測る。



第49号住居跡跡土層柱記 1・2共通

- 1 礎石
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含有。
- 3 暗赤褐色土 焼土層。
- 4 暗黄褐色土 焼けたロームブロック層。

第397図 第49~51号住居跡(2)



第49号住居跡出土遺物 (第398図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 杯	口 径 (15.4) 現存高 3.8	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラナデの後粗いナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+E+I □25 焼成：普

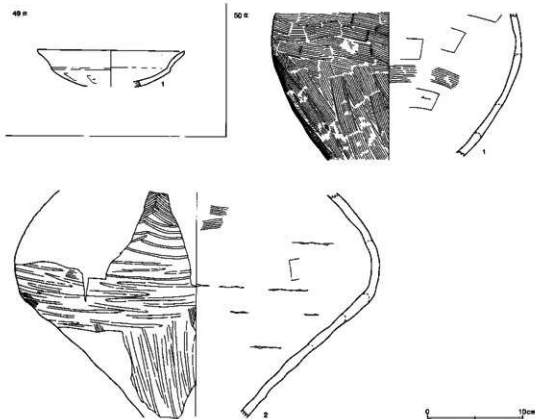
主柱穴を結んだ線の、外側やや北寄りに1基、内側やや南寄りに1基、計2基の炉跡が検出されている。前者（エレベーションH-H'）は、61cm×61cmの不整形円形・確認面からの深さ8cmを測る。北寄りの位置に、偏平な長細い石が据えられていた。後者（エレベーションI-I'）は、86cm×47cmの不整形円形・確認面からの深さ10cmを測る。中央付近に、拳大の石が検出された。

ごく少数の出土遺物の中から、図化し得たのは1点のみであった。

第50号住居跡 (第396・397図)

第50号住居跡は、J' 89gグリッドに位置する。第51号・第49号住居跡と重複しているが、前者を切り、後者には切られていると推定された。

代正寺遺跡や大西遺跡では、耕作や攪乱等によって、遺構の遺存度は全体的に悪い。場所によっ



第398図 第49・50号住居跡出土遺物

第50号住居跡出土遺物 (第398図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 17.0 現存高 26.1	胴部：外面はハケ目、内面はハケ目とヘラナデ。 褐色。	A+B+C+G+J 胴下75 焼成：普
2	壺	胴径 (38.4) 現存高 23.5	胴部中に張りをもつ。器面は内外面とも摩滅著しい。外面はハケ目の後ヘラ磨きか、上半にヘラ描による線彩文と思われる文様を施す。沈線は深く幅広い。内面上位は粗いハケ目の後ナデか、中～下位はヘラナデの後ナデか。茶褐色。	A+B+D+H 胴15 焼成：普

ては、40cm～50cm程の表土を剥ぐとそのままローム面が現れてしまう、という状況であった。大西遺跡では、88～90グリッドの東側において特に遺存状況が悪く、本住居跡を始めとして規模や形態を揃めない遺構が多くみられた。

本住居跡は、幅15cm・深さ5cmの壁溝が、長さ2、3m程確認されたのみであり、規模や主軸方向は確定できなかった。壁溝から推定されるプランは、四隅に若干丸味をもつ方形あるいは長方形である。検出されたのは西側コーナー部分であるが、このコーナー脇に位置するP6は貯蔵穴と思われるもので、土器が2点(第398図1・2)が出土をしている。規模は、39cm×31cmのほぼ円形・深さは18cmを測る。

ごく部分的に、ロームブロックを主体とした、堅固な貼床が認められた。本住居跡は、第49号住居跡と方位的にほぼ等しいとみられ、また位置的にも近い。調査時においては、第49号住居跡を拡張した遺構であるとの可能性も考えてみた。しかし貼床面が途切れ、出土遺物を観ても時期的に異なる点からも、別個の遺構であると判断した。P5に主柱穴の可能性を想定したが、確認は得られなかった。炉跡は検出されていない。

出土した遺物は、貯蔵穴からの2点のみであった。

第51号住居跡 (第396・397図)

第51号住居跡は、J' 89hグリッドに位置する。第132号土壌によって切られる。第45号・第46号・第49号・第50号住居跡等と重複するが、新旧関係については確定できなかった。6cm程の立ち上がりを検出され、住居跡の存在が知れたのみであった。

北側の立ち上がりのみから推定すると、平面形態は隅丸の長方形が考えられよう。そしてこの壁面は、長軸方向に対応すると看做されるが、主柱穴としてP5またはP7と、P8を想定してみた。確認面からの深さはP7が83cm・P8が43cm、ピット間の距離はP5-P8では340cm・P7-P8では370cmを測る。壁溝・炉跡などは検出されていない。遺物の出土はみられなかった。

第52号住居跡 (第399・400図)

第52号住居跡は、L' 90cグリッドに位置する。本住居跡は、表土削平中に、カマド部分が島状に遺存しているのが確認された。そのため、周囲についても削平を薄目にして遺構確認に入ったが、

壁面を検出することはできなかった。

カマド及びカマド周辺の精査を行っていく過程で、カマドは1基ではなく2基であることが判明した。遺存状況の良好なカマドについては、第52号住居跡に伴うものと判断された。しかし今一つについては、別個の遺構であるとは判別できたものの、カマド袖部分の最下部と思われる焼土の付着した粘土帯を検出できたのみにとどまり、規模や方位だけでなく、住居跡そのものの検出もかなわなかった。

第52号住居跡のカマドは、北側部分を近世ピットに切られてはいるものの、比較的残りは良く、図化した以上には北に及んでいないと観察された。そして、このカマドの北側においては、土師器や須恵器のほかには陶器の鉢も出土するなど、他遺構との重複による遺物の混入がみられる。

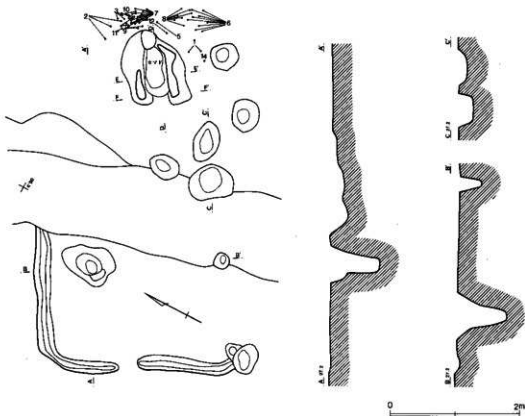
これまでに述べてきた範囲と同様に、この周辺箇所についても遺構の遺存状況はきわめて悪く、全体的に黒褐色の覆土がシミ状に広がっているという様相であった。そのため遺構として確定をし、図化することはできなかったが、周囲には多数の遺構が存在したと推論される。そのため、残念ではあるが、この範囲内からの出土遺物に関しては、“第52号住居跡カマド周辺遺物”として第401図に掲げることとした。

次いで、第52号住居跡について記述をしたい。遺構内を第5号溝跡によって、南北に切られている。既に述べたように遺構の遺存度は低く、僅かにカマド部分と、壁溝を確認できたのみであった。壁溝は幅20cm～25cm・確認面からの深さは10cmを測り、北壁の西側半分と西壁の北部分を得たのみである。西壁については、南部分で屈曲してコーナーとなるのではなく、さらに南に続くものと観察された。この見通しから判断すると、本住居跡は東カマドであり、東壁中央からやや北寄りに位置するといえよう。

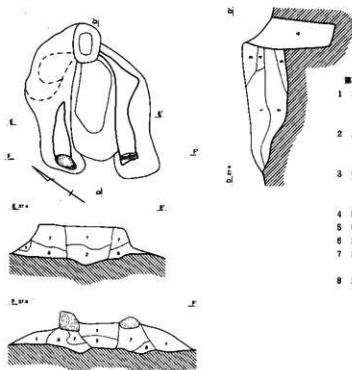
カマドは、北端部分を近世ピットに切られているが、他の部分から規模の推定を行った。全長は推定123cm・焚口幅24cmを測る。カマド袖に挟まれた部分の第1層と第2層は焚口部・燃烧部に相当しよう。第3層も燃烧部と層数されるが、一部天井部からの崩落土が混入しているとも考えられる。第7・8層はカマド袖部に相当するといえよう。構築材は、ロームブロックを多量に混入した粘性はそれほど強くない黒褐色土であり、袖部先端の内側、床面からそれぞれ14cm・18cmの位置に、拳大の石が据えられていた。天井部に関しては既に失われており、煙道は近世ピットによって攪乱されたと推定される。

壁溝やカマドから、主軸方向（東西方向）の規模は480cm、主軸方向はN-61°-Eを指すと想定される。あくまでも一つの可能性として、エレベーションB-B'で示されるピット2基を主柱穴と想定すると、ピット間の距離は210cm、確認面からの深さは80cmと40cmという数値が得られる。この場合、この2基に対応するピットは確認されておらず、プラン的にも縦長の住居跡となる。西側壁溝の南側が、ピットに切られるはするものの屈曲しているようにも見受けられ、この屈曲をそのまま延長すれば、あるいは本住居跡のプランとなるのかも知れない。

出土遺物は得られなかった。



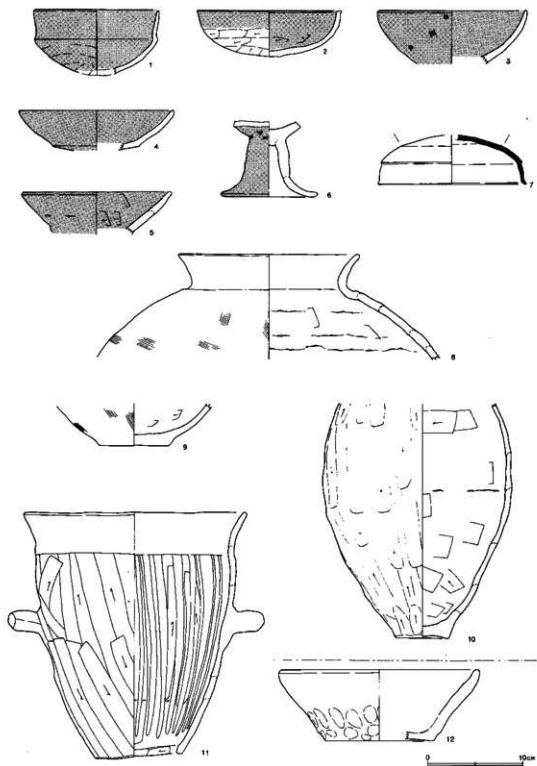
第399図 第52号住居跡(1)



第400図 第52号住居跡(2)

第52号住居カマド土層註記

- 1 黒褐色土 ローム粒・黄土粒・黄土ブロック含有。しまり強。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。しまり強。
- 3 明赤褐色土 粘土を多量に含む層。粘土層入が顕著。粘性中。
- 4 暗灰褐色土 粘土層。
- 5 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。
- 6 黒褐色土 ローム粒・粘土層入。しまり強。
- 7 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・黄土粒含有。粘性中。
- 8 黒褐色土 多量のロームブロック含有。ソゲ基層か。

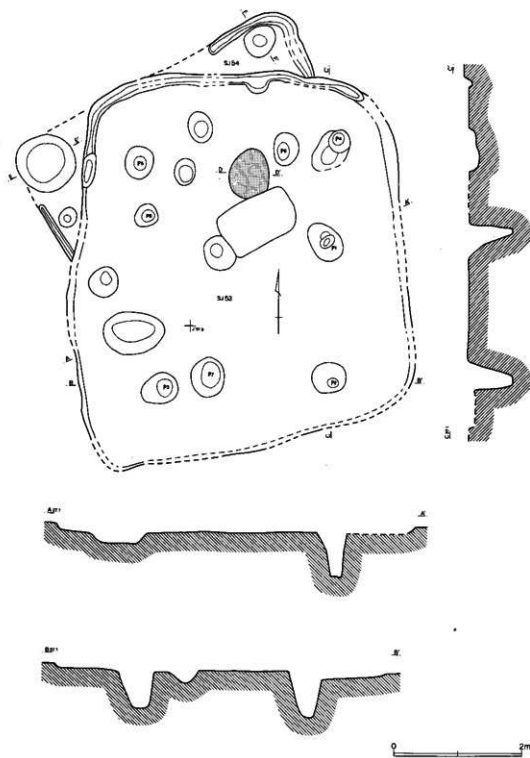


第401图 第52号住居跡出土遺物

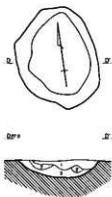
第52号住居跡出土遺物 (第401図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (13.0) 現存高 6.8	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。茶褐色。	B+J(細密) □25 焼成：やや良
2	杯	口径 15.0 現存高 5.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。橙色。	A+E+I(多)+J □150 杯80 焼成：やや良
3	高杯	口径 (15.3) 現存高 5.5	器面は摩滅している。口縁部：外面はハケ目の後内外面とも横ナデか。杯部：外面はハケ目の後ナデか、内面はナデ。褐色。	A+B+J(細密) □130 杯25 焼成：普
4	高杯	口径 (16.1) 現存高 4.1	口縁部：内外面とも丁寧なナデ。赤色。	A+B+E+J □25 焼成：やや良
5	高杯	口径 (15.5) 現存高 4.5	口縁部：外面は横ナデ、内面はヘラナデの後横ナデ。赤褐色。	A+B+E+J □95 焼成：やや良
6	高杯	脚台径 (9.2) 現存高 7.8	杯部：外面はハケ目の後ナデ、内面はナデ。柱状部：外面はナデ、内面は粗いナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤色。	A+B+E+J 脚70 焼成：良
7	須臾器 蓋	口径 (15.4) 現存高 5.1	全面：ロクロナデ。天井部：回転(左回転)ヘラ削り。灰色。	B+I(多)+J □20 蓋20 焼成：普
8	壺	口径 (19.0) 現存高 11.0	9と同一個体。 外部は黒色、内部は茶褐色。	□20 胴上半20
9	壺	底径 7.2 現存高 4.3	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はハケ目の後ナデ、内面はヘラナデの後ナデ。	B+I+J 底100 焼成：普
10	壺	胴径 (19.8) 底径 5.5 現存高 24.6	胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。底部：外面はヘラナデ、内面はナデ。赤褐色(一部黒色)。	A+B+I+J 底100 焼成：普
11	甌	口径 (23.1) 底径 9.1 器高 25.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラ削りの後粗いヘラ磨き。橙色(一部黒色)。	A+B+I+J □90 甌85 焼成：やや良
12	陶器 鉢	口径 (20.4) 底径 (11.7) 器高 7.5	口縁部：内外面とも横ナデか。体部：外面は指頭による押さえか、内面はナデか。灰色。	B+小磯 □25 底20 焼成：普





第402圖 第53・54号住居跡(1)



第53号住居跡土層図記

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含有。
- 2 明赤褐色土 表土層。
- 3 明黄褐色土 焼けてボロボロになったローム層。



第403図 第53・54号住居跡②

### 第53号住居跡 (第402・403図)

第53号住居跡は、J' 90 e グリッドに位置する。北側で、第54号住居跡に切られる。共に床面が失われているため、掘り込みの深い本住居跡の方が、遺構の残りが良かったという状況であった。北側と西側のごく一部に、幅20cm・深さ5cmの壁溝が検出された。平面規模は595cm×520cmの略方形・確認面からの深さは10cmを測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。主柱穴は可能性として、P-1~P3を考えた。残る1箇所については、第54号住居跡の主柱穴と想定したP8が、これに該当するのだろうか。各ピット間の距離はP1-P2間が220cm・P2-P3間が258cm、深さはP1・P2で70cm・P3で60cmを測る。主柱穴を結んだ線の外側に、炉跡が検出された。遺物の出土はない。

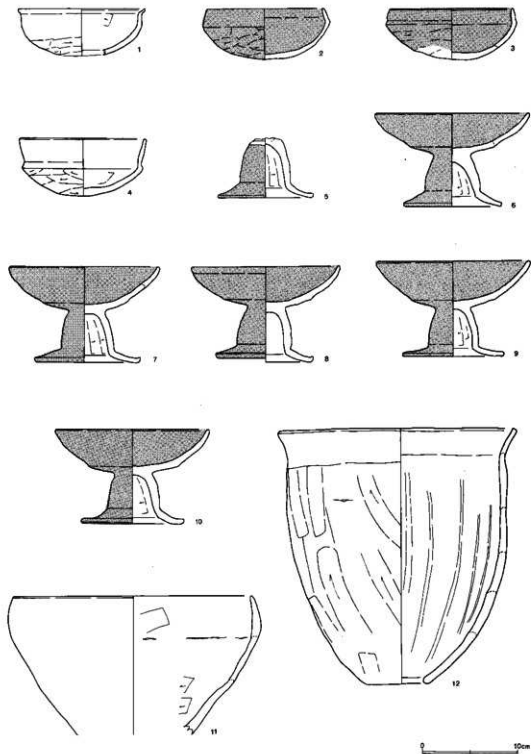
### 第54号住居跡 (第402・403図)

第54号住居跡は、J' 90 b グリッドに位置する。実測図(第402図)のみからでは、第53号住居跡に切られているように見受けられるが、第53号住居跡の方が掘り込みが深いため、遺存度が高くなった結果と想定される。

北壁・東壁・西壁それぞれにおいて、部分的にはあるが壁溝が確認された。壁溝は幅10cm~20cm・確認面からの深さは5cm程であり、これによって得られた東西規模は475cmであった。カマドは検出されていないが、北カマドであればN-30°-W、東カマドであればN-60°-Eの主軸方向が推定できる。主柱穴を特定することは困難であったが、P6~P8を想定すると各ピット間の距離は、P7-P8間で265cm・P8-P6間で230cmとなるが、残る1箇所が得られず確証を欠く。東西コーナーに見られる土壌のいずれかが、貯蔵穴であろうか。比較的出土遺物が多く、14点を図化することができた。

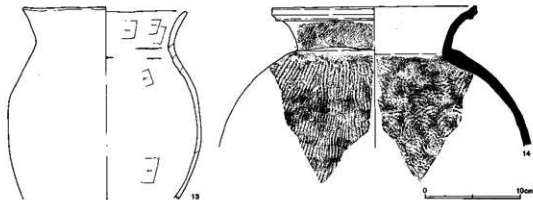
### 第54号住居跡出土遺物 (第404・405図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径(13.1) 現存高 4.8	□縁部:内外面とも横ナデ。体部上半:外面はナデ、内面はヘラナデとナデ。体部下半:外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。黄褐色。	B+H+J □25 体20 焼成:やや良



第404圖 第54号住居跡出土遺物(1)

2	环	口径 12.2 現存高 5.3	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はヘラ削りの後横ナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+H+J □50 体70 焼成：良
3	环	口径 12.2 器高 5.3	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、内面は丁寧なナデ。赤褐色。	A+B+I+J □90 体100 焼成：良
4	环	口径 (13.3) 現存高 6.0	口縁部：内外面とも粗い横ナデ。坏部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデとナデ。褐色。	A+B+G+J □55 坏80 焼成：良
5	高环	脚台径 10.0 現存高 6.3	柱状部：外面はナデ、内面はヘラナデの後ナデ。裾部：内外面とも粗い横ナデ。赤褐色。	A+B+H+J 脚85 焼成：良
6	高环	口径 (16.2) 脚台径 (10.3) 器高 9.7	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。 柱状部：外面はナデ、内面はヘラナデの後ナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	A+B+J 坏80 脚100 裾50 焼成：良
7	高环	口径 (15.3) 脚台径 11.2 器高 10.1	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。 柱状部：外面はナデ、内面はヘラナデの後ナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	A+B+H+J 坏80 脚100 裾75 焼成：良
8	高环	口径 15.2 脚台径 9.8 器高 10.0	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。 柱状部：外面はナデ、内面はヘラナデの後ナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	A+B+J 坏80 脚90 裾50 焼成：良
9	高环	口径 16.0 脚台径 (15.0) 器高 10.0	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。 柱状部：外面はナデ、内面はヘラナデの後ナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	A+B+G+J 坏70 脚100 裾30 焼成：普
10	高环	口径 15.8 脚台径 (10.8) 器高 9.9	口縁部：内外面とも横ナデ。坏部：内外面ともナデ。 柱状部：外面はナデ、内面はヘラナデの後ナデ。裾部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	A+B+J 坏60 脚80 裾30 焼成：良
11	甔	口径 (25.0) 現存高 14.5	器面は摩滅している。外面にスス付着。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラナデの後ナデか、内面はヘラナデとナデ。黒褐色。	A+B+J □35 体60 焼成：普



第405図 第54号住居跡出土遺物之2

12	壺	口径 24.5 器高 26.6	内外面と器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。 胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラ磨きか。褐色（一部黒色）。	A+B+I 口径60 胴50 焼成：普
13	壺	口径 (17.5) 胴径 (20.2) 現存高 20.1	口縁部：外面は粗い横ナデ、内面はヘラナデの後、粗い横ナデ。 胴部：内外面ともヘラナデとナデ。褐色。	A+B+H+J 口径80 胴上半35 焼成：普
14	壺	口径 (21.2) 現存高 14.4	頸部：外面は6本単位の波状文2段。胴部：外面は平行叩き目、 内面は青海波文。黄褐色（一部灰色）。	B+E+I+J 口径25 胴上半20 焼成：不良

#### 第55号住居跡 (第406・407図)

第55号住居跡は、L' 90dグリッドに位置する。第56号住居跡にのった状態で構築されており、第57号住居跡を切っている。北側壁面と、東西壁面の一部を検出できたのみであるが、南北規模については土層断面A-A'から推定することができた。平面規模は445cm×432cmの略方形・確認面からの深さは22cmを測る。主軸方向は、N-3'-Eを指す。

P1~P3を主柱穴と想定したが、第4番目については攪乱によって失われている。各主柱穴間の距離は、P1-P2間が238cm・P3-P1間が260cmを測る。土層断面より得られた貼床面のレベルからの深さは、P1で49cm・P2で68cm・P3で88cmである。貼床面はロームブロックを主体とする暗黄褐色土（第406図第4層）であり、締まりが強く粘性は弱い。第56号住居跡の覆土にのっているため、重複部分でのプランは不明確であったが壁溝はないと判断された。

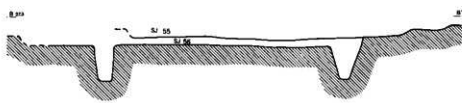
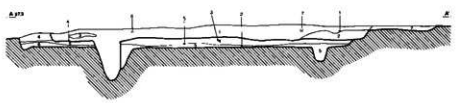
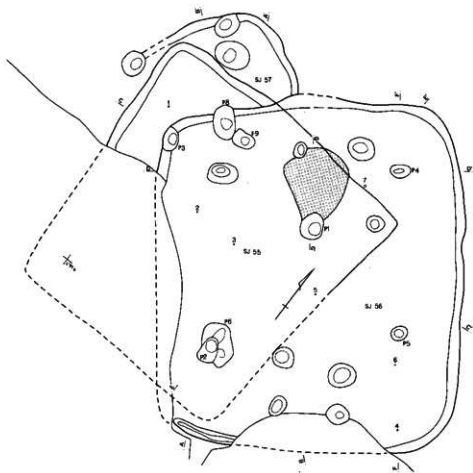
出土した遺物は少数であり、図化し得た遺物については、不明石製品を合わせて3点であった。

#### 第55号住居跡出土遺物 (第408図)

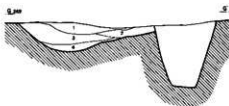
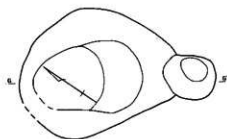
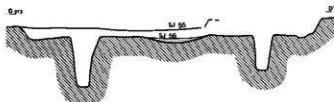
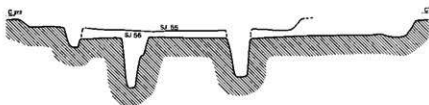
番号	器種	分量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (12.2) 現存高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、 内面はナデ。褐色。	A+B+I+J 口径30 杯30 焼成：良
2	不明 石製品	現存長 13.6 最大幅 4.9 厚さ 1.4	上部面のみ剝離が行われているが、後欠損したものと思われる。 他は自然瓦。重量156.3g。黄緑色。	緑泥片岩製
3	土錘	長さ 5.9 幅 3.4 重さ 55.8	形状は長楕円、断面はほぼ円形を呈す。大槌把な作りである。 暗褐色。	A+B+G+J ほぼ完形 焼成：普

#### 第56号住居跡 (第406・407図)

第56号住居跡は、L' 90eグリッドに位置する。第57号住居跡を切ると推定され、第55号住居跡には切られている。南西側と南東側の壁面が失われているが、平面形態・規模を推定することはできた。平面規模は538cm×482cmを測り、四隅に若干の丸味をもつ方形を呈し、確認面からの深さは22cmである。主軸方向は、N-39'-Wを指す。P4~P7を主柱穴と想定した。各主柱穴間の距離は、P4-P5間が250cm・P5-P6間が273cm・P6-P7間が250cm・P7-P4間が275cmを測る。各主柱穴の深さはP4で57cm・P5で62cm・P6で33cm・P7で80cmである。主柱穴を結んだ線に、炉跡が確認された。規模は123cm（推定）×95cmの楕円形・貼床面からの深さは22cmを測る。南側コーナー付近にのみ、壁溝が検出された。出土した遺物は少数であり、図化し得たのは5点である。



第406圖 第55~57号住居跡(1)



第55・56・57号住居跡土層断面記

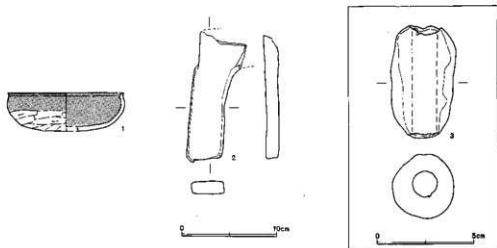
- 1 黒褐色土 カーボン・黄土粒・ローム粒微量。しまりやや強、粘性やや弱。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒若干。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック層。しまり強、粘性弱。  
(1~3層=S J 55)
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック層。しまり強、粘性弱。  
(4層=S J 55の粘床)。
- 5 暗褐色土 ローム粒・カーボン少。しまりやや強、粘性やや弱。
- 6 暗褐色土 ローム粒少、カーボン微量。しまりやや強、粘性やや弱。(5・6層=S J 56)
- 7 暗褐色土 ローム粒少。しまりやや強、粘性やや弱。  
(7層=S J 57)。

第56号住居跡土層断面記

- 1 暗黄褐色土 カーボン・黄土粒少。しまりやや強、粘性やや弱。
- 2 黒褐色土 カーボン若干、黄土粒少。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 赤褐色土 粘上ブロック層中にカーボン若干。
- 4 暗黄褐色土 硬化したローム層。



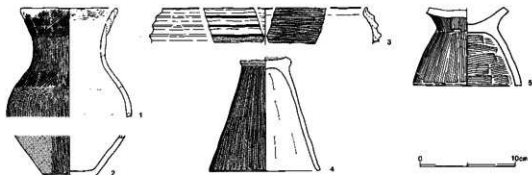
第407図 第56~57号住居跡②



第408図 第55号住居跡出土遺物

第56号住居跡出土遺物 (第409図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	口径 (9.9) 胴径 (13.0) 現存高 11.5	器面は摩滅著しい。口縁部に3段の輪襷痕を持つ。口縁部と胴部上位にLRの単斜縄文を施した後、頸部と胴部をヘラ磨き。胴部上位の縄文を4箇所ヘラ磨きですり消していると思われる。頸部内面：ヘラ磨きか。胴部内面：ナダか。赤褐色。	A+B+E+J □45 胴35 焼成：普
2	甕	底径 5.2 現存高 4.2	胴部：外面はヘラ磨き、内面はナダか。底部：外面はナダ、内面はナダか。黄褐色。	A+B+G+J 底100 焼成：普
3	高杯	口径 (21.5) 現存高 3.8	口縁部：外面はナダの後ハケ状工具による押擦か、内面はヘラ磨き。黄褐色。	A+B+J □10 焼成：やや良
4	高杯	脚台径 (11.6) 現存高 11.9	底部：内面はナダ。脚台部：外面は端部横ナダの後、全体を丁寧なヘラ磨き、内面は端部横ナダの後、全体をヘラナダ。赤褐色。	A+B+J(細密) 脚75 焼成：やや良



第409図 第58号住居跡出土遺物



5	台付壁	脚台径 11.4 現存高 8.1	底部に炭化物付着。脚台部：内外面ともハケ目。黄褐色。	B+C+J 脚100 焼成：やや良
---	-----	---------------------	----------------------------	----------------------

#### 第57号住居跡 (第407・408図)

第57号住居跡は、L' 90d グリッドに位置する。第55号・第56号住居跡に切られ、僅かにコーナー部分が1箇所確認されたのみである。確認面からの深さは6cm程で緩やかに立ち上がり、この範囲内では壁溝は検出されなかった。

P8またはP9を、支柱穴の1つと想定したい。P8を想定した場合、確認面からの深さは45cmを測る。規模は不明であるが、隅丸の方形あるいは長方形が推定される。遺物の出土はなかった。

#### 第58号住居跡 (第410図)

第58号住居跡は、L' 90h グリッドに位置する。遺構の重複が激しく、各遺構についてごく部分的に検出し得たのみであり、規模や形態を判断するには大きな無理を伴う。

第60号住居跡を切り、第59号住居跡・第5号溝跡・第145号土塊・第1号井戸跡等に切られている。北側と東側で、僅かな壁面と幅20cm～42cm・深さ4cm程の壁溝を部分的に検出し得たのみで、規模は不明であり、形態としては方形もしくは長方形が推定される。

遺構の遺存度は非常に悪く、確認面からの深さは6cmを測るのみである。遺構内には、数多くのピットが存在している。支柱穴の可能性を想定して、様々に並びを検討してみたが、残念ながら支柱穴として特定することはできなかった。なお、壁溝を参考とすると、主軸方向はN-30° - Wが想定される。

炉跡と覚しき遺構が2基検出されており、北側のものは65cm (推定) × 42cmの楕円形・深さ12cm、南側のものは75cm × 50cmの楕円形・深さ5cmを測る。

出土遺物はきわめて少なく、図化し得たのは1点のみであった。

#### 第58号住居跡出土遺物 (第411図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 13.4 現存高 4.3	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+J小瀬 (多) 完形 焼成：良

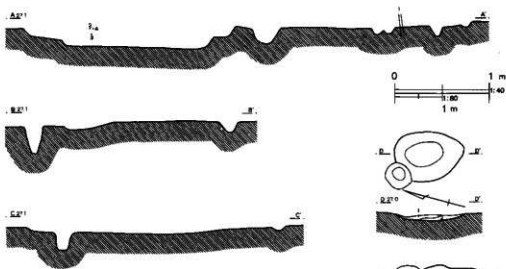
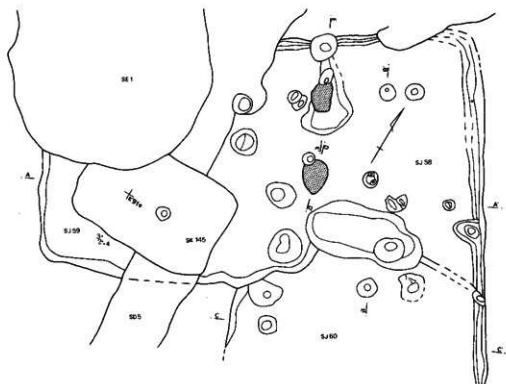
#### 第60号住居跡 (第410図)

第60号住居跡は、K' 91b グリッドに位置する。北側と東側で第58号・第59号住居跡や土塊によって切られ、南側についてはプランが失われている。確認面からの深さは最大値で12cmを測るが、北側と西側で僅かに検出された立ち上がりはきわめて緩やかである。調査し得た範囲内では、壁溝は確認されていない。支柱穴と覚しきピットや炉跡についても検出されなかった。図化し得た遺物は3点である。



0 10cm

第411図 第58号住居跡出土遺物



第58号住居跡土層柱記

1・2号共通

- 1 黒褐色土 焼土粒・カーボン微量。しまり・粘性やや弱。
- 2 暗褐色土 カーボン・ローム粒微量。しまり・粘性やや弱。
- 3 黒褐色土 焼土粒少、カーボン・ローム粒微量。しまり・粘性やや弱。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック層中にカーボン少。しまり・粘性やや弱。

第410図 第58・60号住居跡

### 第60号住居跡出土遺物 (第412図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	高 杯	口 径 (11.5) 現存高 6.9	口縁部：外面は横ナデ、内面は横ナデの後へラ磨き。 杯底：内外面とも丁寧なへラ磨き。黄褐色。	B+E+I(多)+J 杯35 焼成：普
2	壺	口 径 (18.8) 現存高 2.7	口縁部：内外面ともへラ磨き。茶褐色。	B+J(細密) 口10 焼成：普
3	高 杯	現存高 6.1	胴部下位：外面はへラ磨き、内面はナデ。脚台部：外面はへラ磨き、内面はへラナデ。赤褐色。	B+F+J 焼成：普

### 第61号住居跡 (第413図)

第61号住居跡は、K' 91f グリッドに位置する。南側から西側を大きく攪乱されるほか、北側から西側を第1号井戸跡・第5号溝跡によって切られる。これらの他にも第216号～第218号土壌に切られており、本住居跡の壁面はすべて失われている。

壁溝・炉跡あるいはカマド、さらに貯蔵穴等々についてもまったく検出されていない。それにも関わらず遺構として認定をし、住居跡と銘々したのは、周囲の遺構に囲まれた中に僅かながらも遺存していた貼床面によっている。

貼床面は、ロームブロックを主体とした暗黄褐色土からなり、きわめて堅固で明瞭なものであった。第61号住居跡が多くの住居跡にみられるように、硬度も弱く不明瞭な貼床面であったならば、あるいは住居跡として判断できなかったとも想像される。

第413図のエレベーションA-A' によって示されるピット2基を、1つの可能性として、支柱穴と想定したい。この場合、ピット間の距離は245cm、確認面からの深さは32cmと41cmを測ることになる。

遺物の出土はなかった。



第412図 第60号住居跡出土遺物

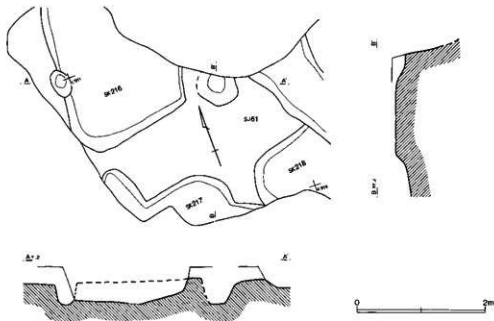
### 第62号住居跡 (第414・415図)

第62号住居跡は、N' 94 b グリッドに位置する。東側は擾乱を受けており、北側については第63号住居跡によって切られる。幅20cm～32cm・床面からの深さ6cm程の壁溝が巡るが、部分的に途切れている。P1もしくはP2とP3を支柱穴の2本と推定した。支柱穴間の距離は、P1-P3を仮定すると430cm、P2-P3を仮定すると460cmとなり、主軸方向については前者の場合でN-17 - W、後者の場合でN-17 - Wを指すと考えられる。

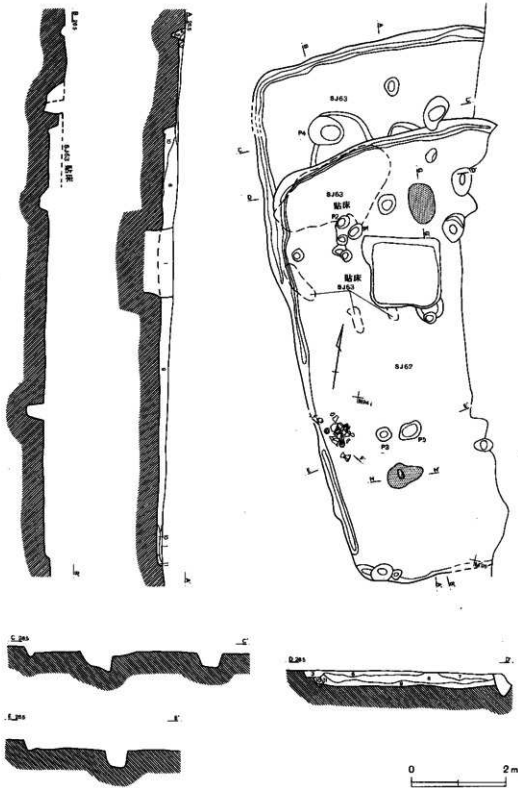
長軸方向の平面規模は912cm、四隅に若干の丸味をもつ長方形を呈すと推定され、確認面からの深さは32cmを測る。北側の支柱穴を結んだ線上に1基、南西コーナー付近に1基が検出された。前者は82cm×57cmの楕円形・床面からの深さ10cm、後者は100cm×49cmの不整形・床面からの深さ9cmを測る。南西支柱穴と壁面との間部分から、遺物5点がまとまった状態で出土をした。

### 第62号住居跡出土遺物 (第416・417図)

番号	器種	法量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径	6.4	口縁～胴部：外面は丁寧なヘラ磨き、口縁部：内面はヘラ磨き。 胴部：内面上位は指頭による押捺。底部：外面はヘラによるナ ア付け、内面はナデ。外部は赤褐色、内部は橙色。	B+D+H+J(細密)
		胴径	12.1		□80 胴100
		底径	4.6		底100 焼成：良
		器高	11.9		
2	壺	胴径	7.8	整形は非常に丁寧。胴部：外面は丁寧なヘラ磨き、内面上中位 はナデ、下位はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。 赤褐色。	A+B+E(細密)
		底径	3.8		底100 胴100
		現存高	10.2		焼成：良

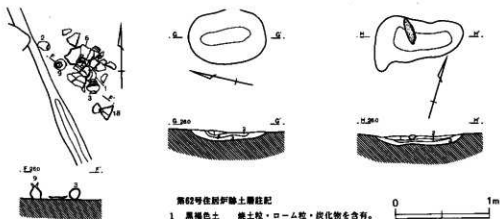


第413図 第61号住居跡



第414圖 第02・83号住居跡(1)

3	壺	胴径 12.9 底径 5.0 現存高 14.0	胴部中央に張りをもつ。胴部：外面上位と中位にRL斜織文を施した後、丁寧なヘラ磨き、内面上半はナデか、下半はヘラナデか。頸部：内外面とも丁寧なヘラ磨き。底部：内外面ともナデか。赤褐色。	A+B+J 胴100 底100 焼成：良
4	壺	底径 7.0 現存高 15.3	胴部中位にやや張りを有す。胴部上半にL燃糸文3段施す。胴部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面上半はヘラナデの後ナデ、下半はハケ目の後粗いナデ。赤褐色。	A+B+J(細密) 胴70 底65 焼成：やや良
5	壺	口径 18.4 現存高 12.3	器面は摩滅している。複合部：外面はLR2段、頸部：外面はLR2段まで残存、内面はナデ。口縁部：内面はヘラ磨き。赤褐色。	A+B+G+J 口80 焼成：普
6	壺	口径 (28.3) 現存高 12.3	内面は剝離著しい。口縁部：外面は横ナデ、内面は横ナデの後ヘラ磨き。頸部：内外面ともヘラ磨き。赤褐色(黒色)。	B+E+I 口35 焼成：普
7	壺	口径 16.2 現存高 10.6	対角線上に「耳」状の貼付、計2個あると思われる(現在1個)口縁部：外面は指で觸み突部状にした後、刻みを全周させる、内面はヘラ磨き。頸部：内外面ともヘラ磨き。肩部にRL織文。「耳」の部分には赤彩なし。橙色。	A+B+F+I(多)+J 口50 焼成：やや良
8	壺	現存高 16.0	外面はLR、RLの羽織文2段、それ以外の部分についてはヘラ磨き、内面はナデ。内外面及び欠け口にスス付着。破片を伊に転用したもの。明褐色。	A+B+E+H+J 焼成：やや良



第62号住居跡土層柱記

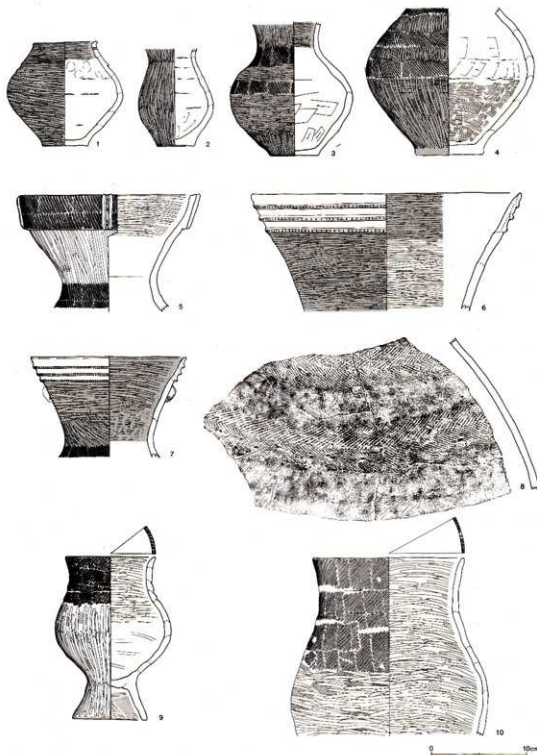
- 1 黒褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物を含有。
- 2 明赤色土 焼土層。
- 3 暗黄褐色土 焼けたローム層、粘性なし。



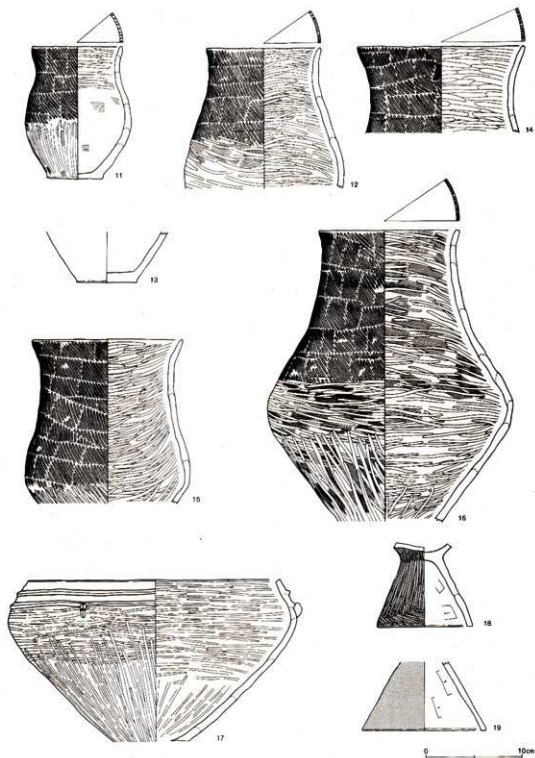
第62・63号住居跡土層柱記

- |         |                      |         |                            |
|---------|----------------------|---------|----------------------------|
| 1 赤褐色土  | ローム粒多量、焼土含有。         | 7 黒褐色土  | ローム粒・ロームブロック・焼土多含有。しまりや中弱。 |
| 2 黒褐色土  | ローム粒・ロームブロック・焼土含有。   | 8 黒褐色土  | 壁層は焼土が多い。                  |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒を主体とする層、焼土混入。    | 9 黒褐色土  | 8層より焼土多く炭化物多量含有。           |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒を主体とする層。         | 10 黄褐色土 | ロームを主体とする層。                |
| 5 暗黄褐色土 | ローム主体。しまり強。(S)E3の貼床) |         |                            |
| 6 黒褐色土  | ローム粒・ロームブロック・焼土粒含有。  |         |                            |

第415図 第62・63号住居跡②



第416图 第62号住居跡出土遺物(1)



第417图 第62号住居跡出土遺物2



9	台付甕	口 径 8.6 胴 径 12.2 脚台径 7.7 器 高 17	口縁は緩やかに外反して開く。胴部中央にやや張りをもつ。 口縁～頸部に輪横痕を4段有す。口唇部と頸部にL形斜縄文を施す。胴部～脚台部：外面はハケ目の後やや粗いヘラ磨き、口縁～胴部上半：内面はヘラ磨き。胴部下半：内面はヘラナデとナデ。脚台部：内面はハケ目。黒褐色。	A+B+H+J □90 胴100 脚100 焼成：良
10	甕	口 径 (15.7) 胴 径 (20.7) 現存高 18.7	口縁～頸部の輪横痕は不明瞭。口唇部及び口縁～頸部にL形の斜縄文を施す。胴部：外面はハケ目の後ヘラ磨き、口縁～胴部：内面はヘラ磨き。灰黄褐色。	B+I □25 胴上半55 焼成：普
11	甕	口 径 9.3 胴 径 11.1 器 高 13.7	口唇部に弱い刻み目を巡らせる。器面は摩滅著しい。口縁は緩やかに外反して開く。口縁～胴部上半にL形斜縄文を3段施す。口縁～胴部上半の輪横痕は不明瞭。胴部下半：外面はハケ目の後ヘラ磨き、内面はハケ目とナデか。口縁～胴部上半：内面はヘラ磨き。底部：内外面ともナデか。灰褐色。	B+E+J □65 胴80 底90 焼成：不良
12	甕	口 径 11.8 胴 径 16.8 現存高 14.2	頸部は括れ弱く、口縁付近でわずかに外反して開く。口縁～胴部上位の輪横痕は極めて不明瞭。口縁～胴部上位にL形斜縄文を施す。胴部上位～中位：外面はハケ目の後ヘラ磨き。口縁～胴部中位：内面はヘラ磨き。口唇部：木口状工具による刻みか。褐色。	A+D+小礫(多) 焼成：やや良
13	甕	底 径 6.4 現存高 5.3	胴部～底部：内外面ともナデ。黄褐色(一部黒色)。	H+J(細密) 底100 焼成：普
14	甕	口 径 (17.5) 現存高 9.0	口縁～頸部の輪横痕は不明瞭。口唇部～頸部にL形斜縄文を施す。褐色。	B+E+F 焼成：やや良
15	甕	口 径 (15.8) 胴 径 (17.4) 現存高 12.2	頸部はほぼ直立し、口縁部は緩く外反して開く。輪横痕は残さない。口縁～胴部上半：外面にL形の斜縄文を施すが、施文は雑である。胴部中位：外面はハケ目の後ヘラ磨き。口縁～胴部中位：ヘラ磨き。赤褐色。	A+D+I □20 胴20 焼成：やや良
16	甕	口 径 (14.5) 胴 径 25.6 現存高 30.5	胴部中央に張りをもつ。口縁～胴部上位の輪横痕は不明瞭。外面はL形の斜縄文を施す。口唇部にL形の斜縄文を施す。胴部中位～下位：ハケ目の後ヘラ磨き。口縁～胴部中位：内面はハケ目の後粗いヘラ磨き、胴部下位：内面はハケ目の後粗いヘラ磨きか。橙色。	B+E+I+J □115 胴・頸40 焼成：やや良
17	高 坏	口 径 (26.1) 現存高 16.7	器面は摩滅している。口縁部：外面は横ナデか、内面はヘラ磨き。体部：内外面ともヘラ磨き。褐色。	A+B+H+(細密) □・体50 焼成：普
18	高 坏	脚台径 9.8 現存高 8.3	脚台部：外面は丁寧なヘラ磨き、内面はヘラナデの後ナデ。赤褐色(内面黒色)。	B+D+J(細密) 脚100 焼成：良

19	高 坏	脚台径 (13.3) 現存高 7.2	外面は丁寧なナデ、内面はナデ。暗赤褐色。	A+G+J(細密) 脚40 焼成：青
----	-----	-----------------------	----------------------	-----------------------



第418図 第63号住居跡出土遺物

#### 第63号住居跡 (第414・415図)

第63号住居跡は、N' 93h グリッドに位置する。第62号住居跡と同様に、東側に攪乱を受けている。南側では、ロームを主体とする貼床が第62号住居跡の覆土の上のっているのが確認されたが、立ち上がりについては検出されなかった。幅20cm～30cm・床面からの深さ8cm程の壁溝が巡り、規模は不明であるが方形もしくは長方形が推定される。

P4 P5を、西側の支柱穴に想定した。その場合、P4-P5間の距離は650cm・確認面(第62号住居跡床面)からの深さはそれぞれ30cmと34cmを測る。主軸方向はN-13°-Wが推定され、第62号住居跡ときわめて近い数値となる。貯蔵・貯蔵穴については検出されていない。

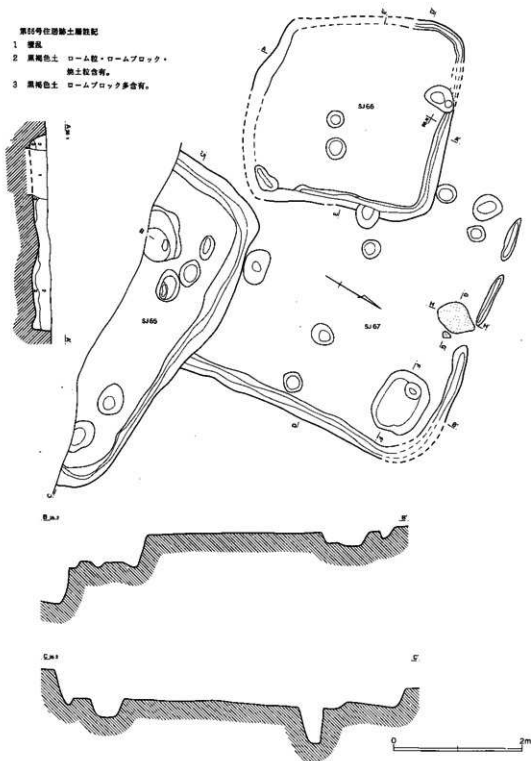
少数出土した遺物のうち、図化し得たのは2点である。

#### 第63号住居跡出土遺物 (第418図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	碗	底径 5.1 現存高 4.7	壺の下半を碗に転用したもの。胴部：外面はヘラ磨き、内面はヘラナデとナデ。底部：内外面ともナデ。褐色。	A+B+D+E+F+I+J 胴下半100 底100 焼成：やや良
2	壺	胴径 (22.2) 底径 7.6 現存高 9.5	胴部：外面はハケ目の後粗いナデと粗いヘラ磨き、内面はヘラ磨き。底部：外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き。褐色(内面は黒褐色)。	B+P+I+J 胴下半30 底90

第65号住居跡土層略記

- 1 壁土
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・  
粘土粒含有。
- 3 黒褐色土 ロームブロック多含有。



第418図 第65～67号住居跡(1)

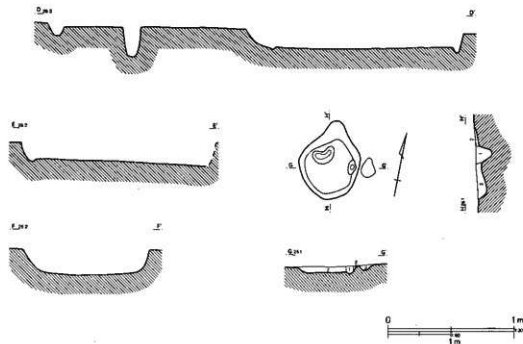
第65号住居跡 (第419・420図)

第65号住居跡は、N' 95 b グリッドに位置する。北側で第67号住居跡を切り、両側は攪乱のため失われている。大西遺跡で検出された住居跡の中で、最も南に位置する遺構である。

幅16cm～38cm・床面からの深さ10cm程の壁溝が巡っている。平面規模は不明であるが、形態としては方形あるいは長方形が想定されよう。確認面からの深さは38cmを測り、壁面の立ち上がりは直角に近かったと推定される。第419図エレベーションC-C' で示されるピット2基のうち、西側のものが北西支柱穴と考えられるが、その他の支柱穴やカマド・貯蔵穴等に関しては検出されていない。図化し得た遺物は3点である。

第65号住居跡出土遺物 (第421図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	□ 径 (21.2) 現存高 17.2	口縁部：内面ヘラナデの後、内外面を横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+G □40 胴20 焼成：普
2	壺	□ 径 (20.0) 現存高 9.5	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。茶褐色。	A+B+I+J □25 焼成：普
3	杯	□ 径 12.0 底 径 11.0 器 高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+D+J □95 杯95 焼成：普



第420図 第65～67号住居跡②

### 第66号住居跡 (第419・420図)

第66号住居跡は、N' 93 a グリッドに位置する。第67号住居跡と重複するが、新旧関係については確認できなかった。南側と西側の一部分を擾乱されている。北側・東側及び西側において、幅15cm~25cm・床面からの深さ5cmの壁溝が検出されているが、僅かに遺存していた南側壁面では確認されていない。

遺存部分から推定される平面規模は南北310cm・東西313cm、確認面からの深さは23cmを測り、平面形態は略方形を呈すると考えられる。貼床面はやや凹凸をもち、壁面の立ち上がりは急なものでほぼ直角に近い。

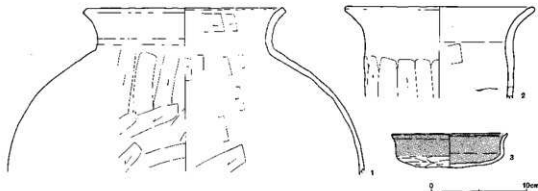
主軸方向はN-30°-Wを指す。炉跡もしくはカマド、貯蔵穴、柱穴等々は検出されていない。遺構内に数基のピットが確認されているが、いずれも本住居跡を切っているものと推定される。

ごく僅かの土器片が出土したが、図化し得るものはなかったため、便宜的に本節(弥生~古墳時代の遺構と遺物)で扱うこととした。

### 第67号住居跡 (第419・420図)

第67号住居跡は、N' 94 j グリッドに位置する。第65号住居跡に切られる。第66号住居跡と重複するが、新旧関係については確認することができなかった。北側と東側で、壁面と壁溝の一部分を確認し得たのにとどまる。壁溝は幅15cm~25cm・床面からの深さ12cmを測り、北側においては一部途切れている。平面規模は不明であり、形態については方形あるいは長方形を呈すると推定される。床面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは急であり、ほぼ直角に近い。主軸方向はN-9°-Wを指す。柱穴と特定できるピットは確認されていないが、北東コーナー部分において貯蔵穴と推定される土壌が検出された。平面規模は98cm×78cm、形態は楕円形を呈し、床面からの深さは18cmを測る。北壁面のやや東寄り位置で、カマドの残存部が検出された。遺存状況は非常に悪く、焚口部と燃焼部の最下面がごく僅かに残されていたのみであった。現存長61cm・焚口幅48cm、確認面からの深さ4cmを測る。第2層は焚口部および燃焼部に、第3層の泥岩はカマド袖部に相当しよう。

図化し得る遺物はなく、便宜的に本節(弥生~古墳時代の遺構と遺物)で扱うこととした。



第421図 第65号住居跡出土遺物

## (2) 壺棺墓

大西遺跡において、2基の壺棺墓が検出された。2基共にJ区での確認であり、遺物包含層を調査している過程において出土したものである。位置的にはJ区中央部西寄りの、台地の肩部分に近い緩やかな斜面上に立地しているといえよう。

第1号壺棺墓はF' 73fグリッドに、第2号壺棺墓はF' 73eグリッドに位置しており、両者は約3mの距離にある。どちらも暗茶褐色土層を切っており、覆土は黒褐色であるため、遺構として確認することはきわめて困難であった。

このことから、周辺の斜面部に対しても、30cm程の間隔でピン・ポールを突き刺して有無を調べてはみたが、検出することはできなかった。

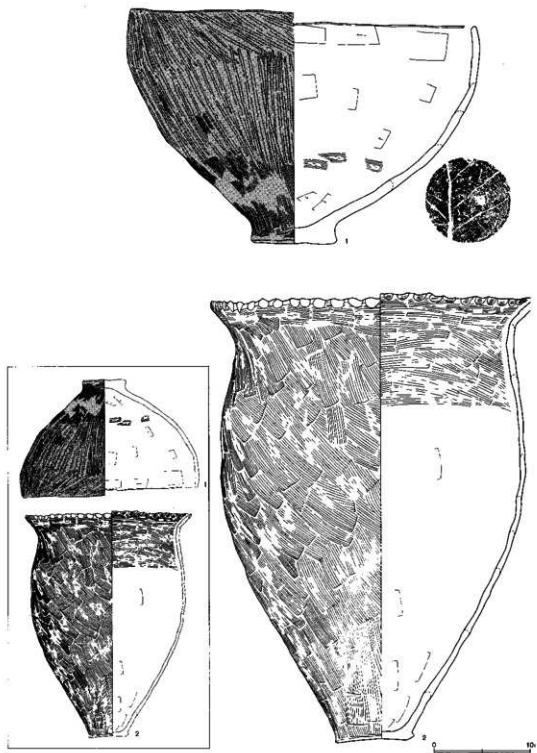
### 第1号壺棺墓 (第422・455図)

第1号壺棺墓は、F' 73fグリッドに位置する。遺物包含層を掘り下げていく過程で、甕の口縁部に、甕の胴下半部状を呈した鉢をかおせるというセット関係が、横位の状態で検出された。壺棺墓の覆土と周辺の包含層には、色調に大きな差はなく、明確さに欠けるといわざるを得ない。長軸方向は不明であるが短軸方向は92cm・確認面からの深さは25cmであった。底面は平坦ではなくやや窪み状を呈し、立ち上がりについては比較的急であると推定された。

身に相当する甕の底部から、蓋に相当する鉢の底部を結んだ線に軸に仮定した場合N-123° - Eを示す。

### 第1号壺棺墓出土遺物 (第422図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	鉢	口径 35.8 底径 8.6 器高 24.4	F' 73fグリッド。器面は摩滅している。体部：外面はハケ目の後へラ磨き、内面はヘラナデ。底部：外面は木葉痕、内面はナデ。甕の下半部からの転用と思われる。褐色。	A+B+C+H+J □60 胴95 底100 焼成：普
2	甕	口径 34.2 底径 8.0 胴径 32.0 器高 45.9	F' 73fグリッド。胴部：中央よりやや上位に最大径を持つ。口縁を内側に折り返す。口唇部：指頭による相互押捺。胴部：外面はハケ目、口縁～胴上位：内面はハケ目の後粗いナデ、胴中位～底部：内面はヘラナデとナデ。底部：外面はナデ。褐色。	A+B+H+J □60 胴95 底95 焼成：やや良



第422图 第1号青铜器

### 第2号壺棺墓 (第423・455図)

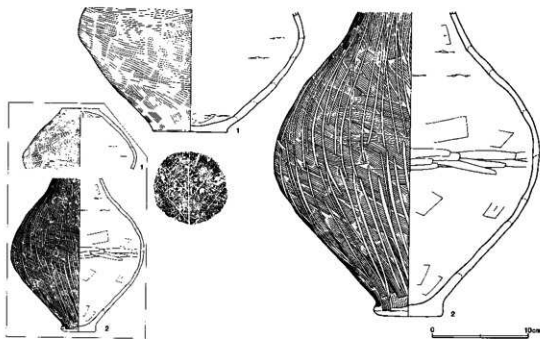
第2号壺棺墓は、F' 73eグリッドに位置する。第1号壺棺墓と同様に、遺物包含層を掘り下げていく過程で検出されたものである。土圧で若干押し潰されてはいるが、口縁部を欠いた壺に、壺の胴下半部をかぶせるというセット関係が、斜位の状態で検出された。

遺物を検出した時点で、周囲の精査を再度おこなったが、遺構としてプランを確認することは残念ながらできなかった。底面についても不明確ではあったが、比較的平坦であろうと推定される。

身に相当する壺の底部から、蓋に相当する壺の底部を結んだ線を軸に仮定した場合N-178° - Eを示すこととなる。

### 第2号壺棺墓出土遺物 (第423図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	胴径 (23.6) 底径 7.7 現存高 12.8	F' 73eグリッド。器面は荒れている。胴部：外面はハケ目、内面はナデ。底部：外面は木葉痕を残す、内面はヘラナデ。赤褐色。	A+B+H+J 底100 胴下半40 焼成：やや不良
2	壺	底径 6.3 現存高 31.8	F' 73eグリッド。胴部：外面はハケ目の後粗いヘラ磨き、内面上位・下位はヘラナデ、中位は指によるナデ付け。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。赤褐色（一部黒色）。	A+B+H+J 胴5 底100 焼成：善



第423図 第2号壺棺墓



### 3 奈良・平安時代の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### 第23号住居跡 (第424・425図)

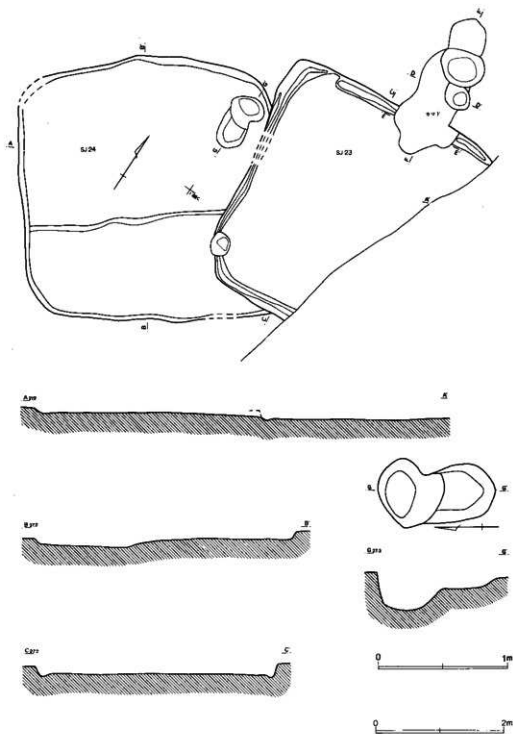
第23号住居跡は、1' 87 i グリッドに位置する。西側で第24号住居跡を切り、東側については調査範囲外に続く。西側2箇所のコーナー部分が検出された。検出し得た範囲において壁溝が確認されており、幅8cm~20cm・床面からの深さは5cmを測る。東側の壁溝が未検出であるため、東西規模は不明であるが、南北方向については385cm・確認面からの深さは15cmを測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。平面形態は、方形もしくは長方形と推定される。

遺存状況はきわめて悪いが、北側壁面にカマドが検出された。全長248cm・焚口幅38cmを測り、一部近世ピット(第1層)に切られている。第2~4層は焚口部および燃焼部に、第2層は煙道部に相当しよう。

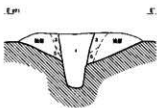
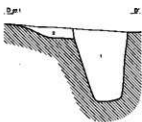
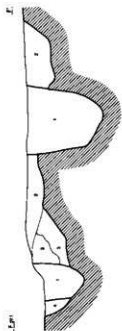
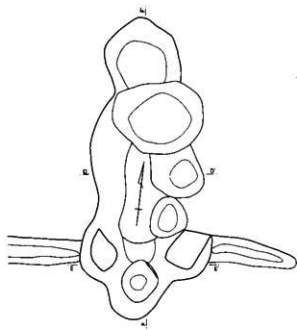
主柱穴・貯蔵穴等は検出されていない。貼り床面は、ロームブロックも少なく不明瞭なものである。図化し得た遺物は、須恵器3点を合わせ計8点であった。

##### 第23号住居跡出土遺物 (第426図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法的特徴	胎土・残存率%等
1	杯	□ 径 (10.7) 現存高 2.4	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はへら削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+H □30 底20 焼成：良
2	杯	□ 径 (9.0) 現存高 3.1	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はへら削り、内面はナデ。褐色。	A+B+J □20 杯20 焼成：良
3	杯	□ 径 (10.8) 現存高 3.3	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はへら削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+F+J □25 杯20 焼成：良
4	須恵器 杯	□ 径 (15.4) 底 径 11.0 現存高 4.0	ロクロナデ。底部：回転糸切り後、全面を回転(左回転)へら削り。灰白色。	B+D+F+I+J □20 底80 焼成：不良
5	須恵器 蓋	□ 径 (17.6) 現存高 1.5	ロクロナデ。暗灰色。	B+H+J □20 焼成：やや良
6	須恵器 甕	□ 径 (20.2) 現存高 14.5	口縁部内面に自然釉付着。全面ロクロナデ。灰色。	B+H+J □15 焼成：普
7	甕	□ 径 (10.2) 現存高 5.6	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はへら削り、内面はナデ。褐色。	B+I(多) □20 焼成：やや良
8	甕	底 径 (7.7) 現存高 6.3	器面は荒れている。胴部~底部：外面はへら削り、内面はへらナデ。褐色。	A+B+I(多)+J 底70 焼成：やや不良



第424图 第23号住居跡(1)

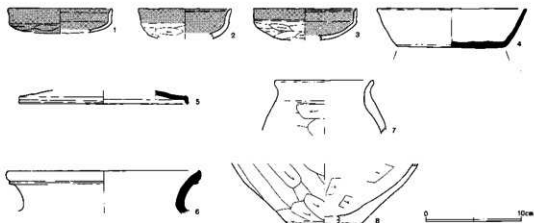


第23号住居カマド土層柱記

- 1 黒褐色土 中近きビット。
- 2 黒褐色土 1層よりロームが少ない。
- 3 黒褐色土 焼上粒・粘土含有。
- 4 黒褐色土 3層より粘土多。
- 5 黒褐色土 3層より焼上多。

0 1m

第425図 第23号住居跡②



第426図 第23号住居跡出土遺物

#### 第25号住居跡 (第427~429図)

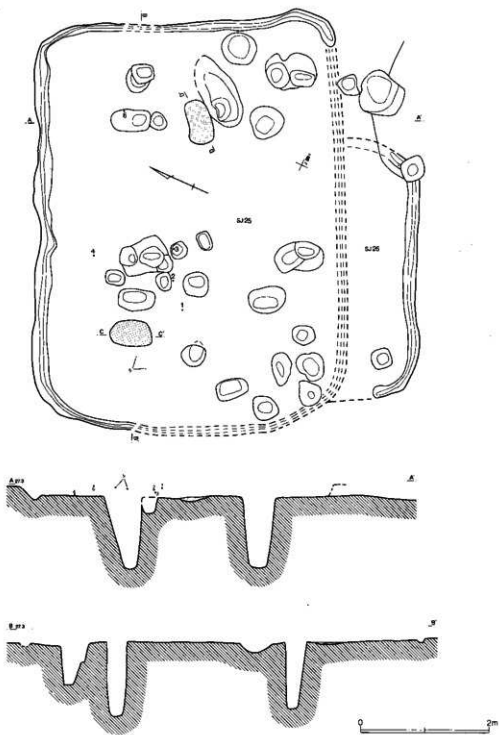
第26号住居跡は、J' 88 b グリッドに位置する。本住居跡の位置する周辺は、住居跡が最も密集する範囲であり、遺構の遺存状態はきわめて悪いといわざるを得ない。特に、第25号住居跡との重複部分に関しては非常に劣悪であった。

新旧関係としては、北側で第25号住居跡を、東側から南側にかけて第36号住居跡を、そして西側では第30号・第34号・第35号住居跡をそれぞれ切っていると推定される。

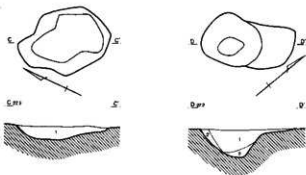
本住居跡は、検出し得た範囲からでは平面形態や規模を推定することは無理であり、第25号住居跡との切り合いについても、平面・断面から確定することはできなかった。また、第25号住居跡を切るカマドの存在が推定されるが、その痕跡すらも検出することはできなかった。遺存状況が悪いとするのも一つの解釈ではあろうが、やはり疑問とせざるを得ない。とりえず覆土内の出土遺物

#### 第26号住居跡出土遺物 (第429図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (12.2) 現存高 3.2	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+E+J □10 杯15 焼成：良
2	土師器 杯	口径 (14.6) 現存高 4.0	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。褐色。	B+G+J(細密) □15 杯10 焼成：良
3	須恵器	口径 (13.6) 底径 (8.6) 現存高 3.6	全面ロクロナデ。底部：全面ヘラ削り。灰色。	B+H+J □・杯15 底15 焼成：普
4	須恵器 蓋	口径 (13.3) 現存高 3.3	ロクロナデ。灰白色。	B+G+J 天井15 焼成：不良



第427圖 第25・28号住居跡(1)



第25号住居跡土層柱記 伊1

- 1 黒褐色土 ローム粒 (5~40mm)  
多量、焼上粒・カーボ  
ン少量含有。しまり強。

伊跡土層柱記 伊2

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼上粒。し  
まり有。  
2 黒灰褐色土 灰層、焼上粒・カーボ  
ン多。しまり有。



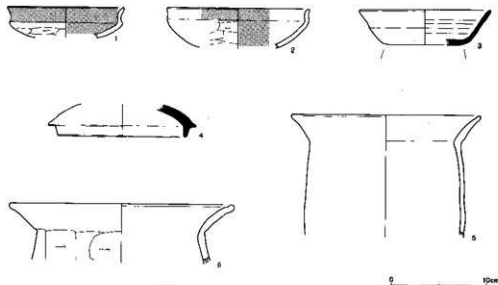
第428図 第25・26号住居跡②

5	罍	口径 (19.8) 現存高 12.7	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りか、内面はナデか。橙色。	A+B+P(多)+I+J □20 胴上半20 焼成：普
6	罍	口径 (20.9) 現存高 6.2	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。橙色。	A+B+D+E+J □25 焼成：普

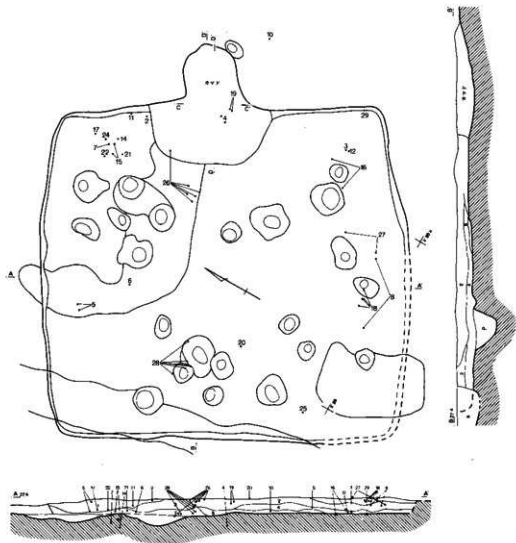
から、既期の遺構と判断した。

遺構として検出されているのは、幅15cm~20cm・確認面からの深さ5cm程の壁溝のみであり、規模は不明であるが平面形態としては、方形あるいは長方形が推定される。支柱穴・貯蔵穴と考えられる遺構は検出されていない。

図化し得た遺物は、須恵器2点を合わせ計6点であった。



第429図 第25号住居跡出土遺物



第30号住居跡土層図記

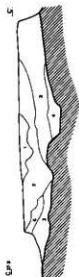
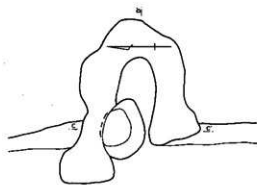
- 1 灰褐色土 灰色の粘上ブロック(δ1cm)多、焼土粒若干。しまり強、粘性中強。
- 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少。しまり強、粘性中強。
- 3 黒褐色土 焼土粒若干、カーボン・ローム粒少。しまり強、粘性中強。
- 4 黄褐色土 ローム粒多、ロームブロック(δ1cm)少。しまり強、粘性中強。
- 5 暗褐色土 ロームブロック層中に黒色土少。しまり強、

粘性中強。

- 6 暗褐色土 ロームブロック(δ3cm)少。しまり強、粘性中強。
- 7 灰褐色土 ローム粒・焼土粒少。しまり強、粘性中強。
- 8 黒褐色土 ローム粒・カーボン炭量。しまり・粘性強。

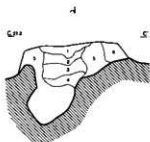
0 2m

第430図 第30号住居跡(1)



カマド土層柱記

- 1 灰褐色土 粘土・細土粒・ローム粒含有。しまり強、粘性やや強。
- 2 灰褐色土 1層に類似するが、粘土1層より多量含有。
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒含有。
- 4 黒褐色土 多量の粘土・焼土混入。しまり強。
- 5 灰褐色土 カマドソデ。粘土多含有。
- 6 黒褐色土 4層に類似。焼土ブロック含有。

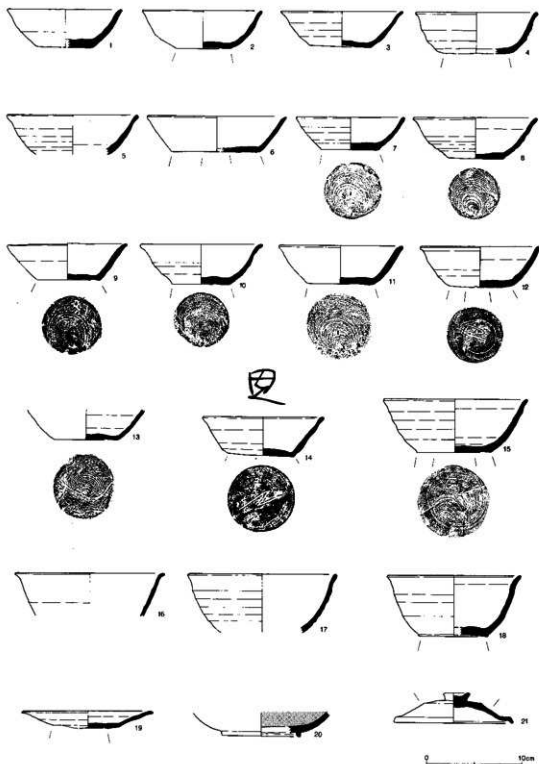


第431図 第30号住居跡②

第30号住居跡 (第430・431図)

第30号住居跡は、L' 88 i b グリッドに位置する。北側で第28号住居跡を、南側で第42号住居跡を西側で第32号住居跡をそれぞれ切っており、北西コーナー部分を第3号溝跡によって切られている。他の遺構との重複は多いが周辺の住居跡をいずれも切っており、さらにその覆土の色調がやや黄色味を帯び砂粒が含まれていることから、黒褐色の中に本住居跡が方形に浮かび上がっているようにして検出された。

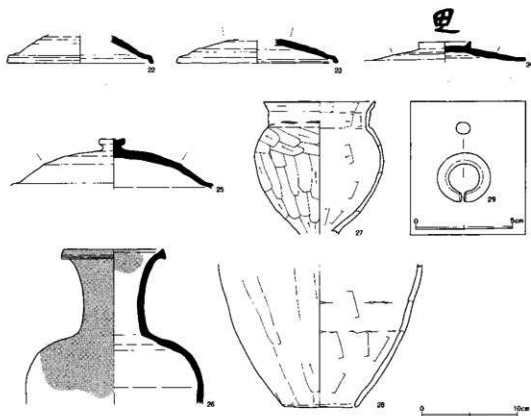




第432図 第30号住居跡出土遺物(7)

第30号住居跡出土遺物 (第432・433図)

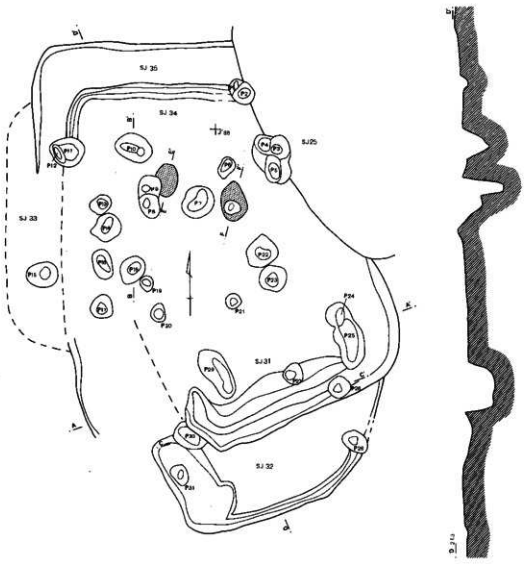
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	須恵器 杯	口 径 (11.8) 底 径 ( 5.8) 現存高 3.9	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。 灰色。	B+H+J □15 杯30 焼成：やや良
2	須恵器 杯	口 径 12.8 器 高 4.9	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。 灰色。	B+J(多)+小磯 完 形 焼成：やや良
3	須恵器 杯	口 径 (12.6) 底 径 6.4 器 高 3.7	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。 灰白色。	B+B+H+J □50 杯60 焼成：不良
4	須恵器 杯	口 径 (12.6) 底 径 ( 6.8) 器 高 4.3	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。 灰色。	B+H+J 杯25 底10 焼成：普



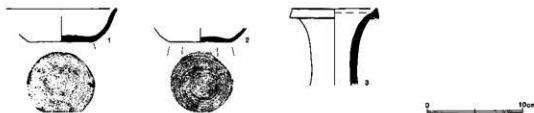
第433図 第30号住居跡出土遺物②

5	須恵器 杯	口 径 (13.6) 底 径 (7.8) 現存高 4.1	ロクロナデ。灰色。	B+H+J □20 杯20 焼成：普
6	須恵器 杯	口 径 (14.4) 底 径 (9.1) 器 高 3.7	ロクロナデ。ロクロ右回転か。底部：回転糸きり離しの後、回転ヘラ削り。灰色。	B+H+J 杯20 底25 焼成：普
7	須恵器 杯	口 径 11.2 底 径 5.6 器 高 3.5	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。底部に「N」状の刻みあり。黒灰色。	B+I+J 完形 焼成：普
8	須恵器 杯	口 径 12.6 底 径 5.6 器 高 4.3	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。灰褐色。	J <sup>多</sup> +I+J □75 底100 焼成：普
9	須恵器 杯	口 径 12.3 現存高 3.8	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。灰色。	I+J 杯100 焼成：普
10	須恵器 杯	口 径 12.8 底 径 6.1 器 高 4.2	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。灰黄色。	B+I+J(多) 完形 焼成：普
11	須恵器 杯	口 径 12.8 底 径 6.6	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。黄褐色。	□55 杯75 焼成：不良
12	須恵器 杯	口 径 12.3 底 径 6.4 器 高 4.3	底部に「N」字状の刻印あり。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し後、回転ヘラ削りの後「N」字状の刻印を施す。灰色。	B+H+J □95 杯100 焼成：普
13	須恵器 杯	底 径 6.5 現存高 3.2	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。黄灰色。	I+J 底100 焼成：普
14	須恵器 杯	口 径 12.6 底 径 6.8 器 高 4.0	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転ヘラ削り（右回転）。底部：外面に「N」字状の刻み、内面に墨書あり。灰黄色。墨書は文字不明。「里」又は「田人」か。	B+H+J 完形 焼成：普
15	須恵器 杯	口 径 14.8 底 径 7.7 器 高 5.5	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し後、周辺は（静止）ヘラ削り。黄褐色。	B+H+J □75 底100 焼成：やや不良
16	須恵器 杯	口 径 (15.6) 現存高 4.5	ロクロナデ。黄灰色。	A+B+J □25 焼成：やや不良
17	須恵器 杯	口 径 (15.4) 現存高 6.1	ロクロナデ。灰色。	B+G+J □15 杯20焼成 やや良

18	須恵器 坏	口 径 14.0 底 径 7.0 現存高 6.3	ロクロナデ。ロクロ右回転か。底部：回転糸きり難し。 黄褐色。	B+H+J □50 坏80 底50 焼成：やや不良
19	須恵器 坏	口 径 13.3 現存高 1.8	器形は歪んでいる。高台部分欠損。全面ロクロナデ。 ロクロ右回転。底部：へら削りの後付高台か。灰褐色。	A+B+I+J □75 坏75 焼成：普
20	須恵器 坏	高台径 ( 8.1) 高台高 0.4 現存高 2.6	ロクロナデ。底部：糸きりの後ナデ後付高台か。 内部は明緑灰色、外部は灰白色。	底20 高台20 焼成：良
21	須恵器 蓋	紐 径 2.7 口 径 12.3 器 高 3.1	内面は一部自然釉付着。ロクロナデ。天井部：回転へら削り。 (右回転) 灰色。	B+I+J ほぼ完形 焼成：やや良
22	須恵器 蓋	口 径 (15.2) 現存高 2.8	ロクロナデ。黒灰色。	B+H+J □25 蓋20 焼成：普
23	須恵器 蓋	口 径 (16.9) 現存高 2.4	全面ロクロナデ。ロクロ右回転。天井部：回転へら削り。 (左回転) 灰白色。	B+E+I+J □20 天井20 焼成：普
24	須恵器 蓋	紐 径 5.5 紐 高 0.7 現存高 2.1	全面ロクロナデ。ロクロ右回転。天井部：回転へら削り (左回転) の後紐を付ける。灰白色。 墨書は文字不明。「里」又は「田人」か。	B+I+J 紐90 焼成：普
25	須恵器 蓋	紐 径 ( 2.3) 現存高 15.1	天井部：へら削りの後ナデ。灰色。	B+I+J 抓み50 焼成：普
26	須恵器 長頸壺	口 径 (10.3) 胴 径 (18.6) 現存高 16.3	外面全体と口縁部内面に灰釉、剝離部分多。ロクロナデ。 灰緑色。	B+G+J □20 甕55 胴上半70 焼成：普
27	壺	口 径 11.6 胴 径 13.5 現存高 13.8	内面はへらナデにより、器面を薄く仕上げる。口縁部：内面は へらナデの後内外面とも横ナデ。胴部：外面はへら削り、内面 はへらナデ。灰褐色。	B+D+E+J □70 胴70 焼成：良
28	瓶	現存高 15.0	胴部：外面はへら削りの後ナデ、内面はへらナデ。 橙色 (一部黒色)。	A+B+I+J 焼成：普
29	耳 環	直 径 2.8 太 さ 0.7	比較的遺存状態は良好。形状はほぼ円形、断面は楕円形に近い。 白銀色。	



第434图 第32号住居跡



第435図 第32号住居跡出土遺物

第32号住居跡 (第434・435図)

第32号住居跡は、L' 88 g グリッドに位置する。遺構の遺存度はきわめて悪いが、出土遺物から判断して、北側において第31号・第33号・第34号・第35号住居跡を切っていると推定される。僅かに南側の、幅21cm・確認面からの深さ5cm程の壁溝が、320cm程遺存していたのみである。カマドについては、既に攪乱されていると判断した。須恵器3点で検出された。

第32号住居跡出土遺物 (第435図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 杯	□ 径 (11.6) 現存高 3.4	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離した後、周辺を回転ヘラ削り。灰色。	B+H+J □25 底90 焼成：普
2	杯	底 径 6.4 現存高 1.5	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離した後、周辺を回転ヘラ削り (右回転)。褐色。	B+H+J 底95 焼成：普
3	須恵器 長頸壺	□ 径 (8.7) 現存高 8.0	口縁部内面と頸部外面に自然軸付着。ロクロナデ。黒灰色。	B+I □25 頸70 焼成：良

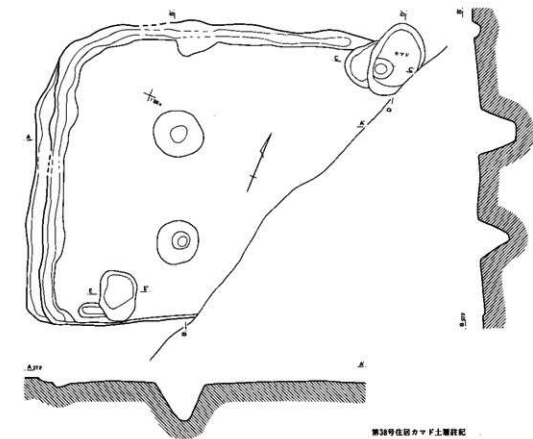
第38号住居跡 (第436・437図)

第38号住居跡は、I' 88 d グリッドに位置する。幅20cm前後、確認面からの深さ10cm前後の壁溝が、北側と西側で確認されたが、西側については拡張による結果であろうか。南北方向の規模は464cm・確認面からの深さは5cmを測り、主軸方向N-18°-Wを指す。北壁やや東寄りに、全長116cm・最大幅79cmのカマドが検出された。第2層が、燃焼部および煙道部に相当しよう。

図化し得た遺物は、土師器6点・須恵器6点の、計8点である。

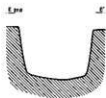
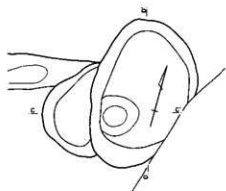
第38号住居跡出土遺物 (第437図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	□ 径 (11.2) 現存高 2.8	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+I+J □15 杯15 焼成：普



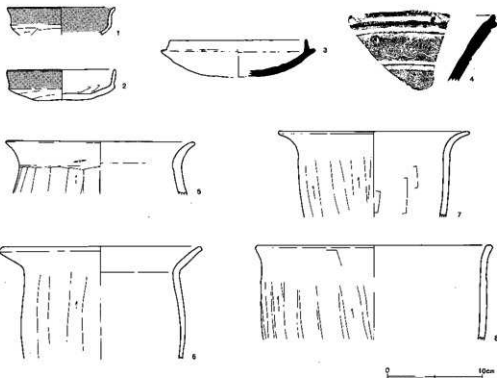
第38号住居カマド土層柱記

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・  
焼土ブロック・焼土粒少。粘  
性強。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・  
焼土ブロック少、焼土粒若干。  
粘性強。
- 3 黄褐色土 黄色粘土粒を含有。
- 4 灰褐色土 灰色粘土粒を多量に含有。



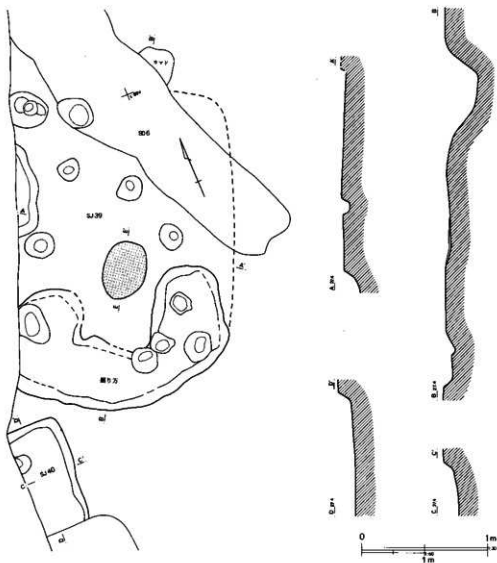
第436図 第38号住居跡

2	杯	口径 (12.9) 現存高 13.2	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデの後ナデ。褐色。	A+B+I+J □10 杯40 焼成：普
3	須恵器 杯	口径 (14.3) 現存高 3.8	粗いロクロナデ。在地産。暗灰色。	B+I+J □10 杯15 焼成：普
4	須恵器 壺	現存高 8.3	外面に5本単位の波状文を4段残す。ロクロナデか。灰色（一部黒色）。	B+H+J 焼成：やや良
5	壺	口径 (19.4) 現存高 5.5	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。灰黄褐色。	A+B+E+J □20 焼成：普
6	壺	口径 (20.8) 現存高 15.0	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデか。器面は摩滅している。橙色。	A+B+H+J □80 胴上20 焼成：普
7	壺	口径 (20.0) 現存高 9.0	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。橙色。	B+E+I+J □20 胴上20 焼成：普
8	壺	口径 (24.5) 現存高 9.8	口縁部：外面はヘラナデの後、内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。黒褐色。	B+F+J □20 胴上25 焼成：普



第437図 第38号住居跡出土遺物





第29号住居跡上層柱記

- 1 赤褐色土 黄土層中にカーボン若干。しまりやや強、粘性弱。
- 2 明赤褐色土 黄土ブロック層中にカーボン少。しまり強、粘性弱。



第436図 第40号住居跡、出土遺物

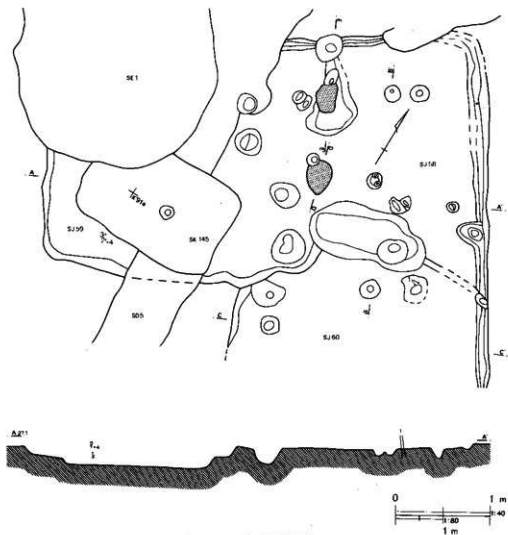
### 第40号住居跡 (第438図)

第40号住居跡は、M' 90bグリッドに位置する。南側で土墳と重複し、西側は擾乱を受けており、北東コーナー部分が検出されたのみである。確認面からの深さは約20cm、規模は不明であるが方形あるいは長方形と推定される。壁溝は検出されていない。

須恵器1点が出土したのみであった。

### 第40号住居跡出土遺物 (第439図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	須恵器 杯	底径 (6.4) 現存高 2.8	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り羅し。橙褐色。	A+B+I+J 底45 焼成：やや不良



第438図 第59号住居跡

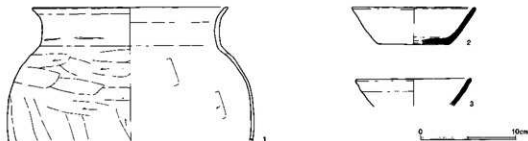
### 第59号住居跡 (第439・440図)

第59号住居跡は、K' 91b グリッドに位置する。北側から西側にかけて第58号住居跡を、東側から南側にかけて第60号住居跡を切る。そして、第145号土壇・第5号溝・第1号井戸跡および数基のピットによって切られており、遺構としては南東コーナーと南西コーナー、そして南壁が検出されたのみである。

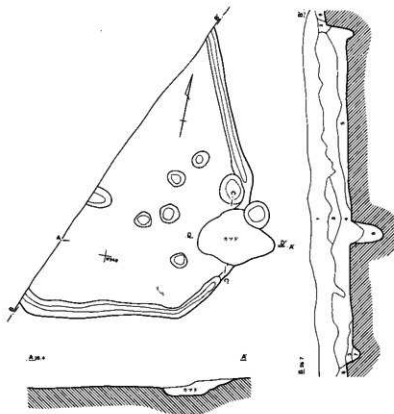
東西規模は約600cm・確認面からの深さは20cm前後を測るが、その他の南北規模や主軸方向に関しては不明である。平面形態については、方形または長方形が推定され、遺存している壁面の立ち上がりは緩やかである。

### 第59号住居跡出土遺物 (第440図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	壺	口径 20.2 胴径 (26.0) 現存高 14.0	内面ヘラナデにより器面をうすく仕上げる。口縁部：内外面ともに横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。明褐色（一部黒褐色）。	A+B+D+E □100 焼成：やや良
2	須恵器 杯	口径 (12.8) 底径 (7.2) 現存高 3.8	ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。灰黄色。	B+J □・杯30 焼成：不良
3	須恵器 杯	口径 (12.0) 現存高 2.9	ロクロナデ。灰褐色。	B+I+J □35 焼成：普

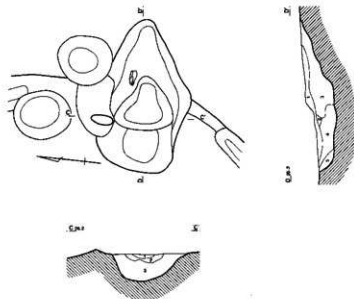


第440図 第59号住居跡出土遺物



第64号住居跡土層柱記

- 1 新作土
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多。しまり弱。
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多。粘土・炭化物含有。
- 4 黒褐色土 やや砂粒がかり、粘土多。
- 5 茶褐色土 ローム粒・粘土含有。
- 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含有。
- 7 黄褐色土 ロームを主体とする層。
- 8 黒褐色土 新築層、ローム粒・ロームブロック含有。



第65号住居カマド土層柱記

- 1 暗褐色土 ローム粒・粘土・粘土含有。若干灰色がかっている。
- 2 暗赤褐色土 粘土を主体とする。
- 3 黒褐色土 粘土少、ローム粒・ロームブロック・粘土含有。
- 4 暗灰色土 粘土を主体とする層。粘性強。
- 5 暗灰色土 4層より黒色強い。



第441図 第64号住居跡

第64号住居跡 (第441・442図)

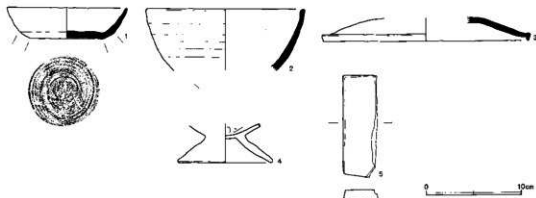
第64号住居跡は、N' 94d グリッドに位置する。数基のピットと重複するのみであるが、西側については調査範囲外に続いており、コーナー部分が1箇所確認されたのみであり平面規模は不明である。平面形態に関しては、方形もしくは長方形が推定される。幅20~30cm・床面からの深さ12cm前後壁溝が巡っている。検出された壁面は、確認面から30cm程であり、立ち上がりは急で垂直に近いといえるものである。主軸方向はN-74°-Eを指す。貯蔵穴・柱穴等は検出されなかった。

南東コーナーにおいて、カマドが検出された。全長118cm・焚口幅46cmを測り、第1層~第4層が燃焼部・煙道部に相当しよう。

図化した遺物は、土師器1点・須恵器3点・石製品1点の、計5点である。

第64号住居跡出土遺物 (第442図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	須恵器 杯	口径 (12.4) 底径 7.6 器高 3.1	全面：ロクロナデ。底部および周辺は回転ヘラ削り（右回転）。 明灰褐色。	A+B+H+J 口35 底100 焼成：普
2	須恵器 杯	口径 (16.3) 現存高 6.4	全面：ロクロナデ。灰黄褐色。	B+J 口15 杯20 焼成：やや不良
3	須恵器 蓋	口径 (21.5) 現存高 2.4	天井部：回転ヘラ削りか。体部：内外面ともナデ。 端部：横ナデ。明灰色。	B+G+J 天井20 焼成：普
4	高杯	底径 (10.0) 現存高 4.1	器面は摩滅している。杯部：外面はナデか、内面はヘラナデ。 脚台部：内外面とも横ナデ。褐色。	A+B+D+F 杯20 脚55 焼成：不良
5	砥石	長さ 10.4 幅 3.5 厚さ 0.8	裏面は剥離のため欠損。左側面も大部分欠損しているが一部に 砥面を残す。残る側面は3面とも砥面として使われている。表面 はよく使われており平滑。砥面には、いずれも糸線が観察さ れる。黄褐色。現存重量75.5g。	粘板岩製



第442図 第64号住居跡出土遺物

## 4 中近世の遺構と遺物

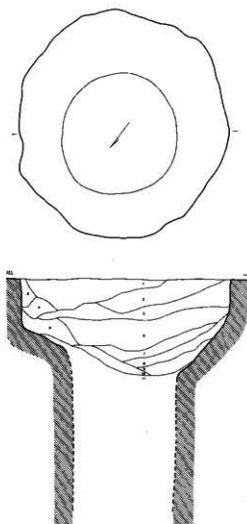
### (1) 井戸跡

#### 第1号井戸跡 (第443図)

第1号井戸跡は、K' 91a グリッドに位置する。他遺構との重複が顕著であり、北側で第56号住居跡を、東側から南側にかけて第59号住居跡・第5号溝跡・第145号土壌を、そして西側においては第144号土壌を切っていると推定される。

確認面における平面規模は、478cm×437cmの略円形を呈する。バックフォーによって伝面を断ち割り、確認面から480cmまで掘り下げはしたが、底面には及ぶことはできなかった。

断面形は、確認面から140cm～196cmの位置に段をもち、それ以下については垂直に掘り下げられたロート状を呈するものであろう。弥生時代から中近世まで、さまざまな遺物が出土したが、遺構の時期を確定するには至らなかったため、図化は省略をした。



#### 第1号井戸跡土層注記

- 1 褐色土 層非常に多、ロームブロック(φ1cm)若干含有。しまり非常に強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 層・ロームブロック(φ1cm)少含有。しまり非常に強、粘性弱。
- 3 茶褐色土 ローム粒若干、層少含有。しまり非常に強、粘性弱。
- 4 黒褐色土 ローム粒少、カーボン微塵含有。しまり強、粘性弱。
- 5 暗褐色土 ローム粒少・ロームブロック(φ1cm)若干、層少含有。しまり強、粘性弱。
- 6 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm)ローム粒・黄土粒若干、層少含有。しまり強、粘性弱。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック(φ5cm)多含有。しまり強、粘性弱。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック層。しまり・粘性弱。
- 9 暗黄褐色土 ローム粒少、層若干。しまり強、粘性弱。
- 10 暗褐色土 層多、ローム粒少含有。しまり強、粘性弱。
- 11 暗褐色土 ロームブロック多含有。しまり強、粘性弱。



第443図 第1号井戸跡

## (2) 地下式坑

大西遺跡では、地下式坑と判断される遺構が、1基のみではあるが検出されている。“地下式坑”の定義に明確さを欠くとはいうものの、この他に、地下式坑を推定させる例も数基確認されている。しかし、いわゆる“土壇”との区別を行っていく、地下式坑と命名することを避け、土壇として扱った。

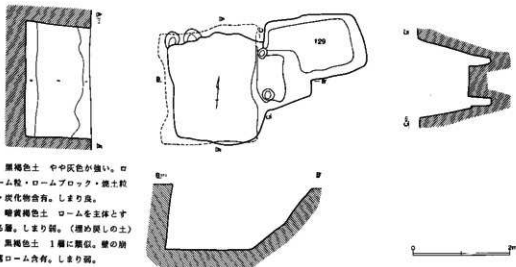
そのため、「5 その他の遺構と遺物 (2)土壇」の項に掲載した遺構の中にも、“地下式坑”が含まれている可能性は否定できない。

### 第1号地下式坑 (第444図)

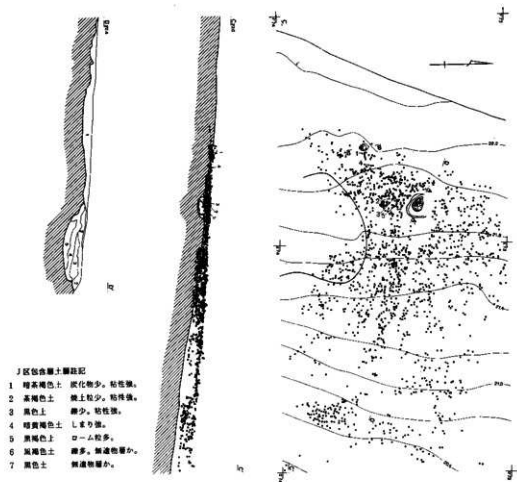
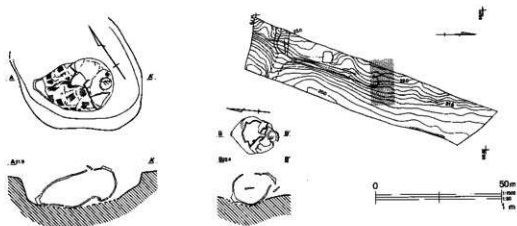
第1号地下式坑は、K' 90 f グリッドに位置する。北側で2基のピットに切られ、東側では第12号土壇と重複するが、これを切っていると推定された。本遺構を検出した時点では、東側のオーバーハングしている位置において、地下式坑の天井部が一部分ではあるが遺存しており、その下には空洞部分も認められた。調査の過程で、できる限りこの天井部を残しながら掘り下げを行ったが、崩落の可能性が生じたため、天井部を人為的に突き崩さざるを得なかった。

形態としては、東側を開く略方形の横穴に階段部分が付属している遺構であり、階段部分の途中に柱穴と推定されるピットが2基みられることから、入り口部分には簡単な覆屋状の施設が存在したとも考えられる。

横穴部分は、入り口方向以外は3方ともに若干オーバーハングをしており、確認面からの深さは最大で132cmを測る。底面は平坦であり、平面規模は244cm×198cm、壁面の立ち上がりは非常に急なものである。入り口部分は、奥行き110cm・幅120cm程であり、途中に1箇所階段状に段をもつ。柱穴と推定されるピットは86cmの間隔で位置し、深さは40cm程であった。遺物の出土はみられなかった。



第444図 地下式坑



- J区包含層土層記
- 1 暗茶褐色土 炭化物少、粘性強。
  - 2 茶褐色土 炭土粒少、粘性強。
  - 3 黒色土 炭土粒少、粘性強。
  - 4 暗黄褐色土 しまり強。
  - 5 黄褐色土 コーム粒多。
  - 6 灰褐色土 炭多、無炭物層少。
  - 7 黒色土 無炭物層少。

第445圖 J区包含層



## 5 その他の遺構と遺物

### (1) 包含層

大西遺跡はJ・K・L区にまたがっているが、L区においては遺物の包含層が確認されている(第445図)。J区は、全体的に西から東に下る斜面部によって形成されており、同区北寄りの範囲は基地によって攪乱されていた。

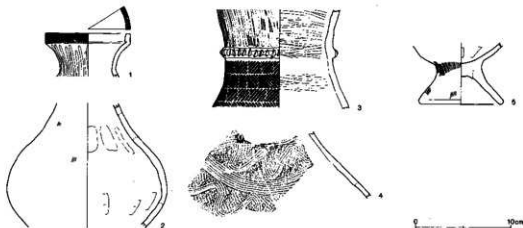
弥生土器を包含した堆積土層が検出されたのは、おおよそE' 73グリッド～F' 73グリッドの範囲であり、基地の南側にあっている。なお、2基の壺棺墓についても、この遺物包含層において検出されたものである。さらに、この包含層の南側については、溝状の遺構による攪乱を受けていた。これらの点から、本来的には、この遺物包含層は北側においては基地の部分にまで、南側については、溝状遺構の北端部分にまで達していたと想定されよう。遺物包含層は、東側部分(=斜面下位)では、1m程堆積しているのが観察されている。

主として、弥生土器を包含する堆積土層は、南北9m×東西13m程の範囲にあたり、この範囲から台地平坦面上がった位置に、既期の集落が存在したとも推定できるのではなからうか。

多数の遺物が出土しているが、主な土器片5点を図化することとした。

#### J区包含層出土遺物(第446図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径 9.0 現存高 4.5	F' 73fグリッド。口唇部にLR斜縄文。口縁部：内外面とも横ナデの後、外面にLR斜縄文。頸部：外面はナデの後粗いヘラ磨き、内面はナデ。赤褐色。	A+B+E+H+J □45 焼成：やや良
2	甕	胴径(16.8) 現存高 13.1	F' 73fグリッド。外面は摩滅著しい。胴部：外面はハケ目の後ナデか、内面上半は指頭による押捺、下半はヘラナデ。茶褐色。	A+B+I(多)+J 焼成：普



第446図 J区包含層出土遺物

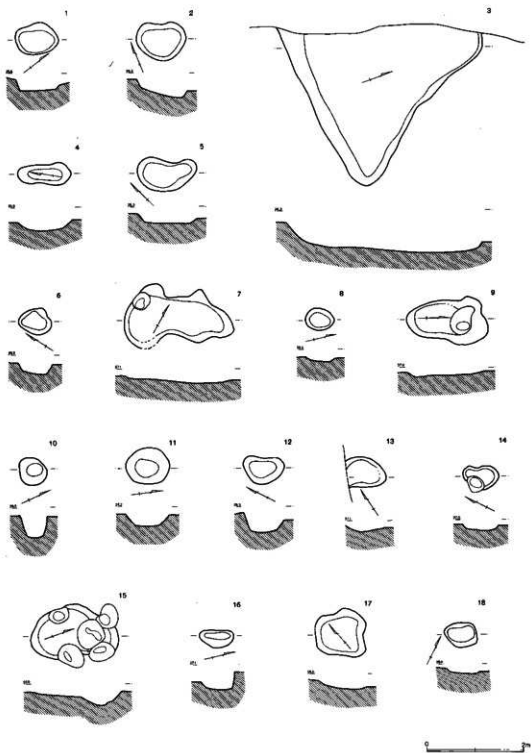
3	臺	現存高 10.2	F' 73 f グリッド。内面は制塵著しい。頸部中央に突帯を一巡させる。突帯に刻みを施す。頸部：外面上半はハケ目の後ヘラ磨き、下半はLR、RL、LR、LR4段の羽状縄文を施す、内面はヘラ磨き。外部黒褐色、内部茶褐色。	A+B+F+H+J 焼成：やや良
4	臺	現存高 5.6	F' 73 e グリッド。沈線は太めで鮮明。縄文施文～横線文～(2段)～山形文～上段の縄文すり消し。梅杓は4本単位。茶褐色。	A+B+E+J 焼成：やや良
5	台付甕	脚台径 8.9 現存高 6.4	F' 73 i グリッド。器面は摩滅している。胴部下位：外面はナデ、内面はヘラナデ。脚台部：外面はハケ目の後ナデか、内面はナデ。橙色。	A+B+H+J 脚95 焼成：普

大西遺跡新旧対称表 土 壤 (SK)

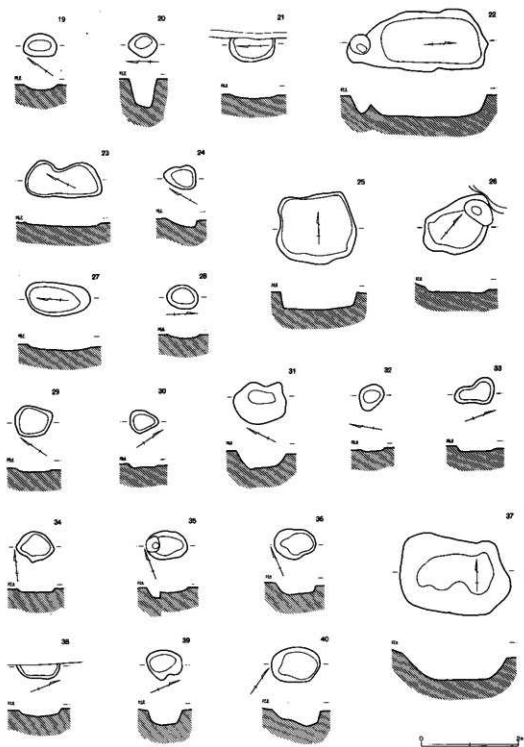
番号	旧番	区	グリッド	形 状	規模 (長×短×深) cm	主軸方向	備 考
1		K	I' - 8 1 - b	楕円形	90 × 66 × 22	N-39° - E	
2		K	I' - 8 1 - c	不整楕円形	103 × 74 × 19	N-12° - W	
3		K	I' - 8 1 - a	—	— × — × 42	—	調査区域外に続く
4		K	I' - 8 1 - f	楕円形	112 × 39 × 19	N-10° - W	
5		K	I' - 8 1 - f	不整楕円形	122 × 64 × 15	N-43° - W	
6		K	I' - 8 1 - f	不整楕円形	69 × 54 × 21	N-34° - W	
7		K	I' - 8 2 - i	不整楕円形	223 × 80 × 9	N-64° - E	
8		K	I' - 8 1 - i	楕円形	61 × 45 × 7	N-9° - E	
9		K	J' - 8 3 - c	不整楕円形	163 × 92 × 10	N	
10		K	I' - 8 2 - b	円形	62 × 55 × 44	N-24° - E	
11		K	I' - 8 2 - h	円形	90 × 74 × 23	N-8° - E	
12		K	H' - 8 2 - g	不整楕円形	86 × 55 × 35	N-27° - W	
13		K	J' - 8 3 - b	不整楕円形	— × 62 × 12	N-51° - W	
14		K	J' - 8 3 - e	不整楕円形	74 × 50 × 13	N-23° - W	
15		K	J' - 8 3 - h	不整楕円形	185 × 101 × 27	N-16° - E	
16		K	J' - 8 3 - h	楕円形	72 × 36 × 33	N-11° - E	
17		K	I' - 8 3 - a	不整楕円形	100 × 96 × 10	N-52° - W	
18		K	I' - 8 3 - b	不整楕円形	67 × 50 × 7	N-62° - E	
19		K	I' - 8 3 - i	楕円形	69 × 47 × 10	N-43° - W	
20		K	J' - 8 4 - a	円形	59 × 49 × 49	N-4° - W	
21		K	J' - 8 4 - h	—	96 × — × 7	—	SD2内
22	35	K	J' - 8 4 - b	不整楕円形	293 × 125 × 44	N-5° - E	SD2と重複
23		K	I' - 8 4 - b	不整楕円形	159 × 72 × 7	N-25° - W	
24		K	I' - 8 4 - i	不整楕円形	58 × 48 × 14	N-31° - W	
25	34	K	J' - 8 4 - a	不整方形	160 × 145 × 37	N-90° - E	SD2内
26		K	J' - 8 4 - a	不整楕円形	160 × 106 × 10	N-50° - E	SD2と重複
27		K	I' - 8 4 - d	楕円形	135 × 69 × 9	N-11° - W	
28		K	I' - 8 4 - d	楕円形	62 × 49 × 7	N-3° - E	
29		K	I' - 8 4 - e	不整楕円形	× ×	N-39° - W	
30		K	I' - 8 4 - e	不整楕円形	60 × 48 × 8	N-31° - E	
31		K	I' - 8 4 - f	不整楕円形	112 × 81 × 36	N-27° - W	
32		K	I' - 8 4 - c	楕円形	60 × 47 × 5	N-12° - W	
33		K	I' - 8 4 - i	不整楕円形	80 × 37 × 10	N-19° - E	
34		K	I' - 8 5 - i	不整方形	60 × 56 × 6	N-87° - W	
35		K	K' - 8 5 - i	楕円形	86 × 59 × 9	N-75° - W	
36		K	J' - 8 6 - g	楕円形	86 × 67 × 10	N-70° - W	
37		K	K' - 8 5 - i	不整楕円形	220 × 153 × 53	N-90° - E	
38		K	K' - 8 6 - a	(楕円形)	— × — × 13	—	調査区域外に続く
39		K	I' - 8 6 - d	不整楕円形	73 × 60 × 31	N-24° - E	

番号	旧番	区	グリッド	形状	規模(長×短×深) cm	主軸方向	備考
40		K	I' - 86 - e	楕円形	102 × 72 × 30	N-52° - E	
41	29	K	J' - 86 - a	楕円形	- × 62 × 16	N-12° - E	
42	30	K	J' - 86 - a	不整楕円形	115 × 90 × 19	N-62° - E	
43	25	K	I' - 86 - g	円形	86 × 84 × 73	N-73° - E	
44	26	K	I' - 86 - g	円形	85 × 81 × 80	N-37° - E	
45	27	K	I' - 86 - g	不整楕円形	135 × 61 × 27	N-75° - E	
46		K	H' - 86 - g	方形	83 × - × 13	N-15° - E	
47		K	L' - 87 - e	-	- × 58 × 60	-	
48		K	K' - 87 - b	不整楕円形	120 × 63 × 24	N-36° - W	
49		K	K' - 87 - c	楕円形	115 × 67 × 10	N-90° - E	
50		K	K' - 87 - g	方形	83 × 66 × 15	N-55° - W	
51		K	J' - 87 - b	長方形	- × 89 × 9	N-11° - W	S J 18を切る
52	24	K	J' - 87 - d	-	- × 70 × 5	-	S J 25内
53		K	J' - 87 - f	不整形	79 × 52 × 52	N-90° - E	
54		K	J' - 87 - i	不整楕円形	82 × 56 × 11	N-36° - E	S J 25内
55		K	H' - 87 - d	円形	72 × - × 14	N-4° - E	調査区域外に設く
56		K	L' - 88 - d	-	- × 85 × 12	N-37° - E	S J 27を切る
57	22	K	J' - 87 - d	長方形	526 × 145 × 9	N-80° - E	S J 3と重複
58		K	J' - 88 - h	不整楕円形	132 × 66 × 57	N-47° - W	
59		K	J' - 88 - h	円形	150 × 125 × 31	N-17° - W	S K 58と重複
60		K	K' - 88 - h	不整楕円形	75 × 50 × 15	N-77° - W	
61		K	K' - 88 - e	楕円形	74 × 44 × 14	N-2° - E	
62		K	J' - 88 - c	不整円形	70 × 64 × 60	N-2° - E	
63		K	J' - 88 - c	楕円形	(98) × 87 × 19	N-67° - W	
64		K	J' - 88 - f	-	- × - × 11	-	S J 36隣接にかかると
65		K	J' - 88 - d	楕円形	74 × 53 × 44	N	
66	37	K	L' - 88 - g	長方形	- × 190 × 12	N-73° - E	S J 27を切る
67	18	K	I' - 88 - h	長方形	135 × 104 × 9	N-90° - E	
68		K	I' - 88 - a	不整楕円形	94 × 86 × 4	N-5° - W	
69		K	M' - 89 - c	-	- × - × 32	-	調査区域外に設く
70	26	K	M' - 89 - i	楕円形	73 × 42 × 49	N-67° - E	
71		K	M' - 89 - f	-	- × - × 26	-	
72		K	L' - 89 - g	不整形	110 × 53 × 14	N-70° - E	
73		K	L' - 89 - b	方形	59 × 51 × 27	N-13° - E	
74		K	L' - 89 - a	楕円形	62 × 49 × 37	N-85° - W	
75		K	K' - 89 - c	楕円形	- × 48 × 35	N-72° - W	S J 75, 76は重複
76		K	K' - 89 - c	楕円形	- × 61 × 12	-	
77		K	K' - 89 - a	方形	169 × 100 × 16	N-25° - W	
78		K	K' - 89 - e	不整楕円形	77 × 62 × 24	N-65° - E	
79		K	K' - 89 - f	不整形	152 × 59 × 10	N-1° - E	
80		K	K' - 89 - h	不整形	76 × 64 × 9	N-69° - E	
81		K	K' - 89 - h	楕円形	70 × 47 × 14	N-2° - W	
82		K	J' - 89 - a	不整楕円形	112 × 53 × 9	N-12° - W	
83		K	L' - 89 - b	長方形	1029 × 104 × 13	N-7° - W	
84		K	L' - 89 - c	長方形	(600) × 197 × 22	N-7° - W	
85		K	L' - 89 - h	長方形	- × - × 53	-	
86		K	J' - 89 - d	円形	73 × 69 × 11	N-30° - E	
87		K	J' - 89 - f	楕円形	100 × 72 × 51	N-30° - E	S K 87, 88は重複
88		K	J' - 89 - f	-	- × 58 × 10	-	
89		K	J' - 89 - f	長方形	121 × 74 × 12	N-58° - E	
90		K	I' - 89 - d	楕円形	78 × 52 × 15	N-85° - E	
91		K	M' - 90 - c	楕円形	72 × 49 × 28	N-85° - W	
92		K	M' - 90 - f	不整楕円形	66 × 57 × 23	N-22° - W	
93		K	I' - 89 - g	楕円形	- × 107 × 7	-	S K 93, 94は重複
94		K	I' - 89 - g	楕円形	(82) × 68 × 67	N-50° - E	S J 49内
95	19	K	I' - 89 - a	不整形	160 × 133 × 4	N-75° - W	S K 95, 96は重複
96	20	K	I' - 89 - a	不整形	(214) × 95 × 5	N-3° - W	S J 46を切る
97		K	L' - 90 - b	不整形	112 × 81 × 46	N-54° - E	

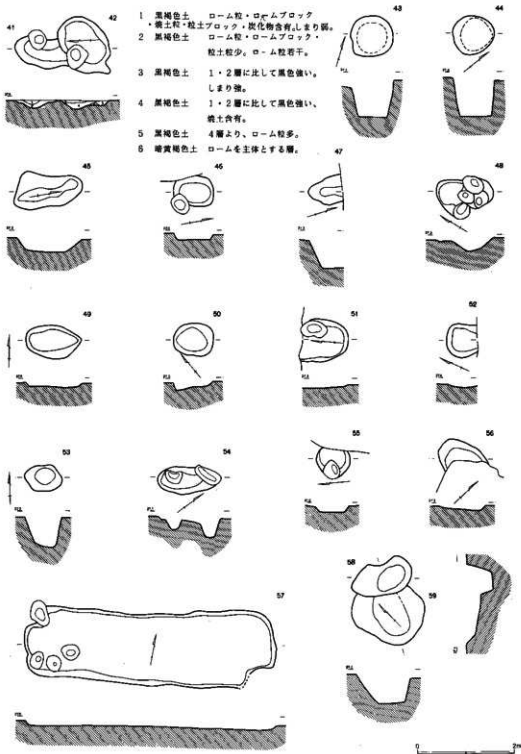
番号	旧番	区	グリッド	形状	規模(長×短×深) cm	主軸方向	備考	
98	36	K	M' -90-c	方形	240 × - × 22	N	調査域外に続く	
99		K	L' -90-a	楕円形	61 × (41) × 11	N-13°-W		
100		K	L' -90-b	円形	59 × 55 × 14	N-74°-E		
101		K	L' -90-a	円形	61 × 52 × 14	N-40°-E		
102		K	L' -90-a	円形	61 × 46 × 58	N-69°-W	SK102.103は重複	
103		K	L' -90-a	楕円形	155 × 52 × 16	N-2°-W	SK102を切る	
104		K	L' -90-d	楕円形	94 × 83 × 13	N-63°-E		
105		K	L' -90-d	楕円形	78 × 62 × 27	N-2°-E		
106		K	L' -90-e	楕円形	78 × 45 × 54	N-34°-W		
107		K	L' -90-c	楕円形	- × 47 × 21	-	SJ56を切る	
108	K	L' -90-d	不整楕円形	200 × 96 × 19	N-60°-E			
109	K	L' -90-b	不整形	132 × 132 × 7	N-62°-W			
110	10	K	K' -90-b	長方形	141 × 101 × 27	N-77°-E		
111		K	K' -90-a	不整円形	71 × 53 × 18	N-33°-W		
112	9	K	K' -90-c	不整形	75 × 51 × 21	N-72°-W		
113		K	K' -90-c	楕円形	65 × 41 × 26	N-73°-E		
114	6	K	M' -90-f	長方形	- × 173 × 31	N-87°-E	調査域外に続く	
115		K	K' -90-e	-	- × - × 13	N-24°-W		
116	21	K	K' -90-c	楕円形	169 × 51 × 48	N-11°-W		
117		K	K' -90-e	楕円形	85 × 63 × 19	N-21°-E		
118		K	K' -90-i	円形	72 × 65 × 21	N-65°-W		
119		K	J' -90-b	円形	77 × 64 × 27	N-58°-E		
120		K	J' -90-b	楕円形	107 × 74 × 30	N-47°-W		
121		K	J' -90-c	楕円形	81 × 67 × 44	N-88°-E		
122		K	J' -90-d	円形	65 × 54 × 32	N-50°-W		
123		K	J' -90-f	円形	65 × 59 × 32	N-73°-E		
124		K	K' -91-e	円形	64 × 51 × 13	N-47°-W		
125		K	K' -91-f	円形	73 × 71 × 39	N-18°-W		
126		K	K' -91-g	楕円形	66 × 56 × 25	N-9°-E		
127		K	K' -91-h	楕円形	68 × 47 × 22	N-1°-E		
128		8	K	K' -91-i	不整楕円形	107 × 79 × 58	N-38°-E	
129			K	J' -90-d	長方形	(217) × 134 × 64	N-79°-E	地下式物に切られる
130			K	K' -90-g	不整形	161 × 127 × 86	N-64°-E	
131			K	J' -90-a	方形	- × - × 104	-	SJ48を切る
132			K	J' -90-a	不整形	589 × 122 × 33	N-58°-E	
133			K	J' -91-a	楕円形	97 × 67 × 19	N-89°-E	
134			K	J' -90-g	円形	94 × 90 × 62	N-86°-E	
135			K	J' -90-h	長方形	124 × 76 × 34	N-62°-E	
136	K		J' -90-h	円形	119 × 114 × 39	N-3°-E		
137	K		J' -91-h	不整楕円形	- × - × 16	-	調査域外に続く	
138	K	J' -90-f	不整楕円形	184 × 98 × 26	N-43°-W			
139	K	I' -90-a	長方形	- × - × 25	-	調査域外に続く		
140	K	L' -91-f	-	- × - × 11	-	調査域外に続く		
141	5	K	J' -90-g	長方形	175 × 85 × 16	N		
142		K	K' -91-c	不整楕円形	253 × 114 × 23	N-70°-E		
143		K	J' -91-a	不整楕円形	242 × 144 × 13	N-35°-W		
144		K	L' -91-f	長方形	252 × - × 33	N	SE1と重複	
145		K	K' -91-d	長方形	322 × 225 × 17	N-89°-E	SE1と重複	
146		K	J' -91-c	楕円形	113 × 75 × 31	N-5°-W	SK146.147は重複	
147		K	J' -91-c	-	- × - × 13	-	調査域外に続く	
148		K	J' -91-c	不整楕円形	104 × 79 × 33	N	SK155と重複	
149		K	K' -92-a	方形	79 × 63 × 16	N-79°-W		
150		K	K' -92-c	不整楕円形	65 × 48 × 16	N-61°-E		
151		K	K' -92-f	不整楕円形	70 × 58 × 44	N-62°-W		
152		K	K' -92-g	不整楕円形	86 × 63 × 7	N-85°-W		
153		K	K' -92-h	楕円形	67 × 40 × 39	N-55°-E		
154		K	J' -90-i	-	- × - × 21	-	調査域外に続く	
155		K	J' -90-i	不整形	124 × 72 × 27	N-77°-W	SK155.156は重複	



第447圖 土壤(1)

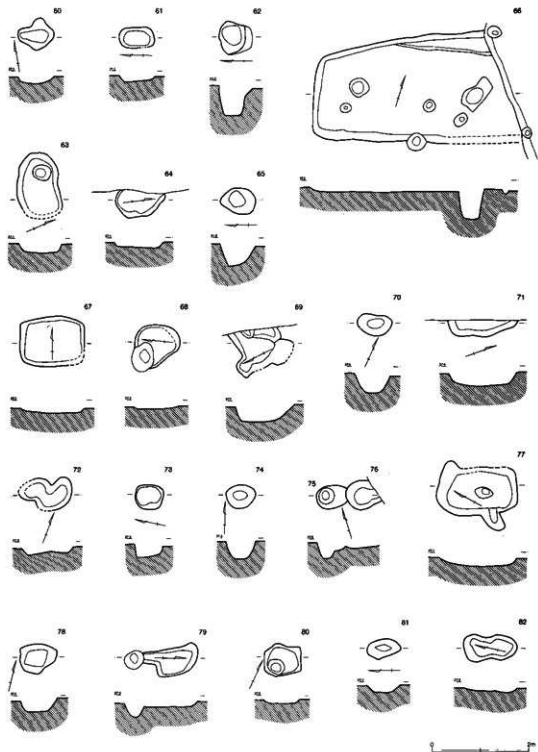


第448圖 土坑



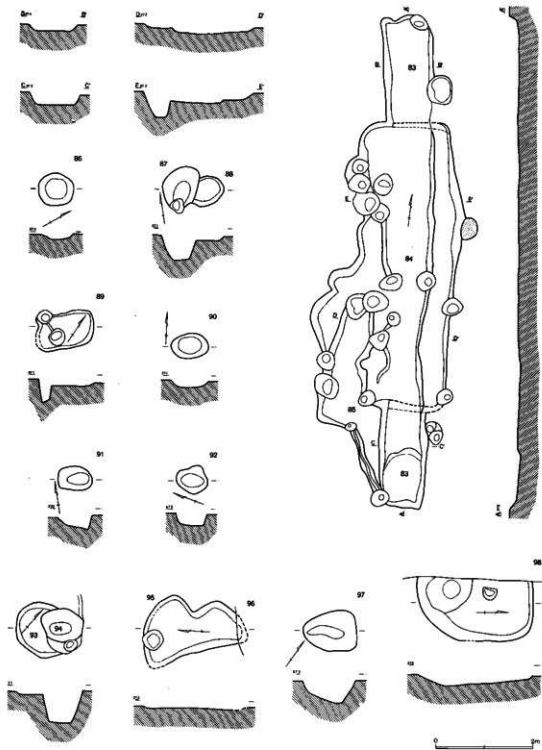
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・黄土粒・粒土ブロック・炭化物含有。しまり弱。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・粒土粒少。ローム粒若干。
- 3 黒褐色土 1・2層に比して黒色強い。しまり強。
- 4 黒褐色土 1・2層に比して黒色強い。黄土含有。
- 5 黒褐色土 4層より、ローム粒多。
- 6 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。

第449図 土坑③

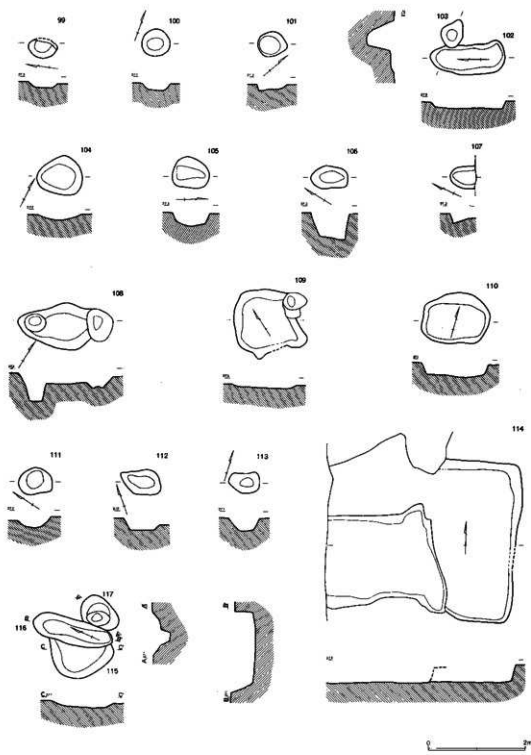


第450圖 土壙(4)

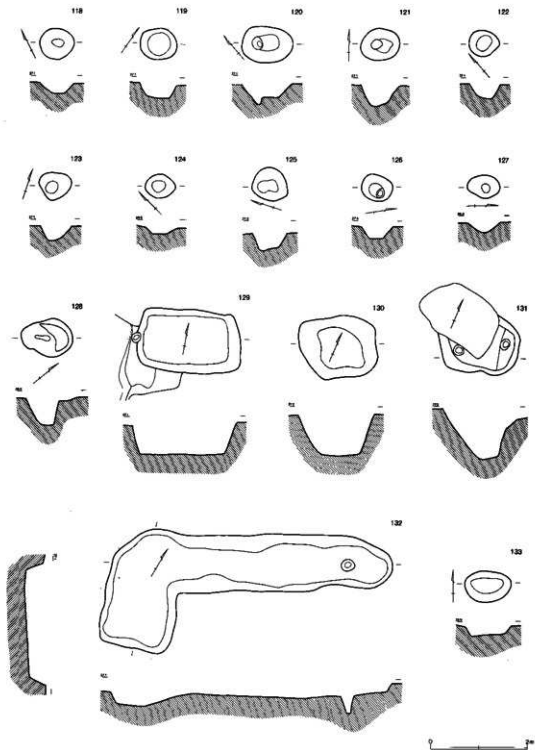




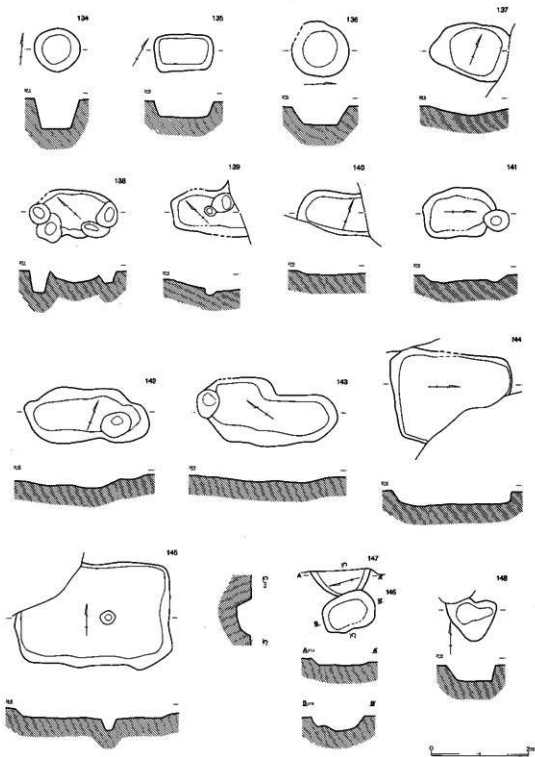
第451圖 土城5



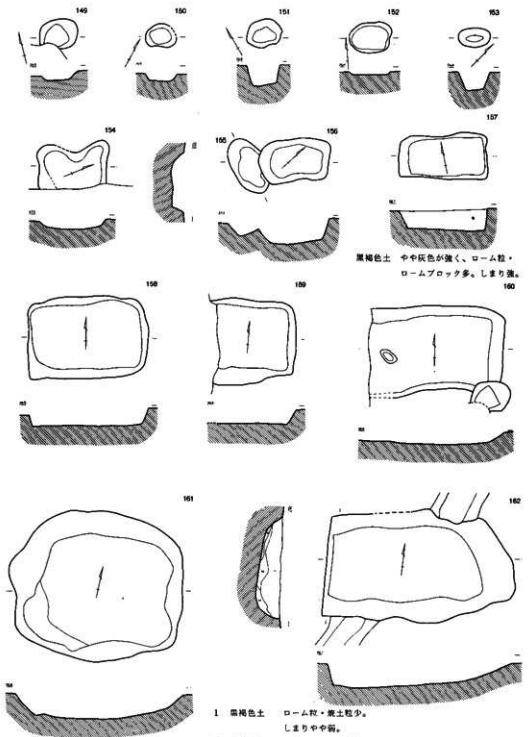
第452图 土壤(6)



第453圖 土鍬



第454圖 土埴器

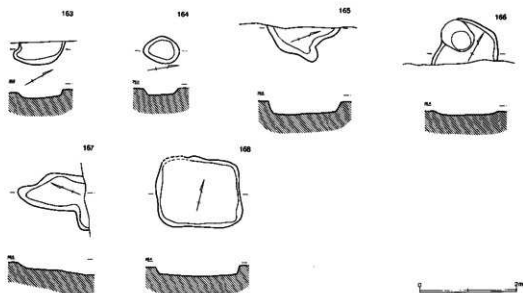


黒褐色土 やや灰色が強く、ローム粒・ロームブロック多。しまり強。

- 1 黒褐色土 ローム粒・黄土粒少。しまり中や弱。  
 2 黒褐色土 1層よりローム粒多。  
 3 暗黄褐色土 ロームを主体とする層。



第455図 土壌剖



第456図 土壌剖

番号	旧番	区	グリッド	形状	規模 (長×短×深) cm	主軸方向	備考
156		K	J' -90-i	長方形	148 × 91 × 50	N-40°-E	
157	36	K	K' -93-a	長方形	184 × 97 × 44	N-79°-W	
158	2	K	K' -92-a	長方形	248 × 169 × 35	N	
159	1	K	K' -92-d	長方形	- × - × 30	-	
160	3	K	K' -92-a	長方形	- × - × 26	-	
161	2	K	J' -92-a	不整形	351 × 316 × 52	N-78°-E	
162	2	K	K' -93-d	長方形	388 × 236 × 52	N-83°-E	
163		L	K' -93-c	-	- × - × 13	-	調査区域外に就く
164		L	K' -94-a	楕円形	74 × 55 × 12	N-9°-E	
165		L	K' -94-a	-	- × - × 27	-	調査区域外に就く
166		L	K' -94-b	-	- × - × 7	-	S J 62と重複
167		L	J' -94-h	-	- × - × 25	-	S J 63と重複
168		L	K' -94-a	長方形	175 × 146 × 21	N-77°-E	

第12号土墳出土遺物 (第457図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径 (18.7) 現存高 3.6	口唇部：指頭による相互押捺。頸部：内外面ともハケ目。褐色。	B+E+I+J 焼成：普
2	壺	現存高 6.0	上位から3本単位の櫛状工具による横線文2段一粗い鋸歯文一直線の垂下文を施す。文様は線も太く鮮明。褐色。	B+D+I+J 焼成：普
3	壺	現存高 3.8	外面上位を3本単位と思われる櫛状工具による簾状文又は横線文一（同じ工具による）波状文一その間に乱縄文を施す、内面はナデ。文様は線も太く鮮明である。	B+H+J 焼成：普
4	壺	現存高 2.7	胴部：外面はLR-乱縄文を羽状に施す、内面はナデ。黒色。	B+J 焼成：普

第22号土墳出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	底径 5.8 現存高 15.9	器面は荒れている。胴部中位に2個で1単位の円形浮文をもつ。頸部～胴部上半：外面に乱縄文3段を施文し、後へら磨き、内面はへら磨き。胴部下半：外面はハケ目の後へら磨き、胴部内面はナデか。底部：内外面ともナデか。赤褐色（一部黒色）。	A+B+E+H+J 胴30 底100 焼成：やや良

第43号土墳出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 9.9 底径 5.4 器高 2.0	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。赤褐色。	B+F+J(細密) □・底75 焼成：普
2	杯	口径 10.0 底径 5.3 器高 2.1	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。褐色。	A+B+F+J(細密) □95 杯100 焼成：普



第457図 土墳出土遺物(1)

第44 (a) 号土壇出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 10.0 底径 5.1 器高 2.1	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り難し。 褐色。	A+B+P+J □75 杯90 焼成：普
2	杯	口径 10.0 底径 5.6 器高 1.9	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り難し。 灰褐色。	A+B+J(細密) 完形 焼成：普

第44 (b) 号土壇出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	高杯	現存高 14.0	杯部：内外面ともヘラ磨き。脚台部：外面はヘラ磨き、内面はナデ付け。赤褐色。	A+B+P+J 焼成：やや良
2	壺	胴径 (19.3) 底径 (7.2) 現存高 15.4	器面は摩滅している。胴部：外面はハケ目、内面はヘラナデ。 底部：内外面ともナデ。橙色（一部黒色）。	A+B+H+J 底75 脚40 焼成：やや不良

第57号土壇出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	壺	口径 (12.5) 現存高 3.5	器面は摩滅している。口縁部：内外面ともハケ目の後横ナデ。 橙色。	A+B+P+J(細密) □25 焼成：普
2	壺	口径 (16.5) 現存高 4.1	口縁部：内面ヘラナデの後、内外面とも横ナデ。橙色。	A+B+H+J □25 焼成：普

第58号土壇出土遺物 (第458図)

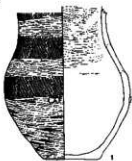
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (12.2) 現存高 4.7	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、 内面はナデ。赤褐色。	A+B+H+J □95 杯80 焼成：普
2	杯	口径 (11.5) 現存高 4.1	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナ デ。赤褐色。	A+B+J □20 杯20 焼成：普

第66号土壇出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (14.0) 現存高 3.6	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナ デ。橙色。	A+B+G □10 杯10 焼成：普



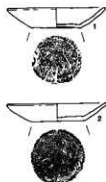
1W 22



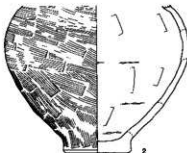
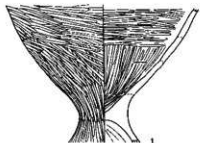
1W 43



1W 44



1W 46



1W 57



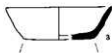
1W 58



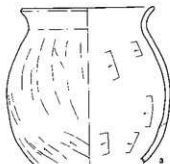
1W 66



1W 114



1W 168



0 10cm

第458图 土坑出土遗物(2)

第114号土壇出土遺物 (第458図)

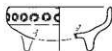
番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	碗 陶磁器	現存高 3.6 底径 4.3	内面浅緑色の釉が剥落したと思われる。高台の整形は鈍。ロクロナダ。ロクロナダ。ロクロナダ。底部：回転未切り離し後、付高台。灰白色。	焼成：やや良
2	須恵器 蓋	口径 (17.7) 現存高 2.0	天井部：自然軸付着。ロクロナダ。灰色。	B+J □15 蓋15 焼成：やや良
3	須恵器 杯	口径 (11.0) 底径 (7.2)	全面：ロクロナダ。底部：回転ヘラ削り (右回転)。	B+I □25 底15 焼成：普

第161号土壇出土遺物 (第459図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	陶磁器 香炉	口径 (10.7) 器高 4.6	体部：内外面ともヘラナダ。灰色。	B+H □25 体20 脚50 焼成：普

第168号土壇出土遺物 (第458図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 14.3 現存高 4.3	口縁部：内外面とも横ナダ。杯部：外面はヘラ削りの後ナダ、内面はナダ。赤褐色。底部：外面に黒斑。	A+B+H+J □100 杯80 焼成：良
2	杯	口径 (16.0) 現存高 4.6	口縁部：内外面とも横ナダ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナダ、内面はナダ。橙色。	A+B+H+J □20 杯15 焼成：普
3	甕	口径 13.7 胴径 17.1 現存高 16.4	口縁部：内外面とも横ナダ。胴部：外面はヘラ削りの後ナダ、内面はヘラナダ。赤褐色。	A+B+D+E+H+J □45 焼成：普



第458図 土壇出土遺物③

### (3) 溝跡

大西遺跡においては、これまでに述べてきた以外の遺構として、溝跡6条・“性格不明遺構”と命名せざるを得なかった遺構1基が検出されている。溝跡6条については、いずれもK区の平坦面上において検出されており(第338図)、“性格不明遺構”については、台地の肩線に平行したL区南半で検出されている(第337図・第445図)。

#### 第1号溝跡(第450図)

第1号溝跡は、J' 82 f グリッドに位置する。K区北西端近くに位置しており、遺構の西側部分が調査範囲外に続いており、全長は不明。

調査範囲が小さいため、規模や形態については不明である。現状における形態から溝跡と推定したが、土壌の可能性も否定できない。

調査し得た範囲内において、現存長200cm・確認面における最大幅87cm・底面における幅は、13cm~32cm、確認面からの深さは28cmを測る。東側に行くに従って先細りするが、東に傾斜する斜面部に位置することから、遺構として途切れてしまっていると推定された。本来的には、さらに東に延びていたのではなかろうか。底面は比較的平坦であり、壁面の立ち上がりは緩やかである。

遺物の出土はない。

#### 第2号溝跡(第460・462図)

第2号溝跡は、J' 83 h グリッドに位置する。台地の肩線に平行して位置している。北側では第22号土壌を切り、西側から南側にかけては第4号溝跡によって切られ、西側では第3号溝跡に切られる。そして、中央部では第25号土壌と重複しているが、新旧関係については不明である。北側については、さらに続いていたものと推定される。

平面形態は全体的に、北側から南側に行くに従って幅広となっているが、北側方向に対しても傾斜をしているため、上位部分が既に失われており、底面付近のみが遺存したためとも推定される。

規模については、北端部に近い第22号土壌付近で幅60cm、エレベーションD-D'で幅62cm・確認面からの深さ12cm、エレベーションE-E'で幅93cm・確認面からの深さ9cm、南端部で幅155cm、現存長は720cmを測る。第22号土壌との重複箇所から、エレベーションD-D'付近にかけては、東側はやや幅広になり、西側についてはテラス部分をもつ。

底面は比較的平坦であり、壁面の立ち上がりはきわめて急であるといえる。方向的にはほぼ南北に走る。

土器片1点が、検出されたのみにとどまる。

### 第2号溝出土遺物 (第462図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (12.8) 現存高 2.9	青磁。明緑色。	□25

### 第3号溝跡 (第460・462図)

第3号溝跡は、K' 84 i グリッドに位置する。他遺構との重複は少なく、東側で第2号溝跡に切られているのみであり、西側については、調査範囲外に続いている。

検出し得た範囲内における規模は、現存長370cm、第2号溝との重複部分で上場幅45cm・下場幅35cm、エレベーションF-F'で上場幅55cm・下場幅40cm・確認面からの深さ35cm、エレベーションG-G'で上場幅43cm・下場幅35cm・確認面からの深さ55cm、西端部で上場幅45cm・下場幅36cmを測る。

上場幅・下場幅ともに均一であり、平面形態は直線的で、東北東から西南西に走る。底面は比較的平坦で、壁面の立ち上がりは急である。

土師器1点が出土したのみであった。

### 第3号溝出土遺物 (第462図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (15.8) 底径 (13.5) 現存高 3.5	口縁部：内外面とも横ナズ。杯部：外面はヘラ削りの後、粗いヘラ磨き、内面はナズ。赤褐色。	B+GJ □50 杯45 焼成：普

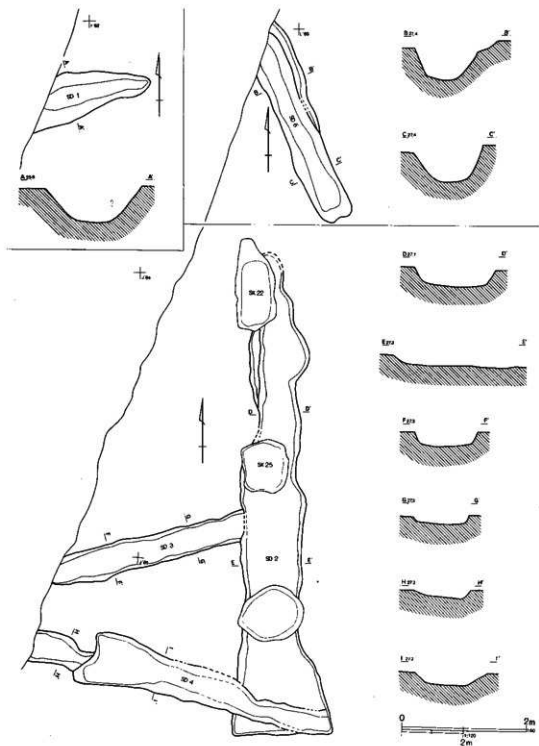
### 第4号溝跡 (第460・462図)

第4号溝跡は、K' 85 c グリッドに位置する。東側は第2号溝跡を切る。第2号溝跡の東側は、比較的急な斜面部になっており遺構としては途絶えているが、第4号溝跡は重複部分よりもさらに東へ続くとも推定される。

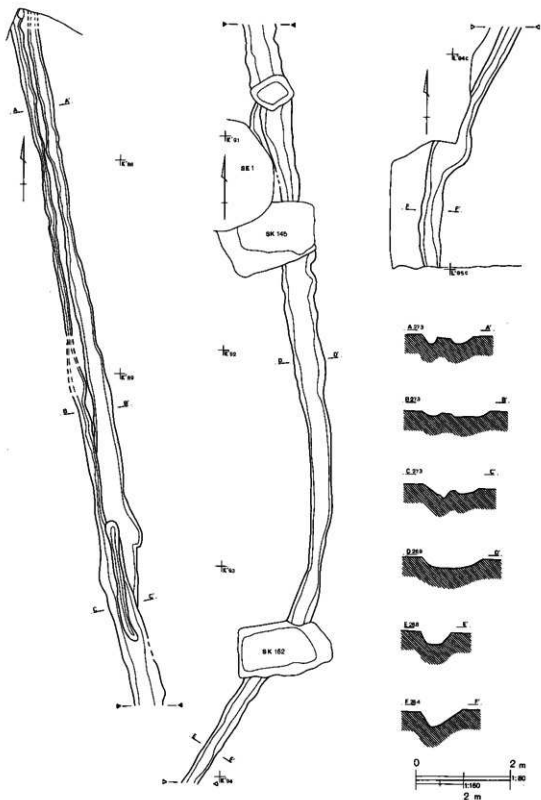
西側については、溝が細くなっているのか、あるいは別の溝が重複しているのか2つの可能性が考えられるが、調査過程において前者を想定した。

検出し得た範囲内における規模は、現存長490cm、東端部で上場幅36cm・下場幅20cm、第2号溝南西端との重複部分で上場幅45cm・下場幅25cm、エレベーションI-I'で上場幅58cm・下場幅30cm・確認面からの深さ35cm、エレベーションH-H'・東のもっとも広がりをもつ部分で上場幅84cm・下場幅75cm、エレベーションH-H'で上場幅45cm・下場幅30cm・確認面からの深さ35cm、西端部で上場幅50cm・下場幅37cmを測る。上場幅・下場幅ともに変動的ではあるが、概ね直線的に東南東から西北西に走っているといえよう。

少数の出土遺物の中から、図化し得たのは1点のみであった。



第460圖 第1~3号測跡



第461图 第1~4、B号测跡

#### 第4号溝出土遺物 (第462図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	須恵器 壺	口径 (32.0) 底径 (16.8) 器高 11.5	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：内外面ともナデ。 底部：内外面ともナデ。灰色。	B+C □40 底40 焼成：昔

#### 第5号溝跡 (第461・462図)

第5号溝跡は、L' 87eグリッドからL' 94hグリッドにまで及んでいるが、南北ともに調査範囲外に続いており、さらに延びるものと推定される。現存長69mを測り、その間に第20号・第28号・第30号・第32号・第42号・第43号・第52号・第58号・第59号住居跡などを切り、第1号井戸跡、第145号・第162号土壇等に切られている。北端部から、エレベーションC-C' 付近までは2条であると思われるが、ここでは同一遺構として扱った。

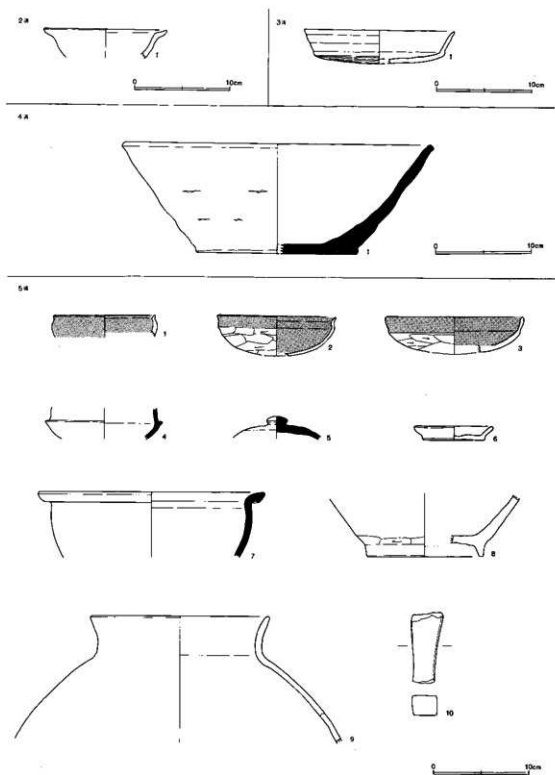
検出し得た範囲内における規模は、北端部では上場幅48cm・下場幅16cmともう一方は、上場幅48cm・下場幅20cm、エレベーションA-A' では上場幅32cm・下場幅10cm・確認面からの深さ12cmともう一方は、上場幅48cm・下場幅20cm・確認面からの深さ10cm、エレベーションB-B' では上場幅32cm・下場幅12cm・確認面からの深さ10cmともう一方は、上場幅80cm・下場幅56cm・確認面からの深さ10cm、エレベーションC-C' では上場幅56cm・下場幅10cm・確認面からの深さ23cmともう一方は、上場幅48cm・下場幅32cm・確認面からの深さ10cm、エレベーションD-D' では上場幅120cm・下場幅83cm・確認面からの深さ24cm、エレベーションE-E' では上場幅64cm・下場幅32cm・確認面からの深さ32cm、エレベーションF-F' では上場幅80cm・下場幅16cm・確認面からの深さ32cmを測る。

概して、2条が平行している範囲では幅が狭く、壁面の立ち上がりが急であり、1条の範囲では比較的幅広で、壁面の立ち上がりは緩やかであるといえよう。北端部から約50mの間は、北北西から南南東へほぼ直進し、それ以南については、弱いS字状を描くが、概ね南北に走っていると表現できよう。時期的にも内容的にも、さまざまな遺物が数多く出土をしているが、石製品1点を含めて計10点が図化できた。

#### 第6号溝跡 (第460図)

第6号溝跡は、M' 89cグリッドに位置する。第39号住居跡を切っている。北側は、調査範囲外に続く。北半部東側のテラスは他遺構との重複とも考えられるが、調査時の観察から同一のものと判断をした。検出し得た範囲内における規模は、現存長648cm、エレベーションA-A' の上場幅はテラスを含めて130cm・含めずに100cm・下場幅45cm・確認面からの深さ48cm、エレベーションB-B' では上場幅106cm・下場幅58cm・確認面からの深さ47cmを測る。概して、幅は均一で直線的に西北西から南南東に走る。断面形はU字状を呈し、南端部で遺構は止まっている。

遺物の出土はみられなかった。



第482图 第5号洞跡



第5号溝出土遺物 (第462図)

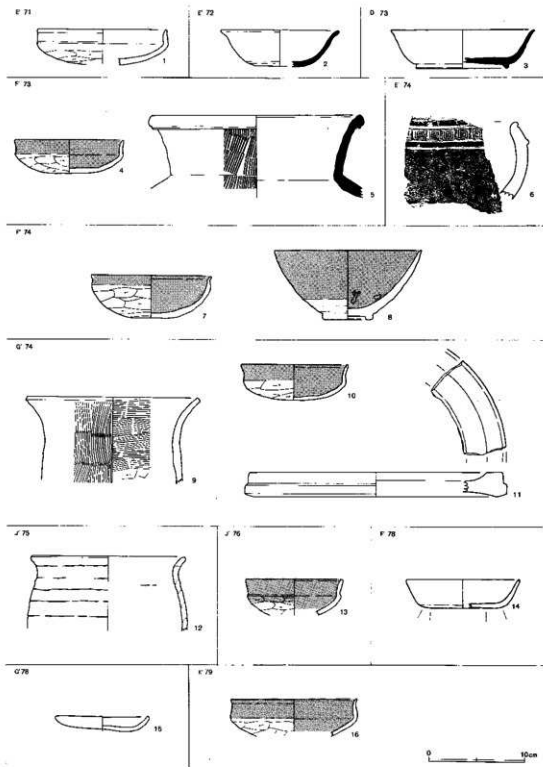
番号	器種	流量	cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	杯	口径 (10.6)		口縁部：内外面とも横ナデ。赤褐色。	焼成：やや良
		現存高 2.3			
2	杯	口径 (12.3)		口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	B+I+J □・杯25
		現存高 4.2			焼成：やや良
3	杯	口径 (14.2)		口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。橙色。	A+B+E+J □5
		現存高 3.6			杯20 焼成：普
4	須恵器 杯	現存高 3.3		ロクロ成形。灰色。	B+J 杯10
					焼成：普
5	須恵器 蓋	鈕径 2.2		ロクロナデ、天井部：ヘラ削り。灰色。	B+H+J 鈕90
		現存高 2.4			焼成：普
6	陶質 皿	口径 (14.2)		口縁部：内外面とも横ナデ。底部：内外面ともヘラナデの後ナデ。褐色。	A+B+J(細密)
		底径 (6.3)			□40 底40
		現存高 1.5			焼成：普
7	須恵器 鉢	口径 (23.6)		口唇部～体部に自然軸付着。全面：ロクロナデ。黒灰色。	B+I+J □25
		現存高 6.8			焼成：普
8	甕	底径 (12.1)		外面下位のみヘラ削り。内面一部に自然軸付着。灰色。	A+B+I+J 底20
		現存高 6.5			焼成：普
9	甕	口径 (18.3)		器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデか。灰褐色。	A+B+P+I+J
		現存高 13.3			□25 胴上20
10	磁石	現存長 7.4		上・下端を欠損し残る4面を研ぎ面として使用している。面は平滑で条線はあまりみられない。平面形態は一方に広がるもので、断面は長方形を呈す。現存重量22.3g。青白色。	焼成：不良 凝灰岩製
		幅 3.1			
		厚さ 2.2			

(4) 性格不明遺構

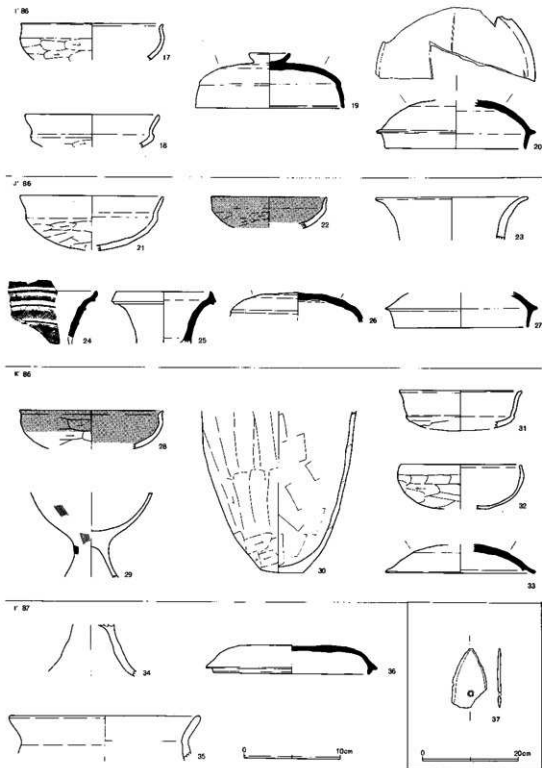
J区の表土削平の段階において、台地の肩線に平行する形で、性格を判断できないプランが検出された(第337・445図)。調査期間の関係もあり調査することができず、確認された範囲を図化することができたのみであった。しかし人工によるものである点に疑問はなく、性格不明遺構として扱いここに概述する。遺構は南北方向に走るものと、東西方向に走るものことからなるが、性格が不明であるため同一の遺構であるのか、別個の遺構が重複しているのか判別できなかった。南北方向の遺構は、北端部では弥生時の包含層にまで達しており、これを切っているが範囲については確認できなかった。第445図エレベーションD-D'に見られる落ち込みにつながると思えば、溝跡とも推定されよう。検出できた規模は、幅約1.4m～4m・現存長約38m。

東西方向のものについては、幅約1.4mと1.8mの溝状の遺構が2条、約6.8mに亘って平行していた。この2条を東に延長すると、香林寺という寺院に及んでいることから、道という可能性を考えた。

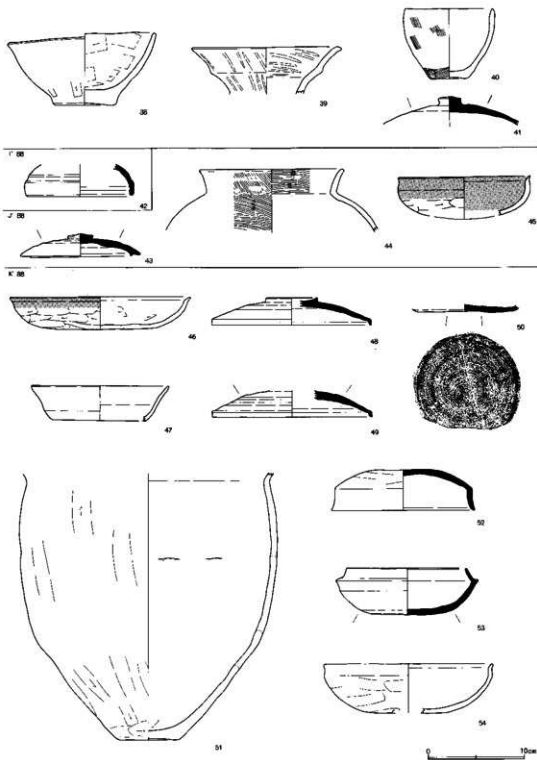
しかし、南北方向に走る遺構との関連については、不明であった。



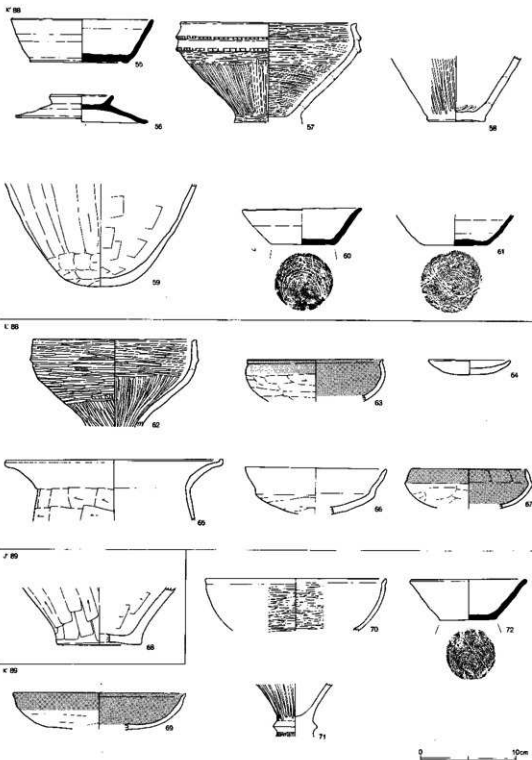
第463圖 グリット出土遺物(1)



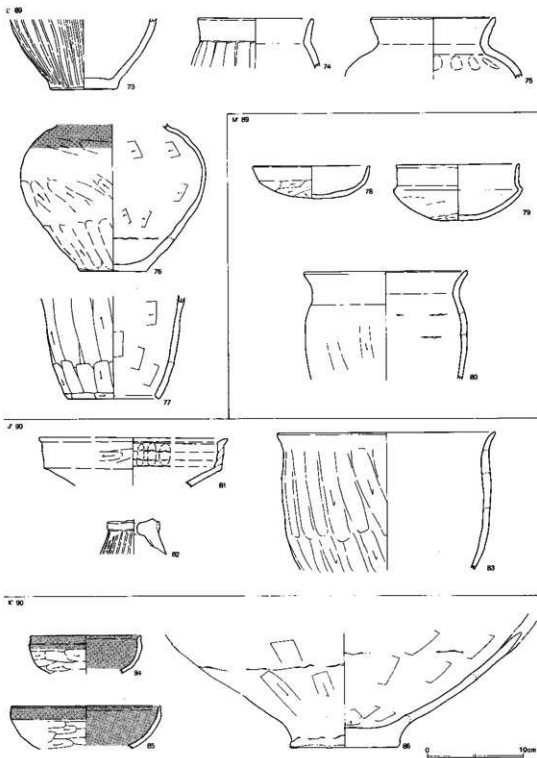
第484図 グリッド出土遺物②



第485図 グリッド出土遺物図

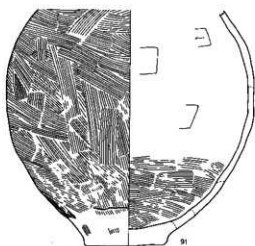
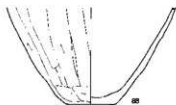
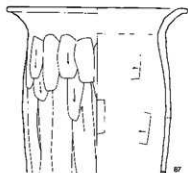


第466図 グリッド出土遺物(4)



第487図 グリッド庄土遺物⑤

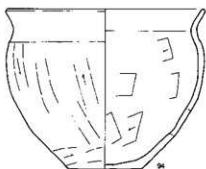
K 90



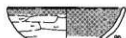
L' 90



J' 91



K 91



K 92



K 92



L' 97



第468図 グリッド出土遺物⑬

グリッド出土遺物 (第463・464・465・466・467・468図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率等
1	杯	口径 (13.4) 現存高 3.6	E' 71グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。赤褐色。	A+B+D+J □15 杯25 焼成：やや不良
2	須恵器 杯	口径 (12.4) 底径 (5.2) 現存高 3.9	E' 72グリッド。全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し。灰色。	B+H+J(多) □35 杯30 底10 焼成：不良
3	須恵器 杯	口径 (14.9) 高台径 (9.6) 高台高 0.5 器高 4.0	D' 73グリッド。全面：ロクロナデ。底部：回転ヘラ削り(左回転) 後付高台。灰色。	B+I+J 焼成：普
4	杯	口径 (11.4) 器高 3.5	F' 73グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。褐色。	A+B+F+J □10 杯20 焼成：良
5	須恵器 壺	口径 (21.7) 現存高 7.7	F' 73cグリッド。口縁～胴部外面に平行叩き目め残る。明灰色(黒灰色)。	B+D+I+J □25 焼成：普
6	陶器 鉢	現存高 8.0	E' 74グリッド。口縁に雷文あり。内外面ともナデか。灰白色。	B+D+E+F+J 焼成：普
7	杯	口径 (12.6) 器高 4.5	F' 74グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+E+I+J □30 杯35 焼成：良
8	陶磁器 碗	口径 (15.4) 高台径 (5.0) 高台高 0.4 器高 7.3	F' 74グリッド。全面：ロクロナデ。底部：静止糸きりの後付高台か。緑釉陶器。	□25 杯30 底50 焼成：普
9	壺	口径 (17.7) 現存高 9.0	G' 74グリッド。器面は摩滅している。口縁部：内外面ともハケ目の後、粗いナデ。胴部：外面はハケ目、内面上位はハケ目、中位はヘラナデか。黄褐色。	A+B+F+I+J □25 胴上半30 焼成：普
10	杯	口径 11.1 器高 3.7	G' 74グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。橙色。	B+E+J(細密) ほぼ完形 焼成：普
11	焙烙	最大径 (27.4) 現存高 2.5	G' 74グリッド。外面及び内面に滑らかに仕上げ底面は粗い成形痕を残す。灰黄色。	焼成：普
12	壺	口径 (16.0) 現存高 7.8	J' 75グリッド。外面は輪轆痕明瞭。口縁部：内外面とも粗い横ナデ。胴部：内外面ともナデ。外部は暗褐色、内部は黄褐色。	B+D+I+J □25 胴上20 焼成：良



13	杯	□ 径 (10.1) 現存高 3.8	J' 75グリッド。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+I+J(細密) □45 杯35 焼成：やや良
14	土師器 杯	□ 径 (11.8) 底 径 (8.2) 現存高 3.0	F' 78グリッド。器面は摩滅している。全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸きり離し後周辺ヘラ削り。明褐色。	A+B+F+J □25 杯25 底25 焼成：普
15	灯明皿	□ 径 9.6 現存高 1.6	G' 78グリッド。□縁部：内外面とも横ナデ。底部：内外面ともナデ。黄褐色。	B+E+J(細密) □85 杯80 焼成：普
16	杯	□ 径 (13.2) 現存高 3.9	K' 79グリッド。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+J(細密) □20 杯20 焼成：やや良
17	杯	□ 径 (14.7) 現存高 3.8	I' 86dグリッド。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。暗赤褐色。	B+G+J □15 杯10 焼成：良
18	杯	□ 径 (14.0) 現存高 3.4	I' 86gグリッド。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+F+G □15 杯5 焼成：普
19	須恵器 蓋	紐 径 4.1 □ 径 15.5 器 高 4.7	I' 86dグリッド。天井部：ヘラ削りの後ナデ。ロクロナデ。黒灰色。	B+J 蓋85 焼成：普
20	須恵器 蓋	□ 径 14.6 現存高 5.0	I' 86dグリッド。全面：ロクロナデ。天井部：ヘラ削りの後(左回転)ナデ。外面に刻みをもつ。灰色。	B+I+J □15 蓋35 焼成：普
21	杯	□ 径 (15.0) 現存高 5.7	J' 86グリッド。器面は摩滅している。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	□25 杯25 焼成：普
22	杯	□ 径 (12.0) 現存高 3.3	J' 86fグリッド。器面はやや摩滅している。□縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色。	A+B+G(細密) □20 杯20 焼成：普
23	甕	□ 径 (15.6) 現存高 4.7	J' 86fグリッド。□縁部：内外面とも横ナデ。褐色。	A+B+J □20 焼成：やや良
24	須恵器 甕	□ 径 (17.2) 現存高 5.5	J' 86gグリッド。□縁部に6本単位の帯角の波状文1段。濃灰色。	B+G 焼成：良
25	須恵器 甕	□ 径 (9.8) 現存高 5.4	J' 86hグリッド。ロクロナデ。灰色。	B+J □25 焼成：普
26	須恵器 蓋	現存高 (3.1)	J' 86iグリッド。ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り(左回転)後ナデ。褐色(外部黒灰彩色)。	B+G+J(細密) 天井70

27	須恵器 蓋	口 径 (14.0) 現存高 3.7	J' 86 i グリッド。ロクロナデ。灰色。	焼成：やや不良 A+B+F+H 天井10 焼成：不良
28	杯	口 径 (15.0) 現存高 4.0	K' 86 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+J(細密) 口15 杯15 焼成：普
29	台付壺	現存高 8.9	K' 86 グリッド。外面はハケ目の後粗いナデ、内面はナデ。黄褐色。	A+B+J(細密) 焼成：普
30	壺	底 径 4.4 現存高 17.0	K' 86 b グリッド。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。底部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。黒褐色。	B+I+J 底80 焼成：普
31	杯	口 径 (12.8) 現存高 3.9	K' 86 a グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。黒褐色。	A+B+J 口10 杯10 焼成：良
32	杯	口 径 (12.6) 現存高 4.6	K' 86 g グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色。	A+B+C+I+J 口50 杯40 焼成：普
33	須恵器 蓋	口 径 (15.4) 現存高 2.9	K' 86 g グリッド。ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り（右回転）。灰色。	B+H+J 口25 天井25 焼成：普
34	高 杯	現存高 5.3	I' 87 グリッド。内外面ともナデ。橙色（一部黒斑）。	A+B+E(細密) 脚100 焼成：普
35	壺	口 径 (20.0) 現存高 4.8	I' 87 グリッド。器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデ。褐色。	A+B+H+J 口25 焼成：やや不良
36	須恵器 蓋	口 径 (16.2) 現存高 3.0	I' 87 グリッド。ロクロナデか。灰色。	天井5 焼成：普
37	磨 製 石 鉢	現存長 3.1 現存巾 1.8 厚 さ 0.2	I' 87 グリッド。下部を欠く。両側面を砥ぎ出し刃を設ける。両面に糸線を残す。両面から穿孔を行う。現存重量1.5g。	緑泥片岩製
38	碗	口 径 (15.6) 底 径 6.2 現存高 7.6	K' 87 グリッド。底部はややドーナツ状。口縁部：内面ヘラナデの後、内外面を粗い横ナデ。杯部：内外面ともヘラナデの後粗いナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。黄褐色。	A+B+I(多)+J 口75 底100 焼成：やや良
39	壺	口 径 (14.8) 現存高 4.9	K' 87 e グリッド。器面は摩滅している。口縁部：内外面ともヘラ磨き。明灰褐色。	口40 焼成：普
40	碗	口 径 9.0 底 径 3.6	K' 87 e グリッド。口縁部：外面ハケ目の後、内外面とも粗い横ナデ。体部：外面上～中位はハケ目の後粗いナデ、下位はハ	A+B+E+I+J 口50 体60 底100

		器高 7.3	ケ目、内面はナデ。底部：内外面ともナデ。黄褐色。	焼成：普
41	須恵器 蓋	紐径 2.3 現存高 3.2	K' 87hグリッド。ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り（右回転）。灰色。	B+I+J 紐90 天井35 焼成：普
42	須恵器 蓋	口径 (11.0) 現存高 3.4	I' 88グリッド。ロクロナデ。灰色。	B+H 天井5 焼成：やや良
43	須恵器 蓋	紐径 2.6 口径 (12.5) 器高 2.3	J' 88グリッド。全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。天井部：回転ヘラ削り（右回転）。灰色。	B+E+I+J □25 天井30 紐75 焼成：普
44	壺	口径 (14.8) 現存高 6.6	J' 88aグリッド。口縁部：内外面ともハケ目の後粗い横ナデ。胴部：外面はハケ目、内面はナデ。暗褐色。	A+B+F+I+J □50 焼成：普
45	杯	口径 (15.6) 現存高 4.0	J' 88cグリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。橙色。	A+B+H+J □10 焼成：良
46	杯	口径 (18.7) 器高 3.4	K' 88グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデの後ナデ。赤褐色。	A+B+D+J □30 杯35 焼成：良
47	須恵器 杯	口径 14.2 底径 10.0 器高 3.6	K' 88グリッド。口縁は直線状に開く。ロクロ成形。灰色。	E+I+J □15 焼成：普
48	須恵器 蓋	紐径 (5.2) 口径 (16.8) 現存高 2.9	K' 88グリッド。ロクロ左回転。天井部：回転ヘラ削り。灰白色。	B+G+J 紐30 焼成：普
49	須恵器 蓋	口径 (16.8) 現存高 2.8	J' 88aグリッド。ロクロナデ。天井部：回転ヘラ削り（右回転）。明灰色。	B+I+J 天井20 焼成：普
50	須恵器 杯	底径 10.4	K' 88グリッド。底部：回転糸きり（ロクロ右回転）の後、外周部分を回転ヘラ削り（左回転）。灰色。	B+H+J 焼成：普
51	壺	胴径 (27.0) 底径 6.0 現存高 28.0	K' 88cグリッド。内面は荒れている。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデか。底部：外面は木葉痕残す、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+E+I+J 底90 焼成：やや不良
52	須恵器 蓋	口径 (14.8) 現存高 4.3	K' 88dグリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。灰褐色。	B+G+J(細密) □50 杯50 焼成：不良
53	須恵器 杯	口径 (12.5) 現存高 4.9	K' 88eグリッド。ロクロナデ。底部：ヘラ削りの後ナデ。褐色。	B+J □45 杯90 焼成：不良

54	环	□ 径 (17.6) 現存高 5.2	K' 88 e グリッド。□ 縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はへら削りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+E □20 环15 焼成：良
55	須恵器 环	□ 径 14.8 底 径 10.3 現存高 4.6	K' 88 i グリッド。ロクロナデ。底部：削り出し高台。灰色。	B+J □30 底80 焼成：普
56	須恵器 蓋	□ 径 13.2 高台径 6.3 器 高 2.7 高台高 1.0	K' 88 e グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り後付高台。灰色。	B+I+J 蓋70 高台100 焼成：普
57	高 环	□ 径 (18.3) 現存高 10.2	K' 88 e グリッド。□ 縁部：外面は横ナデ、内面は横ナデの後へら磨き。环部：内外面とも丁寧なへら磨き。赤褐色。	□25 环35 焼成：やや良
58	壺	底 径 5.7 現存高 6.7	K' 88 e グリッド。胴部：外面は丁寧なへら磨き、内面はナデ。底部：外面はナデ、内面はナデ付け。暗赤褐色（一部黒色）。	A+B+H+J(細密) 底100 胴25 焼成：普
59	壺	現存高 10.7	K' 88 h グリッド。外面はやや摩滅している。胴部～底部：外面はへら削り、内面はへらナデ。黄褐色。	A+B+H+J 胴下半25 底100 焼成：普
60	須恵器 环	□ 径 (12.3) 現存高 3.8	K' 88 h グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。灰色。	I+J 环100 焼成：普
61	須恵器 环	底 径 6.5 現存高 3.2	K' 88 h グリッド。ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。黄灰色。	I+J 底100 焼成：普
62	高 环	□ 径 (17.0) 現存高 9.2	L' 88 e グリッド。□ 縁部：内外面とも横ナデの後、粗いへら磨き。环部：内外面ともハケ目の後へら磨き。外部橙色、内部黄褐色。	B+P+H+J □25 环35 焼成：普
63	环	□ 径 (17.1) 現存高 4.4	L' 88 i グリッド。赤色（一部黒色）。	□20 环20 焼成：普
64	环	□ 径 ( 8.4) 現存高 1.5	L' 88 i グリッド。全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切り離し。黄褐色。	I+J □50 底80 焼成：普
65	壺	□ 径 (22.7) 現存高 6.4	L' 88 e グリッド。器面は摩滅している。□ 縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はへら削り、内面はナデ。橙色。	A+B+D+P+I □25 焼成：普
66	环	□ 径 (14.7) 現存高 4.8	L' 88 h グリッド。□ 縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はへら削り、内面はナデ。黒色。	B+D+P(細密) □30 环25 焼成：普

番号	器種	法量 cm	形 態 お よ び 手 法 の 特 徴	胎土・残存率%
67	杯	口 径 (12.0) 現存高 4.1	I' 89gグリッド。口縁部：内面ヘラナデの後、内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後、丁寧なナデ、内面は丁寧なナデ。赤褐色。	B+F+I+J □30 杯20 焼成：やや良
68	壺	底 径 ( 8.5) 現存高 6.0	J' 89gグリッド。胴部：外面はヘラ削りの後、粗いナデ、内面はヘラナデ。底部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+I+J 底50 焼成：普
69	杯	口 径 (18.1) 現存高 3.8	K' 89aグリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。茶褐色。	A+B+D+J □25 杯25 焼成：良
70	杯	口 径 (19.0) 現存高 5.4	K' 89aグリッド。外面はヘラ削りの後ヘラ磨き、内面はヘラ磨き。茶褐色。	A+B+J(細密) 焼成：やや良
71	高 杯	現存高 5.5	K' 89aグリッド。杯部～胴台部：外面はヘラ磨き、杯部内面はナデ。赤褐色。	B+J 焼成：やや良
72	須恵器 杯	口 径 12.0 底 径 5.9 現存高 4.2	K' 89グリッド。ロクロナデ。底部：回転永切り離し。灰色。	A+C 底100 焼成：普
73	壺	底 径 6.7 現存高 7.4	L' 89fグリッド。器面は摩滅している。胴部：外面はヘラ磨き、内面はナデ。底部：内外面ともナデ。橙色。	B+H+J 底55 胴下35 焼成：普
74	壺	口 径 11.8 現存高 5.2	L' 89hグリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+E+F+J □25 焼成：普
75	壺	口 径 (12.8) 現存高 6.4	L' 89iグリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はナデ、内面は指頭による押捺とナデ。橙色。	A+B+E+J □35 焼成：普
76	壺	胴 径 19.4 底 径 7.0 現存高 15.5	L' 89iグリッド。胴部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。底部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色 (一部黒色)	A+B+H+J 胴80 底100 焼成：良
77	瓶	底 径 ( 9.6) 現存高 10.8	L' 89iグリッド。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。褐色 (一部黒色)。	A+B+D+F+I+J 胴下位30 底25 焼成：普

グリッド出土遺物 (第464・465・466・467・468・469回)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
78	杯	口径 12.0 現存高 3.2	M' 89 f グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	B+D □75 焼成：普
79	杯	口径 (13.0) 現存高 5.8	M' 89 f グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後、底部付近を除いて粗いナデ、内面はナデ。明褐色。	B+I+J □10 杯50 焼成：普
80	壺	口径 (17.0) 胴径 (17.0) 現存高 11.4	M' 89 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部上半：外面はヘラ削りの後、粗いナデ、内面はナデ。褐色。	B+D+小礫 (多) □25 胴上半25 焼成：普
81	高杯	口径 (19.8) 現存高 5.0	J' 90 b グリッド。口縁部内面に輪痕を残す。口縁部：外面はヘラナデの後ナデか、内面は指頭による押捺。杯部：内外面ともナデ。褐色。	A+B+E+J □20 杯5 焼成：普
82	脚台	現存高 3.6	J' 90 c グリッド。外面はヘラ磨きか、底部：内面はナデか。脚台部：内面はナデか。褐色。	A+B+J 脚75 焼成：普
83	壺	口径 (22.8) 胴径 22.0 現存高 14.4	J' 90 i グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面は丁寧なナデ。外部黒褐色、内部黄褐色。	A+B+E+H+J □50 胴60 焼成：やや良
84	杯	口径 (11.6) 現存高 4.0	J' 90 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+G+J □15 杯20 焼成：良
85	杯	口径 (15.5) 現存高 4.4	K' 90 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+I+J □15 杯15 焼成：普
86	壺	現存高 11.9 底径 11.2	K' 90 グリッド。胴部：内外面ともヘラナデとナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。赤褐色 (一部黒色)。	A+B+I+J 胴下25 底100 焼成：良
87	壺	口径 (18.0) 現存高 17.3 胴径 (15.5)	K' 90 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。褐色。	A+B+E+J □20 胴上半25 焼成：普
88	壺	底径 (5.0) 現存高 10.2	K' 85 グリッド。胴部～底部：外面はヘラ削り、内面はナデ。褐色。	A+B+F+J 底30 胴上半25 焼成：普
89	杯	口径 10.8 器高 2.9	K' 90 c グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。杯部外面にスス付着。赤褐色 (一部黒色)。	A+B+E+I+J 杯100 焼成：やや良
90	杯	口径 (12.4)	K' 90 b グリッド。器面は摩滅している。口縁部：内外面とも	B+E+I+J

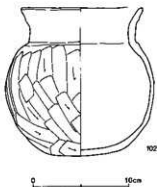
		器高 3.2	横ナデ。环部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデか。褐色。	□25 环35 焼成：普
91	壺	胴径 (25.8) 底径 8.2 現存高 24.6	K' 90b グリッド。胴部：外面はハケ目、内面下位はハケ目、上中位はヘラナデ。底部：外面はナデ、内面はヘラナデ。赤褐色（一部黒褐色）。	A+B+C+H+J 底85 胴35 焼成：普
92	高 杯	口径 (24.4) 現存高 5.8	K' 92a グリッド。器面は荒れている。内外面ともヘラ磨き。茶褐色。	A+B+J 环40 焼成：普
93	高 杯	脚台径 (6.5) 現存高 4.2	L' 90g グリッド。内外面ともナデ。褐色。	A+B+J 脚35 焼成：普
94	壺	口径 (20.5) 胴径 (20.8) 底径 7.4 現存高 6.8	J' 91c グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はヘラナデ。底部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。褐色。	B+D+I(多)+J □10 胴30 底100 焼成：やや良
95	杯	口径 (12.3) 現存高 3.4	K' 91 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色（一部黒色）。	B+I+J 焼成：普
96	須恵器 杯	底径 (5.2) 現存高 2.2	K' 92a グリッド。やや上げ底を呈す。ロクロ成形。底部：回転糸切り難し。灰褐色。	D+J 底10 焼成：普
97	須恵器 杯	底径 6.8 現存高 2.3 高台径 6.7 高台高 0.5	K' 92a グリッド。器面は摩滅している。全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転糸切りの後付高台。灰黄色。	底70 焼成：不良
98	杯	口径 12.0 器高 4.1	K' 92b グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。赤褐色。	A+B+E+I(多)+J 环100 焼成：良
99	杯	口径 11.8 器高 3.5	K' 92i グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデの後ナデ。赤褐色。	A+B+I(多)+J ほぼ完形 焼成：良
100	杯	口径 (11.8) 現存高 3.2	覆土。口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削りの後粗いナデ、内面はナデ。褐色。	A+B+E+J(細密) □20 环20 焼成：やや良
101	杯	口径 (12.8) 現存高 4.0	L' 97 グリッド。口縁部：内外面とも横ナデ。环部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色。	A+B □35 焼成：普

右に掲載した甕（第469図102）は、調査過程において、住居跡と判断した範囲内から検出された、ほぼ完形の遺物である。

しかし調査の進展にともない、住居跡とするには根拠に乏しく、住居跡以外の遺構として推定するについても同様の状況となった。

そのため、非常に残念ながら、本遺物についてはグリッド出土遺跡として扱わざるを得ないこととなってしまった。

なお、出土したのはJ' 66グリッド内である。



第469図 グリッド出土遺物(7)

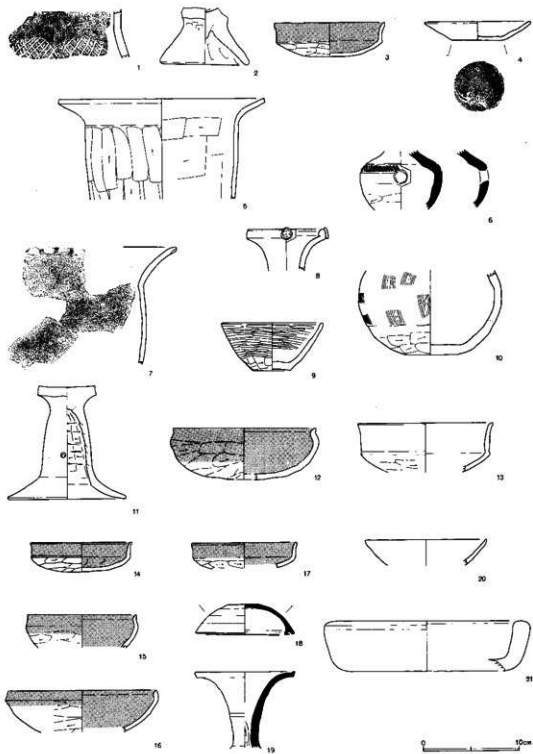
グリッド一括出土遺物 (第469図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
102	甕	口径 12.5 胴径 15.4 底径 7.2 器高 15.4	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部～底部：外面はヘラ削り、内面はナデ。外面にスス付着。黒褐色。	A+B+E+F+I ほぼ完形 焼成：やや良

表面採集遺物 (第470図)

番号	器種	法量 cm	形態および手法の特徴	胎土・残存率%等
1	甕	現存高 5.0	外面はヘラ状工具で左下りの斜線を施した後、右下りの線文を行う。内面はナデ。黒褐色。	A+B+E+F 焼成：普
2	脚台	脚台径 9.3 現存高 5.9	器面は摩滅している。底部：内面はヘラナデ。脚台部：外面はヘラナデの後ナデか、内面はヘラナデ。橙色。	A+B+D+F+I+J 脚90焼成：やや良
3	杯	口径 (11.4) 器高 3.5	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色。	A+B+I □25 杯30 焼成：普
4	杯	口径 10.6 底径 5.2 器高 2.0	全面：ロクロナデ。ロクロ右回転。底部：回転急切り難し。橙色。	A+B+E+J 完形 焼成：普
5	甕	口径 (21.3) 現存高 10.6	口縁部：内外面とも横ナデ。胴部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。橙色。	A+B+E+J □25 胴上位30 焼成：やや良
6	須恵器 罌	胴径 (8.5) 現存高 6.1	体部：外面上半はナデ、下半はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。灰色。	B+H+J 胴40 焼成：普
7	甕	現存高 12.2	口唇部：指頭による交互押捺。内外面ともハケ目の後ナデか。褐色（一部黒色）。	A+D+H+J □10 焼成：普





第470图 表面採集遺物

8	壺	口 径 ( 7.8) 現存高 4.4	円形乳文は1個のみ遺存。口縁部：内外面とも横ナデ。 胴部：内外面ともナデ。茶褐色。	A+B+F+I+J □25 頸20 焼成：良
9	碗	口 径 10.5 底 径 4.0 器 高 5.0	体部：外面上半はヘラ磨き、下半はヘラ削り、内面上半はヘラ磨き、下半はナデ。底部：内外面ともナデ。黄褐色。	A+B+B+J □70 底100 焼成：やや良
10	壺	胴 径 (15.0) 底 径 5.4 現存高 8.8	胴部：外面上位～中位はハケ目の後ナデ。下位はヘラ削り、内面はナデ。底部：内外面ともナデ。茶褐色。	B+B+F+J 底95 焼成：普
11	高 杯	現存高 11.8	器面は摩滅している。柱状部：外面はナデか、内面は粗いヘラナデ。裾部：内外面とも粗い横ナデか。柱状部に孔径4mmの穿孔(1つ)。橙色。	柱状100 裾20 焼成：普
12	杯	口 径 (14.8) 現存高 5.4	口縁部：内外面とも横ナデ。体部：外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ。赤彩。	A+B+J(細密) □20 体25 焼成：やや良
13	杯	口 径 (14.0) 現存高 5.2	器面は摩滅している。口縁部：内外面とも横ナデか。杯部：外面はヘラ削りか、内面はナデか。明黄褐色(内部黒色)。	A+B+I+J □20 杯15 焼成：普
14	杯	口 径 10.6 器 高 3.1	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はヘラナデの後ナデ。赤褐色。	A+B+J(細密) □75 杯90 焼成：良
15	杯	口 径 (11.4) 現存高 3.4	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色。	A+B+I □40 杯20焼成：やや良
16	杯	口 径 (15.4) 現存高 4.3	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色(一部黒色)。	A+B+F+H □15 杯15 焼成：普
17	杯	口 径 (10.0) 現存高 2.7	口縁部：内外面とも横ナデ。杯部：外面はヘラ削り、内面はナデ。茶褐色	A+B+J □・杯20 焼成：やや良
18	須恵器 蓋	口 径 8.3 蓋 径 10.5 器 高 3.2	天井部：ヘラ削り。ロクロナデ。灰色。	蓋95 焼成：普
19	須恵器 罌	口 径 (10.5) 現存高 8.0	ロクロナデ。黒灰色。	B+I □15 頸65 焼成：普
20	陶 器 碗	口 径 (12.8) 現存高 2.7	内部は緑黄色、外部は灰色。	□・杯15 焼成：良
21	焙 焼	口 径 (21.0) 現存高 5.2	外面に鉄製品断片付着。赤褐色。	B+F □30 焼成：普

(5) 鉄製品 (第472図1~6)

大西遺跡において検出された鉄製品は6点である。確認されたのは遺構内・遺構外、または包含層中などさまざまであるが、ここに一括して図化をした。いずれも断片的な残存で、錆化も著しいことなどから用途を推し図ることはきわめて困難であり、想像の域を出ない。

1は、E' 73gGrid内の包含層において確認された。釘か。錆化著しい。一方は錆膨れしているが、他方は、断面が方形を呈しつつ窄まっていくと考えられ、下端を欠損する。現存長9.3cm、幅1.0cm。

2は、K' 90eGrid内のビット中より出土した。錆化著しく両端を欠損する。釘の途中部分か。現存長5.1cm、幅0.5cm。

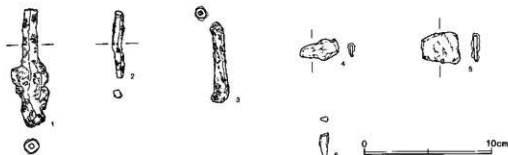
3は、E' 73dGrid内の包含層において確認された。下端部を欠く。欠損面を除いて全面を錆に覆われているが、断面方形を呈する釘と思われる。現存長6.2cm、幅0.6cm。

4・5はL' 89eGrid内のSJ41中より出土した。ともに錆化著しく、原形は大きく失われている。

4は、関部と基部の一部を残す刀子と思われる。平棟の両関造りか。現存長3.0cm。最大幅部分で、茎幅1.1cm、厚さ0.5cm、刃幅1.6cm、棟幅0.5cmが残存。

5は、図上における両端と下面を欠損する。最大幅部分で刃幅2.5cm、棟幅0.3cmを測る平棟造りの刀子の刃部か。現存長3.0cm。

6は、用途不明。4と同様、刀子の関部と基部の一部か。現存長1.7cm、幅0.4cm。



第471図 鉄製品

## (6) 瓦

代正寺遺跡と大西遺跡とは緩やかな谷によって隔てられており、出土した瓦のほとんどはこの周辺の表層から採集されたものである。詳細な出土地点は大西遺跡内の方が多いが、本節で一括して掲載した。

検出されたのは小破片が大半であり、その内の丸瓦と判断されるものすべてと、平瓦は端部と側縁を残すものについてのみ図示した。36点の瓦の内訳は軒丸瓦2点、丸瓦8点、平瓦26点である。3の丸瓦を除いてはすべて破片であり、接合資料はなかった。

1は代正寺遺跡第3号溝跡より検出された軒丸瓦当部の破片である。瓦当の径は推定18.2cmで、全周の約45°が残存する。24弁の単弁蓮華文である。外縁は欠損する。破損部分の状態から、厚さ1.2cmほどの、やや外周を高めた円板状の瓦当面に、別に形作った文様部分を貼り合わせ、蓮華の周囲を刻み込んで肉厚な蓮弁を作出し、さらに外縁部を巡らせる製作工程が観察される。火熱を受けて赤変し、文様部分は煤が濃く付着している。

2は三巴文の瓦当面の破片である。巴文頭部の剥離痕が見られる。尾部は細く長く延び、外区には0.9cm～1.2cmの間隔で径5mmの珠文が巡らされている。成形は1と同様、偏平な瓦当面に文様部分を貼り合わせたもので、文様と外縁部は一体で型抜きされている。

3は完形の丸瓦である。瓦尻部はやや厚く作られ、玉縁部との接点は内側に削ぎ込まれて上方の頭部を受ける形になっている。側縁は面を取った後になでられて丸みを帯び、頭部内面は幅広く緩やかな面取りが施される。内面に布目を残し、外面は縄目をすり消しており、中央部に僅かに痕跡を残している。

他の丸瓦も3とほぼ同様の作りである。9の頭部内面の面取りは幅が狭く鋭角的である。整形は外面に縄目を残すものが3点あり、6は内面の布目をすり消している。

11～36は平瓦である。18は唯一両側縁を残す広端部である。尻幅は24.8cm、谷の深さは約3.8cmを測る。側縁末端に僅かに面取りが施される。凸面は縄目、凹面は布目をすり消している。

その他の平瓦の整形は、側縁の面取りを施すものと切り離しのままのもの、凹凸面をすり消すものとしなないものがある。すり消しについては、弱くなるものと、細い篋状の工具で瓦の縦方向または斜位に削り取るものがある。また、やや幅の広い工具によって横方向に整形して、刷毛目様の整形痕をそのまま残す例があり、凸面ではその上に縄目を施すため、器面は細かい格子目状となっている。

28の凹面には刻印が認められる。文字は不明である。また、29では縦の破損面に28の刻印の縁に類似する切り込みが認められる。その位置や形状、瓦の整形方法などもほぼ同じであるので、おそらく刻印と思われる。

その他、出土地点、計測値等は以下の一覧表に示した。

## 6 大西遺跡についての小結

以上、大西遺跡において検出された遺構と遺物について、報告を行ってきた。代正寺遺跡の場合と同様に、大西遺跡に関しても時期ごとに、ごく簡単なまとめをしておきたいと思う。そしてその後、代正寺遺跡・大西遺跡を合わせた総括をしたい。

先土器時代：今回の調査では、この時期にともなう遺物は確認されなかった。代正寺遺跡との間に存在する谷に面した支台の北東端近辺（J区）や、南端部近辺（K・L区）においても検出されていない。しかしK・L区の南側は、台地の南端部が切り通しや攪乱・現道のため台地縁辺部からやや奥まった位置に当たっている。今後、周辺地域の調査をすれば、既期の遺物が出土する可能性は十分に考えられよう。

縄文時代：今回の調査で、前・中・後期の土器片が検出された。遺構については確認されていないが、既期の集落の存在が想定される。また、谷を挟んで対峙する代正寺遺跡の斜面部では、1軒ではあるが前期の住居跡が検出されており、また地点は異なるが、中期・後期の土器片も出土している。これらとの関連からも、大西遺跡での縄文時代集落の存在は想定されてよからう。

弥生時代：現状において、大西遺跡に集落が活発化するのとは中期後半以降といえる。その痕跡としては、住居跡や壘形墓・土壇等の遺構として認められる。高坂台地で、これまで知られていた弥生時代の遺跡としては、杉の木遺跡や、諏訪山古墳群の調査で検出された住居跡（共に吉ヶ谷式）等があった。さらに下寺前遺跡では、吉ヶ谷式と岩鼻式が共に検出され、今回の調査によって代正寺遺跡・大西遺跡においても、両型式に加え宮の台式の土器が確認され、新たな知見となった。特に大西遺跡からは、宮の台式の土器による壘形墓が検出され、隣接する代正寺遺跡における方形周溝墓とのかかわり合いが重要な問題として挙げられる。この地域において、この時期の遺構は今後さらに増すことが推定される。

古墳時代：代正寺遺跡と同様に、弥生時代からさらに遺跡としての広がりを見せるといえる。大西遺跡で検出された既期の遺構としては、住居跡が大部分であり、この他には土壇が確認されたのにとどまる。しかし、同支台上に現存の古墳（東松山市No53遺跡）も覗られ、支群の別はあるものの、高坂古墳群が及んでいると推定され、これにともなう集落域のひろがりも推論せざるを得ない。

奈良・平安時代：今回調査した大西遺跡の範囲内では、密度はそれ程高くはないものの、集落の範囲が最も広がりを見せる時期であるといえよう。つまり、大黒部遺跡はいうまでもなく大西遺跡A区も含み、さらに谷を挟んで西側に位置する下寺前遺跡、そして東側に位置する代正寺遺跡の南部分までが一つの集落域としてとらえられる。そして、今後の調査範囲の拡大にともない、台地南側を中心として、さらに大規模に展開していた遺跡として把握されよう。

中近世：中世に確定し得る遺構はないものの、調査範囲の北寄りに位置するJ区から、この時期に含まれる瓦が検出されており、既期の遺構として、近在する香林寺との関わりを想定させる。これとはまた別に、小代氏館跡と直後の繋がりをもつ遺構・遺物は今回得られなかったが、位置的に観ても無関係とは考えにくい。さらに、近世に降ると、高坂台地のほぼ全面に集落域が拡大していったと解釈されるのである。

## 7. 大西遺跡新旧対照表 住居跡 (S J)

番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド
1	1	J	G' - 75 - i	35	47	K	K' - 87 - i
2	51	K	K' - 86 - b	36	25	K	J' - 88 - c
3	52	K	K' - 85 - h	37	26	K	J' - 88 - h
4	53	K	K' - 86 - h	38	70	K	I' - 88 - d
5	42	K	K' - 86 - g	39	64	K	M' - 89 - f
6	49	K	L' - 87 - c	40	67	K	M' - 90 - b
7	50	K	L' - 87 - f	41	14	K	L' - 89 - h
8	41	K	J' - 86 - h	42	16	K	K' - 89 - a
9	40	K	J' - 86 - b	43	17	K	K' - 89 - a
10	43	K	I' - 86 - b	44	22	K	J' - 89 - b
11	66	K	I' - 86 - i	45	72	K	J' - 89 - b
12	67	K	I' - 87 - c	46	20	K	J' - 89 - d
13	35	K	J' - 87 - a	47	21	K	J' - 89 - a
14	45	K	K' - 87 - c	48	18	K	J' - 89 - g
15	46	K	K' - 87 - c	49	62	K	J' - 89 - i
16	44	K	J' - 87 - a	50	19	K	J' - 89 - g
17	33	K	J' - 87 - f	51		K	J' - 89 - h
18	39	K	J' - 87 - c	52	2	K	L' - 90 - c
19	23	K	I' - 87 - a	53	63	K	J' - 90 - e
20	32. 37	K	I' - 87 - i	54		K	J' - 90 - b
21	48	K	M' - 87 - e	55	4	K	J' - 90 - d
22	39	K	M' - 87 - e	56	6	K	J' - 90 - e
23	68	K	I' - 87 - i	57	8	K	L' - 90 - d
24	69	K	I' - 87 - h	58	10	K	L' - 90 - h
25	36	K	J' - 87 - g	59	12	K	K' - 91 - b
26	30	K	J' - 88 - b	60	11	K	K' - 91 - b
27	31	K	L' - 88 - b	61	13	K	K' - 91 - f
28	29	K	K' - 88 - a	62	57	L	N' - 94 - b
29	38	K	L' - 87 - i	63	56	L	N' - 93 - h
30	24	K	L' - 88 - i	64	58	L	N' - 94 - d
31		K	K' - 88 - f	65	61	L	N' - 95 - b
32	27	K	J' - 88 - g	66	59	L	O' - 95 - c
33		K	K' - 88 - c	67	59	L	O' - 95 - c
34	28	K	K' - 87 - i				

溝 (SD)

井戸跡 (SE)

番号	旧番	区	グリッド	番号	旧番	区	グリッド
1		K	J' - 82 - f	1	1	K	K' - 91 - a
2	4	K	J' - 83 - h				
3	6	K	K' - 84 - i				
4	5	K	K' - 85 - c				
5	3	K	L' - 87 - e				
6		K	M' - 89 - c				

地下式坑

番号	旧番	区	グリッド	形状	規模 (長×短×深) cm	主軸方向	備考
1	SK7	K	J' - 90 - d	不整形	125 × 126 × 136	N	

## VII 付 編

### 代正寺・大西遺跡出土土器胎土分析

#### X線回折試験及び電子顕微鏡観察

#### 1 実験条件

##### 1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{mm}/\text{m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスバックリング装置で定着した。

##### 1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40Kv, Current : 30mA, ステップ角度 :  $0.02^\circ$ 、計数時間 : 0.5SEC

##### 1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35, 350, 750, 1500, 5000, の5段階で行い写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

#### 2 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示しており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)を $m/m$ 単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

## 2-1 組成分類

### 1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分類し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hbに三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo/(Mo+Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示すとおりである。

### 2) Mo-Ch, Mi-Hb 菱型ダイアグラム

第2図に示すように菱型ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Ch, の2成分が含まれない、c) Mi, Hb, の2成分が含まれない、の3例がある。

菱型ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo/(Mo+Ch) \times 100$ と計算し、Mi, Hb, Ch, も各々同様に計算し、記載する。

菱型ダイアグラム内にある1~7はMo, Mi, Hb, Ch, の4成分を含み、各辺はMo, Mi, Hb, Ch, のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

## 2-2 焼成ランク



焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランク I : ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランク II : ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランク III : ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランク IV : ガラスのみが生成し、原土 (素地土) の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランク V : 原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

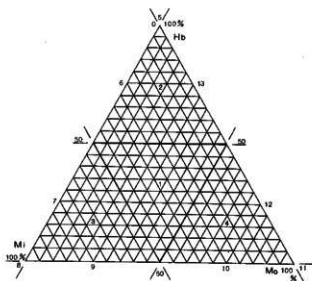
以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

## 2-3 タイプ分類

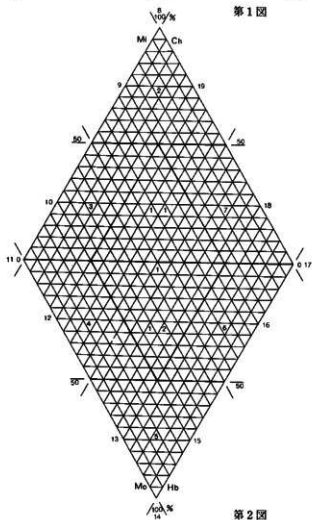
タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称与える考えであ



第 1 图



第 2 图

る。

### 3 実験結果

#### 3-1 タイプ分類

胎土分析に供した土器は代正寺遺跡より出土した岩鼻式土器6個と五領式土器2個(No1~6、22、23)、大西遺跡より出土した吉ヶ谷式土器10個(No7~16)、玉太岡遺跡より出土した吉ヶ谷式土器5個(No17~21)の合計23個である。

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第3図三角ダイアグラム、第4図菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA~Cの7タイプに分類された。

土器胎土のタイプで最も多いものはGタイプで10個、次いでDタイプの5個、Fタイプの3個、Bタイプの2個となり、他は各々1個ずつである。

電子顕微鏡による分析では土器胎土中に粗粒のガラスが生成している焼成ランクIIが3個、中〜粗粒のガラスが生成している焼成ランクII~IIIが3個、焼成ランクがIII~IVのものは2個、他のものは焼成ランクがIIIである。

次に各タイプについて述べる。

##### Aタイプ……代正寺-2

Mont. Mica. Hb. Chの4成分を含む。個体数は1個と少ない。

##### Bタイプ……代正寺-1、4

Mont. Mica. Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。個体数は2個と少ない。

##### Cタイプ……代正寺-24

Mont. Mica. Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。個体数は1個である。Bタイプとは組織的にはよく似ているが強度の相違により位置分類が異なっているものである。

##### Dタイプ……代正寺-5、大西-7、12、13、玉太岡-21

Hb1成分を含み、Mont. Mica. Chの3成分に欠ける。個体数は5個でGタイプについて多いタイプである。

##### Eタイプ……大西-11

Mica. Hb. Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。個体数は1個と少ない。

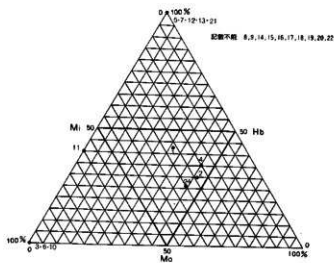
##### Fタイプ……代正寺-3、6、大西-10

Mica1成分を含み、Mont. Hb. Chの3成分に欠ける。個体数は3個である。

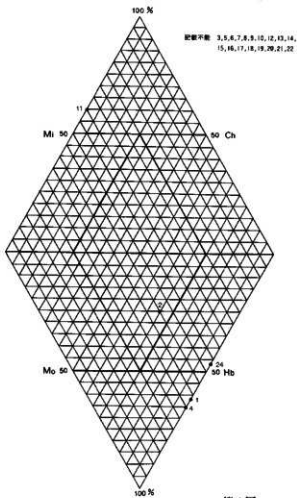
##### Gタイプ……代正寺-22、大西-8、9、14、15、16、

玉太岡-17、18、19、20

Mont. Mica. Hb. Chの4成分に欠ける。 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot 1\text{H}_2\text{O}$ (アルミナゲル)で構成される。個体数は10個と最も多い。このタイプは大西遺跡と玉太岡遺跡の土



第 3 図



第 4 図

器が主体で、吉ヶ谷式土器で構成されているのが特徴である。個体数の多いことから推察して、大西遺跡と玉太岡遺跡の在り地あるいは在地近傍の可能性が高い。

土器胎土の分析によるタイプ分類では雲母類 (Mica) と各閃石 (Hb) が検出され、モンモリロナイト (Mont) と緑泥石 (Hb) のどちらかがともに検出されるタイプは結晶片岩との関連が推察される。このようなタイプは代正寺遺跡の土器に多いタイプであり、大西遺跡と玉太岡遺跡の土器では大西-11の1個だけであることからすると、このようなタイプは代正寺の特徴と言えよう。

先にも触れたように大西遺跡と玉太岡遺跡の土器の胎土は角閃石 (Hb) を1成分含むDタイプと4成分を含まないGタイプで構成され、組成的には代正寺遺跡の土器とは異なるように見受けられる。

### 3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の個々の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個々の石英-斜長石比を有しているといえる。

この個々の比率を有する砂がどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する個々の技術の一端である。

第5図Qt-Pl相関図には代正寺遺跡、大西遺跡、玉太岡遺跡の土器が記載してある。図から明らかなように、土器はI~Vの5つのグループと“その他”に分類された。各グループの特徴について次に述べる。

#### Iグループ…代正寺-1、大西-9、12

石英は2800~3800、斜長石は850~1000の範囲にあり、個体数は3個で比較的集中度はいい。このグループは大西遺跡の高杯と壺で構成されるグループで、代正寺-1はBタイプで、明らかに組成が異なっており、砂の混合比が類似しているだけであるように見受けられる。

#### IIグループ…代正寺-2、3、4、6、大西-7、11、玉太岡-18

石英は3400~4200、斜長石は400~550の範囲にあり、個体数は7個と最も多く、集中度も高いのが特徴である。

このグループの特徴は代正寺遺跡の壺が集中し、大西遺跡の高杯と壺、玉太岡遺跡の高杯が混在する。このグループに属する胎土のタイプは統一性がなく、いろんなタイプが混在することで特徴付けられる。

#### IIIグループ…代正寺-22、玉太岡-18、20

石英は3000~3600、斜長石は200~300の範囲にあり、個体数は3個と少ないが集

中度はいい。器種的には高杯、壺、広口壺と統一性がないが、胎土はすべてGタイプであるのが特徴である。

#### IVグループ…代正寺-24、大西-10、15、16

石英は4400~5600、斜長石は150~400の範囲にあり、個体数は4個で、幾分多少傾向にある。器種的には壺で統一されているが胎土のタイプはC、F、Gの3タイプで構成される。このグループは大西遺跡の土器が主体となるものと推察される。

#### Vグループ…大西-13、玉太岡-21

石英は4400~5600、斜長石は500~700の範囲にあり、個体数は2個と少ない。器種は壺で、胎土はDタイプとすべて統一されているのが特徴である。

#### “その他”……代正寺-5、大西-8、14、玉太岡-17

大西-8は石英の強度が異常に高く、明らかに異質のように見受けられ、代正寺-5、大西-14、玉太岡-17は石英の強度が低いゾーンに分布するもので、大西-14と玉太岡-7はともに壺で、胎土もGタイプとよくにている。石英の強度が低いゾーンの3個の土器はいずれも焼成ランクがIIと高いことでの共通性が認められる。

以上の結果から全体の傾向を検討すると、各グループにおける特徴として代正寺遺跡の土器と大西遺跡の土器あるいは玉太岡遺跡の土器のいずれかと共存する傾向にあることがわかる。代正寺遺跡の特徴としては Mica, Hb を主体とし、Ch, Mont のいずれかを含む傾向が認められる。このことと各遺跡の土器が共存することを合せて検討すると、使用している胎土に問題があるのではなく、むしろ混入した砂に問題があるように見受けられる。すなわち、胎土としては同じか類似しているものを使用し、混入した砂の成分が異なった結果として、このような現象が発生したとなると、地域差は砂によって現わされるといえよう。このように考えてくると、代正寺遺跡と大西遺跡、玉太岡遺跡の各々の土器が各グループで混在するという事は、この3つの遺跡では明らかに高い関連性があるように見受けられる。

#### 4 まとめ

- 1) 代正寺遺跡、大西遺跡、玉太岡遺跡の各々の土器23個を分析し、A~Gの7タイプに分類された。このように多くのタイプに分類されたのは胎土そのものが異なっているというのではなく、むしろ胎土に混入した砂の成分の違いによって生じた現象ではなからうか。代正寺遺跡のように Mica, Hb を主体とし、Mont, Ch の2成分のうちのいずれかを含むタイプは結晶片岩系の砂を混入した結果として生じたものではなからうか。
- 2) 石英と斜長石の相関では、3遺跡の土器はI~Vの5つのグループと“その他”に分類された。I~IVの4つのグループは代正寺遺跡の土器と大西遺跡の土器、玉太岡遺跡の土器のいずれかあるいは両方と共存する傾向が認められた。胎土のタイプが異なりながら、このような現象が生じ

た原因が何にあるかという1)の項で述べたように混入した砂の成分が異なったためではなからうか。

- 3) “その他”における特徴としては、石英の強度が低いゾーンにある代正寺-5、大西-14、玉太岡-17はいずれも焼成ランクがIIと高いことである。また、大西-8は石英の強度が他と比較して異常に高いことが特徴となる。この4個の土器のうち代正寺遺跡の土器を除く3個はいずれも裏で、胎土はGタイプと共通している。このことから推察すると、これら3個の土器は搬入品と判断することは難しいように思われる。
- 4) 代正寺遺跡の土器は岩鼻式土器、大西遺跡と玉太岡遺跡の土器は吉ヶ谷式土器である。これらの土器は2)の項で述べたようにI～IVの4つのグループで共存しており、砂の混合比はよく似ているように見受けられる。代正寺遺跡の岩鼻式土器は結晶片岩系の砂を混入することによって特徴付けられるのではなからうか。大西遺跡と玉太岡遺跡の土器は胎土の組成もよく似ており、砂の混合比も類似することから推察して、近似関係にあるように見受けられる。代正寺遺跡の五領式土器2個のうち代正寺-22はIIIグループにおいて玉太岡遺跡の土器との関連性が予想され、代正寺-24はIVグループにおいて大西遺跡との関連性が予想される。

第1表 融土性試験

90. 代正寄選録

試料No	タイプ分類	構成ラック	組成分類			結度鉱物および遊晶鉱物							ガラス	備考				
			Mo-MI-Ib	Mo-Ch, Mo-Ib	Mo-Ib	Mont	Mica	Hb	Chi(Fe)	Ca(Mg)	Kaol	K-fels			Albite	Qz	Pl	Cr
代正寄-1	B	III	1	1.5		210	179	277										中粒 粗粒砂, 粘弾性粘土
2	A	III	1	1		234	124	154	102									中粒 粗粒砂, 粘弾性粘土
3	F	II~III	8	2.0				134										中~粗粒 中粒砂, 粘弾性粘土
4	B	III	1	1.5		341	145	267										中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
5	D	II~III	5	2.0				50										中~粗粒 粗粒砂, 粘弾性ローーム質粘
6	F	III	8	2.0				176										中粒 中~粗粒砂, 粘弾性ローーム
大西-7	D	III	5	2.0				92										中粒 細粒砂, 粘弾性粘土
8	G	II~III	1.4	2.0														中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
9	G	III~IV	1.4	2.0														中~粗粒 中粒砂, 粘弾性粘土
10	F	III	8	2.0														細粒 細粒砂, 粘弾性粘土
11	E	III	7	9		337	223	113	66									中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
12	D	III	5	2.0				91										中粒 細粒砂, 粘弾性粘土
13	D	III	5	2.0				87										中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
14	G	II	1.4	2.0														粗粒 粗粒砂, 粘弾性粘土
15	G	II	1.4	2.0														粗粒 粗粒砂, 粘弾性粘土
16	G	III	1.4	2.0														中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
玉太調-17	G	II	1.4	2.0														粗粒 中粒砂, 粘弾性粘土
18	G	III	1.4	2.0														中粒 中粒砂, 粘弾性ローーム質粘
19	G	III	1.4	2.0														中粒 中粒砂, 粘弾性ローーム質粘
20	G	III	1.4	2.0														中粒 中粒砂, 粘弾性ローーム質粘
代正寄-22	G	III	5	2.0				76										中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
23																		中粒 中粒砂, 粘弾性粘土
24	C	III~IV	1	1.6		190	128	115										細粒 中~粗粒砂, 粘弾性粘土



## VIII 結 語

### 1. 代正寺遺跡出土の円筒埴輪の編年的位置づけ

代正寺遺跡の調査において、第1・9・15号古墳跡の3基に埴輪の樹立が確認されている。なかでも、第9・15号古墳跡からは円筒埴輪、形象埴輪（人物・馬・器財など）の良好な資料が検出されている。

#### 1. 第15号古墳跡出土の円筒埴輪

埴輪の樹立が確認された第1・9・15号古墳跡のなかで、円筒埴輪の良好な資料が認められたのは第15号古墳跡で、第1号古墳跡では3個体、第9号古墳跡では1個体が図示したのみである。

第15号古墳跡は墳丘径約17mを測る円墳で、調査時には既に墳丘は消滅していた。周溝西側にブリッジをもち、埋葬施設は不明である。埴輪は原位置を留めるものではなく、ほとんどのものが周溝覆土中から出土している。円筒埴輪片は周溝の各所から出土していることから、墳丘を圍繞していたことが想定できる。しかし円筒埴輪・形象埴輪の破片の多くは、西側のブリッジから北側の周溝に集中して検出されており、圍繞された円筒埴輪列の間隔には疎密が存在していた可能性が高い。また埴輪片が集中して出土している地域の周溝底から、破損した円筒埴輪7個体が人為的に重ねられた状態で、横倒しになって検出されたことは注目される。覆土の堆積状態からは後世の擾乱によるものとは考えられない。調査当初は埴輪棺の可能性を考えて入念な精密を行ったが、土壌等の施設は認められなかった。またスカシ孔や口縁部、底部を塞いでいる状態の破片も存在しなかったことから、埴輪棺の可能性はないものといえる。追葬もしくは二次的な墓前祭祀の際に、破損していた円筒埴輪を一括して周溝内に処分したものと推測しておきたい。これは埴輪の複数回樹立と関連して興味深い資料である。

第15号古墳跡から出土した円筒埴輪は、二条突帯三段構成のものを基本としている。器形は底径よりも口径が大きい、ハの字形に開く形態をしているが、底部の縮小化はさほど進行していない。段間幅はごく僅かに第1段が長い。突帯の突出度は弱く、断面の形態はM字形である。スカシ孔は円形に統一されている。外面調整は一次のみのタテハケが施され、底部調整は行われていない。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。

#### 2. 代正寺遺跡出土の円筒埴輪の編年的位置づけ

代正寺遺跡から出土した円筒埴輪は、川西宏幸の円筒埴輪編年では第V期（6世紀代）に比定できる（1973、1978、1988）。川西編年第V期の段階は畿内地方はもとより、東北地方においても埴輪祭式が衰退している（今津1988）。しかし関東地方では、この時期に埴輪祭式が最も盛行していることから、関東地方は埴輪祭式の特異な地域として捉えることができる。さらに関東地方における埴輪祭式の受容には、広義の東山道ルートが伝播経路として大きな役割を担っていたものといえる。関東地方の受容期の埴輪祭式は複雑な様相を呈しており、埴輪祭式が畿内政権の影響のもとに成立したとするならば、畿内政権の重層的かつ複雑な政権構造を示すものとして捉えることができる。

(拙稿1991a)。このことから関東地方全域を一元的に捉えた編年作業は困難である。

埼玉県における円筒埴輪の編年作業は萩原恭一(1980)、若松良一(1982)、飯塚武司(1984)らによって行われている。いずれも川西編年第Ⅴ期の細分が中心となっている。萩原は長沖古墳群から出土した資料をもとに編年作業を行い、6世紀代を2期に分割している。若松は関東地方の埴輪の変遷を9期に分け、6世紀代を4段階に細分している。飯塚は埴輪生産の変遷を3期に分類し、その第Ⅲ期(6世紀代)を5段階に分けている。そして1985年に群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会の主催で行われた、第6回三県シンポジウム『埴輪の変遷—普遍性と地域性—』において、佐藤好司、若松良一、坂本和俊らが編年作業を行っている。佐藤は児玉地域、若松は比企地域(註1)、坂本は埼玉県全域を対象とし、6世紀代の編年を佐藤と坂本は2段階、若松は3段階に細分している。

若松編年・坂本編年では、代正寺遺跡第15号墳から出土した円筒埴輪は、その特徴から6世紀中葉の段階に相当する。6世紀中葉段階の円筒埴輪の特徴は、円形スカシ孔の統一化、突帯の低平化に加えて、色調が赤褐色系に統一され、低径の嬌小化が進行することである。第15号古墳跡から出土した円筒埴輪はこれらの要素をすべて満たしている。しかし底径の嬌小化がさほど進行していないことから、6世紀中葉段階でも前半期に時期を限定することができよう。

形象埴輪が出土している第9号古墳跡では、年代を求めることができるほどの円筒埴輪の資料には恵まれていない。出土した埴輪は総じて淡黄色を呈している。人物埴輪(巫女)は頭部や指の表現が写実的であり、初期の人物埴輪として捉えられる。色調や人物埴輪の特徴から、第15号古墳跡よりも古く位置づけることができ、積極的な根拠には乏しいが、6世紀前葉から中葉にかけての時期に相当するものと思われる。

第1号古墳跡から出土した円筒埴輪(朝顔形埴輪を含む)も、色調は淡黄色を呈している。このことから、第9号古墳跡と同様に第15号古墳跡よりも古く位置づけることができよう。

#### まとめ

代正寺遺跡の第1・9・15号古墳跡から出土した埴輪は、その特徴から第1・9号古墳跡が6世紀前葉から中葉、第15号古墳跡は6世紀中葉の前半に位置づけることができる。この時期に、さきたま古墳群では梅塚古墳・天王山古墳などの、埴輪が樹立されている小形円墳群が築造されている。これを契機として、さきたま周辺地域、比企地域などでは小形円墳にも埴輪祭式が採用されている(拙稿1991b)。

比企地域において本格的な埴輪祭式が受容された古墳は、5世紀後葉に比定される諏訪山33号墳(円墳、径29m)である。段間幅とほぼ同じ幅の工具によりB種ヨコハケが施されている。一方同時期に比定されている前方後円墳の東松山市天神山古墳には埴輪祭式は導入されていない。これら2古墳に若干遅れて、さきたま稲荷山古墳が築造されている。若松は、諏訪山33号墳の円筒埴輪の技法が畿内(河内)のものに類似し、陶器産の須恵器が伴出していることから、被葬者を「允恭朝に比企の地に置かれた徴徳のある刑部と関連」させ、「その地方的伴造であった可能性」を考えている。天神山古墳に後続する前方後円墳の東松山市おくま山古墳(62m、6世紀初頭)では、埴輪祭式が導入されているものの、その規模はさきたま首長墓の1/2程度である。その後、大形古墳は

6世紀中葉の大里村冨山古墳（円墳、92m）まで約半世紀の間、築造されていない。この間、代正寺遺跡東松山市諏訪山古墳群、古凍根半裏古墳群、吉見町久米田1号墳などの小形円墳が構築され、埴輪祭式が継承されている。注目されるのは、代正寺遺跡の円筒埴輪には、比企地域の土器の胎土の特徴とされる白色針状物質がみられないことで、別の地域で生産された埴輪が比企地域の小形円墳に樹立された可能性がある。さきたま地域の埴輪の胎土には、基本的には白色針状物質が含まれていない。また小形円墳に埴輪祭式が導入された時期が一致する。これらのことから比企地域における埴輪祭式の様相は、さきたま古墳群の動向と合わせて考えていく必要がある。（山本 靖）

註1 若松は『諏訪山33号墳の研究』のなかでこれに加筆し、「比企地方における埴輪の受容と展開—武蔵国の円筒埴輪編年を通して—」と題して武蔵地域の編年作業を行っている。

<参考文献>

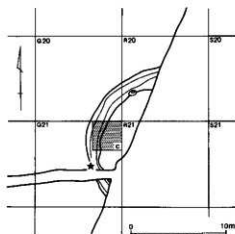
- 飯塚武司 1984 「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第9集 法政考古学会
- 今津節生 1988 「企画展 東国のはにわ」福島県立博物館
- 川西宏幸 1973 「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第4号 史学研究会  
1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会  
1988 「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』稿書房
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪の編年の諸問題」【第6回 三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—】北武蔵古代文化研究会ほか
- 佐藤好司 1985 「見玉地域における埴輪の様相」【第6回 三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—】北武蔵古代文化研究会ほか
- 萩原恭一 1980 「埴輪」『長沖古墳群』見玉町文化財調査報告書 第1集 見玉町教育委員会
- 山本 靖 1991 a 「関東地方における埴輪祭式の受容」『研究紀要』第8号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
1991 b 「利根川南岸地域の前方後円墳の展開」『専修考古学』久保哲三先生追悼号 専修大学考古学会
- 若松良一 1982 「東国円筒埴輪の編年的研究」（修論要旨）『法政大学大学院紀要』第8号  
1985 「比企地方の円筒埴輪」【第6回 三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—】北武蔵古代文化研究会ほか
- 若松良一・山川守男・金子彰男 1987 「諏訪山33号墳の研究」

## 2. 代正寺遺跡出土の形象埴輪について

代正寺遺跡の調査では合計16基の古墳跡が検出され、第1・9・15号古墳跡の3基に埴輪の樹立が確認された。そのうちの第9・15号古墳跡からは人物、馬、器財形埴輪などの多くの形象埴輪が出土し、6世紀前半における小規模円墳の埴輪祭式の実態が明らかにされている。

### 1. 第9号古墳跡出土の形象埴輪

第9号古墳跡からは西側周溝を中心に女子人物埴輪、胸繫に鈴をつけた馬形埴輪などが出土している(第1図)。形象埴輪の樹立状況については部分的な調査のため全容は不明であるが、西側周溝部分を中心に女子、飾り馬などが限定的に配置されていた可能性が高い。また出土位置が明らかでない点が惜しまれるが、擾乱土中に一括して廃棄された女子人物埴輪の半身像がほぼ完形に復元されている。この女子人物埴輪は顔面に赤彩を塗布し、巫女特有の祭服である意須比を身に纏い、壺を捧げ持った姿態を表現していることから巫女を表した女子像と推定される。頭部や指などの表現が写実的であり、淡褐色に焼き上げられた色調などの特徴から人物埴輪としては初期の作風を残す優品である。



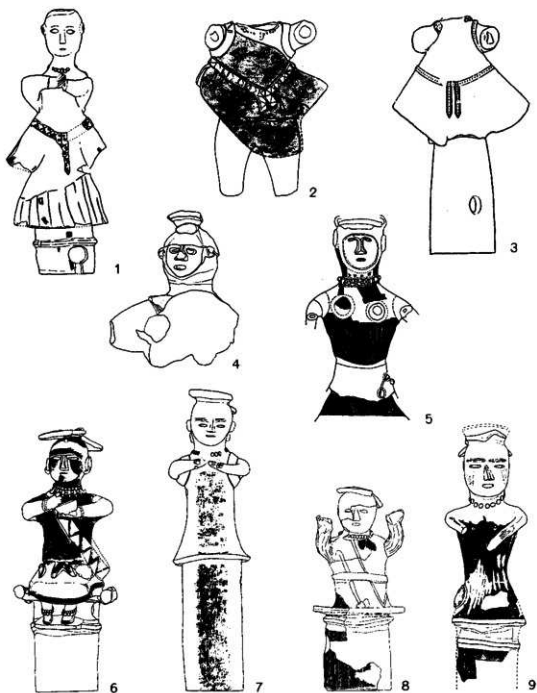
第1図 第9号古墳跡形象埴輪分布図  
(★印は巫女埴輪出土地点)

両手を前方に差し出し、酒を入れた壺や盃を捧げ持つ姿態を表した女子像は、宮城県台町103号墳(今津1988)、茨城県不二内古墳(斎藤・川上1974)、静岡県郷ヶ平6号墳(鈴木1985)など各地で出土しており、祭宴に参加した人々に酒を振る舞う巫女や内膳の女子を表した普遍的な表現である。巫女埴輪の最古例のひとつとされる5世紀後葉の大坂府番上山古墳からは、意須比を身に纏い褌掛けし腰に緩く腰帯を巻いた巫女像が4体出土している(野上1982)。いずれも両腕を欠失しているが基部の状況から両腕を前方に上げ杯、壺などを捧げ持つ姿態を表現していたものと考えられている。また褌掛けをした男頭と推定される男子像が共存していることから人物埴輪出現期から巫女や男頭などの祭人埴輪が埴輪祭式の中で重要な役割を担っていたことが推測される。TK47型式の須恵器を出土した京都府塩谷5号墳では墳丘裾部を巡る円筒埴輪列以外、わずかに2体の巫女埴輪が樹立されていただけで、形象埴輪を少数樹立する小規模古墳の場合、最小単位の人物埴輪の配置が巫女像に限られていたことを示す好例である(伊野1990)。さらに畿内における埴輪樹立古墳の中で最も新しく位置づけられる6世紀中葉の奈良県勢野茶臼山古墳から出土した女子像も意須比を纏った巫女を表しており、畿内では人物埴輪の出現から消滅に至るまで巫女埴輪は一貫した衣服や動作を一つの類型として厳格に順守していたことが指摘されている(伊達1966)。これは家、蓋、盾などの器財形埴輪を中心に盛行した畿内の埴輪文化の中で人物埴輪出現以降、巫女などの祭人埴輪が中核的な存在であったことを示唆している。

東国においても畿内での人物埴輪出現以後、わずかに遅れた5世紀後葉の福島県天王塚古墳から腕の表現のない意須比をつけた巫女と共に椀形埴輪が共存しており、初期の巫女埴輪の実態が明らかにされている(山崎1984)。5世紀末葉の宮城県台町103号墳からは、足を挙げ持つ女子像が典型的巫女の姿態として逸速く登場している。また関東でも初期人物埴輪を出土した埼玉県埼玉稲荷山古墳から鈴鏡を腰に吊した巫女(高藤・柳田1980)、群馬県保渡田八幡塚古墳から二重の頸飾りをつけ意須比を纏い前方に手を上げた巫女が出土している(福島1932)。つづく6世紀前半代の群馬県塚廻り3号墳からは椅子に腰掛けた巫女像が、同じく塚廻り4号墳からは意須比を身に纏い右手に頭椎大刀を持つ巫女像と杯を挙げ持った女子像が出土しており、首長権継承儀礼である誂と饗宴を表現したものと復元されている(橋本1980)。6世紀後葉に築造された円墳の群馬県富岡5号墳では、横穴式石室開口部右側に巫女4、武人2、農夫1、馬1が列状に配置され、巫女像は禪掛けをした御食持ちの女子として表現されている(外山1972)。また6世紀後葉の前方後円墳、群馬県綿貫観音山古墳では横穴式石室の開口部に正座する巫女と、これに対向して胡座する貴人が配置され、巫女の後には御食持ちの女子が続く。さらにこの二人の中心人物を見守るように「三人童女」と呼ばれる稚児巫女が置かれ、殯宮における首長権継承儀礼の場を表現したものと推定されている(若松1988)。このように6世紀代に人物埴輪を中心に爆発的に隆盛した東国の埴輪文化の中で巫女埴輪は、殯の場における「神人共食の儀礼」を表示する重要な役割を演じ、形象された人物の社会的地位や職掌によってさまざまな祭服や祭具を身に纏い、それぞれ多様な姿態を表現している。その多くが「静」的な表現を示す畿内の巫女像とは異なり、東国の巫女像は「動」的な表現を示すものが多いことが大きな特徴と言える(註1)。

次に県内における巫女埴輪の出土例としては、5世紀末葉の埼玉稲荷山古墳から出土した鈴鏡を腰に下げた巫女が刳現例と考えられる(註2)。6世紀代の例としては東松山市三千塚古墳群から出土した椅子に座り、袋状の意須比を身に纏い、腰に鈴鏡と通常の形の鏡を左右に下げた巫女の椅座像がある(若松1988)。同じく東松山市古凍根岸裏7号古墳跡からは円盤状の台部の上に両手を高く前方に持ち上げ、意須比を身に纏った巫女像が出土している(村田1984)。また岡部町白山12号墳からは足を挙げ持ち禪掛けした巫女(さきたま資料館1990)、鴻巣市生出土塚埴輪窯跡群からは鈴鏡を腰に下げ、両手を胸前においた巫女(鴻巣市1989)などが出土している。

これらのうち埼玉稲荷山古墳、三千塚古墳群、生出土塚埴輪窯跡群出土例の3例に鈴鏡を腰に下げた表現がみられ注目される。同じ様に鈴鏡を腰に下げた表現は福島県神谷作101号墳出土の盛装女子像(今津1988)、群馬県塚廻り3号墳の杯を持ち椅子に座る巫女像、群馬県古海出土の巫女椅座像(後藤1942)などが知られており、巫女の中でも中心的役割を果たす高貴な女性を表現したものが多く、鈴鏡は縁に付けられた鈴が楽器の役割を果たすことから、神祀りや舞いを職掌とする関東の巫女達に重用されていたのではないかと指摘されており(若松1988)、意須比などの祭服と同様に巫女を象徴的に表した祭具として意識され、死者の魂振りのために用いられたのであろう。他に東京国立博物館所蔵の深谷市上増田字西浦759出土品と東松山市柏崎字名所352出土品の中に巫女埴輪の破片が存在している(東京国立博物館1986)。前者は胸の前に両腕を上げて何かを挙げ持つ姿態をとる女子人物埴輪である。後者は足を挙げ持った手の破片である。また意須比を纏った女子像



第2図 巫女埴輪 (縮尺約1/10)

1 塩谷5号墳(京都)、2 野畑出土(大阪)、3 勢野茶臼山古墳(奈良)、4 天王塚古墳(福島)、5 稻荷山古墳(埼玉)、6 塚廻り3号墳(群馬)、7 富岡5号墳(群馬)、8 古凍根岸裏7号古墳跡(埼玉)、9 生出家埴輪窯跡群(埼玉)

が葛蒲町相間古墳群（塩野1977）、江南町野原古墳群（亀井1977）から出土している。

以上の検討から第9号古墳跡に示された埴輪祭式の性格は、壺を捧げ持つ女子人物埴輪が葬儀に参列した人々の穢れを払うために酒を奉仕する巫女を表現したものと考えられることから葬における祭宴の場面を象徴的に表したものと推定される。このような6世紀前半代の小規模円墳における人物埴輪を中心とした埴輪祭式の類型としては、近隣に位置する古凍根岸裏7号古墳跡でも確認されている。東側周溝の限定された範囲から巫女、女子、帽子を被る男子などの人物埴輪が出土しており、埴輪祭式の共通性が窺われる。なお、第9号古墳跡の築造時期については、相伴した円筒埴輪の検討から6世紀第2四半期前半に位置づけられる。

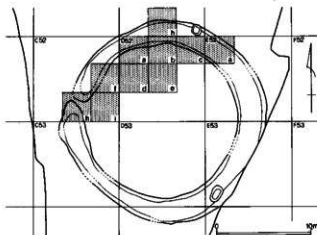
## 2. 第15号古墳跡出土の形象埴輪

第15号古墳跡は南東側周溝の一部が調査区域外にかかっている他はほぼ完掘され、西側周溝にブリッジ部をもつ墳丘径約17mの円墳であることが判明した。既に墳丘部分が削平されてしまっているため埋葬主体部の内容については不明である。埴輪の配列についても原位置をとどめるものが全くなく、ほとんどのものが周溝の覆土中に流れ込んだ状態で検出されている。

円筒埴輪は周溝の各所から出土しているが、その大半は西側のブリッジ部から北側周溝にかけて集中して出土している。全体に遺存状態が良好でないため断定はできないが、円筒埴輪列の樹立間隔に粗密が存在していた蓋然性が高い。おそらく北半部には密に、南半部にはややまばらに円筒埴輪が樹立されていたものと推定される。このような円筒埴輪列の樹立間隔の粗密は、ほぼ原位置の状態でも円筒埴輪列が検出された6世紀末の行田市酒巻14号墳でも確認されている（中島1988）。

形象埴輪は第3図に示したように西側周溝ブリッジ部から北東側周溝部分の限定された範囲内から出土した。しかし、円筒埴輪同様、周溝の覆土内から出土した破片が多く、原位置を示すものは全くなかった。また表土内や重複する溝跡から出土し、本来の樹立位置から二次的に大きく移動したものが含まれている。このように樹立位置を特定できるものがなく、必ずしも良好な資料とは言いがたいが、ここでは小破片であっても形象埴輪の種類や個体の復元可能なものを積極的に取り上げて形象埴輪の配置について復元を試みたい。

まず、3×3mの小グリッドごとに出土した形象埴輪の概要について説明する。ブリッジ部付近のC-52-hグリッドからは器形埴輪の膳部(18)、C-52-iグリッドからは馬形埴輪の脚部(30)が出土している。ブリッジ部北側のC-52-fグリッドからは人物埴輪の左腕(7)、女子人物埴輪の髻の元結(3)が出土している。墳丘北側のD-52-dグリッドか

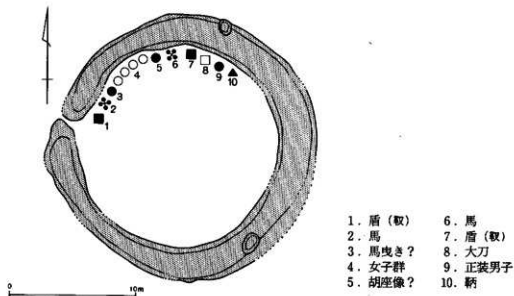


第3図 第15号古墳跡形象埴輪分布図

らは人物埴輪の頸部(6)、腕部(8)、胴部(9)、小型人物埴輪の左手(10)が出土し、他に大刀形埴輪の勾金(15)がある。D-52-eグリッドでは人物埴輪の鼻(5)、大刀形埴輪の勾金(14)、器財形埴輪の鱗部(17)が出土している。北西側周溝のD-52-aグリッドでは女子人物埴輪の髻(1)、小型人物埴輪の足(11・12)が出土し、北側周溝のD-52-bグリッドからは女子人物埴輪の鬘元結(2)、器財形埴輪の鱗部(16)、他に馬形埴輪の立髪(26)、脚部(31)、馬鈴(32~37)がまとまって出土した。さらに北東側周溝のD-52-cグリッドからは人物埴輪に付属する頭椎大刀(13)と鞍形埴輪(38)が出土し、鞍形埴輪の一部はE-52-aグリッドにも広がっていた。この他に表土内から男子人物埴輪の美豆良(4)、馬形埴輪(25・27~29)などが出土している。(第1分冊 第237~239図 参照)

これらがある程度出土位置の特定できたものである。いずれも断片的であり、本来樹立されていた位置、順序、構成、個体数などを復元することは難しい。しかし、原位置の分かるような良好な状態で検出される場合は稀であり、今後の方法論的な課題の一つとして原位置を離れて出土した破片資料を埴輪祭式復元のためにどのように活用していくかが重要な課題であると思われる(註3)。十分な資料操作とは言えないが、出土位置をもとにして形象埴輪の樹立位置を推定復元したものが第4図である。

出土した形象埴輪には人物、馬、大刀、鞍等が認められ、小規模な円墳としては数量、種類ともに比較的豊富な内容を提示している。ブリッジ部から出土した器財形埴輪(18)は、盾あるいは鞍と推定される鱗部の破片である。これは防鞆・防衛の機能を象徴化した武器・武具をブリッジ部に配置し、僻邪的な性格を表示したものと想定される。隣接する位置からは馬形埴輪の脚部片(30)が出土している。周匝から脚部以外の破片は出土していないが、この位置に馬形埴輪の配置を想定



第4図 第15号古墳跡形象埴輪配置推定復元図



しておきたい。また付近からは腕を前方に上げた姿を示す人物埴輪の胴部片(9)が出土していることから「馬曳き」が伴っていた可能性も考えられるが、断片的であり判断としない。

北西側周溝から北側周溝にかけて人物埴輪がまとまって出土した。確認された髻の数からみて女子像が少なくとも3~4体樹立されていたものと復元される。いずれも小破片のため人物の性格を示唆するような装身具、衣服、姿態などの判明するものは少ない。丸玉を二重につけた頸飾りを表現する頸部の破片(6)がみられ、その中に高貴な女性が含まれていたことが分かるほどである。注目されるものとしては小型の人物埴輪の手足の破片(10~12)が出土している。接合部分がないため明確ではないが、胎土、色調、整形などの特徴から同一個体の可能性の強いものである。どのような所作を表現したものは明らかではないが、足の表現などは埼玉古墳群の瓦塚古墳から出土した琴琴座像に類似していることから(若松1986)、胡座像あるいは椅子に腰掛けられた人物(中心的な人物か?)を表現していたものと想定される。これらの人物群がどのような配置構成をとっていたかは推測の域を出ないが、埴輪祭式の中で主要な場面を表現していたことは間違いないであろう。おそらく埴輪祭式の中で普遍的な祭宴の場面を表現していたのかも知れない。

この人物群の東側からは馬鈴を付けた飾り馬の破片(26・31~37)がまとまって出土しており、馬形埴輪の存在が考えられる。飾り馬の存在は儀式的な荘厳化と言った装飾的な効果を目的としたものと考えられる。その周囲からは盾あるいは鞍と推定される器財形埴輪(16)、大刀形埴輪の勾金破片(14・15)など防禦・防衛の機能を象徴する武器・武具が出土している。このうち大刀形埴輪は三輪玉を装着した玉纏大刀を模したものと想定される。実物の玉纏大刀は、実用性が低く儀仗刀として位置づけられていることからみて守護の性格の他に威儀具としての性格を兼ね備えていたものと推定される。また、これらの器財形埴輪に混じって人物埴輪に付属する頭椎大刀の破片(13)が出土している。この破片から大刀を佩用した正装男子像の存在が推定されるが、単体で樹立されていたのか、人物群を構成していたものであったのかは明確ではない。さらに、その東側には柄形埴輪(38)が樹立されていたことが出土状況から復元される。

以上、出土位置のある程度特定できたものを中心に配置と性格について復元を試みた。しかし、限定された資料のため本来の樹立位置、樹立順序、個体数などに関しては明確ではなく、必ずしもその全容を明らかにし得たとは言えない(註4)。形象埴輪配置の全体的な傾向としては、墳丘の北側に配置された複数の女子像と椅座像等からなる人物埴輪群を中心として、その両側に盾、鞍、大刀、鞍などの器財形埴輪と馬形埴輪が樹立された状況を想定することができる。

次に、出土した形象埴輪の形態、製作技法等を中心に類例との比較検討を行い、時期的な位置づけについて検討する。

人物埴輪については全容のわかるものではなく、わずかに女子人物埴輪の髻部、男子人物埴輪の美豆良、腕、足などの破片が数点確認されているに過ぎない。このうち腕や足の破片の断面部は、中空に形作られており、時期的な位置づけの検討材料となる。このような人物埴輪の腕にみられる中空式の製作技法は、若松良一氏の検討によれば棒状工具を利用して製作されたもので「木芯中空技法」と名づけられている(若松1986)。また中空式の製作技法は人物埴輪の初現期から6世紀の前葉頃まで存在した技法であり、中葉式の製作技法は6世紀中葉頃、新たに生まれた技法であると指摘

している。従って本古墳例も人物埴輪の製作技法としては古い要素をとどめるものと言えよう。

大刀形埴輪は三輪玉をつけた勾金の破片が2点出土しただけで把、鞘などの形態は不明である。三輪玉は勾金に対して直交して装着されたもので両耳部分を欠損している。剝離痕の観察から三つの粘土塊を貼り付けて製作されたもので、両耳部分と中央のくびれが明瞭であり比較的実物を忠実に模したものと想定される。

飯塚武司氏によれば関東の大刀形埴輪は、畿内より若干遅れた6世紀初頭に三輪玉を装着した玉纏大刀を忠実に模したものととして出現し、埴輪消滅期の7世紀初頭までその形を踏襲していることが大きな特徴であると指摘されている(飯塚1981)。また坂 靖氏は畿内地方では4世紀末の奈良県東大寺山古墳、5世紀中葉の大坂府大賀世2号墳から大刀形埴輪が出土しているが、東国で隆盛するいわゆる「消火器形」埴輪とは形態的に異なり、直接的な祖形になったとは考えられないことから、それらより後出する5世紀後葉の大坂府茶山1号墳出土の三輪玉を勾金に装着した大刀形埴輪や和歌山県天神山古墳、奈良県橿本高塚谷出土の三輪玉を装着した勾金の破片などが東国で盛行した玉纏大刀形埴輪の祖形になったと指摘している(坂1988)。

県内では、6世紀後半に築造された前方後円墳の行田市酒巻15号墳から三輪玉を勾金に装着した玉纏大刀を忠実に模した大刀形埴輪が出土している。横穴式石室開口部の東側に榎・鞘などの器財形埴輪と共にまとまって樹立されていた(中島1989)。6世紀末に位置づけられる円墳の花園町黒田17号墳の埴輪頂部から出土した大刀形埴輪は勾金部に三つの円形の粘土粒を貼り付けた形骸化した三輪玉の表現がみられる。同様に勾金に円形の粘土粒を二つ貼り付けて形骸化した三輪玉あるいは丸玉を表現をした例が熊谷市三ヶ尻林4号墳から出土している。鴻巣市生出家埴輪窯跡群、東松山市桜山埴輪窯跡群、嵐山町屋田5号墳などからは勾金に楕円形の粘土塊を縦位に貼り付けた飾玉の表現をもつ例が知られている。他に6世紀末の美里町塚本山1号墳から勾金に三輪玉の様に中央の大きな鈴の両脇に小さな鈴を付けた破片が出土しており注目される。三輪玉と鈴を折衷した形の静岡県飯塚古墳出土の銅製鈴付き三輪玉との関連性が窺われる。

このように本墳出土の大刀形埴輪は三輪玉を勾金に装着した玉纏大刀を表現したものと理解され、三輪玉の形態は実物を比較的忠実に表していることから古相を示すものと位置づけられる。

馬形埴輪は完形に復元されるものがなく、ほとんどが部分の破片である。頭部、胴部(鞍)、脚部、馬鈴などが出土している。個々の製作技法の詳細は事実報告に譲り、特に頭部と脚部の製作技法について説明する。

頭部製作技法の分かる25は、頭部と口先端部を欠損しているため頭部との接合関係及び口先端部の状態など頭部製作技法の分析視点として重要な部分の成形が不明である。頭部は粘土紐の積み上げによって先細りの円筒部を形作り、頬骨は粘土板を貼り付けて表現したもので内面に粘土紐痕が明瞭に残る。頭部の横断面形は偏平な隅丸台形に近いものと推定される。また目の上の膨らみなども写実的な表現である。脚部の製作技法は、円筒埴輪と同様に幅3~4cmの粘土帯を円筒状にして基部を作り、その上に粘土紐を巻き上げて成形された「粘土紐巻き上げ成形」である(註5)。

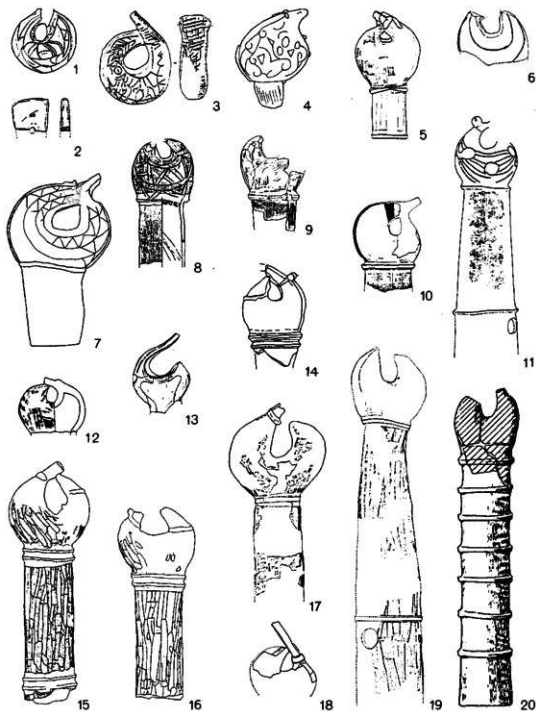
次に、馬装について検討する。25の頭部に装着された鏡板は、長楕円形の下端を弧形にくり込んだ空豆形をした楕円形鏡板付轡である。周縁に円形の粘土粒を貼り付けて鋳留を表現し、赤彩を施

す。この鏡板は、実物の馬具との検討から鉄板を切り抜いて作られた鉄製楕円形鏡板付轡を表現した可能性が強いものと思われる。鉄製楕円形鏡板付轡は、比較的簡素な造りから環状鏡板付轡成立以前の実用的な轡として半島から伝播し、5世紀末から6世紀前半にかけて盛行したものと考えられている。初現期の大阪府長持山古墳のような鉄地金銅張製のものはあまりなく、鉄板を切り抜いただけの比較的簡素な造りのものが多いのが特徴で、全国で40例ほどの類別が知られている（鹿野1987）。関 義則・宮代英一両氏の集成によれば県内で鉄製楕円形鏡板付轡を出土した古墳は、行田市大稻荷2号墳、川越市 どうまん 塚古墳・下小坂3号墳、東松山市諏訪山1号墳、朝霞市一夜塚古墳、児玉町長沖古墳群の6例が知られている（関・宮代1987）。全国的にみても奈良県、宮崎県、長野県などと並んで卓越した出土数を誇り、初期の実用的な馬具の配布を巡って特別な政治状況が想定されている。個体ごとの形態差が著しいことが特徴のひとつとも言われており、型式学的な変遷は明確にされていないが、終末段階（MT15～TK10型式段階）になると奈良県忍坂4号墳出土例にみられるような鏡板の大型化、周辺に鉄釘打ちした製品が出現し、実用性から離れた装飾的な馬具に変化すると指摘されている。このことから本古墳から出土した馬形埴輪は、楕円形鏡板付轡の終末段階の特徴を模したものと位置づけておきたい。また北武蔵地域の埴輪生産の展開を検討した飯塚武司氏の編年案では、北武蔵第Ⅲ期2段階とした6世紀第2四半期前半にはf字形鏡板と鉄留め表現する円形ないし楕円形の鏡板を装着した馬形埴輪が一般的であるが、3段階になるとf字形や鉄留め表現をする鏡板に素環の鏡板が新しく加わり、前二者は3段階で消滅し、4段階からは素環の鏡板のみの表現になるとしている。なお、3段階の実年代を6世紀第2四半期後半～6世紀第3四半期前半に比定している（飯塚1984）。このように本古墳例は飯塚氏の北武蔵第Ⅲ期3段階に概ね相当するものと思われる。

面繫の辻金具については、方形金具を四方に配した組み合わせ式十字形板状辻金具を類革に付けたものがある。同様の辻金具の表現は桜山4号窯跡出土の馬形埴輪（水村1982）にもみられ、埴輪の需給関係を探る手掛かりとなる。他には円形の飾り鉄を表現したものがある。

鞍に関しては全体の形状の判明する資料はないが、後輪垂直鞍を付けた胴から尻にかけての破片が出土している。この鞍には居木の表現はみられず、布ナブを施しただけで韃鞄の一部が残存する。後輪は櫛形を呈し、周縁部には赤彩が施され、尻繫は後輪から直接延びて鈴杏葉を装着する。鈴杏葉の本体部分は剣菱形とならず舌状の粘土紐に鈴を貼り付けた簡略化された五鈴杏葉を表現したものである。他には胸繫などに付けられた馬鈴が出土している。

最後に鞍形埴輪の時期的な位置づけについて類別を踏まえて検討しておきたい。鞍は半月形の袋状に作った革製品の内部に獣毛をつめたもので、弓をひく人の左の手頸にむすびつけ、矢をはなつたさいの弦の衝撃をふせぐために用いた弓具と言われている（小林1959）。実物としては正倉院御物の中に鹿革製黒塗りの鞍が今に伝えられている。鞍形埴輪に関する研究は、明治年間の八木英三郎氏の報告（八木1895・1899）、昭和初期の相川龍雄氏の研究（相川1931）などが代表的なものであるが、以後の研究はやや停滞し、個別に出土例が報告されているに過ぎなかった。近年、形象埴輪の編年的研究の機運の盛り上がりにより他の器財形埴輪との関連（高橋1988）や形態分類（坂1988）について検討が行われている。



第5図 轆形埴輪 (縮尺約1/10)

1・2 長瀬高浜遺跡 (鳥取)、3 背見山古墳 (和歌山)、4 恵下古墳 (群馬)、5 高山1号古墳 (群馬)、6 網4号墳 (栃木)、7 千ヶ窪古墳 (栃木)、8 箱崎古墳群 (埼玉)、9 お袖塚古墳 (千葉)、10 稲荷2号墳 (栃木)、11 富岡5号墳 (群馬)、12 五箇古墳 (栃木)、13 境林古墳 (栃木)、14 西原F-1号墳 (群馬)、15・16 酒巻15号墳 (埼玉)、17~19 生出塚埴輪窯跡群 (埼玉)、20 織姫神社境内古墳 (栃木)

管見に触れた鞍形埴輪の出土例は全国で50例ほど知られる。初現期の4世紀末から5世紀代にかけては主に畿内周辺から出土しているが、6世紀以降は東国を中心に出土例が知られ、その大半が群馬県(13例)、栃木県(10例)、埼玉県(9例)の北関東地方に集中して分布している。

従前の研究では4世紀末葉の三重県石山古墳から出土した鞍形埴輪が最古例として位置づけられているが、正式報告がないため詳細については不明である。後続する5世紀中葉前後の例としては鳥取県長瀬高浜遺跡(福岡1982)、京都府鴨谷東1号墳(京都府1990)、静岡県堂山古墳(静岡大学1989)などが知られる。いずれも鞍部に複雑な幾何学文様を線刻している。長瀬高浜遺跡例は円筒部の付かない鞍本体のみを表現した中実式のもので、鞍手部分に円孔をもち片面にのみ文様が描かれている。全体に平面的に作られていることから樹てののではなく直接置かれたものと推定されている(土井・根鈴1987)。他の2例は短い円筒部の付いた中空式のもので、堂山古墳例は直弧文を線刻したもとして著名である。また畿内周辺における最も新しい時期の例としては、6世紀初頭の和歌山県青見山古墳から出土した格子目文及び直弧文を思わせる幾何学文を線刻した円筒部の付かない形態のものがある(大野・大野1978)。

東国では6世紀初頭の群馬県恵下古墳から出土した短い円筒部の付く環状のものが初現期の例である(梅澤1981)。幾何学文を線刻し、背部に鈴を付け、縫い合わせ目の表現がみられる。つづく6世紀第2四半期の例として群馬県高山1号古墳(中沢1987)、栃木県千ヶ窪古墳(堀・屋代1967)、埼玉県井天塚古墳(金井塚1976)、千葉県お袖塚古墳(野中・溝口1979)など短い円筒部の付く形態のものが出土している。このうち千ヶ窪古墳例は三角文を線刻し、背部に突帯による縫い合わせ目の表現がみられる。6世紀第3四半期から6世紀末にかけて出土例が増加し、埼玉県広木大町古墳群のように一古墳群で最多の10個体の出土が確認されたものもある(小淵1980)。長大化した円筒部の付く形態が主体を占めている。鞍部に複雑な線刻文や彩色などを施す例は少なくなり、簡略化した文様を表現するものが多くなる。代表的なものとして背部及び鞍手に黒色の彩色を施した栃木県稲荷2号墳例(梁木1985)、背部に二条線を線刻し、縫い合わせ目を表現した群馬県西原F-1号墳例(小島1985)及び埼玉県酒巻15号墳例(中島1989)、円文を弧線で繋ぎ鞍手に鈴を付けた群馬県富岡5号墳例、弧線を線刻した栃木県網4号墳例(森田1981)などがある。さらに終末段階になるとハゲ目調整のみの無文のものが主体を占め、鞍手部分に結紐を表現しただけのものがみられる。この時期の例として群馬県白石二子山古墳(東京国立博物館1983)、埼玉県生田塚埴輪窯跡群、栃木県織姫神社境内古墳(後藤1937)、水道山山頂古墳(小山市立博物館1991)などの長大化した円筒部をもつものが知られる。このように鞍形埴輪は近畿地方において盾・蓋などの器形埴輪の出現にやや遅れた4世紀末に出現し、鞍本体のみを稀に埴輪で表現していたが、6世紀代になり他の武器・武具形埴輪と共に東国で急速に発展した様相が窺われる(坂1988)。

紙数の都合上細かな検討は別稿に譲るが、本古墳例は類例の少ない赤彩による幾何学文様を描いていること、円筒部があまり長くないこと、環状を呈し中空に形作られ形態、成形技法などの特徴から鞍形埴輪としては古相を示しており、6世紀前半代の所産と位置づけられる。

以上のように形象埴輪の検討から本古墳の築造時期については、6世紀第2四半期後半に位置づけておきたい。この年代観は円筒埴輪の分析から導かれた年代観とも概ね符合するものと思われる。

### 3. まとめ

これまで述べてきたように代正寺遺跡の2基の古墳跡から出土した形象埴輪の様相は、6世紀前半代の小規模円墳における埴輪祭式の性格を復元していく上で重要な問題点を提示している。

第9号古墳跡では限定された範囲内に女子、馬などの形象埴輪を配置した状況が窺われ、壘を維持し意須比を纏った巫女埴輪が重要な位置を占めている。破片資料からみて少なくとも2体の巫女像の樹立が想定される。

第9号古墳跡に後続して築造された第15号古墳跡では、人物、馬、大刀、柄などの豊富な形象埴輪が、西側に設置されたブリッジ部から周溝北側を中心に配置されていた状況が復元された。また第9号古墳跡と比較すると形象埴輪の数量、種類が大きく変容し、形象埴輪展開期の様相を示している。とりわけ大刀、柄、盾(馭)などの武器・武具を表象した器財形埴輪の主体的な存在が大きな特徴として注目される。

(大谷 徹)

### 註

- (1) 関根慶子氏は、畿内の女性人物埴輪は初現期から神の妻としての象徴的な面が強く意識されているが、東国などに伝播した時は伝承伝達者として、さまざまな姿態を表し葬送の場で一つの儀式やストーリーを表現する埴輪像に大きく変化していると指摘している(関根1990)。また畿内の巫女像は右肩から左脇にかけて幅広い布を纏った意須比を纏い、首から背にかけて神を掛け背で十字に廻し、腰紐はゆっくりと前で結んで垂らした様式的な表現を示しているのに対して、東国の巫女像は祭服の表現を省略したものと意須比の表現も装束のような簡略化されたものが多くパウエティーがみられる。
- (2) 最近、昭和48年に稲荷山古墳の西側中堤に設けられた盗り出し付近から出土した壘を両手で掛け持つ人物埴輪の腕の破片が紹介された(若松1991)。これによって関東地方における人物埴輪の出現期に遡って巫女特有の姿態を表現した女性埴輪が登場していたことが明らかとなった。
- (3) 埼玉県行田市瓦塚古墳(若松1986)、群馬県太田市成塚石塚遺跡(中山1991)などの報告書で形象埴輪群の意図的な配置復元が行われている。
- (4) 高橋克壽氏によれば、器財形埴輪は墳頂部に樹て並べられ被葬者の眠る墳頂の聖域を守護するために4世紀後半に誕生したが、葬送觀念や死生観の変容に伴い6世紀前半代には墳丘の低位置に樹立されるようになるとしている(高橋1988)。また橋本博文氏も関東地方の形象埴輪群配置の検討から同様の見解を指摘している(橋本1980)。本古墳の場合は原位置の判別するものがないため明確ではないが、大刀、柄などの器財形埴輪は人物や馬などの形象埴輪と共に樹立されていた可能性が高い。
- (5) 群馬県内出土の馬形埴輪を中心として製作技法を検討した稲村繁氏は、御師の成形技法には「粘土板円筒成形」と「粘土紐巻き上げ成形」の二者がみられるとしている(稲村1986)。県内では県北部の児玉地域に「粘土板円筒成形」によって作られた馬形埴輪が確認されているほか、鴻巣市生出塚埴輪窯跡群、及び生出塚埴輪窯跡から埴輪の供給を受けた騎西町小沼耕地1号墳などで「粘土板円筒成形」によって製作された馬形埴輪や動物埴輪が出土している(田中1991)。

### 引用・参考文献

- 相川龍雄 1931 「柄の埴輪 -埴輪の研究(10)-」『上毛及び上毛人』第183号  
飯塚武司 1981 「形象埴輪考」『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集  
飯塚武司 1984 「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第9集  
稲村 繁 1986 「群馬県における馬形埴輪の変遷 -上芝古墳出土品を中心として-」『MUSEUM』425号  
伊野近富 1990 「塚谷5号墳出土の人物埴輪」『京都府遺跡調査概報』第38冊  
今津館生 1988 「東国のはにわ」福島県立博物館  
梅澤重昭 1981 「恵下古墳」『群馬県史』資料編3  
大野嶺夫・大野左千夫 1978 「背見山古墳発掘調査概報」『古代学研究』85号  
小山市立博物館 1991 「飛び道具-狩猟弓から武器弓へ-

- 金井塚良一編 1976 『北武蔵考古学資料図鑑』
- 鹿野吉則 1987 『大和における馬具の権相—鉄製楯形円鏡板付轡を中心に—』『考古学と地域文化』
- 亀井正道 1977 『甕の埴輪出土の古墳とその遺物』『MUSEUM』310号
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990 『京都古代との出会い』
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史 資料編1考古』
- 小島純一 1985 『西原古墳群』群馬県勢多郡粕川村教育委員会
- 後藤守一 1937 『足利市彌生神社境内古墳発掘調査報告』
- 後藤守一 1942 『所謂製袋衣着用埴輪について』『日本古代文化研究』
- 小林行雄 1959 『とも 類』水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』東京創元社
- 小渡良樹 1980 『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告第40集
- 斎藤忠・川上博義 1974 『不二内古墳』『茨城県史料』考古資料編古墳時代
- 斎藤忠・柳田敏司 1980 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
- さきたま資料館 1990 『古墳の年代をはかる—須恵期—』展示解説書
- 塩野 博 1977 『埼玉県南埼玉郡葛西町下宿間所在天王山塚古墳について』『埼玉考古』第16号
- 静岡大学文学部考古学研究室 1989 『第17回 考古展 遠江地方の古墳文化の一様相』
- 鈴木敏則 1985 『静岡県形象埴輪』第17回埋蔵文化財研究会『形象埴輪の出土状況』資料編
- 高 義則・宮代英一 1987 『県内出土の古墳時代の馬具』『埼玉県立博物館紀要』第14号
- 関根久壽 1988 『藤付埴輪の編年と古墳祭祀』『史料』第71巻第2号
- 伊達宗泰 1966 『勢野茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊
- 田中正夫 1991 『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集
- 土井珠美・根鈴知津子 1987 『長瀬高沢遺跡の埴輪』『季刊考古学』第20号
- 東京国立博物館 1983 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編(関東II)
- 東京国立博物館 1986 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編(関東III)
- 外山和夫 1972 『富岡5号墳』群馬県立博物館研究報告第7集
- 中沢貞治 1978 『高山遺跡、天ヶ塚遺跡、天野沼遺跡、下書上遺跡』伊勢崎市教育委員会
- 中島洋一 1988 『酒巻古墳群』行田市文化財調査報告書第20集
- 中島洋一 1989 『酒巻15号墳・稲荷通遺跡』行田市文化財調査報告書第21集
- 中山茂樹 1991 『成塚石橋遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 野上丈助 1982 『大坂府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館
- 野中敬・溝口靖 1979 『お松塚古墳遺構確認調査報告』東洋大学考古学研究会発掘調査報告第2集
- 橋本博文 1980 『埴輪祭祀論』『家廻り古墳群』群馬県教育委員会
- 橋本夫・屋代方子 1967 『千ヶ窪古墳』
- 坂 靖 1988 『埴輪文化の特質とその意義』『福原考古学研究論集』第8
- 福島武雄 1932 『八幡塚古墳』『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』第2輯
- 福岡豊純 1982 『長瀬高沢遺跡発掘調査報告書IV(埴輪編)』鳥取県教育文化財団
- 関根照子 1990 『女性人物埴輪出現の背景』『神戸女子大紀要』24L巻(文学部篇)
- 水村季行 1982 『桜山塚群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集
- 村田健二 1984 『古東根岸裏』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集
- 森田久男 1981 『絹古墳群』『小山市史』史料編原始古代
- 八木英三郎 1895 『下野国下都賀郡羽生田ノ古墳』『東京人類学会雑誌』116号
- 八木英三郎 1899 『下野国河内郡長岡の古墳』『東京人類学会雑誌』155号
- 梁木 誠 1985 『稲荷古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第17集
- 山崎義夫 1984 『天王塚古墳』本宮町文化財調査報告書第8集
- 若松良一 1986 『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会
- 若松良一 1988 『はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館
- 若松良一 1991 『さきたまのヴィーナス』『さきたま』No.3 埼玉県立さきたま資料館

### 3 代正寺・大西遺跡の中期後半～後期前半の弥生土器について

はじめに

1 形態の分類

2 器面調整と文様

3 代正寺・大西遺跡の中期後半

～後期前半の弥生土器（素描）

おわりに

はじめに

代正寺遺跡と大西遺跡からは、弥生中期後半から後期前半にかけての土器が比較的多く検出されており、両遺跡の特色の一つとなっている。小稿ではごく大まかではあるが、二・三土器について検討をしておきたいと思う。

その具体的内容は、1として壺形土器・壺形土器・高坏形土器・甕形土器のまとまりのない分類、2として器面調整の種類と文様についての概観、3では当遺跡出土の既期の土器のうちから、代表例を取り挙げて、中期後半に含まれるものを二つに、後期前半については一まとめとして素描をし、図化してみた（第1～4図）。本文と各図から一目瞭然のように、これらについては充分な資料分析や検討を踏まえる余裕もなくおこなってしまったものである。

1～2の煩雑な工程と、3の粗雑な仮定は操作として連続するものではなく、まったく別個な作業の感すらある。結果的に、時期的な三分をした形にはいるが、各々の時期幅や時期差に関しては述べるだけの根拠が脆弱であり、それぞれを細分することも可能である。さらに、跨って位置すべきものもあろうし、まったくの検討違いによる例も想定される。極論するならば、中期後半の「新しい方」とか、「新しい方」までは降らずや「古い方」に近いとか、「後期前半」という程の認識で第1～4図が成っている、といえるものである。

またこの時期幅を対象とする以上、吉ヶ谷式の土器も当然含まれる訳であり、扱われるべき問題である。しかし、ここでは取り挙げるだけの準備と余裕もなく、割愛し機会を改めたいと思う。

ここで、表題について一言触れておきたい。当遺跡の、弥生時代中期の範疇にはいる遺物は宮の台式のものであり、これについては一口に「中期後半」と表現されることが多く、小稿もその例に倣った。代正寺・大西遺跡で確認された宮の台式土器は、「古い方」にまでは遡るものではなく、「中頃」～「新しい方」に属すと看做される。「小田原式」の存否の問題はおくとして、宮の台式の土器、即中期後半としてしまうのではなく、「古い方」がないのであるから「後期後葉」とすべきであったかも知れない。取りあえず、小稿では「中期後半」と表現することとした。

なお、表記の仕方については、SJは住居跡、SHは方形周溝墓、SDは溝、SKは土壇、STは古墳跡、壺棺は壺棺墓、表採は表面採集されたもの、グリッドはグリッド一括のもの、それ等に続く数値は遺構番号・遺物番号を示す。大西は大西遺跡の遺物を、それ以外については代正寺遺跡の遺物を意味する。また小文中には、時期を類推出来なかつた例や、分類から漏れているものも多数あり、きわめて厳密性に欠ける。素案として、敢えて私見を述べてみたいと思う。



## 1 形態の分類

ここでは、壺形土器・壺形土器・高環形土器・甔形土器に関しての分類をしてみたい。

### 壺形土器

壺形土器はバラエティーに富む。口唇部の形態・器面調整から次のように分けられる。

A類：口唇部に、木口状工具による刻み目を有するもの。

A1類：外面から端部に刻みを施すもの。SJ16-7、SJ44-1、SJ73-5、SH11-28・31、グリッド53

A2類：端部上面から刻みを施すもの。SJ11-1、SJ15-1、SJ73-2・3・4・6、SJ77-1・2、SJ80-1、SH4-1、SH6-12、ST10-3、大西 SJ41-1・2

B類：口唇部に、指頭による相互押捺を施すもの。

B1類：相互押捺をおこなっているが外面については指頭ではなく、親指の爪先で僅かに窪ませたもの。SH11-32

B2類：口縁部が指頭による相互押捺のため形状的に波打っているもの。SJ11-2、SJ41-3、SJ46-1・2、SJ80-2、SH10-8・9、SH11-29・30、ST15-24、グリッド21

C類：内面が二重の口縁となるもの。

C1類：口唇部は指頭による相互押捺を施すもの。SH3-4、大西壺棺1-2、SJ46-2

C2類：口唇部に縄文を施すもの。SJ44-2、ST4-11

C3類：口唇部外面に刻み目を施すもの。ST4-12

D類：外面が二重の口縁となるもの。SD14-4・6

E類：口唇部に縄文を施すもの。SJ19-1

F類：施文を行わないもの。SJ27-1・2、SJ73-1、SJ76-3

G類：口唇部にヘラ描きの施文を有するもの。表採1

H類：胴部に連弧文を有するもの。SH10-6

A1類は、刻み目を等間隔に全周させるのを基本とするが、SJ73-5については刻みを数個ずつの単位にして、間隔を空けつつ全周させると思われる。またA2類についてもSJ73-3・4において、同様な施文方法がおこなわれている。

A1類：器形と器面調整から、4種類に分けられる。

a：張りの弱い胴部から口縁が短くやや内側気味に開き、最大径を口径に有する。ハケ目はみられず簾状文を有する。SJ73-5

b：張りの弱い胴部から口縁が短く外反して開き、最大径を口径に有する。ハケ目はみられず文様ももたない。SH11-28

c：張りのない胴部から口縁は緩やかに外反して開き、最大径を口径に有する。調整はハケ目のみであり、文様はない。SJ16-7、SJ44-1、グリッド53

d：やや張りのあると思われる胴部から大きく外反して開く。最大径は胴径に有すると思われる。ハケ目の後ナデをおこない、文様はもたない。SH11-31

A2類は器形と器面調整から4種類に分けられる。

- a : 張りの弱い胴部から内灣気味に口縁が立ち上がり、口径と胴径は近い。器面調整はハケ目を基調とし一部ハケの後ナデをおこなうが、文様はもたないもの (SJ73-2・3、大西SJ41-2) と薫状文をもつもの (SJ73-4、SH6-12) がある。
- b : 張りの弱い胴部から口縁が短く外反して開き、ハケ目のみ (大西 SJ41-1) と、薫状文をもつもの (SJ11-1) がある。
- c : 張りの弱い胴部から口縁が緩やかに外反して開くもので、ハケ目のみと思われるもの (SJ80-1、SH4-1) と、文様をもつもの (薫状文+波状文 SJ73-6) がある。
- d : 張りをもった胴部から緩やかに口縁が外反し、最大径を胴径に有するもの。ハケ目のみのもの (SJ77-2) と、文様をもつもの (薫状文 SJ77-1) がある。

B1 類は、胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁は直線的に僅かに開く。最大径を口径に有する。

口唇部に平坦面をもち、容量の大きなもの。ハケ目のみであり文様はもたない。SH11-32

B2 類は、器形と器面調整から、6種類に分けられる。

- a : 上位に胴部最大径をもち、口縁は短く外反して開くもので、口径と胴径はほぼ等しい。文様はもたないが、ハケ目の後へラ磨きをおこなう。比較的小型である (SH10-9)。このほかに、口縁部を欠くが、器面調整にへラ磨きが入るものに SJ80-3 がある。
- b : 張りの弱い胴部から口縁が緩やかに外反して開くもの。ハケ目のみで文様はもたず、比較的小型である。SJ80-2、SH10-2
- c : 上位に胴部最大径をもち、口縁は内灣気味に短く開く。最大径を口径に有する。ハケ目のみのもの (SJ41-3) と、ハケ目の後ナデをおこなうもの (SJ46-1、ST15-24) があるが、共に文様はなく、比較的小型である。
- d : やや丸味をもった胴部から口縁は外反して開き、最大径を口径に有する。ハケ目の後ナデをおこなっていると思われるが、文様はなく比較的小型のもの。グリッド21
- e : 底部付近から口縁にかけて、ほぼ直線的に開く。ハケ目のみで文様はなく、小型である。SH11-31
- f : 張りをもった胴部から口縁部は外反して開き、最大径を胴径に有する。SH11-29

C1 類は、器形と器面調整から3種類に分けられる。

- a : 中位から上位にかけて丸味をもった胴部から、短い口縁が大きく外反する。ハケ目のみで文様はもたず、容量は大きい。大西壺棺 1-2
- b : 上位に張りをもった胴部から口縁は緩やかに外反し、全体的に長胴の印象を与える。ハケ目のみで文様はもたず、容量は大きい。SH3-4
- c : 張りの弱い胴部から、口縁部は直線的に開く。器面調整は、へラ削りの後粗い横ナデを施す。SJ46-2

C2 類は、形態と器面調整から2種類に分けられる。

- a : 張りのない胴部から口縁は短く外反し、口唇端部と内面に縄文を施す。ハケ目の後ナデをおこなうが文様はない、比較的小型のもの。ST4-11
- b : 張りの弱い胴部から長めの口縁は緩やかに外反し、口唇端部に縄文を施す。ハケ目のみで

- a: 張りの弱い胴部から内灣気味に口縁が立ち上がり、口径と胴径は近い。器面調整はハケ目を基調とし一部ハケの後ナデをおこなうが、文様はもたないもの (SJ73-2・3、大西SJ41-2) と薫状文をもつもの (SJ73-4、SH6-12) がある。
- b: 張りの弱い胴部から口縁が短く外反して開き、ハケ目のみ (大西 SJ41-1) と、薫状文をもつもの (SJ11-1) がある。
- c: 張りの弱い胴部から口縁が緩やかに外反して開くもので、ハケ目のみと思われるもの (SJ80-1、SH4-1) と、文様をもつもの (薫状文+波状文 SJ73-6) がある。
- d: 張りをもった胴部から緩やかに口縁が外反し、最大径を胴径に有するもの。ハケ目のみのもの (SJ77-2) と、文様をもつもの (薫状文 SJ77-1) がある。
- B 1 類は、胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁は直線的に僅かに開く。最大径を口径に有する。口唇部に平坦面をもち、容量の大きなもの。ハケ目のみであり文様はもたない。SH11-32**
- B 2 類は、器形と器面調整から、6 種類に分けられる。**
- a: 上位に胴部最大径をもち、口縁は短く外反して開くもので、口径と胴径はほぼ等しい。文様はもたないが、ハケ目の後ヘラ磨きをおこなう。比較的小型である (SH10-9)。このほかに、口縁部を欠くが、器面調整にヘラ磨きが入るものに SJ80-3 がある。
- b: 張りの弱い胴部から口縁が緩やかに外反して開くもの。ハケ目のみで文様はもたず、比較的小型である。SJ80-2、SH10-2
- c: 上位に胴部最大径をもち、口縁は内灣気味に短く開く。最大径を口径に有する。ハケ目のみのもの (SJ41-3) と、ハケ目の後ナデをおこなうもの (SJ46-1、ST15-24) があるが、共に文様はなく、比較的小型である。
- d: やや丸味をもった胴部から口縁は外反して開き、最大径を口径に有する。ハケ目の後ナデをおこなっていると思われるが、文様はなく比較的小型のもの。グリッド21
- e: 底部付近から口縁にかけて、ほぼ直線的に開く。ハケ目のみで文様はなく、小型である。SH11-31
- f: 張りをもった胴部から口縁部は外反して開き、最大径を胴径に有する。SH11-29
- C 1 類は、器形と器面調整から 3 種類に分けられる。**
- a: 中位から上位にかけて丸味をもった胴部から、短い口縁が大きく外反する。ハケ目のみで文様はもたず、容量は大きい。大西壺箱 1-2
- b: 上位に張りをもった胴部から口縁は緩やかに外反し、全体的に長胴の印象を与える。ハケ目のみで文様はもたず、容量は大きい。SH3-4
- c: 張りの弱い胴部から、口縁部は直線的に開く。器面調整は、ヘラ削りの後粗い横ナデを施す。SJ46-2
- C 2 類は、形態と器面調整から 2 種類に分けられる。**
- a: 張りのない胴部から口縁は短く外反し、口唇端部と内面に縄文を施す。ハケ目の後ナデをおこなうが文様はない、比較的小型のもの。ST4-11
- b: 張りの弱い胴部から長めの口縁は緩やかに外反し、口唇端部に縄文を施す。ハケ目のみで

文様はない。容量は大きい。SJ44-2

D類は、下膨れの胴部から僅かに外反して開き、小型のもの(SD14-2)と中型のもの(SD1-4-4)がある。共に外面はハケ目の後ナデをおこなうが、文様はない。後者では、内面にヘラ磨きを施している。

E類は、丸味を有する胴部から、口縁はやや内灣気味に大きく開く。SJ19-1

F類は、張りの弱い胴部から、内灣気味の口縁が僅かに開く。ハケ目のみで文様はない。SJ27-1・2、SJ73-1、SJ76-3

G類：口唇部に波状文・頸部に簾状文を有し、口縁は内灣しながら開く。表採1

H類は、張りのある胴部から、口縁は外反して開く。胴部には連弧文のみでなく円形浮文、頸部には簾状文を有する。SH10-6

### 壺形土器

壺形土器についても、甕形土器と同様にバラエティーに富む。口縁部の形態と器面調整から次のように分けられる。

A類：受け口状を呈するもの。いずれも小型である。

A1類：端部に粘土紐をのせ、複合状を呈するもの。頸部までは無文。SH11-1

A2類：口縁内外面に、櫛状工具による刺突を巡らせるもの。頸部～肩部に多様な文様が施される。SJ91-5

A3類：口唇部と口縁部外面に縄文を施すもの。頸部には4本単位の波状文が施される。SH13-1

B類：口縁の開きが弱く、直立に近いもの。器形は、球形に近い胴部からほぼ直立状に立ち上がるもので、ヘラ磨きがおこなわれるが無文。小型壺。SJ72-1、SH9-1

C類：口縁が緩く外反して開くもの。

C1類：口縁部や口唇部に施文のおこなわれないもの。ハケ目調整を基調とし、土器全体にも施文しない例が多いと思われるが、ナデ整形の後頸部にヘラで施文をおこなうもの(SH1-1-2)、ハケ目の後ヘラ磨きをし、肩部にクシ描きをおこなうもの(SJ16-6)、頸部に縄文を施すもの(SJ50-1)等があるが、いずれも小型である。

C2類：口縁部に縄文を施すもの。ハケ目のみの頸部以上は無文のもので、縄文を口唇に施文するもの(SH11-5)、口唇部と口縁内面に施文するもの(グリッド50)、口縁外面に施文するもの(グリッド51)、口唇部のほかに頸部と肩部に羽状縄文をおこなうもの(SJ7-9-2)、器面調整にヘラ磨きをおこない、頸部突帯・肩部羽縄文を施すもの(SH10-10)等がある。

D類：口縁がラッパ状に大きく開くもの。

D1類：口縁部や口唇部に施文のおこなわれないもの。SJ91-1、SH5-5、SH6-13、SH11-24

D2類：口唇部に刻み目をもつもの。SJ79-1、SJ81-3

D3類：口唇部に縄文を施すもの。SH9-2

D 4 類：口縁が内側に折り返されるもの。口縁外面に円形浮文と頸部に簾状文を施す、小型壺。

SH11-4

D 5 類：直線的に開く口縁にヘラ磨きをし、外面にヘラ描きの鋸歯文を施す。SH11-6

E 類：ラッパ状に開き、端部は短く直立するもの。大西表探 8、SJ43-2、SD45-18

E 1 類：縄文はなく、外面に円形浮文を 1 箇所貼付。大西表探 8

E 2 類：口縁外面のみに縄文を羽状におこなう。SD45-22

E 3 類：口縁外面と口唇部に縄文を施し、棒状の突起をもつ。SJ43-2

F 類：複合口縁を呈するもの。

F 1 類：口縁部は無文のもの。ともにヘラ磨きをおこない、頸部に簾状文を 2 段施す。SH4-6は丸味をもった胴部から口縁が大きく外反して開き、クシ描きの簾状文の下位にヘラ描きの鋸歯文と円形浮文をおこなう。SD14-5 は張りの強い胴部から、口縁が内灣気味に開く。

F 2 類：口縁部外面に縄文を施すもの。頸部はほぼ直立し、口縁は緩やかに外反して開く。頸部はヘラ磨きをし、肩部にも縄文を施す。

F 3 類：口縁外面にクシ描きの波状文をおこなう。ともに口縁は大きく外反するが、器面調整はナデのもの (SJ25-1) と、ヘラ磨きのもの (SJ76-2) がある。前者は小型壺である。

A 2 類は、なで肩から頸部がほぼ直立し、受け口状の口縁にいたる。

C 1 類は、器形から 2 種類に分けられる。

a：球形に近い胴部から、なで肩を呈しながら開き、肩部に櫛描き文をもつ。SJ16-6

b：肩部から頸部に移行する部分に膨らみを有し、縄文を施す。SJ50-1

C 2 類は、いずれも小型で、なで肩を呈すと思われる。

D 1 類は、器形と器面調整から 3 種類に分けられる。

a：球形の胴部から、口縁部は大きく外反して開く。ヘラ磨きをおこない、文様はもたない。

SH5-5

b：張りの強い胴部から、口縁部は大きく外反して開く。ハケ目調整と思われ、頸部に櫛描き文を有する。SH11-24

c：張りの強い胴部から、口縁部は大きく外反して開く。ヘラ磨きをおこない、頸部に簾状文と波状文をもつ。SH6-13

D 2 類は、器形と施文方法から 2 種類に分けられる。

a：口唇部に対して、直角方向に刺突状の刻み目をいれるもので、全周する。撫で形を呈し、文様は多彩で、施文範囲も広い。SJ79-1

b：外側方向から刻みをおこなうもので、部分的な施文。8 箇単位で一対か。SJ81-3

D 3 類は、器面調整は、内外面ともにナデか。SH9-2

D 4 類は、外面に円形浮文を 2 箇 1 単位で 4 箇所、計 8 箇所有し、頸部にヘラ描き横線文。

SH11-4

D5類は、器面調整は内外面ともにヘラ磨き。SH11-6

### 高坏形土器

高坏形土器は、概ね3種類に大別できよう。

A類：小型で坏部の浅いもの。坏部は内灣気味に開き、端部付近で屈曲して平坦面を有す。器面調整はヘラ磨きで、平坦面にはヘラ描きの山形文を施す。SK14-1

B類：大型で、坏部が深い。坏部は直線的もしくは内灣気味に開き、端部付近で屈曲して平坦面を有す。

B1類：器面調整はヘラ磨きを基調とし、口縁端部と外面に縄文を施す。SH13-10

また、SJ5-1、大西 SK44b-1 は口縁部を欠き、SJ22-1～3については坏と脚台との接合部であるが、本類の土器と考えられる。

B2類：器面調整は丁寧なナデを基調とし、短い口縁端部の外面に平坦面に刻みを施す。SJ73-11

C類：大型で、坏部が深い。坏部は内灣気味に開き、端部に棒状浮文を施す。

C1類：素口縁を呈す。SJ76-3

C2類：複合口縁を呈す。SD15-9

D類：大型で、坏部が深い。坏部は内灣気味に開き、素口縁。台付臺の肩上半以上を省いたような形態を呈する。SJ45-1

### 甔形土器

甔形土器は、SHという出土遺構から観て別の意味を推定することも出来る。しかし、ここでは底部が有孔であることから、甔形土器として扱っておきたい。器種的に2分できる。

A類：体部は、直線的もしくは内灣気味器形的に開き、端部付近で屈曲する。形態的に、B類高坏に類似する。器面調整は、ハケ目の後丁寧なナデ。底部は焼成前の穿孔（SJ41-2）。体部のみ残存ではあるが、形態や成形から観て、SJ41-1も本類の甔形土器であると考えられよう。

B類：形態的に、甔形もしくは甔形土器の胴部形態からの転用と思われるもの。

B1類：底部が焼成前の穿孔で、土器生成段階で甔を意図したと考えられるもの。SH11-34

B2類：底部が焼成後の穿孔で、甔形として使用していた土器を転用したと考えられるもの。

B2類は、文様の有無で2種類に分けられる。

a：縄文をもたない。SH11-35

b：縄文をもつ。SJ45-3

## 2 器面調整と文様

### (1) 器面調整

上に掲げた土器の器面調整法として、主に観察されたものに、1 ハケ目、2 ヘラ磨き、3 ヘラナデ、4 ヘラ削り、5 ナデ（横ナデを含む）等々と、これらを複数組み合わせたものが観察された。

・甔形土器 外面：ハケ目調整のみを基調とし、a その後にナデをおこなう例（SJ73-2・、

SD14-2・4他)、bヘラ磨きをおこなう例(SH10-9)、cハケ目は観られずナデのみと思われる例(SH11-28)が少数例観察される。内面：a口縁部や胴部上半にハケ目をおこなう例(SH3-4、SJ41-3他)が多いが、bその他の部位についてはヘラナデやナデを施す例(SH11-29、SJ15-24他)が多い。cヘラ削りをおこなった例は検出されておらず、存在したとしても例外的であろうと考えられる。

・壺形土器 外面：aハケ目を残す例(SJ11-9、SJ91-3、SH5-4他)、bハケ目の後ナデをおこなう例(SH3-2、SH5-7・8等)、cハケ目の後ヘラ磨きをおこなう例(SH3-3、SJ16-6、SH5-5他)、d丁寧なナデのみが観察される例(SH3-1)等がある。cが最も多く、dは例外的と思われる。内面：a口縁部や底部にハケ目をおこなう例(SH10-10、SH11-25他)もあるが、b中位にまで及んでいるもの(SJ12-5)は少ない。cヘラナデ(SH3-3、SH5-9他)やdナデ(SJ43-1、SH9-1)もある。さらに、eこれらの組み合わせもあり、多種多様といえる。

壺形土器の口縁部については、装飾との見方をすべきかも知れないが、口縁部の調整としては、A木口状工具(=ハケ状工具)による刻み目(SJ73-2、SJ79-1、SH11-32他)を施すものと、B指頭による相互押捺(SH3-4、大西壺採1-2、SH11-29他)が大多数である。

## (2) 文様

ヘラ描き文や櫛描き文などのいわゆる文様の他に、浮文・突帯等も含めることとする。なお、実例については、代表例のみとした。

各々の文様要素を構成する施工方法として、A：工具を用いるもの、B：縄文を施すもの、C：浮文・突帯等を施すもの等々が挙げられる。

A：工具を用いるもの=1・ヘラ状工具、2・櫛状工具、3・棒状工具、4・ハケ状工具(=木口状工具)

### 1・ヘラ状工具による文様

a連弧文(SH10-1、SJ50-2)、b綾杉文または山形文(SJ50-2)、c横線文(SH11-2・4他)、d波状文(SH11-24・25他)、e鋸歯文または山形文(SJ79-1、SH11-6、SH4-4・6、SH5-10他)、f格子目文(SJ15-3、大西表採1)、gその他。(SH5-8)

### 2・櫛状工具による文様

a横線文(=横位の直線文 SJ16-6、SJ91-5、SJ91-5、SJ79-1他)、a'縦線文(=縦位の直線文 SH11-10、表採3)、b縦位の波状文(ST15-13)、b'横位の波状文(SJ79-1、ST15-13、SJ12-5他)、c斜線文(SH13-2)、d山形文(SJ91-5、ST15-11他)、e簾状文(SJ73-5、SD14-5、SH4-6他)、f刺突による複数の列点文。(SJ91-5)

### 3・棒状工具による文様

a刺突文(SH10-6、SH11-4、大西表採8)、a'刺突による列点文(SJ91-3)。

B：縄文を施すもの。

### 1・RLやLRの縄文帯をもつもの。

a複数段施工しても、羽状としないもの(SH3-3、SH11-22、SH5-4他)、b複数段施工して、羽状とするもの(SJ79-2、SH10-10・25、他)。

2・RL 縄文や LR 縄文以外をおこなうもの。

a 結節文をおこなうもの (SJ46-6)

C: 浮文・突帯等を施すもの

1. 浮文を施すもの

a 円形浮文を貼付するのみのもの (グリッド45)、b 円形浮文を貼付したのち、棒状工具で刺突するもの (SH0-6、SH11-4、SJ81-1、大西表探8)、c 円形浮文を貼付したのち、ヘラ状工具を押捺するもの (SH4-6)

2. 突帯等を施すもの

a 突帯を施すもの (グリッド23、ST15-14)、a' 突帯を施しさらに刻みをおこなうもの (SH3-3、SH5-6、SH0-10)、b 棒状浮文を施すもの (SJ76-1、SD15-7)、c 棒状浮文というよりも、突起を設けているもの (SJ43-2)。

以上に、文様を構成する要素をここに挙げて眺めてみた。これらはそれぞれ単独で用いられる場合もあるが、多くは各々を複数施文したり、多種類の要素と組み合わせて構成されている。気付いた点を記しておきたい。

全体的に観て棒状工具を用いる例が多く、ヘラ状工具がこれに次ぐ。ヘラ状工具による沈線には、他の文様を区画するために用いられる例もある (SH5-3、SH11-25 他)。突帯はすべて壺の頸部に施されている。

壺形土器の文様はまさに多種多様であり、該当しないのはB2類a、C2類aを数えるに過ぎない。中でも多数を占めるのはA1類d、A2類b'、A2類e及びその組み合わせといえる。変わり種としては、A1類gのSH5-8が挙げられよう。施文部位は、口唇部～胴部上半部にみられるもの (SJ79-1 他) から、口唇部もしくは口縁部～肩部にみられるもの (SJ91-5、SJ79-2 他)、あるいは頸部のみのもの (SJ16-6、SH11-24 他) などがある。甕形土器については無文の例が多く、文様自体の種類も少ない。文様としては圧倒的にA2類b'とA2類eが主流であり、これらについては、壺形土器でも多用されている要素である。施文部位は、頸部～胴部上半までおこなっているSH0-6とST10-3を除いて、頸部に限られる (SJ73-6、SJ77-1 他)。

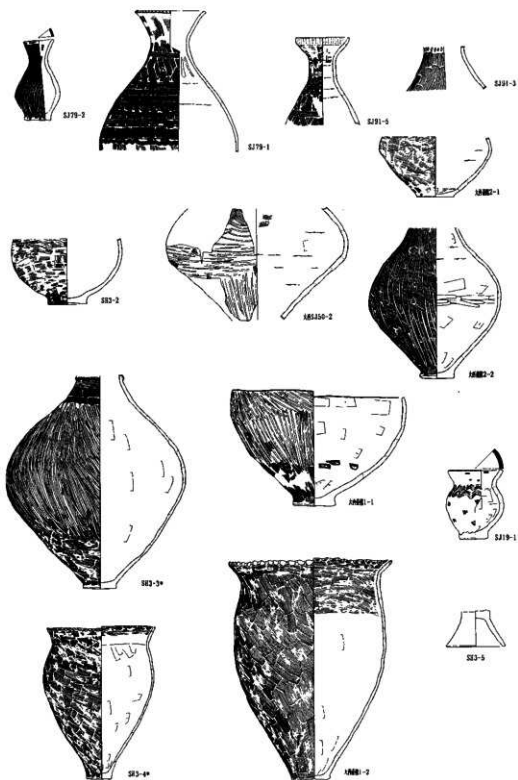
高坏形土器ではA1類e (SK14-1)とB1類a (SH13-10)が用いられ、ともに口唇部もしくは口縁部に施文される。甕形土器には、文様はみられない。

### 3 代正寺・大西遺跡の中期後半～後期前半の弥生土器 (素描)

代正寺・大西遺跡からは、既期の資料が比較的多く検出されている。しかし、残念ながら形態・整形・調整・文様等について、系統的に比較検討するには資料数的にも、無理があるといわざるを得ない。そこで、既に述べたように小稿では便宜上、中期後半に関して「新しい方」とか、「新しい方」までは降らずや「古い方」に近いという程の要素を抽出していくこととなる。

言い換えるならば、当遺跡の資料を操作するのではなく、これまでに成されている宮の台式土器の編年論から、該当もしくは援用し得る要素を以って類推するに過ぎない。「後期前半」については、時期幅が大きいと観られるが特に分けることを控えた。中期後半～後期前半の範疇に含まれる





第1圖 代正寺・大西遺跡:弥生中期後半(1)

土器であっても、具体的な位置付けの出来なかつた例も多数あり、これ等の明言は避けざるを得なかつた。

「古い方」に、やや近い遺物をまとめたのが第1図である。あくまでも括弧付きで、(1)と表記した。器種的には、壺形土器・小型壺形土器・甕形土器が主として挙げられ、壺形土器の胴下半部を転用したとみられる鉢形土器、さらに SHB-5 の脚台部が高環形土器であるとすれば、これも含まれる。

・壺形土器：文様帯が広範囲で、縄文帯を沈線区画している例や、頸部に刺突をおこなっている例があるが、一方、沈線区画していない縄文帯や、羽状の縄文帯が一部見受けられる。全体的に描き文は少なく、王子文・舌状文・楕円文・十字状文・結紐文等もみられない。器面調整はハケ目を残すものと、ヘラ磨きをおこなうものがある。器形は、全体的に胴部に張りをもつ。

SJ79-2 は沈線区画をもたず、しかも羽状の縄文をおこなうが、その縄文帯は多く施文範囲も広い。SJ50-2 にみられるヘラ描きの連弧文は、粟林式に系譜が求められるものであろうか。SHB-3 は、羽状縄文ではなく波状文もないが、刻みを有する突帯の下位に縄文をおこない、胴部に強い張りをもつ点で、荒川区道灌山遺跡採集例に類似する。頸部に刺突をおこなう例は、SJ11-6 でも確認された。他遺跡では、浦和市明花向遺跡A区第1号住居跡・横浜市折本西原遺跡Y49号住居跡等にみられる。折本西原遺跡では宮の台式を1~3期に分けており、Y49号住居跡例は1期とされるものである。

壺形土器頸部に突帯を巡らせるものは、本遺跡でもC2類a(突帯のみ)=ST15-14(小型)・グリッド23や、C2類a'(突帯に刻み目)=SHB-3・SH10-10(共に大型)、SH5-6(小型)に例がある。C2類aについては浦和市円正寺遺跡例、折本西原遺跡Y50号住居跡、千葉市城の腰遺跡87号遺構、C2類a'については円正寺遺跡例(小型)、城の腰遺跡37号遺構(小型)等々に類例が求められる。但し、当遺跡資料のうち第1図に含め得たのはSHB-3のみであり、他はいずれも「新しい方」に考えた。因みに、城の腰遺跡では宮の台式を1~4期に分類をしており、37号遺構例を3期に、87号遺構例を4期に比定している土器である。

・甕形土器：SHB-4と大西壺棺1-2の口縁部は、内面が二重で刻み目のみられるものではなく、いずれも指頭による相互押捺をおこなう(C1類)。胴部に文様はなく、ハケ目調整のみである。大西壺棺1-2は、口縁調整で折本西原遺跡Y9号住居跡、口縁部が二重ではないが器形的に同Y15号住居跡に類例が求められよう。折本西原遺跡は、宮の台式を1~3期に分類しており、後者は2期(古)、前者は2期(新)に比定される。SJ19-1は、文様構成は異なるが器形的に、吹上町袋・台遺跡1号住居跡や寄居町用土・平遺跡30号遺構に類例がある。波状文についても、用土・平遺跡に近い施文といえる。

「新しい方」と看做したものを、(2)としてまとめたものが第2図である。器種的には多様であり、壺形土器・小型壺形土器・甕形土器・小型甕形土器・高環形土器・小型高環形土器・甕形土器・手捏ね土器、さらにSH11-27の脚台部を、台付き甕形土器のものとすればこれも含まれる。

時期的な幅に関して少し触れておくと、例えばSH10とSHBは遺構として重複関係にあり、当然前後関係をもつ。しかし、他の遺構の遺物との時期的な併行関係・前後関係を把握するまでに至ら

ない。そのため、これらの時期差をも含めて扱った。

・壺形土器：口縁の形態はA～F類までがあり、多彩である。胴部形態は、張りをもつ例もあるが、球形に近いものや、SJ11-9 や SH5-9 に代表される無花果形を呈するものが増える。頸部は、首太の印象が強くなるものが多い。施文については、(1)に比べ施文範囲が頸部および、その周囲に集中する傾向がある。山形文や鋸歯文が、やや増えて来るといえそうである。縄文帯は、羽状となるもの・沈線区画をもたないものが多くなる。器面調整は、ハゲ目を残すものもあるが、ヘラ磨きをおこなう例が主流となり、赤彩を施すものもある。

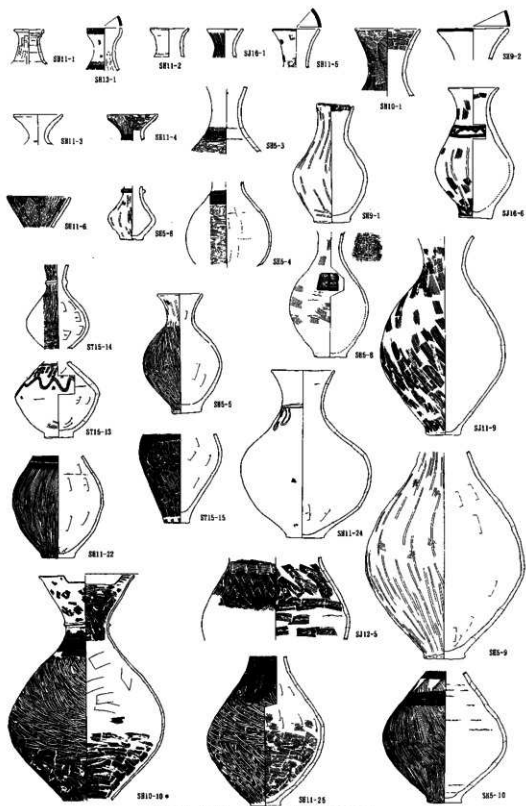
無花果形を呈する例はきわめて多く、円正寺遺跡・朝霞市台の城山遺跡・富士見市南通り遺跡の他、城の腰遺跡・折本西原遺跡・市原市大蔵遺跡他多数に類例が得られる。SH11-1 は、頸部上端部に粘土紐を接合し、口縁としている様相をもつ。強い類例を捜せば、頸部上端部の内側ではあるが、粘土紐をほぼそのまま口縁とする点において、浦和市明花向遺跡B区2号住居跡に求められるかも知れない。

・甕形土器：口縁裝飾については、刻み目と指頭による相互押捺とがある。口縁形態は、受け口状や直立に近い例も見受けられるが、概ね張りの弱い胴部から緩やかに外反して開く。SH10-9 や SH11-28 のように短く開くものや、SH11-29 のように胴部上半に最大径をもち大きく開く例もある。また、SH10-6 の連弧文には、栗林式の系譜が考えられよう。

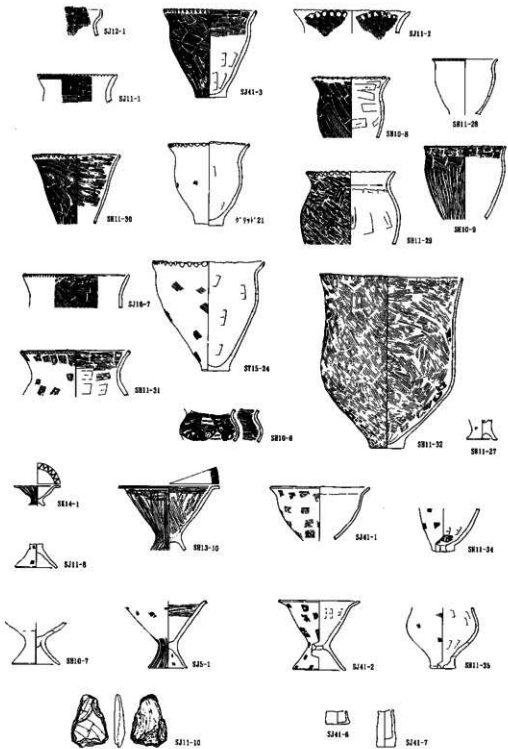
SJ41-3 と ST15-24 は、器形的に三芳町竹間沢本村遺跡や岩槻市馬込遺跡に類似する。SH11-32 の器形については、与野市内道西遺跡例・明花向遺跡B区5号住居跡例・折本西原遺跡環濠内例に近いといえそうである。SH11-30 の下部については、底部からほぼ直線的に口縁まで続くものと類推され、上部を欠くが、明花向遺跡B区4号住居跡例に近いと観られる。SJ11-1 は、SJ73 や SJ77 にみられるように、後期に引き継がれていく。SH11-27 は、台付甕であろうか。

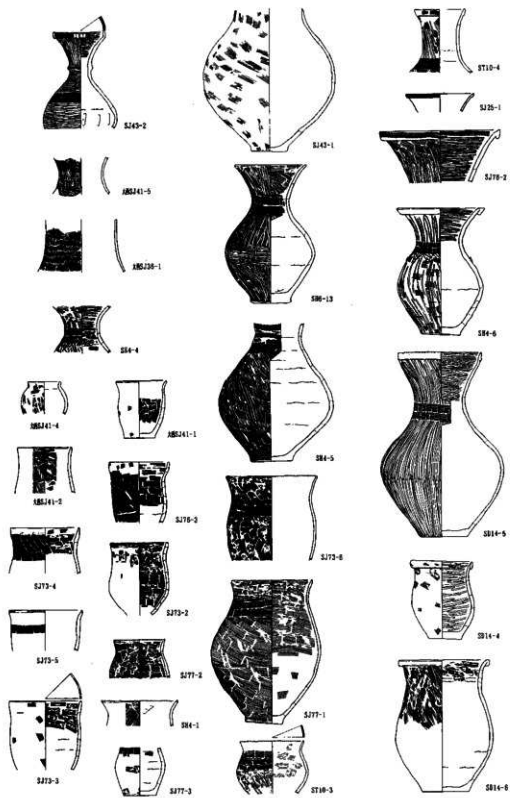
・高環形土器：SJ41-1・2 は、後者が（焼成前）穿孔されていることから、甕形土器として扱い、これと同器形の前者もこれに倣った。しかし、SK14-1・SH13-10・SJ5-1 等とは容量・施文・器面調整に違いはあるが、脚台部から内筒気味に坏部が開き、端部付近で屈曲する点で基本的に共通する。この事柄から、SJ41-1・2 は本来高環形の土器であるとして類推したい。後者に観られる穿孔が焼成前であるということは、高環として作られ焼成された土器を、ある段階で甕に転用したのではなく、成形前もしくは成形中に甕を意図したと看做される。そしてその器形として、高環形が用いられたと考える。この仮定に沿って、代正寺・大西遺跡の高環の類例を、他遺跡に求めたい。

SK14-1 (A類) は脚台部を欠いている。本例の方が、口縁部の屈曲が強くと、山形文（または鋸歯文）中に刺突文をもたないが、用土・平遺跡において高環Aとされている10号・12号住居跡例に極めて類似している。SH13-10・SJ5-1 (B類) と SJ41-1・2 (甕A類) では、縄文をもつ例が台の城山遺跡に、突起をもつ例が南通り遺跡と折本西原遺跡Y4号住居跡に、縄文とヘラ描き波状文をもつ例が長野市牟礼バイパスD地点遺跡に、そして前橋市清里・庚申塚遺跡16・18号住居跡等々に、類例を求められよう。牟礼バイパスD地点遺跡例については、山形文と波状文の違いはあるが、ともに口縁平坦面にヘラ描きをおこなう点で、SK14-1 や用土・平遺跡10・12号住居跡例と共通している。SJ11-7 と SH10-7 に関しても高環を想定したが、以上に挙げた類例に含まれると考え



第2圖 代正寺・大西遺跡：弥生中期後半(2)





第3图 代正寺・大西遺跡：弥生後期前半

る。SH10-6(壺形土器)とSK14-1(高杯形土器)については、あるいはやや「古い方」に近いものであろうか。

・甌形土器：器形的に、壺形土器や壺形土器からの転用と思われるもので、焼成前穿孔(SH11-34=B1類)と、焼成後穿孔で無縄文(SH11-35=B2類a)がある。有孔という形態から甌形土器であると判断したが、方形周溝墓という出土遺情の性格から、別な目的で穿孔された土器の可能性も否定できない。ここでは、取りあえず甌形の土器と表記をした。転用であるとすれば、各時期での壺形なり壺形なりの器形が反映されている訳であり、本2例も同様である。

「後期前半」の遺物については、初頭に近いものから中頃のものまで含まれるが、分けることを避け一括としたものが第3・4図である。器種は壺形土器・小型壺形土器・壺形土器・小型壺形土器等が主に確認され、この他に、ST10-3には台付き壺形土器の可能性もある。

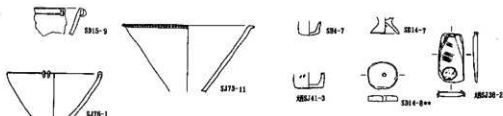
・壺形土器：口縁部は、素口縁と複合口縁が存在する。口縁が、直立気味の頸部から緩く開くもの(ST10-4)、長い口縁が内灣気味に開くもの(SD14-5)・大きく外反して開くもの(SH4-6、SJ76-2他)、大きく外反して端部付近で屈曲して直立するもの(SJ43-2)等が代表される。前段階に継ぎ続き、首太の印象を与えるものが多い。胴部は、中位に張り有する例が増えるといえよう。

器面調整はハケ目を残す例(SJ43-1)もみられるが、多くはその後にはヘラ磨きをおこない(SD14-5、SH4-5他)、磨き面の一部(SH4-6)、または全面(SJ43-2)に赤彩をおこなうものもある。

口縁部や口唇部への施文の他は、頸部や胴部上半に収束される。口唇部には縄文(B1類)、口縁部には縄文(B1類・B2類)・櫛描きの波状文(A2類b')・突起(C2類c)等がみられる。頸部については、櫛描き簾状文(A2類e)・櫛描き波状文(A2類b')を主とし、この他にヘラ描き鋸歯文(A1類e)・突帯(C2類a・a')をおこなう例もある。これらを7)単独で施文するもの、8)複数段施文するもの、9)アとイを組み合わせ構成しているもの等がある。胴部上半には、縄文(B1類a・b)・円形浮文(C1類c)を施すものがある。

櫛描き文は、前段階よりも櫛歯の数も多く、線が浅く細い。前段階から通して、壺形土器・壺形土器共に、波状文と簾状文が最多用される文様である。しかし、前者は波高が小さく、後者は間隔が不揃いな例が少なくない。施文自体についても、粗雑化が進んでいると表現できよう。

SD14-6は、簾状文の有無という違いこそあるものの、器形・器面調整ともに用土・平遺跡に類例が得られる。SJ25-1とSJ76-2は大きさが異なるものの、口縁は大きく開き、端部を幅狭く折



第4図 代正寺・大西遺跡：弥生後期前半

第1～4類とも

・点線の有無・破線については本図参照のこと  
・線尺単 \*\*は1/12、\*\*は1/4、#は全て1/8

り返すという点で共通する。後者はヘラ磨きをするが、前者については器面摩滅のため不明瞭である。柿沼幹夫氏が、後期をⅠ～Ⅴ期に分けた内でⅡ期に据えた資料に、川越市霞ヶ関遺跡第三次調査区域例がある(柿沼1987)が、この中に類例が得られよう。

SJ43-2は、比較的小型の壺でヘラ磨きをおこない、赤彩される。強いて挙げれば、城の腰遺跡07・064号跡例に形態的な類似点を求められようか。文様構成は、口唇部と口縁部に縄文、後者にはさらに突起(C2類c)、頸部に刻み目を有する突帯(C2類a')、肩部に縄文帯2段(羽状ではない=B1類a)である。SH10-10(第2図)は大型壺でヘラ磨きをおこない、赤彩はない。文様構成は、口唇部に縄文、頸部に刻み目を有する突帯(C2類a')、肩部に縄文帯5段(羽状=B1類b)となっている。両資料の、口縁部における縄文の有無は、その形態の違いに起因するのであろうか。肩部の縄文に羽状と、そうではないものとの違いや、赤彩の有無、頸部と胴部との比率の違い、容量の差等々、相違点はあるものの類似点も多く、時期的にも近いのであろうか。

・壺形土器：口縁は素口縁が大部分であるが、複合口縁を呈する例(SD14-2・4)もある。口縁裝飾については、刻み目が多いが、まれに刻みをおこなわない例(SJ76-3)もある。胴部の張りは弱く、口縁は緩やかに外反するか内灣気味に開く。器面調整はハケ目を主体とするが、ナデと思われるものがある(SJ73-5)。文様は前段階から継ぎ続き、波状文と簾状文がおこなわれるが、施文しない例(SJ73-2、SJ77-2)もみられる。簾状文は1段のもの(SJ73-4・5)、2段のもの(SJ77-1)、さらには器形的に観て台付壺と推定される土器であるが、簾状文1段と波状文2段を併用するもの(ST10-3)等がある。SJ73やSJ77に代表される壺形土器は、霞ヶ関遺跡例に類似している。推定の域を出ないが、これ等は文様や施文方法・器形に若干の違いがあるものの、北信州(箱清水式)や北関東西部(樽式)に系譜が求められる土器であろうか。

・高杯形土器：杯部は直線的に開き、端部付近で短く屈曲するもの(SJ73-11=B2類)と、内灣気味に開き口縁に棒状の浮文をするもので、素口縁(SJ76-1=C1類)と複合口縁(SD15-9=C2類)がある。

SJ45-1は大型で、台付き壺の胴上半以上を省いたような形態を示している(D類)。あるいはこの時期に含まれるものであろうか。であるとすれば、壺形土器の胴下半部に底部穿孔をして、甑に転用したSJ45-2(B2類b)もこの段階の土器となる。

## おわりに

大雑把なまとめとして、代正寺遺跡・大西遺跡のいわゆる中期後半の土器は、南関東系の要素が主体的であり、信州や北関東西部的な要素は客体的なものであったと観られる。これをもう少し別な表現をするならば、南関東系である宮の台式土器の分布圏の最北端に近く、この文化をもった人々の内では、北の最前線的な位置に立地する集落のひとつとして、代正寺遺跡や大西遺跡があったと想像したい。

後期に降ると、逆に信州や北関東西部の要素が強くなる、といえるのではなからうか。前段階とのこの違いをどう解釈するのかについては、資料がさらに増加した時点で吟味されるべき課題と考える。



以上に、代正寺遺跡と大西遺跡について、既期の土器を眺めてみた。あくまでも、二遺跡における土器しか対象と出来なかった。住居跡や方形周溝墓・その他の遺構をも含めて、集落域全体を範囲に入れ、さらに他遺跡・他地方との関わりを問うものでなければ、片手落ちといわざるを得ない。しかも、唯一対象として扱った土器の検討が見当違いのもとなつては、片手落ちどころか両手両足が落ちているに等しい。最小限、二遺跡における吉ヶ谷式土器との関連や、前後する時期とのつながりに関しては、不可欠の問題であつた。

良好な資料を整理するという立場にありながら、報告担当者の力量不足のために、それ等を有意義なものとする事が出来ませんでした。今後機会を設け、再検討したいと考えております。

(鈴木孝之)

文末となりましたが、小稿を起こすにあたり磯崎 一、剣持和夫、利根川章彦、富田和夫の諸氏には、貴重な助言や御教示を戴きました。にもかかわらず、それらを活かすことが出来ずに、御覧のような取り留めもない駄文となつてしまいました。文中や図中に、不備な点や間違いがあれば、それはすべて筆者である鈴木の実であることは述べるまでもありません。各氏には御礼申し上げると同時に、御詫び申し上げます。

#### 引用・参考文献

- ・相京建史ほか 1981 『清里・庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・相京建史 1986 『清里・庚申塚遺跡について』『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・朝霞市教育委員会 1975 『台の城山遺跡』
- ・石川日出志 1986 『中部・関東の弥生時代中期をめぐる諸問題』『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・泉谷憲俊 1982 『宮の台式土器の時間軸上の多様性の分析—煮沸形態土器を対象として—』『法政考古学7』
- ・泉谷憲俊 1983 『宮の台式にみられる楕円文をめぐって』『法政考古学7』
- ・井上唯雄・柿沼憲介 1983 『関東北部』『弥生土器II』ニュー・サイエンス社
- ・浦和市教育委員会 1963 『太田窪円正寺遺跡発掘調査』文化財の調査第9集
- ・大塚 実 1986 『吉ヶ谷および岩鼻式土器の背景』『土曜考古11』
- ・大島慎一 1986 『弥生時代における中期後半の弥生土器について』『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・小山岳夫 1986 『佐久地方における弥生時代中期後半の土器』『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・柿沼幹夫 1976 『竹間沢本村遺跡』『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・柿沼幹夫 1976 『埼玉県における弥生式土器の成立とその系譜—取録土器の概要—』『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・柿沼幹夫 1987 『埼玉県北西部地方の櫛描文土器』『埼玉考古23』

- ・金関 恕・佐原 真(編) 1987 『弥生文化の研究4 弥生土器II』
- ・北武蔵古代文化研究会ほか 1986 『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』
- ・熊野正也 1983 「関東南部」『弥生土器II』ニュー・サイエンス社
- ・剣持和夫 1986 「武蔵地方の概観」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・剣持和夫ほか 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- ・小久保 徹 1976 「猫田遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・齋木 勝・深沢克友 1978 「房総における弥生文化の摂取とその波及について」『研究紀要3』千葉県文化財センター
- ・齋木 勝 1986 「千葉県における弥生時代中期後半の土器について」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・埼玉県 1982 『新編 埼玉県史』資料編2 原始・古代
- ・埼玉県教育委員会 1972 「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集
- ・埼玉県教育委員会 1973 「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集
- ・坂戸市 1983 『坂戸市史』原始資料編
- ・高山清司 1976 「円正寺遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・佐々木保俊 1976 「南通り遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・笹沢 浩 1978 「中部高地型柳描き文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- ・笹沢 浩 1983 「中部高地」『弥生土器II』ニュー・サイエンス社
- ・谷井 彪・宮崎朝雄「台の城山遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・千葉県文化財センター『千葉市城の腰遺跡』
- ・富田和夫・中村倉司 1986 「埼玉県における中期後半の柳描文土器について」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか
- ・早川智明・横川好富ほか 1972 「加倉・西原・馬込・平林寺」埼玉県遺跡調査会報告第14集
- ・東松山市 1977 「雉子山遺跡」東松山市史編纂調査報告第8集
- ・昼間孝次 1976 「霞ヶ関遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・吹上町教育委員会 1982 「袋・台遺跡」
- ・福田敏一 1981 「南関東弥生土器にみられる二系統」『法政考古学6』
- ・横川好富 1976 「馬込遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・横浜市埋蔵文化財調査委員会 1980 『折本西原遺跡』
- ・吉田章一郎 1976 「用土・平遺跡」『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- ・寄居町教育委員会 1984 『寄居町史』原史・古代・中世資料編

## おわりに

代正寺遺跡と大西遺跡を合わせると、先土器時代の遺構や遺物は確認されていないものの、縄文前期から中近世に至るまで、実に様々な遺構や遺物が多数検出されている。これらについての問題点も、大変に多種多様というべきものである。

しかし、一般国道建設に先立つ発掘調査という性格上、面的ではなく線的な調査であるため、遺跡の全体を窺うことは困難であり、遺跡全体にトレンチ掘りをおこなう形となった。その制約の中で眺めても、代正寺遺跡や大西遺跡は、遺跡として遺構や遺物の密度が極めて高いと表現出来るものである。このことは、遺跡の立地条件や環境が、人々の暮らしに適していたことに起因し、これは現在も同様である。

このことは両遺跡だけではなく高坂台地全体、さらに周辺の台地上・自然堤防上に対しても当てはまる事柄であり、これらの立地条件下では、豊富に遺跡が確認され続けている。調査例の増えるごとに、各遺跡の範囲や性格等が、徐々に浮かび上がって来るであろう。

代正寺遺跡と大西遺跡を概観してみると、弥生時代中期後半に次ぐ画期として、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭がある。さらに奈良・平安時代以降に至っては、一つの大きな集落として下寺前遺跡をも含めた大規模集落として、規模の差こそあれ現在にまで連続と続いていると解釈したいと思う。

両遺跡には、検討されるべき課題が実に多く存在しており、それらをいずれも山積したままここに筆を置かざるを得ない。別に機会をもち、少しでもその責を果たしたいと考えております。

### 参考文献

- ・東松山市 1981 「東松山市史資料編1」原始古代・中世 遺跡・遺構・遺物編
- ・東松山市教育委員会 「雉子山遺跡」東松山市文化財報告第11集
- ・東松山市教育委員会 1989 「岩鼻遺跡」東松山市文化財調査報告第18集
- ・若松良一他 1987 「諏訪山33号墳の研究」

代正寺・大西遺跡については、発掘調査2年1箇月、整理2年6箇月の長きに亘って（うち6箇月は期間的に併行）作業が行われたものです。この間、地元の方々・教育委員会等には御協力を戴きました。また期間中、発掘補助員・整理補助員、および調査員補といった実に数多くの方々に携わって戴きました。すべての方の氏名を挙げることは実質的に叶いませんが、この方達の存在なしには、発掘調査も整理も終了するは出来なかつた筈です。巻末ではありますが、この場を用いて御礼申し上げます。